針葉樹

第五號

東京商科大學一橋山岳部

美津濃の登山靴とリックサック

山行に最も大切な
完全無缺の登山靴
リックサックが取揃へてございます

神田
小川町

美津濃

大阪 神戸
名古屋 京都

針　葉　樹

第　五　號

1929——1930

山の背の巖のあさきくぼみにも
かつ群れて咲く　千島桔梗の花

大塚金之助

針葉樹　第五號目次

記　錄

第一部（一九二八・一一―一九二九・一〇）……三
第二部（一九二九・一一―一九三〇・五）……七一

紀　文

山の個性……浦松佐美太郎……一〇五
一月の槍平と槍ヶ岳……手塚晴雄……一一一
大武川より大井川東俣へ……高瀬進……一二二
赤石岳、聖岳……園山德二郎……一三六
東北朝日連峰雜記……小川竹夫……一四四

武尊山と其の附近……吹原不二雄……一五八
守門山スキー行……關　守三郎……一七二

雜　記

追想斷片……丸茂平造……一七八
初冬の山郷の思出……小川竹夫……一八〇
山を思ふ心……渡邊九郎……一八三
近代的登山……關　守三郎……一八七
漫想二題……村尾金二……一八九
明神岳へ……横倉吟三郎……一九三
ポン〳〵山に登るの記……吉澤一郎……一九六
阿里山行……冠木啓藏……一九九

山小屋欄……二〇三

部　報……二一五

寫眞

シユレックホルンと氷河……浦松佐美太郎…口繪
白馬岳葱平附近……金田一郎…口繪
四月の劒……浦松佐美太郎…口繪
槍平の小舍……磯野計藏…一二
槍平より穂高……磯野計藏…一六
間の岳……辻辰雄…一八
花咲より武尊山……金田一郎…一四
劍ケ峰の岩壁及び中ノ岳、イヘノグシ……吹原不一雄…一六

地圖

大鳥池及び茶畑山新道概念圖……小川竹夫…一五

Schreckhorn と氷河　　浦松佐美太郎

白馬岳葱平附近　　金田一郎

四　月　の　劍　　浦松佐美太郎

記錄

第一部　一九二八・一一―一九二九・一〇

東北朝日岳方面……四
上越國境方面……七
上信國境方面……一五
東京附近（丹澤山塊、大菩薩方面）……二一
秩父方面……二八
八ヶ岳附近……三四
北アルプス……三六
南アルプス……五六
臺灣……六一
スキー合宿……六三

東北朝日岳南面の山々

小川竹夫

一一、一一　上野驛（後一〇・三五）

一一、一二、晴後雪　米澤（八・五五）——今泉（一〇・一二）——自動車にて手ノ子（一一・〇〇）——宇津峠（二一・三〇）——自動車で小國（四・四〇）——若山

朝福島を出ると、吾妻の雄姿を眺め得て痛快だつた。宇津峠積雪五寸、寒さ限りなし。

一一、一三、雨　若山滯在

一一、一四、雨後雪　滯在。午後金刀比良山、權現山に遊ぶ。

一一、一五、晴後雪　若山（八・二〇）——金目（九・一〇）——金目川の右俣を登り孫守への尾根の右側へとりつく——孫守三角點（〇・三五）——一一七六米三角點（一・二〇）——一二九三米三角點（二・二五）——雪降り出す——柴倉山への尾根一〇二〇米、突起（三・三〇）——柴倉澤を下る——四百三十米位の柴倉澤の出合（五・三五）——岩井澤山と小枕山が會ふ尾根を横切り、地圖の道を西へ——北小國村石瀧の東方半里の部落（七・一〇）

炭燒爺と二人。孫守は雪八寸。孫守はソンモリとよむ。寒くて弱つた。

一一、一六、晴後吹雪　部落（七・四〇）——前日の逆を行く——柴倉澤の出合（一〇・二〇）——柴倉山より西に派出する尾根へ出る——柴倉山（〇・四五）——祝瓶への尾根を北進——一〇三四米、突起（二・五〇）——吹雪——西微南に下り金目川へ出る（三・五五）——金目川と柴倉澤との出合（六・一〇）——宿（八・〇〇）

祝瓶へ登りたかつたが顏と手とが自分のものでない様だし、薄氣味惡い吹雪になつてきたので棄權した。日が暮れて大弱り。泊る山家の若い男が一里强ばかりの所まで迎へに來て呉れた。

一一、一七、小雪　北小國村荒川に沿ひて若山に歸る。

一一、一八、晴　若山滯在。

一一、一九、晴後曇　若山（九・〇〇）——横根（一〇・四〇）——片貝（一・二〇）——鷹ノ巣（二・一〇）——下川口（三・〇〇）——自動車にて坂町驛（四・四〇）——羽越線、信越線經由翌日歸京。

大朝日岳大鳥池縱走

小川竹夫

七、二七、晴後雨　天童驛（六・五三）——鮎貝驛（一一・二〇）——東北館に休む（一一・二五）——一二・〇〇）——黑鴨ノ橋（一・一〇）——中平（一・三〇）——二・一〇）——日影大平（二・二五）——清水流るゝ所（二・四五——三・〇〇）——尖山鞍部（三・一五）——頭殿山の眞北籔の中に雷雨を避く（三・四五——四・二五）——ワラビ野（五・〇〇）——五・二〇）——朝日鑛泉（六・〇〇）

七、二八、曇晴後雷雨　鑛泉（五・三〇）——大朝日の眺望のきく所（六・〇五——六・一五）——鳥原からの澤を

百米上つた所（七・〇〇——七・一〇）——再び澤に出る（七・四五——八・一五）——朝日權現社（一〇・〇五——一〇・一五）——キヤムプ地（一〇・二〇——一〇・三五）——小朝日の鞍部（〇・一〇——〇・二〇）——小朝日三角點（一・〇〇——一・一五）——銀玉水（二・四〇——二・五五）——大朝日社殿（三・三〇）

七、二九、濃霧午後晴　社殿（五・〇〇）——中岳（五・二五）——西朝日キヤムプ地（六・〇〇——六・二五）——西朝日三角點（六・四〇）——龍門山（七・三五——七・四五）——南寒江（九・〇五——九・一〇）——北寒江（九・二〇）——三方境（九・五〇——一〇・〇〇）——狐穴キヤムプ地（一〇・二五——一一・〇〇）——以東岳三角點（一・四〇——二・二〇）——大鳥池畔（四・一〇——四・三〇）——大鳥池岩小舍（五・三五）

七、三〇、晴　岩小舍（五・三〇）——大鳥川本流（六・二〇）——ゲンダン澤（七・三〇——八・四〇）——冷水澤（九・一〇——九・二〇）——冷水泡瀧間三分の一位の所（一一・四〇——一・四五）——泡瀧（五・〇〇）——ゴウラ澤（六・〇五）——サラブチの小舍（七・一〇）

七、三一、晴　小舍（四・五〇）——植林廣場（五・五五）——釣カゴ橋（六・三〇——六・四〇）——釣橋（七・一五）——繁岡（八・三〇——九・一〇）——田澤駐在所（一一・三〇——一・三〇）——自動車——鶴岡（四・〇〇）——此處より乘車、奥羽線の終列車に連絡し之にて歸る。

第一日目、中平にて此の地の山通原田富助と語る。親爺仲々親切。

第三日目は頗强な濃霧に弱つた。俺は憶病でない心算だがとても心配でたまらなかつた。狐穴にて山工の學生に會ふ。

第四日目、一一・四〇——一・四五の間停滯したのは道連になつた學生が病氣になつた爲。大鳥川雷雨のあと仲々徒渉はつらかつた。

同行する筈だつた關と大友が行かなくなり殘念だつた。尙朝日については小生の紀文中の拙文「東北朝日連峰雜記」を見られ度し。

上越國境方面

高橋要二外二名

裏日光方面

一一、七、曇時々雨、一時三十分頃より快晴　西那須(三・五二)——自動車——福渡(四・四五)——下鹽原(六・三〇——七・二〇)——元湯(八・四〇)——元湯より約半里のところ、トロなくなる、(九・二〇——一〇・〇〇)——新湯道と合す(一一・〇〇)——鳥居(〇・四〇)——五里山との分岐點(一・一五)——川治溫泉(近江屋)(三・〇〇)

一一、八、曇、七時半より雨　川治溫泉(六・三〇)——吊橋(七・一五)——田茂澤(ここより引返す)(八・四五)——吊橋(一〇・一五)——川治、高原(一一・二〇)——高原溫泉(柏屋)(一・〇〇)

一一、九、曇、時々晴れたり降つたり　高原(七・三〇)——吊橋(八・〇五)——小指(九・三〇——九・五〇)——野尻(一〇・一五)——日陰(一一・〇〇)——黑部(一一・四五——〇・二〇)——アカマ(一・三〇)——大

川筑（一・五〇）――野門（二・四〇）――雨盛に降る――萱峠（三・〇〇）――川俣（三・五〇）――川俣溫泉（清湧館）（五・二〇）

一一、一〇、晴、十一時三十分――二時五十分雪　川俣溫泉（八・二〇）――西澤金山（一〇・三〇――一一・〇〇）――小屋（〇・二〇）――カラ沼（一・〇五）――切込湖（一・三〇）――湯元（二・二〇――二・五〇）――菖蒲ケ濱（丁田屋）（四・三〇）

一一、一一、晴　丁田屋發（九・一〇）――大尻橋（一〇・〇五）――華嚴瀧（一〇・三〇――一一・一五）――馬返（〇・三〇）――東照宮、二荒神社、大献院見物――日光停車場（四・四五――五・一五）――上野（九・〇五）

守門山（スキー行）

關守三郎外數名

三、三一、晴　長岡驛（六・〇〇）――栃尾鐵道――栃尾驛――上樫出――葎谷――吉ケ平守門館泊

四、一、小雨　滯在

四、二、小雨　晩に晴れる、滯在

四、三、快晴　吉ケ平（六・〇〇）――三角點一〇二三・五M（八・三〇）――一二〇〇M附近第一回晝食（九・一五――九・四〇）――前守門三角點一四三二M（一〇・二五）――奥守門頂上（一一・四五――〇・三〇）――スキーを穿く――藤平山（一・二五）――田小屋（二・二〇――三・二五）――須原（六・〇〇）

この日、完全に凍りたるを以て、登りは全部アイゼンを穿きて下りに初めてスキーを用ひたり。雪量極めて豐

富――八月下旬尚ほ、その溪底に殘雪を見る――雪庇尨大なり。但し時節晩きを以て雪裂れ少なからず、意外の時間を要したり。

四、四、晴　須原(六・五〇)――松坂峠(八・一五)――種苧原(一一・〇〇――〇・二〇)――桝形小屋(一・〇〇――二・〇〇)――栖吉(四・〇〇)――悠久山驛(四・二〇)――長岡

この日、終日スキーを樂む。快極りなし。尚、詳細は紀文中の「守門山スキー行」を參照せられ度し。

早春の赤城武尊山行

吹原不二雄

四、一、晴　水沼驛(九・二〇)――一ノ鳥居(一〇・〇五)――鳥居峠(二・〇〇)――大洞猪谷(二・二五)――鈴ケ岳往復(三時間餘)

赤城の殘雪が馬鹿に少ないのに驚く。湖畔にて一尺餘。鈴ケ岳より上越の山々展望よし。

四、二、曇後晴　猪谷(九・二〇)――黑檜山(一〇・五〇)――猪谷(一一・五〇――二・四五)――小沼(三・〇五)――長七郎山――小地藏岳――鳥居峠(四・一五)――猪谷

宿のスキーを借りて一時間ばかり殘雪を捜して歩き廻つた。新設の赤城シャンツェは小沼へ行く途上、地藏岳の斜面に出來た。雪が少なくなつてスキー客が來なくなつた時分が、始めて靜かな赤城が見られるのだらうと思ふ。

四、三、曇後晴　猪谷(八・二〇)――舊五輪峠(九・三〇)――南郷(〇・三〇)――大原新町(二・一〇――三・一五)――追貝(三・三〇)――花咲山崎(五・二〇)

舊五輪峠からの下り始は、殘雪で道を失つて惱んだ。五輪峠を通つた方がよかつた樣だ。併し人は此の頃は少しも通らない。追貝の手前で道修繕で乘合から下され、後はずつと歩いた。山崎では法稱寺の別當星野氏宅に泊る。

四、四、快晴　山崎(六・四五)——登戸花咲石(七・〇〇)——大品原鳥居(七・一五)——普寛法印像(一〇・四〇)——前武尊(一一・一〇——一一・三五)——イヘノグシ峯(〇・三〇)——奥武尊西峰(一・一五——一・三〇)——前武尊(二・三〇——三・〇〇)——大品原鳥居(四・二〇)——山崎(四・五〇)

大品原からはずつと雪で蔽れてゐた。雪量も隨分あるらしかつたが締つてゐるので歩きよい。前武尊頂上に御堂あり、奥武尊には銅像二つあり。

四、五、快晴　山崎(八・一五)——牧場小舍(九・五五)——牧場二號平(一〇・四〇——一一・一〇)——高山平——一八四一米獨立標高點(一・一五)——高山平——二號平(二・四二——二・五五)——牧場小舍——山崎(四・五〇)

豫定してゐなかつた所だつたがすゝめられて宿の息子を伴つて行つた。牧場、高山平いづれも氣持のいゝ所、武尊はこゝからは非常に壯嚴に見える。

四、六、晴　山崎(九・一五)——花咲峠(一〇・五五——一一・二〇)——川場(一・一〇)——沼田(二・一〇)——上野(六・四四)

花咲峠の邊りは日當りのいゝためか土が露はれてゐる所も出て來た。武尊の好展望地、川場より沼田へは乘合あり。尙、武尊山に就ては紀文中の「武尊山と其の附近」を見られ度し。

谷川岳、阿能川岳、尾瀬沼、景鶴山、平ケ岳、武尊山

吹原不二雄

五、一九、晴　上野驛（九・一〇）——水上驛（三・二〇）——谷川溫泉（四・三〇）

五、二〇、快晴　谷川（七・〇五）——天神峠（九・五〇——一〇・二〇）——谷川岳（一二・〇〇——〇・二〇）——奥の院（〇・四〇）——谷川岳（一・一五——二・一〇）——天神峠（三・一五——四・四二）——谷川溫泉（六・一〇）

高壺澤より殘雪あり。樂な登りにて頂上に達す。展望甚だよし。

五、二一、快晴　溫泉（七・三〇）——阿能川岳（一二・〇〇？）——溫泉（三・〇〇）

谷川を少し溯り左手の尾根に、小さな澤から取付いて、尾根通し西北に籔をこいで頂上まで辿つた。古い鉈目は所々に有つたが、徑らしいのは少しも無く、殘雪が無ければ登攀困難。歸りには阿能川への谷に下つた。九〇〇米突の合流點まで下れば徑有り。

五、二二、曇　溫泉（七・〇〇）——沼田驛（一一・〇〇）——戸倉（三・二〇）

五、二三、風雨　戸倉（七・五〇）——大清水澤（一〇・〇〇）——三平峠（〇・一五）——長藏小屋（〇・四五）

此日まで父同行。荷物ありし爲、人夫（萩原岩雄）同伴。峠上殘雪三四尺、徑全く不明。沼上にも殘雪片々。

五、二四、風雨　滯在、中島、金田兩氏來る。

五、二五、小雨後晴　小屋（七・五五）——沼尻（九・〇〇）——尾瀬ケ原東京發電社宅（一一・〇〇）

五、二六、半晴　社宅（七・〇〇）——三篠瀧下（一〇・二五——一〇・四五）——平滑瀧上（一一・三〇——一一・

五〇)——社宅(〇・五八)

此日平ケ岳に登る心算で五時に出發したが、小雨にて景鶴澤中途より戻る。前日までの豪雨と、融雪期のため、瀧は物凄い水量なりき。晩には岩さんの鮟の鹽燒。

五、二七、快晴　社宅(四・五五)——景鶴山西肩(六・二二五)——大白澤山(七・一五)——平ケ岳(九・二二)——一〇・四〇)——大白澤山(〇・一〇)——景鶴山西肩(一・一〇)——一・四〇)——社宅(二・二三)

全部殘雪を行き、雪の堅さは適當にて歩き易し。藪殆どなし。平ケ岳頂上三角點附近は殘雪とけ、大いにのびる。

五、二八、曇後小雨　社宅(七・〇〇)——沼尻川の橋(七・三五)——富士見峠(九・一〇)——九・二五)——戸倉(〇・三五——一・〇〇)——鎌田——宇重田峠——花咲星野氏宅(五・〇〇)

人夫武さんに峠上まで案内して貰ふ。富士見峠は八木澤峠又は硫黄澤峠の新名、武さんの命名なり。戸倉にて尾瀬でずつと同行した中嶋、金田兩兄に別る。

五、二九、晴　花咲(八・三〇)——武尊牧場小舍(九・五五)——牧場三號平(一〇・五〇——一二・〇〇)——花咲(一一・三〇)

五、三〇、晴　花咲(六・二五)——大品原——前武尊(九・三〇——一〇・一五)——劍ケ峰、イヘノグシ、中ノ岳——沖武尊(一一・四五——〇・一二)——前武尊(一・一二——一・四二)——花咲(五・〇〇)

此の兩日星野寛良君同行。

五、三一、曇　花咲(八・三〇)——千貫峠(一一・〇五)——川場(〇・五〇)——沼田町(三・二五)

千貫峠徑は現今廢道、荆蕀大いにはびこる。背嶺峠徑は時間の點からも眺望もダンチよし。尙、詳細は紀文中の「武尊山と其の附近」に就て見られ度し。（吹原）

武尊山

金田一郎、中島嘉一郎

五、二一　沼田——自動車にて——千鳥新田——山崎法稱寺

山崎には宿屋もあるさうだが法稱寺の院主星野義情氏は武尊山登山者には非常な熱心を以て宿を貸してくれる

五、二二、曇　山崎（七・一五）——不動坂を登りきる（九・一五）——前武尊（一一・〇〇——一一・三〇）——武尊山（一・一〇——一・三〇）——前武尊（一一・三五——三・〇〇）——法稱寺（五・〇〇）

前武尊の手前四十分位の所より雪となつた。劍ケ峰は敬遠して東をまく。不動坂は地圖の樣にジグザグに登らず上下共一直線。

五、二三　山崎——戸倉

五、二四、雨　戸倉——三平峠——尾瀨沼長藏小屋

三ノ瀨の橋が增水のために流れて、途中で會つた斗八に架橋して貰つてやつと渡つた。斗八は昨年の三月尾瀨ケ原の水電小屋で知合つて居る人だ。長藏小屋に吹原君が父君と來て居た。二五、六、七、八日は行を共にした。尾瀨及び平ケ岳の記錄は其の方に讓る。

八、一九、雨後晴　長岡驛(五・五五)——五日町驛(八・〇〇)——大崎(九・一五)——八海山三合目(〇・一五)——三角點一一二一M(一・一〇)——七合目女人堂(四・一〇)——八海山御籠堂(五・〇〇)泊。

七合目女人堂は今は茶屋なり。大崎道と城内道の合點鳥居記號なる御籠堂に泊せるも、行者群宿し、その喧噪一睡をも許さず。

八、二〇、晴、時々霧吹く　御籠堂(六・〇〇)——八ツ峰——獨立標高一七七五M(七・二〇)——七・四五)——阿寺山(御田ケ原)への分岐點(八・一五)——三角點一三四四M(九・〇〇)——八合目(中ノ岳三ツ又野營地より八海山寄り二ツ目一重圏の突起)(一・〇〇)——中ノ岳三ツ又野營地幕營(五・二〇)

中ノ岳野營地は、三角點の北なる三ツ又の峯の頂上にして溜り水を飲料とす。野營地とその西北突起との鞍部草地には殘雪あり流水清冽なり。蓋し此コース中のオアシスとも稱すべし。但し、その附近適當なる平地を缺く。

八、二一、曇後大雷雨　野營地(六・三〇)——獨立標高一八八五M(七・三〇)——第四小突起(八・二〇)——駒ケ岳頂上三角點(一〇・一五——一一・四〇)——明神峠一名枝折峠(四・一〇)——少し降つて木挽小舍雨宿り(四・二〇——四・五〇)——大湯(七・二〇)

駒ケ岳は斷然殘雪豐富なり。駒ケ岳よりは佐梨川を下る方、急峻なるも遙に短時間にして、大湯に達すべきも、天候險惡の兆ありたるを以て、明神峠を經由せり。

八、二二、雨　大湯——小出驛——長岡

今夏より小出驛大湯間乘合開通。

尙、本記錄特に二日目一行中一名足部疾患の憂ありたるを以て最除行長時間を要せり。

上信國境方面

芋川稔一、太田又一

鼻曲山、淺間隱山

一一、一、晴風強し　熊の平驛（四・二二）——五・三〇）——峠町（七・二五——八・三〇）——一ノ宇山獨立標高點（九・〇五）——霧積溫泉分岐點（一一・五〇——〇・三五）——鼻曲山頂上（〇・五五——一・三〇）——分岐點（一・四〇）——草津鐵道線路（霧積溫泉近道一里二十丁の標木あり）（三・二〇）——小瀨溫泉（三・四五）

一一、二、晴夕方曇る　小瀨溫泉（七・四〇）——長日向驛（七・四五——八・〇五）——二度上（八・四五）——鞍部（一四〇〇米突）（九・四五）——淺間隱山（〇・一〇——一・三五）——一六〇〇米突ピーク（二・一〇）——輕井澤峠（社あり）（三・〇〇）——矢竹林道分岐點（三・三五）——水無山分岐點（四・二〇）——鳩ノ湯（五・〇五）

一一、三、晴強風　鳩ノ湯（八・三〇）——矢竹道、峠道分岐點（九・一〇）——地藏峠（一〇・四〇——一一・〇〇）——地藏川（〇・一〇）——應桑（關趾の樅）（〇・四〇——〇・五五）——吾妻驛（一・四五——二・〇二）——

輕井澤驛（三・五六——五・〇七）——上野（一一〇・〇五）

第一日。峠道からは熊野神社の裏山を登り、若い落葉松の植林中を進んで一三三六米突の三角點の附近へ出た。以後留夫山（一五九〇・八）の西の斜面までは地圖上の點線の道を取る。この道の消える所からなほ同じ位の高さを北の鞍部まではよい道がある。此處から西の澤へやゝ惡い道が下つてゐる。僕達は以後鼻曲山迄尾根を歩いた。藪はひどいが東側がガレてゐるので比較的早く進める。霧積溫泉からの道は鼻曲山の二ツ手前の鞍部を東から西へ越してゐる。東側は恐ろしく立派な道だが西側は急に惡くなつてゐて、僕達は少し下つて直ぐ見失つてしまひ思ひ掛けぬ藪の奮闘を演じた。多分、急に惡くなつた道は、卷き加減に、鼻曲山から西西南に走る尾根（この尾根には防火線あり）に出てゐるのではなからうか。（僕達が大分澤を下つてからこの尾根へ出た時、その防火線の中を細い一本の道が通つてゐた。）

第二日。この日、長日向から二度上（ニドアゲ）まで電車へ乘つた。この驛から眞東に向つて進む。廣々としたよい所だ。一四〇〇米突の鞍部近くなると北アルプスが見え初めた。秋のアルプスは美しい。鞍部の眞上、一四八〇米突の突起寄りに鳥居がある。頂上へは行つて見なかつた。道はこの突起の東側を走る。一四一一なる數字の所を越して東側の川浦へ行く道は廢道としてあつた。川浦への新しい道は一四六〇米突と一五二〇米突の兩突起の間の鞍部を越して東方へ下つてゐた。この鞍部から僕達は、西北に向つて尾根を少し登り、今度は尾根の西側を卷きながら淺間隱山へ向つた。この尾根の西側にはよい道がある。淺間隱山の西南の斜面にある炭燒のカマへの道らしい。藪がひどいので頂上へ尾根を進む事はむづかしい。一番大きな水のある澤を上つたが、少しづゝ

岩があるので上るのに樂だつた。丁度頂上と一七〇〇米突のピークの間へ出られる。

頂上から輕井澤峠(一四四六)迄は藪が一寸ひどいが峠の附近は炭燒ですつかり禿山ばかりで樂だつた。この峠の名は鳩の湯の方面から輕井澤へ出るために越すのでかう云ふのかも知れぬが、あぶなつかしい名だ。正しい名をお存知の方は御教示を乞ふ。この峠には大きな鳥居があるので直ぐ分る。こゝから鳩の湯までは僕にとつては忘れ得ぬ好印象を得た所。秋の靜かな落葉徑を歩く事の好きな人には是非おすゝめしたい所。なほ、其の上に鳩の湯の附近の美しい山の乙女達の姿も忘れ得ない。

第三日。この日は、矢竹への廣い道を歩き、竹の字の附近に水車があるが、この少し手前を左へ這入つて峠へ向つた。この道は最初分りにくいが途中からは切開があつて間違へる心配なし。この地藏峠には石の小さな地藏が數個ある。場所柄にないしやれたベンチなんかあつて一寸いゝ所だが、この日、物凄い風であまつさへ雨も降りさうだつたので、ゆつくりのびる事も出來ずに應桑へ下る。この西側の斜面は一面の隈笹。その中をゆるく迂つて行くいゝ道。そして目の下には、如何にも肥えた眞黑な吾妻の秋の裸地と、其の中に輝く綠なす麥畠とがある。唯、譯もなく氣持よく應桑まで下つてしまつた。(芋川)

八風山、物見山、荒船山

高瀨 進三、增山清太郎

一一、一三、晴後曇　信濃追分(五・一〇)——六・〇〇)——杉瓜(七・〇〇)——下發地(七・三〇)——八風山三角點(九・五〇)——一〇・一〇)——香坂峠(一一・二〇)——一一・三〇)——晝食(一一・五〇)——〇・二五)—

—志賀越(〇・四〇)——物見山(一・〇〇)——初谷鑛泉(二一・〇五)

一一、一四、晴　初谷鑛泉(八・三〇)——富岡街道に出る(八・五〇)——富岡街道より岐る(九・〇五)——荒船不動(九・五〇——一〇・一〇)——星尾峠(一〇・四〇——一〇・五〇)——經塚山三角點(一一・二五——〇・三五)——一三四八M獨立標高點(一・二〇——一・四〇)——星尾峠(二一・二〇——二・二五)——柏木峠への道(三・一五)——線ケ瀧(三・三五)——羽澤(三・四五)——雨澤(五・三〇——六・〇〇)——下仁田歸京

八風山から物見山荒船山一帶霧氷が美しかつた。盛を過ぎた黄葉の山々はほんのり薄化粧をした様に霞がかつた様に淡く黄、紅が浮び上つてゐた。寒いのに少々閉口した。香坂峠から物見山へかけては何處もいゝ。中部日本の代表的低山だと云へる。殊に物見山程やさしい山はないと思つた。かなり早いのは、日が陰つて寒いので自然能率が上つたわけなのです。

第二日は實に暖かつた。經塚山からはかなり眺望がいゝ。荒船山から神津牧場へ行くつもりだつたが、戻るのが厭になつて星尾峠から東へ下つた。御大典の奉祝に街道筋は、部落のはづれからはづれへ紅提燈が無數に灯されて闇の中に夢の様に浮んでゐた。(すゝむ)

八風山、物見山、荒船山

四、一三、晴　信濃追分(五・四五——六・一五)——上發地(七・一五)——八風山三角點(九・〇〇——一〇・〇

園山德三郎、清水達雄

○――香坂峠、神津牧場分岐點（一一・〇〇――一二・〇〇）――物見山三角點（一・〇〇――二・一〇）

――一一〇〇米突鞍部（三・一五）――初谷鑛泉（三・四〇）

四、一四、晴　初谷鑛泉（九・一五）――八八九米突獨立標（九・四五）――荒船不動（一〇・二五）――星尾内山峠（一〇・五五――經塚山頂往復――一一・五〇）――綠ケ瀧（〇・五〇）――羽澤（一・三〇）――雨澤（二・三〇）――自動車――下仁田（三・〇〇）

上發地からは盲滅法に登る。低いから難なく達する。が、八風山の頂上から香坂峠への尾根道は踏迷つて澤に降りてしまつた。地圖通りの道を通り左折して香坂峠へ出た。牧場へ泊りたくもあつたが、ものぐさな旅心地から僅な交渉をも嫌つて初谷鑛泉泊りとした。低いピークをいゝ加減に卷いて通稱内山峠（一一〇〇米突）に出、鑛泉に着いた。

鑛泉から一度街道に出て星尾内山峠まで、いゝ道を登る。荒船不動の本社から十分も行くと、左荒船山近道と粗末な導標が立つてゐたが、本道をとつた。經塚山から荒船に出る心算だつたがひどい霧と雪に逢つて割愛した。（園山）

神津牧場を中心として

芋川稔一、丸茂平造、太田又一

四、二六、晴　上野驛（後一一・一〇）

四、二七、晴　輕井澤驛（五・〇二）――途中にて朝食三十分――矢ケ崎山三角點（六・三七――七・〇〇）――

入山峠(八・二〇)——八・四〇)——國境を進む——途中炭燒小舍跡にて晝食一時間——和美峠(〇・三〇)——〇・四〇)——日暮山三角點(二・五〇)——三・〇〇)——峠(俚稱七曲り)(三・三五)——高立(四・四〇)——一本岩(五・〇五——五・五〇夕食)——神津牧場(七・二〇)

四、二八、晴　神津牧場(八・五五)——里道內山峠(一〇・〇〇)——一〇・〇七)——熊倉峰北峰(一〇・二五)——熊倉峰三角點(一〇・四〇)——縣道內山峠(一〇・五五——一一・三〇)——星尾峠道に合す(地圖八八九米地點)(一二・〇〇)——荒船不動(當日祭禮)(〇・四〇)——荒船山三角點(一・五五——二・三〇)——星尾峠(二・四八)——荒船不動(三・〇五)——內山峠分岐點(三・三五)——初谷鑛泉分岐點(黑田)(三・四七——三・五五)——初谷鑛泉(四・一五)——食(四・二〇)——四・五〇)——內山峠(六・五〇)——神津牧場(七・四〇)

初谷鑛泉から十分も來ると畠地がある。此處には上の方に立派な道が澤山あるので其の方に引つぱられやすいから注意を要する。分れ道が一寸氣付かずに通り過ぎやすい。正直に澤を離れない樣に傳つてゆけばいゝ。僕達は間違つてしまひ、其の儘がんばるつもりであつたがおそくなりさうなので一時間ばかりで引き返した。但し峠から下つて來れば間違へる心配はない。

四、二九、晴後曇　神津牧場(一〇・〇〇)——香坂、志賀分岐點(一〇・三二)——志賀峠(一〇・四五——一〇・五〇)——物見山三角點(一一・〇〇——一一・二〇)——志賀峠(一一・二七)——香坂峠(〇・〇五——〇・五〇)——途中晝寢四十分——香坂東地(三・〇五)——香坂(四・〇〇)——鼻顏橋(岩村田町入口)(五・

三七）――岩村田驛（六・〇八――六・一三）――小諸（六・四五――一一・一〇）――翌朝歸京

追記――矢ケ崎山の北面は落葉松が植えられてあつた。輕井澤方面からこの頂まで道がついてゐるらしい、矢ケ崎山の南面は小さな隈笹の急傾斜である。其の隈笹が絶えるとブッシュである。それが入山峠まで續くのである。かなりひどいが入山峠からは防火線やら切開けやらで樂である。

里道内山峠と假に云つておいたのは地圖の内山峠の北、國境と點線路（小徑）とのクロスする峠を指すのである。牧場の人達は兩方ともに内山峠といつてゐる。

高立（群馬縣）から馬取萱（長野縣）に至る峠は「七曲り」といつてゐる。（又一）

東京附近（丹澤山塊、大菩薩方面）

中森長太郎

大菩薩峠

一一、二、晴　鹽山（四・二三）――裂石――上日川峠――大菩薩嶺――峠――上日川峠――嵯峨鹽（二・一五）

一一、三、晴　鑛泉――初鹿野――東京

三峠山

芋川稔一、園山德三郎

一二、一、　新宿（後一一、五一）

一二、二、曇(八丁峠への途中雪降る)　小沼(四・二〇)——山神社(四・四五——五・三〇)——達磨石(六・〇五——六・一五)——鞍部(八・四五)——三峠山三角點(八・五五——一〇・一〇)——大幡八丁峠(一一・二五——一一・四五)——藤野木河口村分岐點(〇・一〇)——河口村(二・二〇)——吉田——大月——歸京(八・二四)

大岳山、御前山、三頭山

勝田一郎、増山清太郎　外一名

一二、八、晴　新宿(後七・四五)——二俣尾(一〇・〇〇)——御岳山(前〇・四五)——大岳山(二・三五)

一二、九、曇夜降雨あり　大岳山(六・二〇)——中岩山(六・五〇)——大澤峠(七・一〇——七・五〇)——御前山(九・三〇——九・五〇)——水窪山(一〇・五五)——月夜見山(一一・三〇)——數馬峠(一・二〇)——三頭山(二・三〇——三・五〇)——前三頭山(四・〇〇)——南秋川水源附近露營(六・五〇)

一二、一〇、雨後晴　露營地(六・〇〇)——一四〇〇米突ピーク(七・五五)——數馬峠(八・二〇)——小河内(一〇・一〇)——氷川(二・一〇——三・五〇)——二俣尾(解散)

御前山から三頭山までは尾根の北側を卷く良い林道がある。月夜見山(一一四七m)と風張峠との間に東京市の造林小屋が出來てゐた。三頭山から槇寄山(一一八八m)に至る縣界尾根はひどいブッシュで徑は殆ど無い。(増山)

三峠山

丸茂平造、太田又一

一、二六、晴　小沼驛（四・一〇）——山神社（四・三〇）——達磨石（五・二〇）——途中朝食三十分——三峠山鞍部（九・〇〇——九・五五）——三峠山三角點（一〇・〇〇——一〇・二五）——八丁巣鷹山（一〇・三五）——アミタテバ（一一・〇〇——一一・三八）——大幡八丁峠（一一・五八——〇・〇五）——藤野木八丁峠（〇・三八——一・三〇晝食）——御坂山（二・四五——三・一七）——御坂峠（三・三五）——疱橋（モハシ）（四・三〇）——船津（五・三五）——自動車——吉田驛（五・四五——六・〇三）——大月驛（七・四五——八・一〇）——新宿解散

三月の大菩薩附近

吹原不二雄

三、八、晴　初鹿野驛（四・〇〇）——嵯峨鹽（八・一〇）——下日川峠（九・三〇）——中日川峠（一一・三〇）——上日川峠長兵衞小屋（三・三〇）

残雪は日蔭に僅に残るのみであつた。日川尾根にかゝつてから腹痛を病んだので小屋迄多く時間を要した。夕方小屋の爺さん戻る。

三、九、晴　滯在、附近を散歩す。

三、一〇、晴　滯在、晝から日川源流を通つて狼平に遊ぶ。

三、一一、曇　上日川峠（八・三〇）——大菩薩嶺（九・四〇）——大菩薩峠（一〇・三〇）——上日川峠（一一・一〇——一一・五五）——裂石（〇・四〇）——鹽山驛（二・五五）

唐松尾根の登りから大菩薩峠までは雪さへ散らついてきた様な悪い空模様だつた。至る所に標柱が立つてゐる

ので公園化した様な氣がした。

原小屋澤より早戸川を下る

中島嘉一郎、磯野計藏、手塚晴雄、久保田禮治

四、二五、晴　新宿驛（後五・〇二）——八王子——根小屋（九・三〇）

四、二六、晴午後烈風雨　根小屋（八・〇〇）——鳥屋柏原（一〇・〇〇）——井戸澤（一一・三〇）——原小屋澤官行造林小屋（三・五〇）

四、二七、晴　蛭ケ岳往復（八・三〇——一一・三〇）——中食——小屋（〇・二〇）——地藏澤落合（〇・三〇）——滑り瀧（〇・五〇）——是より瀧三四あり多く右岸をへづる——中ノ澤落合（三・一〇——三・三〇）——雷淵——傳道——蛙澤（五・三〇）此處にて到底本日中に行けぬ爲に震災前の古炭燒籠に泊る。

四、二八、晴　蛙澤（九・〇〇）——水電堰堤（一一・二〇）——八丁ノ瀧（一一・四〇）——鳥屋宮ノ前（一・〇〇）——根小屋（一・三〇）

なだらかなヒメツギの草原が終り、下り始めると丈なす笹が現はれる。五分ばかりで左に分岐するのが原小屋澤で、又五分程で官行造林小屋へ出る。二十人位泊れる。水は半町程下の方である。まわりは笹がこひである。

翌日は夜來の烈風をさまつて蛭からの眺めは良かつた。僕等は今迄記錄の尠い原小屋澤から早戸川を下らうとして晝に小屋を出た。始めは良い道がついてゐる、右から可成の澤が入つてくる、緩傾斜の道をたどると、明治末年の大伐採のシラ（鐵砲）がある、三十分程で滑り瀧に出る、五丈位な大きな岩の上を水が滑り落ちてゐる、澤

は此處から急傾斜となり兩側は美はしい森林となり、中々景色が良い、右の方の岩壁からは正面に眺められる。中島君と二人で可憐なミツバコンロンサウを見付けて喜んだ。今迄ついてゐた道はこゝで終り、右岸のガレを下る、少し落石する、下りきると平である、是からは大きな石が澤山あり、少し行くと又急になつて水が落ちてゐる、右の方の岩にへばり付きながら靴を脱いで下る、此の邊は兩側はすつかり切り立つてゐる、澤を又左に右に下つて行くと、又段をなしてゐる、右側を下ると小さな美しい瀧が潭をなして落ちて居る、此の邊から早戸川の對岸が見える、右側に荒れた道があつたので、ゆくと十五分程で中ノ澤合流點の眞上のガレに出た。下ると本流に出た、小屋から三時間である。震災の爲め早戸川は急に傾斜がゆるくなつた爲め、砂が一杯積つて殺風景な樣子である、大瀧澤が右から來るが、大瀧は此處からは見えない。

地圖の古い道はヤダケ等が密生して歩けぬ、川を渉りつゝ蛙澤で右岸の古い骨丈の炭燒竈に急造の屋根を造つて泊る。

二十八日は昨日の通り、岩から水へと幾度となく川越しをしてゆく中、何時か來て覺えてゐた兩側が、岩で圍まれ箱淵とでも云ひ度い所に出た。洲が多くなると、水電の堰堤に出る、八丁の瀧落口の狹い所に又堰を造るとて、瀧の岩壁を人の子に依り壞されて居たのは無慘であつた。（久保田）

大室山、加入道山

四、二八、　中野驛（後三・三〇）——與瀬（五・二〇）——牧野村大久和（七・三〇）

關守三郎、小川竹夫

この部落の山家に泊めて貰ふ。

四、二九、晴後曇　大久和（四・四〇）——大川原橋（六・一五——六・二五）——鐘撞の鞍部（七・四五——八・〇〇）——鐘撞三角點（九・〇〇）——大室二等三角點（一一・四〇——一二・〇〇）——加入道山三角點（〇・五〇——一・〇〇）——馬場（二・三〇）——大室指（三・四〇）——强盜峠（四・五五——五・〇五）——安寺澤（五・四〇——五・五〇）——上野原驛（八・四〇）

鐘撞より大室への境界の切開判然せず、地圖の境界線より二百米ばかり北を行く。猛烈な藪で相當へばつた。前進不可能となり四苦八苦の末、漸く境界線の切開にとつ付く、丁度標木第「三一」の所。（三十分以上も霧に包まれてゐる）地圖と同じく尾根筋をからみ標木第「七」を過ぎて間もなく三角點。三角點のヤグラは倒れてゐた。こゝから加入道へは切開に「十」印の石柱あり、之を辿ればわけはない。三角點のヤグラ完全。强盜峠は大した所でない。たゞ尨大な大室、加入道の尾根の具合や、テクスチュアーの發達が一寸偉觀である。（T・O）

麻生山、權現山　（豫科懇親旅行）

増山清太郎、勝田啓介、鈴木英雄、間瀬　正

大友亮藏

四、二八、　新宿（後一一・五八）

四、二九、曇　猿橋（二・四〇——二・五〇）——葛野川最初の橋（四・一五）——駒宮への分岐點（五・〇〇）——麻生澤入口（五・五〇——六・二〇）——楢原尾根第一ピーク（八・三〇）——麻生山頂上（一〇・二〇）——一

二六七米三角點（一〇・四〇）——途中晝食——權現堂（〇・五〇）——八八〇米の十字路（一・〇〇）——扇山西側一一〇〇米（二・〇〇）——鳥澤驛（三・一五——三・二五）——新宿

豫科懇親旅行としてはあまりに人數も少なく、期待した眺望もなかつたが、懇親旅行としては惡くはなかつた。

陣馬峰附近　園山德三郎、芋川稔一

六、八、午前中雨午後晴　與瀨驛（七・二七——七・五〇）——鞍部（八・五〇——九・〇五）——吉野驛分岐點（九・一五）——案下峠（九・四〇）——陣馬道分岐點（霧で何も分らず分岐點が不明瞭のため案下峠まで行つてしまひ引き返す）（九・四五）——陣馬峰（一一・一五——一・二五）——和田峠（頂上から和田峠まではツツジ滿開）（一・四〇）——クラゴオ峠（三・一五——三・三〇）——上野原驛（四・四〇）

丹澤山塊　太田又一、清水達雄、增山清太郎、大友亮藏

六、八、曇　與瀨（七・二五——八・〇〇）——道志川渡渉晝食（一一・五〇——〇・四〇）——長野（一・一五）——燒山（三・二五——三・四〇）——井戸澤小屋跡（四・二五）——カヤノ澤入口（六・〇五）——炭燒小屋（六・二〇）　十合健二

ヒメツギで今までまいてゐた霧が一時晴れたが日沒近かつたので原小屋澤の小屋が見つからなかつた。カヤノ澤は原小屋澤の小さな枝澤で、地圖の道から四五丁位下つた所に炭燒小屋があつたので泊つてしまつた。

六、九、晴時々曇　小屋（七・三五）——地藏澤入口（八・一五）——蛭ケ岳（一〇・二〇）——一〇・四五）——丹澤山手前の鞍部晝食（鞍部から大瀧澤を約一町半下ると——地圖の小徑ではなし——水がある）（一二・〇〇——一・〇五）——丹澤山（一・一五——一・二五）——龍ケ馬場（一・四〇）——塔ケ岳（二・二五——三・〇〇）——九〇六米突三角點（三・四五——四・〇〇）——大倉（四・五〇）——澁澤驛（小田急）地藏澤入口には水ありの立札があつたが水は無かつた。大瀧澤以外にはあまり水は得られない。丹澤山と不動ケ峯に名ばかりの小屋があるが長持ちはしないだらう。

秩父方面

吹原不二雄、關守三郎　外一名

晩秋の奥秩父

一〇、三一、晴　韮崎驛（六・〇〇）——東向（八・〇五）——鳥居峠（九・四〇）——御門（一二・〇〇——〇・四〇）——松平牧場事務所（二・三〇）

一一、一、晴　事務所（八・一七）——富士見平（九・二三）——瑞牆山（一〇・五〇——一一・五〇）——事務所（三・三〇）

一一、二、晴　事務所(四・二五)——富士見平(五・四〇)——金峰山(八・四五)——朝日岳(一〇・三五)——奥千丈岳(一・二〇)——國師岳(一・三五)——京ノ澤小舍(三・四〇)

一一、三、晴　小舍(八・四五)——オツクェ岩(一一・一〇)——川浦(二・四〇)——鹽山驛(五・四三)

韮崎驛より東向迄は自動車あり。事務所は釜瀬川の支流アマドリ澤に沿ひ一三〇〇米あたり、焚木豐富、水は勿論。金峰山の登りは風激しきも眺望極めてよく北アルプス上州一帶の雪を被れる山々がはつきり見えた。瑞牆山にても南方の眺望がよくきく。三繋平の南二丁の所に小屋あり。國師岳にては急に霧がまき急いで天狗岩の方に下る。京の澤小舍は附近一帶にジメ〳〵してゐて氣持惡くおまけに風通しがよすぎる。小舍の上の道を左にとるとあまり上らないが長たらしくてつまらない。

乾　德　山

太田又一外一名

一一、一一、曇後晴　鹽山(四・〇〇)——窪平(五・三五)——德和(七・五五)——乾德山前宮(一一・五〇)——一・三五)——乾德山(二・〇〇)——二・一五)——前宮(二・四〇)——德和(四・二〇)——窪平(六・二五)——七・一〇)——自動車——鹽山(七・三五)

乾德山へは地圖德和川の川の字の北にある小尾根の東側の澤を登つて行く。德和川に沿ふ點線路との分岐は「乾德道」といふ道標と鳥居とが目標である。乾德山前宮は地圖乾德山の山の右下附近にあると思はれる。上に水があるといはれたのでもつて行かなかつたので非道い目に會つた。前宮附近をさがしたが水は見當らなかつた。

將監峠、雲取山

中島嘉一郎、中森長太郎

一一、一五、雨　鹽山（四・二三）——柳澤峠（八・四五——八・五五）——落合（一〇・〇〇）

柳澤峠の上に實に大きい道が出來てゐる。將監峠まで行く筈を猛烈な雨に妨げられて落合の鈴木屋清八に泊る。

一一、一六、小雨、曇　落合（七・一〇）——犬切峠（七・五五——八・〇〇）——三ノ瀬（八・四五——九・〇五）——高丸戸分岐點（九・二〇）——朝日谷を渡り尾根道に合す（九・三〇）——舊、新道分點（九・三五——九・四五）——ムジナの巣（一〇・〇五）——將監小屋（一〇・五五）

將監小屋には薪が豐富にあつた。天氣が思はしくないので牛王院平附近で遊んで暮した。

一一、一七、晴　將監小屋（七・四五）——龍喰山（八・三五——八・五五）——林道に下る——大ダルミ（九・四五）——九・五五）——禿岩（一〇・二〇——一〇・三三）——飛龍山（一〇・四六——一〇・五五）——禿岩（一一・〇五——一一・一〇）——北天タル（一一・三五——一一・四〇）——雲取小屋（一二・五五——二・〇〇）——雲取山（二・三〇——二・四五）——小雲取（二・五五）——ブナ坂（三・三〇——三・五〇）——甚助小屋（四・〇〇）

林道は飛龍の南、禿岩のところで最も高い所を通つて居る。北天タルは三ツ山手前の鞍部で、林道は此處から尾根に出る。之から北天林道が右下に通じて三條湯に達して居る。約一里。北天タルの北二丁に水あり。狼平の雲取小屋から林道を離れ眞直ぐに雲取の頂上に登る。七ツ石の手前で林道が尾根に出て來る。ブナ坂といふ。甚

助小屋は雲取から來ると此處から林道を數町戻ると、左下の急傾斜面に小屋が見へる。水は二丁程離れて居て小屋はきたない。薪は豐富に貯へてあつた。

一一、一八、曇一時雨　甚助小屋（九・三〇）——七ツ石神社（一〇・〇〇——一〇・四〇）——鴨澤（一・〇〇——一・四〇）——小河内（三・一五）

丁度今日は年一回の七ツ石神社の御祭だつた。山麓の人々が女や子供までも登つて來るのに出合つた。堂所では今日一日は公然の秘密になつて居る賭博を開帳するため大勢の人が集つて居た。小河内では鶴屋本店で豪遊。

一一、一九、　小河内（九・〇〇）——氷川（一二・〇〇——一二・四〇）——自動車——二俣尾（一・三〇）

瑞牆山と金峰山

増山清太郎

五、一八、曇　韮崎——八卷——御門——松平牧場事務所

五、一九、曇後晴

寢坊をしたのとあまり氣持が良いので一日牧場の中をブラ〳〵してしまつた。牧場の小丘に立てば、白峯、八ケ岳、富士、御坂山塊等が春霞の上に浮び出て、實に美しく眺められた。

五、二〇、晴　牧場（八・三五）——富士見——賽ノ磧——瑞牆山三角點（正午頃）——牧場（三・五〇）

鉛筆紛失のため時間を記錄せず。

五、二一、曇後晴　牧場（七・二〇）——富士見（九・一五）——大日岩の水場（一〇・二〇——一一・五五）——金

峰山(二一・〇五)——三・一〇)——御室小屋(四・三五)——上黒平(九・〇五)——黒平温泉(九・三〇)

好い氣持の春の日に、重荷を背負つてぶらついたもので、楢峠の手前で日が暮れたのには面喰つた。併し陰暦十三日の月の光を浴びて、眠つた黒平の村へ入つて行く氣持もあながち捨てたものではない。

金峰の頂上では北側を閉ざした夏のやうな白雲の、霽れんとして霽れないのを一時間も待つてゐた。刈合峠(一八三一m)のあたりでは炭焼の小屋に入り込んで暫く話して來た。

雪は瑞牆山では深い澤の底、金峰山では頂上に見たばかり。

五、二二　黒平——猫坂——御岳——天神森——甲府

笠取小舍、雲取山

増山清太郎、鈴木英雄、太田又一

一〇、三一、曇時々晴　鹽山(四・一七——四・二〇)——裂石(雲峰寺山門朝食)(六・四五——七・四〇)——柳澤峠(九・三〇——九・四〇)——川浦峠(一・四〇——一・五〇)——笠取小屋(四・二五)

柳澤峠には市來市長時代に建てたらしいトテモ大きな青銅の鳥居があつた。この峠から笠取小屋までの林道は平坦だが餘り丁寧にまきすぎてゐる。ぼんやりした天氣で眺望のなかつたせいもあらうが二度と通る氣の出ない程長い。

一一、一、終日濃霧、牛王院平附近で霰となる　笠取小屋(一〇・〇五)——水神社(一〇・三〇——一〇・三五)——笠取小屋(一〇・五〇)——唐松尾登口(一・二五)——牛王院平(二・〇〇——二・三〇)……

この三十分は道を間違へたためである……將監峠（二一・三五）——將監小屋（二一・四五）

牛王院平で林道は二岐してゐる。左は三峰へ、右は三ノ瀬へとなつてゐる。初め左して折柄の霰にたゝかれながら三十分を無駄に過した。引き返へして右の道をとるとすぐに將監峠の指導標に出た。此處でも林道は二岐してゐる。一は惣小屋に通ずる林道である。こゝも右すれば又指導標があつた。新將監峠と書いてある。將監小屋はこの指導標から切開きを南に下つたところにある。この小屋と前日の笠取小屋とは薪木に不自由する恐れがあるかも知れない。

一一、二、終日霧深し　將監峠（八・三五）——大ダルミ（九・四五）——飛龍大權現社（一〇・三五）——雲取小屋（〇・五〇）

雲取小屋では薪の豐富なのと泊り合せた何處かの山岳會の人が夜中火の番をしてゐてくれたので暖かく寢られた。水は雲取寄りへ二丁餘、備付けの石油鑵でとりに行く。

一一、三、快晴

雲取小屋（六・五〇）——雲取山三角點（七・三〇——八・一〇）——武州雲取小屋（八・二〇——八・二五）——最低鞍部（八・四五——八・五〇）——芋の木戸ツケ下の指導標（九・一五——九・二五）——白岩北側鞍部（晝食）（一〇・一〇——一〇・五〇）——地藏峠（〇・〇五——〇・三〇）——三峰神社（一・三〇——一・四五）——大輪（三・一〇——四・〇五）——自動車——影森（五・一〇——五・一八）——寄居乘換——池袋（八・三〇）

初の計畫では芋の木戸ツケから國境尾根に沿ふて西谷山、仙元峠へ出る心算だつたのが芋の木戸ツケの指導標

に「道なく、酉谷山まで八時間を要する」とあつたので時間の關係上變更をよぎなくされて三峰へ下ることにしたのである。白岩山北側鞍部（指導標あり）で高橋君に會ふ。將監峠附近の道に就いては「針葉樹」第二號吉澤氏の「秩父事情」を參照せられたし。

八ケ岳附近

金田一郎、中島嘉一郎

八ケ嶽

一一、三、晴　茅野（八・二五——九・〇〇）——自動車にて——中道（九・二五）——柳川（一一・三〇——一二・〇〇）——製板小屋（〇・三〇）——美濃土小屋（一・一五）——赤岳鑛泉（二・一五）

製板小屋の所で道が不明瞭のため暫し立往生。此附近は陰鬱だ。夕方宿から見た赤岳・横岳の岩壁は實にいい。

製板所から鑛泉までに橋が九ある。

一一、四、晴　鑛泉（六・〇〇）——奥小屋（六・四〇——六・四五）——阿彌陀岳・中岳鞍部（七・三〇）——阿彌陀岳（七・五五——八・一〇）——赤岳・權現岳間の尾根に出る（九・一五）——地獄谷小屋（九・五五）——權現岳（〇・二〇——〇・二五）——三頭小屋（〇・四〇——一・〇五）——前三頭（一・四〇——一・四五）——二三〇〇米突？附近で道は二岐す（二・〇〇）——大瀧岩分岐點（左へ一丁水場）（二・二〇——二・四二）——

燕岩分岐點(三・〇六——三・一〇)——大泉神社分岐點(四・二五)——原谷戸(六・〇〇——六・三〇)——長坂驛(七・五〇)

實に何れの尾根を下りて來たのか地圖上、甚だ要領を得ない。御神樂尾根と云ふ名があるらしい。重層岩とか御神樂岩、燕岩、屏風岩等の奇岩?がある。仲々長い下りで、足を若干痛めたので、上諏訪でのびる事にした。油屋別館に泊つた。諏訪は實によいところだ。

立科山と八ケ岳

増山清太郎　他二名

七、二六、　上諏訪——茅野——瀧ノ湯

七、二七、曇夕立あり　瀧ノ湯(六・二五)——大河原峠道と分る(七・〇五——七・一五)——水場(七・三〇——七・五〇)——一番小屋道と分る(八・一五)——中段(九・四五)——立科山(一〇・五五——〇・二〇)——春日湯澤道と分る(〇・三五)——大河原峠(一・四〇——一・五五)——瀧ノ湯(四・二五)

大河原峠から瀧ノ湯あたりへかけての立科の裾野は實に好い氣持だつた。南アルプスの稍ゝ緊張した山旅の氣分を拔くにはこんな所に二三日もブラついてゐるのが一番だ。まだ七月だといふのに黄色い百合も咲いてゐるし耳を澄ませば鳴く蟲の音も聞かれる。意外な所で秋の動かうとする氣配を見せられて驚いた事であつた。この長閑な高原を捨てゝ、湯の宿が狹い澤の底にあるのは惜しい。澤の水音とその名の由來する湯瀧の音が實にうるさい。新湯は瀧こそないが澤の音は矢張うるさからう。それに溫泉プールと變にモダン振つたマッチ箱的な建物が

氣に食はぬ。小齊湯は水音は聞えないだらうが如何にも落付のなささうな宿だ。

七、二八、瀧ノ湯——八ツ手——赤岳鑛泉

七、二九、晴　鑛泉（六・〇五）——美濃戸 中山（六・五五）——行者小舍（七・一〇）——中岳・阿彌陀岳鞍部（八・一〇）——阿彌陀岳（八・三〇）——八・五〇）——中岳（九・二〇）——赤岳南稜（一〇・〇五）——赤岳（一〇・二五——一一・三〇）——石尊岳（〇・一五）——硫黄岳（一・二五——一・五五）——夏澤峠（二・二〇）——本澤泉（二・五〇）

夏の八ケ岳は賑かだ。頂上には繪葉書を賣つてゐるし赤岳小舍には小舍番がゐた。横岳の道は今年も改修されて、もう針金の御厄介になる所は一個處もない。

七、三〇、本澤——松原——小海

北アルプス

白馬岳

リーダー　高木英二、赤城鈴太郎、宇佐美敏夫、金田一郎
磯野計藏、中島嘉一郎

一二、二一、晴　大町——四ツ谷。中綱で自動車が動かなくなつたら、丁度馬橇が迎へに來た。佐野坂を越

える頃から星が見え出した。後立山の山なみが、西の空にくつきりと紫紺の屏風を立並べて居る。冴え渡る冬の夜、橇のきしる音が一層靜けさを増す。

一二、二二、四ツ谷(七・〇〇)——二股(九・〇〇)——九・二五)——猿倉(二・二〇)

芦倉の先まで道が踏まれて居た。根據地と定めた猿倉の休憩所は、二方開放ちになつて居るので、夏小屋の材料で周圍を圍んで、屋根の雪を落したら、軒から下はすつかり埋つて、住家らしくなつた。

人夫　丸山靜男、松澤嘉一郎、横川藤一、郷津長平、大谷東衛

一二、二三、晴　午後より雪　白馬尻往復

今日は白馬尻の岩小屋偵察だ。大谷は約束によつて下山する。他は全部シャベル等を持つて白馬尻へ。小屋の上を登つて行くと雪崩でブナの大木が他愛もなくへし折られた處に出る。そこを一町も登つてナガシリ澤を渡り夏道よりずつと上を御殿場の上へ出るのだ。このあたりが通過に骨を折らせる。白馬尻まで約三時間。岩小屋はすつかり雪に埋れて、岩上の木だけが雪の上に出て居る。とても此の小屋を根據地として使用は出來ない。鍋を掘出すために人夫たちがシャベルを働かせて居る間、スキーの練習をする。何時の間にか日の光が鈍つて、不氣味な風が雪つぶてを運んでくる。一同追立てられる様に引上げる。歸途も三時間。ナガシリ澤は上下とも最大難關だ。

一二、二四、雪　松澤、郷津は殘念乍ら豫定變更の爲歸つて貰ふ事にする。頂上小屋の使用をあきらめたのだ

一二、二五、晴、後吹雪となる。

早朝氣狂ひの様な晴天だ。登路偵察に大雪渓まで進出する。新しく降つた雪も風のため相當硬められて、コンディションは乙上といふところだ。出發も晩かつたが、ナガシリ澤を過ぎて御殿場の上に來た頃から、もう鑓のスカイラインがぼやけて來た。白馬尻に出た頃には、いよ〳〵雪を飛ばして來たが、三號の雪渓まで登つて引返す。今日の結論は大雪渓を登るのは全く樂だと云ふ事に一致した。たゞ雪崩が一番心配だが、降雪量にもよるが、大雪渓に左右から落ちる雪崩は、此の時期では、二、三日間の降雪ならば、概して小さく、而も降雪中か降雪後すみやかに落ちて仕舞ふらしいと云ふ事に見當が付いた。此の事は、登頂の時に正しかつた事を確めた。

一二、二六、吹雪。

一二、二七、吹雪、時々青空を見る。

一二、二八、猿倉(四・三〇)——白馬尻(七・一〇)——葱平(スキーを脱ぐ)(一〇・〇〇)——白馬岳頂上(一一・一一・三〇)——葱平(スキーを穿く)(一二・〇〇)——白馬尻(一・〇〇)——猿倉(三・二〇)

今日天氣が悪かつたら、そのまゝ下山ときめてあつたので手際よく出發出來た。まだ眞暗だ。ラテルネをつけてナガシリ澤を渡るのは、全く骨を折らされた。白馬尻に出る頃漸く明るくなる。雪の狀態も非常によい。大雪渓には既に多くの小雪崩が左右から落ち込んで、スキーのめり込まぬ處もあつた。三號の雪渓で第一回の食事。此の邊から少しづゝ電光形に登り始めた。葱平(ビラ)の急斜面は、ところどころ凍結してゐて、カンテの利かないところもある。小雪渓など區別がつかない。たゞ一つの大雪渓があるばかりだ。蠟燭岩の下でスキーを脱いで、アイゼンを穿く。頂上までは何の造作もない。チョン〳〵と登つて行くだけだ。尾根すぢは殆ど雪が吹拂はれて、

夏道もそれと認められる。頂上東側の雪庇が物凄い。頂上についた頃は一點の雲もない。風も此の時期に珍らしいなぎだ。實に僕等はめぐまれた。頂上の小屋は全部露れて、いかにも寒そうだ。頂上からの眺めは云ふだけ野暮だ。下りはスキーデポーから直ちに穿いてすべる。其の夜の小屋は、ありつたけの蠟燭をともして、七人の山人の間をウイスキーのコップが亂れ飛んだ。

丸山は夕方急用のため下山。

一二、二九、吹雪、　猿倉——四ツ谷

昨日頂上から小屋に歸りついた頃から降りだした雪は、一夜の中に二尺降り積つた。人夫の中、最後の一人になつた横川は、輪カンジキのためぐづ〳〵して居ては歸れなくなると云ふので、一同支度もそこ〳〵に下山した。そして目的を果した氣安さに、皆にこ〳〵しながら、四ツ谷の白馬館に迎へ入れられた。

三月の乘鞍スキー登山

手塚晴雄、磯野計藏、中島嘉一郎、金田一郎

人夫　齋藤竹吉

三、一〇、飯田町驛(後一〇・〇〇)

三、一一、小雪　松本驛(七・一四——八・三〇)——島々(九・二〇)——自動車にて——奈川渡(一〇・三〇—一一・〇〇)——前川渡(〇・四五——二・〇〇)——大野川(二・四〇)福島屋泊

三、一二、快晴　大野川福島屋(八・五〇)——番所(九・四〇——一〇・三〇)——金山原小舍(〇・一五)

新雪五寸程積つたので漸く番所の部落よりスキーをはく、乘鞍の美しい姿を番所原へ上つて見た時、胸はもうわく〳〵して居た。番所より丘陵の様な妙に地勢のごたちや〳〵した所を通つて金山原の小舍に着く、日あたりの良い金山原の小舍は雪も少く、黑い土さへ見える、早速附近でスキーの練習をやる、夫程悲觀する事もない、結構滑れる、齋藤は此の正月畔田前代議士の遭難した頃の方がもつと雪も多く四五尺は此處でもあつたと云ふ、此の附近一帶の雪質は少し濕雪の氣味であるが適當な斜面もあり、練習するだけでも良い。

三、一三、吹雪　滯在、丁度好い工合に天候が惡い、今日一日は骨休み、小舍の近所ゲレンデを探し廻つて滑る、松高山岳部の連中四五名も此の金山原の他の小舍に泊つて居た、先着の人達故流石にもう眞黑い顏を光らせて居るが山の人達故氣持ちが好い。

金山原にはワサビを取る小屋掛けが澤山あつて、どれもこれも滿足な小舍は一つも無いが、泊つて泊れない事はない、現に私達の泊つて居る小舍でさへ、相當廣く、大野川の連中がわざ〳〵宣傳して來た位だから良いのであらうが、今朝の様な吹雪の朝は起きると寢床の上に一面眞白くなつて雪が積つて居る、是には實際あきれた。野天へ昨夕は寢たのかしらと思ふ位だ、夫程節穴の多い小舍ではあるが蒲團は十枚位もあるし、炬燵も、炭も、ランプもあるのには人里近い小舍だけあると思ふ。

三、一四、吹雪　滯在、今日も滯在か、夜は氣溫も下り零點下になる、日中は四五度もある。

竹さんより此の正月の畔田前代議士一行の遭難の話を聞く、冬山の天候の劇變は何よりも恐ろしい、乘鞍の様なだだ廣い尾根では雪崩の心配は殆んど要らないのだらうが、天候が劇變するのが一番恐ろしい、後で聞いた事

であるがやはり此の三月私達よりおくれて乘鞍へ登つて來た神戸商大の一人は乘鞍の肩から眞直ぐ下に下りてしまつて、（實際の道は肩から下りる時大分左へ左へと行かなければならない）大分ひどい目に遭つたさうだ。

ズボンのポケツトに入れてをいた私の時計が乾し方が惡かつたのか、焚火の上にかけてをいたズボンの中に入つて居ない、焚火の中を探がして見たが見付からない、竹さん非常に心配して易を見て貰らひに下の番所の部落まで歸つて行つた、すでに此の時七時すぎだつたので今夜此の吹雪を冒して歸れるかどうかわからないが明朝は乘鞍へ登れるかも知れないので其の出發には間に合ふ樣に歸つて來ると行つて出發した、本當に山の人達の眞面目さ、純眞さには涙ぐましくなる。

三、一五、吹雪　滯在、私達が目を覺ました時には既に竹さんは歸つて居た、夜明け頃歸つたのださうだ、慣れた所とは云ひながら良く一人で吹雪の中を平氣で往復出來るものだと感心した。

時計の後日物語は、竹さんが本當に不思議な程良くあたると云ふ其の村の易者さんに見て貰ふた所「人の尋ねた所にある」と云ふたさうである、再び焚火の中の灰を滅茶苦茶にひつかき廻すと不思議や、昨日あれ程さがした時計が再び現れ出た、此の時はすでに黑焦げに焦げて硝子は熔けてしまつて居た。

午前中鳥居のある尾根の上まで行つて見る、凄い吹雪なのでふるへながら鳥居の所で記念撮影をして引返す、此の鳥居の近所の尾根の惡るい事、風に吹きさらされたやせ尾根で物凄いウインドクラストになつて居る、其の上急なのでターンなど出來ない。

下の金山原に下りて來ると早大の人達五六名に會ふ、リーダーとも覺ぼしき人は尻に毛皮の尻當をぶら〳〵

させて嫌に物凄さう、恐ろしいので默つて居た、私達は小さいシャンツエを作つてゲレンデシュプリンゲンを練習した。

三、一六、晴風あり　金山原小舍（七・〇〇）——鳥居（八・〇〇）——白骨との別れる所（八・五〇——九・四〇）——冷泉小舍（一〇・一〇——一〇・四五）——肩の小舍（一二・一〇——一二・三〇）——冷泉小舍（一・二〇）——金山原（四・〇〇）

冷泉の小舍に泊つて居る松本高校の人達は私達が登つて來たので一緒に行きませうと一緒に行く事になつた、森林帶を出て乘鞍の鞍部を目指して卷いて行く、夫程の吹雪と云ふのではないが登るに從ひ風が出て來て、薄い雲が山頂を覆ひ、風は益々強くなる、乘鞍は風が強いと聞いて居たが餘りの痛さに驚いた、雪の礫を顏に打ちつける、息と雪で顏がばり〳〵凍り其の痛さと云つたらない、肩の小屋へ着いて松高の人達と兩方の人夫と一緒に同勢十人程筒木小屋の軒の庇に荒れの止むのを待つて居たがとても止みさうもなく益々劇しくなりさうなので肩も頂上の一部だとして下りる、登りと違ひ滑降の時は霧が大分深く二三間先きを滑る人の姿が見えないので非常に危險だつた、左へ左へと離れない樣に滑つて行つた、對照とする物がないので自分がどの位早く走つて居るのか分らない、クリスチヤニヤなどで止らうなどして其の反動の大なので漸く分る。

冷泉小舍を松高の人達と別れて歸る時は殘念だつた、早稻田大學の人達が登つて來て此の小舍へ泊るのでなければ私達も今夜泊つて明日の再擧をはかつてもよかつたのである。

三、一七、晴　金山原小舍（九・三〇）——番所（一一・三〇——一・三〇）——大野川（二・三〇）——奈川渡—

—(四・〇〇)——松本(五・三〇)

昨日に變る風の無い良い天氣で冷泉小屋に居る松高の人達が美ましい、又金山原から登るにも癪なのであきらめて下山する事にする、金山原の小屋を出ると直ぐの橋で余、不幸にも滑り落ちた、腰を打つたが買ひ立てのスキーは無事だつた、是から雪の橋は苦手になつた。

大野川の部落で乘鞍へ登ると云ふ神商大の人達に會ふ、又村の青年達が兎など數羽料つて居て是から迎へに行くんだなどゝ大騒ぎをして居るので誰が來るのだと聞いたら此の正月遭難した畔田前代議士の一行だそうだ、遭難のお禮及び宣傳に來るのだとか、前川渡と奈川渡の間で彼等の一行に合ふ、畔田前代議士は登山靴をはいて馬に乘つて居た、君達は何處へ行つて來たのですと聞いた、奈川渡では其のお餘りのお茶菓子を御馳走になつた。

（手塚晴雄）

霞澤岳、明神岳、涸澤行

金田一郎、手塚晴雄、横倉吟三郎、磯野計藏

先輩　浦松佐美太郎、吉澤一郎

七、一、　飯田町發(後一〇・〇五)

七、二、　奈川渡(一〇・〇五——一一・〇〇)——中の湯(〇・五五——二・一〇)——上高地(三・四〇)

松本にて浦松佐美太郎氏、ポーター中山彦一、下川隆雄と一緒になり飯田屋より自動車にて奈川渡に向ふ。直ちに玄文澤に幕營す。

七、三、霧雨、夜は星出づ、夜中は豪雨　霞澤岳へ。幕營地（八・五〇）――涸澤分岐點（一〇・〇〇）――三本槍直下（三・一五）――分岐點（六・三五）――テント（七・二五）

七、四、滯在

七、五、晴、曇、雨　明神山稜

詳細は雜記中の「明神岳へ」（横倉吟三郎）を參照せられたし。

七、六、晴時々雨

吉澤一人涸澤岩小屋に向ふ、左記は手帳に書きとめた覺書なり。

昨夜は十時半頃ドシヤ降りの中を散々な目にあつて歸つて來たので皆トテモひどく參つて居る。起き上つたのは九時頃、夜中は凄い暴風雨だつたらしい、梓川が一尺も增水して居る。天氣がいゝのと涸澤岩小屋へ先へ行つてる下川が心配してるだろうといふ事と、ゴロ〳〵こんな所に寢轉んで居てもつまらぬのと、それに最も重大問題として三圓も出して一晩泊るのは嫌なので自分一人で出かける事にして了ふ。

力餅を食ひ、梓川林道を歩いて横尾へ這入つた。涸澤へ渡る手前に青い煙が見える。長い棒の先に眞新しい草鞋が釣さげてある。清水屋に賴んだ荷揚人夫が昨夕の豪雨の爲、橋がなくなつて居るので今朝早く此處まで來て水の引くまで腰を据えて居るのだつた。從つて自分も御説に從ふより他はない。大きな岩蔭といひ度いが岩の表の様な所へ巣を造つて四時頃から寢てしまふ。何も道具がない、フライパンで米を煮て夕飯にしたが我慢にもたべられたものでは無かつた。それでも雨だけの難は免れた。

七、七、曇、霧小便時々起きたが五時半頃全然起きてしまふ、然し變な天氣だ、川の水は減つた、架橋を手傳つて自分一人先へ行く、約二時間で岩小屋に着いた、帝大の人が三人、下川は今朝、徒渉が出來ぬので屏風岩の側の藪を分けて上高地へ行つた由、暫くして縱走路にある小屋から成瀨氏がグリセードして來た。

夕方涸澤岳と北岳の鞍部までプロムナード、涸と北との間には一岩峯があるからザッテルは兩側にあるわけだ。北側のザッテルから岩場をへつつて南側のコルに降りる時、岩場と雪溪が離れてゐるので飛び降りたらピッケルで腰の邊りをぶつて痛かつた。急な所を怪しげなグリセードで岩小屋に歸へる。帝大の人のゾンメルシーを借りたが凸凹で餘り面白くない。モンガー氏スキーを一本流してしまふ。夜岩小屋の外も中も雨、焚火に眼を赤くしながら、たぬき氏(蓋し氏のついてるのは一橋々下に巣喰ふ狸と異る所以)の醫學を聞く、彼此近い内に博士になるかも知れぬ。夜中無意味な落石の音がゴロン〳〵と聞えて來る。

七、八、曇　帝大の人々は北尾根へ、三時頃上高地殘留組皆來た、帝大の人達が三、四のコルから歸つて來る、下川が餅を持つて來た、穂高祭のである。夜になると又落石だ、蝶と常念のコルにピカリと光ると仙人岩の石がガラガラと落ちて行つた、八時半頃テントに窮屈な思ひをして寢る。

七、九、曇、雨　赤ちやんを殘して皆歸へる、德本越え、淺間の西石川へ、浦松氏に半分出して貰つても俺達の泊る所ぢやない。以上(熊)

劍岳方面

關守三郎、吹原不二雄

七、六、小雨霧　千垣（九・二〇）——芦峅寺（九・五〇——〇・二〇）——藤橋（一・四〇）——熊王清水（三・〇〇）——美女平（三・二五）——ブナ坂小舎（四・一二）

七、七、晴後雨濃霧　小舎（五・三五）——桑谷（六・三〇）——弘法（八・一〇——八・二五）——追分（九・一〇——九・五〇）——室堂（一・五二）

七、八、曇後晴濃霧　室堂（八・一五）——一ノ越（八・五五）——雄山（九・五〇）——大汝（一〇・四五——一一・〇〇）——硯ケ池（一二・一〇——一・二五）——源次郎小舎（二・一〇）

七、九、曇後雨　小舎（七・一〇）——別山尾根（七・三〇）——前劍（八・二〇）——劍岳（九・二〇——一〇・五〇）——平藏頭（一一・二〇）——平藏出合（一一・五五——一・一〇）——小舎（一・五五）——弘法（二・〇〇——二・四〇）——ブナ坂小舎（三・五五）——藤橋（五・二五）

七、一〇、雨　滯在。

七、一一、雨後曇　小舎（九・一〇）——別山乘越（九・四〇）——地獄谷——鏡石（一一・三〇——一二・〇〇）——

Fが八日に怪我をして八峯をやる元氣なく、加へて六日以來一日もカラリとならず、殘念乍ら八峯は又の事にする。十二日も朝の中は雨だつたらしい。（M・S）ブナ坂小舎は、今年からやらぬとかであつた、劍も、ホンの登つた丈で、濃霧の爲何も見えず、この行は完全に失敗だつた。雪は隨分澤山殘つて居り、ゾンメルシーを享樂できたのはせめてもの慰めだつた。

室堂も弘法も追分も皆やうやく、小屋を開いたバツカリであつた。

園山德三郎、大平太郎　外八名

燕、槍ケ嶽

七、一一、晴　有明(八・三〇)——有明溫泉(一一・〇〇——〇・一〇)——信濃坂(四・一〇)——中房溫泉(五・二〇)

七、一二、雨後晴　中房(五・三〇)——富士見松(七・四五)——合戰澤小屋(八・一五)——燕山莊(九・三〇——燕往復——一一・五〇)——蛙岩(〇・二五)——大天井嶽(二・三〇)——西岳小屋(七・〇五)

七、一三、晴　西岳小屋(五・五〇)——最低鞍部(七・一五)——殺生小屋(九・一〇)——大槍(一〇・三〇——一〇・五〇)——殺生小屋(一一・三〇——〇・一五)——槍澤小屋(二・三〇)——一の股小屋(三・一五)——白澤渡(七・一〇)——玄文澤天幕(九・四五)解散。

健男子の弱音を吹くのには實に困つた。一の股から上高地までは、あと二里で欺し通した。山で里數を聞かれるのは、ほとほと困つたものである。上高地は凄い月だつた。河童橋から玄文澤の天幕まで、十時近く河聲を聞き乍ら、いゝ道を歩くと、都會の人が自動車に乘つてまでして、此處まで來る心理が判る。川開きの隅田川にも似た人出の中を通り抜けて、學校の天幕に着いたら、あたりに天幕一つない靜けさに、スツカリ喜んでしまつた。とにかくいゝ晩だつた。山慣れない人たちの眞劍な顏に漸く心の故郷に歸つた淡い笑が綻びた。

烏帽子、槍、上高地

太田又一、安達泰三　他二名

七、一七、晴、七倉澤の落合附近で驟雨に會ふ。大町(八・三〇——九・二〇)——笹平(東信電氣發電所・晝食)

（一一・二五——〇・一〇）——葛温泉（〇・五五——一・一五）——七倉澤を渡る（一・五〇）——不動ノ瀧（三・二八——三・三八）——濁小屋（三・四七）

大町で東信電氣の電車にのせて貰はうと頼んだが登山客は絶對にのせないことになつてゐるといふ規則一點張の返事で暑い陽射の何里かを徒歩いてしまふ。葛温泉では橋のたもとに新しく二階建を建築中だつた。

七、一八、晴　濁小屋（六・四〇）——二二〇九米突三角點（畫食）（一〇・二〇——一一・〇〇）——烏帽子小屋（〇・一〇）

烏帽子岳へ小憩後出かける。よく晴れわたつた日だつたので去年の人達の様に間違はずにすんだ。

七、一九、晴　烏帽子小屋（七・〇〇）——三ツ岳三角點（七・五〇）——野口五郎岳（九・二五）——赤岳（一一・五五——一二・〇〇）——赤岳野營地（晝食）（〇・一〇——一・一〇）——小鷲羽岳（一・三〇）——鷲羽岳三角點（二・〇五——三・〇五）——三ツ股蓮華小屋（三・三五）

赤岳ののぼりで霧に會つたがすぐとはれて鷲羽の頂では昨日にましての眺望の好さ。すつかり落着いてしまひ双六を三ツ股泊りにしてしまふ。

七、二〇、終日霧濃く硫黄澤乘越にかゝる頃から雨となる　三ツ股蓮華小屋（八・四〇）——双六池（一〇・四〇——一〇・四五）——樅澤岳（一一・一八）——硫黄澤乘越（晝食）（一一・四二——〇・〇五）——蒲田への分岐點（一・三五）——肩ノ小屋（二・四五）

七、二一、霧後霽れて快晴となる　槍肩ノ小屋（六・四〇）——槍ケ岳三角點（六・五〇——七・〇五）——肩ノ

小屋（七・二五——七・三〇）——槍澤小屋（九・〇〇——九・四五）——一ノ俣小屋（一〇・二六）——晝食（屏風岩對岸の河原にて）（一〇・五五——一一・五五）——德澤（一・一五）——德本峠分岐點（一一・五八——二一・〇五）——明神池（二一・一五——二一・三〇）——河童橋（三・〇五）——玄文澤商大キャムプ（三・四〇）

立山川東大谷より早月尾根を經て劔へ

吉澤一郎外三名

八、三、上野發（後六・五〇金澤行急行）

八、四、快晴、夕立　滑川（六・二八——七・一二）——上市（七・三五——八・三八）——釋泉寺（九・〇五——九・二五）——峠頂上（一〇・三二）——折戸山本屋（一〇・四〇——一一・二〇）——伊折（〇・四〇——一・四〇）——小又川（四・三五）——立山川取入口（五・二〇——五・三〇）——丸田ノ小屋（五・五〇）

八、五、快晴、夕立　丸田ノ小屋（八・〇五）——東大谷出合附近の岩小屋（一一・〇五——一〇・〇〇）——ロープ場（一・三〇——二・四〇）——下ノ二股（三・三〇）——瀧——泊場（三・五〇）

八、六、快晴　泊場（六・一〇）——二股の大岩（七・〇〇——七・一〇）——早月尾根（九・二五——一一・一五）

——池ノ谷右俣上部雪溪上泊場（〇・五〇）

八、七、快晴　泊場（六・三五）——烏帽子岩中央を拔ける（七・三〇）——東大谷上の二俣の下俣上部（七・三八——七・四五）——劔頂上（七・五五——八・一五）——源次郎尾根の平藏、長次郎乘越（九・〇四——九・四〇）——長次郎岩小屋（一〇・一五）

八、八、快晴、霧、快晴　岩小屋（七・一〇）——長次郎の八峯寄窓（八・三〇——八・五五）——三窓（九・四〇——一〇・二〇）——二七〇〇Mの峯（一〇・五〇——一一・〇〇）——雪渓上部アンザイレン（一一・四〇）——割谷、這松、小尾根を放浪し小窓大雪渓に下る（三・五〇）——池の平への分岐點（四・二〇——四・三五）——三窓出合（四・五〇——五・〇〇）——二股テント場（五・一〇——五・二〇）——渡渉（六・一〇——六・一五）——長次郎下（七・〇五——七・一五）——岩小屋（八・〇〇）

八、九、快晴、曇、雨　岩小屋（九・三五）——劔別山平小屋（一一・二〇）

八、一〇、快晴、霧　小屋（六・三五）——雷鳥澤乘越（七・一〇）——淨土川（七・五五）——地獄谷——鏡石（九・〇〇）——姥石（一〇・二五）——追分（一〇・五〇——一一・三〇）——弘法（一一・五五）——瀧見場（〇・一〇）——分れ道（〇・一五）——稱名茶屋（一・一〇——一・三五）——雜穀谷（二・一五）——大津谷（二・四〇）——藤橋（三・二〇）——芦峅（四・三〇——五・〇〇）——千垣（五・二五——五・三五）

此の電車ならば富山にて二時間以上休めて九・三一の急行に丁度いゝのだが不通の爲翌日一番に乘りかえる。

あとがき

劔岳は拙著「登高記」中にも記してある通りまだ〳〵研究の餘地の充分にある岩山であると思ふ、劍谷側には多くの足跡を印せられてあるけれども西側は近代的登山家にとつて絶好の研究對象であろう。冬期の早月尾根及び池ノ谷、夏季（とは限らず）の東大谷。東大谷は谷そのものを登るだけでも可なりの興味はあるが早月尾根の南面は私達に色々面白い地形を提供して居はしないか。同じ様な事が針ノ木岳西山稜の南面、殊に空澤谷の上部にも

云へると思ふ。あの風化霜瀾の烈しいそして凄じいまでに剝落した面を見せてゐる片麻花崗岩の形相は何と云つても忘れる事の出來ない印象である。山岳部の連中がそろつて此の方面の研究に一夏を過したならば必ずや面白い收穫が得られる事と思ふ。（五・五・四）

笠ケ岳、藥師岳方面

鈴木英雄、增山清太郎、間瀨　正

八、一五、晴　松本――島々――中ノ湯――上高地――中尾峠――中尾――蒲田溫泉

溫泉の位置は地圖に示されてゐるより十町あまり神坂寄りである。

八、一六、曇　蒲田（後二・〇五）――穗高分點（二・三〇）――クリヤ谷第一ノ橋（三・三〇）――岩小屋（五・五〇）

穴毛谷を登るつもりであつたが、前夜は數年來の大嵐で增水のため渡渉不能となりクリヤ谷を登つた。クリヤ谷に岩小屋が二ツある。私達の泊つたのは上の方であるが、之はゆつくり寢られない程貧弱なもので、下の方が遙によい。その位置は水流を下から數へて三回目に渡つた所、谷の左岸一四二〇Mである。直ぐ近くまで行かないと見えないから、流を渡つた所で道をはずさない樣に注意を要する。

八、一七、曇　岩小屋（九・〇〇）――尾根に出づ（一〇・四五）――二二四七M南方鞍部（一一・〇五――一一・三〇）――一二五〇〇M北端晝食（〇・二五――一一・二〇）――笠ケ岳（二・三五――三・二〇）――笠岳小屋（三・三〇）

小屋の近くの残雪が消えて、抜戸への尾根の南側の残雪の下まで水を汲みに行かなければならなかつた。

八、一八、暴風雨　滯在。

八、一九、晴後雨後晴　小屋(七・五〇)——抜戸岳(八・五五)——弓折(九・五五)——双六乘越(一〇・五五—一一・〇五)——中平岳(一一・二五)——双六池(〇・二〇——一・一五)——三俣蓮華小屋(三・二〇——四・〇〇)——赤岳野營地(五・四〇)

双六池の小屋は去年も傷んでは居たが、今年は一層ひどく二本の柱は兩方とも折れてゐる。來年まではとても保つまい。

八、二〇、曇後雨　野營地(六・二〇)——小鷲羽(六・四五——七・〇〇)——鷲羽岳(七・三〇——七・四五)—三俣蓮華小屋(八・二〇——一〇・三五)——五郎平小屋(一・二〇)

赤牛に行くつもりで赤岳野營地まで行つたのであるが、天候不良のため尾根通し藥師に行く事にした。

三俣蓮華小屋からは蓮華の北側を卷く新道を採つたが、濃霧のためか甚だ判り難かつた。大體三角點の北東二七〇〇M位の所を過ぎて蓮華の西北の草地を二六〇〇M邊まで下り左に折れて尾根の二六八〇Mの所に出るのであらう。

八、二一、曇　小屋(一〇・〇〇)——五郎澤を登る——黑部五郎岳(〇・二〇——一・一〇)——赤城山(二・一〇)——二六二二Mピーク手前晝食(二・四五——三・一〇)——上ノ岳(四・一〇——五・二〇)——上ノ岳小屋(五・五〇)

上ノ岳の小屋の近くの殘雪が無くなつたとの事なので、上ノ岳で炊事の仕度をして行つた所、小屋の傍に雨後の溜り水が豐富に得られた。

八、二二、暴風雨　滯在。

八、二三、快晴　小屋（六・〇〇）——有峰道との會合點（六・二五）——二二八二M（七・〇五）——藥師岳（八・四〇）——九・三〇）——二六〇〇M晝食（一〇・二〇）——一〇・四五）——上ノ岳分點（一一・三〇）——一一・四五）——眞川小屋（〇・四五）——一・〇〇）——眞川峠（一一・二五）——約一二〇〇M（三・〇〇）——有峰（四・三〇）

この日約二七〇〇Mから上は結氷した。久し振りの快晴に眺望は申分ない。

連日の雨に眞川の增水が氣にならないでもなかつたが、流石に良材を產する寺地山に發る川だけに殆ど增水してゐなかつたらしい。却つて和田川の東谷では膝を越す渡渉を餘儀なくされた。

八、二四、晴　有峰——大多和——土——笹津——富山——宇奈月溫泉

前穗高北尾根及び北穗高

磯野計藏、横倉吟三郎

八、二一、晴後雨　松本驛——澤渡——中ノ湯——上高地（四・〇〇）

澤渡と中ノ湯の間は十六日の大雨の爲め山崩れあり自動車通ぜず。やむを得ず澤渡で人夫を雇つて上高地に入る。

八、二二、曇　上高地滞在

浦松、槇、松本三氏一行を五千尺に訪ふ。夕方三氏一行は有明の人夫彦さんをつれて中ノ湯に下る。夜丸西から常さんの小屋に移る。九時頃より大雨沛然として降る。

八、二三、晴　上高地（九・〇〇）——池ノ平（四・〇〇）

昨夜の大雨は何處へやらカラリと晴れてスガ〳〵しい朝である。支度もそこ〳〵常さんの甥とかいふ政吉を雇ひ涸澤に向ふ。

横尾の入口で晝食を攝り本谷の左岸の徑をとつて岩小屋へと向ふ。道が本谷と別れて涸澤谷に沿ふやうになると我々の目的の北尾根が全容を表はし初める。尙登るとぢきに本日の幕營地である池の平に到着した。此處は涸澤の岩小屋より百五十米位下の處である。土地は平だし水はすぐ後に瀧を控えて豐富だし、又燃木も充分だからキャンプするには岩小屋より却つて良い所である。特に北尾根へ行くには岩小屋より便利である。テント携帶の方には岩小屋より寧ろ幕營地としてこの池の平をお薦めする。

八、二四、晴　北尾根行、幕營地（七・三〇）——第五、六峯鞍部（八・四〇——九・〇〇）——第五峯（九・二五）——第四、五峯鞍部（九・三五——九・四〇）——第四峯（一〇・〇五——一〇・三〇）——第三峯（一一・一〇）——第二峯（一一・二〇——一一・二五）——前穂高（一一・三五——一・〇〇）——幕營地（一一・三〇）

今日は岩登りには持つて來いの快晴、朝食のパンを攝り出發、第五峯六峯の間に至る雪溪を眞直ぐに登る。可成な勾配なので中々骨が折れる。第五、六峯の鞍部から向側は奥又四郎澤が急な傾斜で落ちてゐて牧場の木の香

も新しい小屋が目近かに見える。此處で二十分ばかり休憩の後愈待ちに待つた北尾根の岩登りへと移る。今年ももう可成りの人數が通つたと見えて人の踏んだ這松が枯れて徑を作つて居る。兎に角第五峯と第四峯の鞍部へ達する迄は非常に樂で唯山稜に沿つて行けば良い、第四峯への登りで一寸オーバーハングした處へぶつかるがこれも少し潤澤側を卷いて行けば簡單である。次に第三峯であるが北尾根中最も難場とされて居る處である。併し此處のチムニーも丁度大きな階段のやうになつて居て案外樂にぬける事が出た。それからチムニーを拔けてからの難場は潤澤側をへづると容易に第三峯に達する。第三峯からは次の第二峯を通つて直ぐに前穂の三角點に達する。途中アンザイレンの必要を感ずるやうな處は見出さなかつた。歸りは前穂から奥穂の方へ少し降り加減に行つて池の平を眞下に見て雪溪をグリセードで下る。岩からシュタイグアイゼンがなかつたら降る事は難かしい。それに又雪溪に取付く邊りの岩は非常にもろいから注意を要する。

八、二五、晴　北穂高行、幕營地（九・三〇）――岩小屋（一〇・五〇）――潤澤岳鞍部（一一・五〇）――北穂高頂上（〇・三五――一・〇〇）――幕營地（二・三〇）――牧場（六・四〇）

岩小屋に日大の初見君外二名の人が居たので暫く遊ぶ。七月に來た時とは雪の量がずつと違つて岩小屋附近には少しもない。水も一町ばかり上でなければないさうだ。岩小屋を出發してから潤澤岳鞍部に着き後は縱走路を辿つて簡單に北穂高頂上に到着する。

歸りは北穂から東に走る尾根に沿つて少し下りすぐ左側の澤の方に移つて眞直ぐに下ると池の平の處へ丁度出る事が出來る。併し徑はあまり良くない。此の日の中にテントを疊んで牧場迄降る。

八、二六、曇　牧場滯在
八、二七、曇　上高地——中ノ湯——澤渡——松本

南アルプス

雪の十谷峠轉付峠

吹原　不二雄

一、六、雪　甲府（七・〇〇）——鰍澤（八・〇〇）——十谷本村（一〇・一五）——十谷峠（一一・一五）——新倉（三・〇〇）

一、七、晴　新倉（七・〇〇）——廣河原（八・〇〇）——保利澤事務所（九・三〇——一〇・一〇）——轉付峠（一・三〇——一・三五）——事務所（三・四〇——四・一五）——新倉（六・一〇）

一、八、晴　新倉（九・一五）——トロ——早川釣橋（〇・五〇）——波高嶋驛（一・五〇）——甲府——歸京

積雪量十谷峠一尺、保利澤一尺五寸、轉付峠三尺五寸——四尺、保利澤事務所には番人が二人ゐる。轉付峠の登りは大體切開の跡が木にしるされてゐるので分る。嶺上の眺望は少し西に下れば非常にいゝ。平賀文男氏の「南アルプスと甲斐の山旅」參照せられ度し。新倉は大部開け、廣河原にも發電所あり。

四月の鳳凰、地藏岳

吹原　不二雄

四、二八、晴　新宿（八・三〇）――韮崎（二・〇〇）――穴山橋（二・三〇）――折居發電所（三・三五）――鳥居峠
――青木湯（六・三〇）
折居に入るには勿論祖母石から行くべきだがうつかりして穴山橋まで乘合に乘つて行つてしまつた。
四、二九、晴一時濃霧　青木湯（三・五〇）――精進瀧（八・三〇）――賽河原（一・〇〇頃）――地藏岳――藥師
岳――砂拂ひ――南御室小屋（六・三〇頃）
青木湯からドンドコ澤に入つたが道が明かならず、一八〇〇米位より殘雪俄然多くなり、四尺内外、然も軟雪で大いに惱む。地藏岳より白峯仙丈甲斐駒見ゆ、南御室、思つた程荒れてはゐない。
四、三〇、晴　南御室小屋（六・三〇頃）――舊青木湯跡――青木湯（〇・一五――一・四五）――鳥居峠――折
居――祖母石――韮崎（五・一〇――五・四七）――新宿
南御室より二二〇〇米まで雪で道分らず苦闘を續ける。舊青木湯までの道もひどく荒れてゐる。

赤石嶽、大澤岳、聖嶽

園山德三郎、人夫　田島善太郎

六、一〇、晴　伊那大島（八・二〇）――トロ軌道（九・四〇）――食事――一〇・〇〇）――飯場（〇・五〇）――落
合（二・〇〇――二・三〇）――大河原市場（三・〇〇）
六、一一、晴　大河原市場（一〇・〇〇）――ヒナタ休ミ（一一・〇五――一一・二〇）――三正坊大權現（〇・三
〇）――小澁湯（一・四〇――二・三〇）――高山瀧（三・五〇）――廣河原小屋（五・〇〇）

六、一二、雨　廣河原（五・三〇）——舟窪（八・二〇——八・五〇）——大聖寺平（九・四〇）——大聖寺石室（九・五五）

六、一三、晴後曇　大聖寺平（五・二〇）——拜ミ所（六・二〇）——小赤石（六・四〇）——赤石嶽（七・一五——八・〇〇）——百間平（九・二五——一〇・一〇）——百間洞（一〇・三〇）——大澤嶽（〇・四五——一・〇〇）——鞍部（一・一〇）露營

六、一四、晴後曇　露營地（五・四〇）——丸山頂上（六・〇〇——六・一五）——丸山兎岳最低鞍部（六・四〇——六・五〇）——兎岳（七・四五——八・〇〇）——聖嶽（一〇・〇五——一〇・四五）——兎岳（〇・三〇——〇・四五）——丸山兎岳最低鞍部（一・三〇——一・四五）——大澤露營（六・四〇）

六、一五、曇小雨　露營地（五・三〇）——大澤渡（七・三〇——八・〇〇）——尾高山東方の二二六〇米突の峯（〇・五〇——一・一〇）——地嶽谷久原鑛山飯場（二・五〇）——アンコ（四・一五）——深ケ澤（四・四五）——大河原市場（六・一五）

六、一六、晴　大河原（〇・三〇）——落合（一・〇三）——白諏神社（三・〇〇——三・一五）——敷島館（三・五〇）——伊那大島（五・四五）

大聖寺ヅルネで舟窪から上は可也の殘雪だつた。雨が降るので雪が柔らかく、歩くのに困難だつた。大聖寺平の東面は案外雪は少いが、それでも石室までは一滑りだ。石室は雪が大半吹込んで三尺近くも積つてゐたが、隅が一坪ばかり乾いて居たので助つた。赤石嶽の東側は全部雪で、小赤石から頂上までは雪の縁を辿つた。シユタ

イグアイゼンの必要は認められない。百間洞までの右山のトラヴァースは、雪が弛んでゐるので可也困難だつた。大澤岳頂上から七八分の尾根筋に、一寸した窪があつて、雪と水が溜つてゐた。風が當らないので此處に露營した。雨は降りさうにもなかつたが、濃霧なので早泊りとしたのである。この水は雪のあるまでで、盛夏の頃は有るまいと思はれる。兎から聖までの踏跡は餘り判然しない所もあるが、注意さへ怠らなければ大過無い。丸山から大澤谷への降路は無いが、澤について降りさへすれば、傾斜も樹林も大した事はない。朽ち倒れた釣師小屋が下流に一二あつた。幾十回も左右に渡渉しなくてはならないけれど、水量も知れたものだけに苦痛では無い。五萬分赤石嶽地圖で、大澤の澤の字邊りで日が暮れたので、岩蔭に露營した。苔臭い溪流での文字通りの露營も味なものだ。大澤渡で道を探したが見當らないので、大體の見當をつけて尾高山の右のピークへと登つた。十一時近く新らしい鉈目を發見したので、よく探したら實に朗々な踏跡がついてゐた。これは大澤へ鯰を釣りに行く人の道である。地獄谷では、獄の字の對岸に大きな飯場がある。閉鎖して居たが、谷の字あたりの事務所には人が居た。此處まで鑛山のトロが下から上つて來る。これからはトロ道を忠實に辿ればいゝ。大河原市場までは飽きる程の長い道だ。尙、詳細は紀文中の「赤石岳、聖岳」を見られたし。

白峰赤石縱走

リーダー　高瀨進三、增山清太郎、清水達雄、鈴木英雄

辻　辰雄（外）

人夫　牛田重義、水石芳捷　外一名

七、一六、飯田町（一〇・〇五）

七、一七、晴　日野春（四・〇〇）——四・四五）——柳澤（六・〇〇）——八・〇〇）——籔ノ湯下（九・二五）——九・四〇）——第一回渡渉（一〇・一五）——一〇・四〇）——一ノ澤（一〇・五〇）——二ノ澤（一一・五〇）——晝食（一二・〇〇）——一・〇五）——赤薙澤合流點（一・四〇）——二・〇〇）——ミノクチ澤出合幕營（四・〇〇）

七、一八、晴　幕營地（七・〇〇）——メドの大瀧（七・四〇）——七・五〇）——奥赤薙澤出合（八・〇五）——八・一五）——本澤袋澤出合（八・三〇）——八・五〇）——晝食（一〇・一〇）——一一・〇〇）——廣河原峠（〇・一〇）——〇・三五）——野呂川（二・〇五）——三・一〇）——廣河原小舍（三・四〇）

七、一九、晴　小舍（五・三五）——大樺池（八・一七）——八・三五）——尾根へ出る（一〇・五五）——一一・四〇）——北岳頂上（一・一〇）——二・一〇）——間ノ岳頂上（五・二五）——五・四五）——間ノ岳石室（六・四五）

七、二〇、晴　石室（五・四五）——農鳥頂上（七・〇〇）——七・〇五）——石室（七・五〇）——八・一〇）——白峰澤（八・四〇）——八・五〇）——魚止ノ瀧（一一・〇〇）——一一・二五）——晝食（〇・一〇）——一・一〇）——新蛇拔澤（二・五五）——雪投澤幕營地（三・二〇）

七、二一、晴　幕營地（六・四〇）——水源第一回晝食（九・四五）——一〇・二五）——北俣岳（一一・三〇）——鹽見岳頂上（〇・〇五）——一・二〇）——本谷山（三・五〇）——四・〇五）——三伏小舍（四・三〇）

七、二二、晴　三伏小舍（七・一〇）——富士見岳（七・四二）——八・〇五）——小河内岳頂上（八・四五）——九・〇〇）——大河内岳頂上（九・三七）——一〇・二五）——晝食（一一・二〇）——一二・〇〇）——板谷岳（一・〇五）

—高山裏小舍(一・五〇)

七、二三、晴後曇　小舍(四・三五)—西河内岳ガレ下(五・四五—五・五五)—西河内岳(七・一八—七・三〇)—魚無河内岳(七・三八)—悪澤岳(八・二〇—八・四五)—西河内岳　晝食(九・二五—一〇・一〇)—大聖寺平(一一・一〇—一一・二〇)—劍ケ峰(一一・五三—一二・〇〇)—小赤石岳(〇・一〇)—赤石岳(〇・二五—〇・五〇)—小赤石岳(一・〇七)—劍ケ峰(一・一四—一・二〇)—大聖寺平(一・三五—三・一五)—廣河原小舍(五・一〇)

七、二四、晴　小舍(六・三〇)—高山瀧(七・〇五)—板谷澤(八・〇〇)—小澁湯(八・一八—九・〇〇)—釜澤三正坊大權現(一〇・〇〇—一〇・一〇)—大河原(一一・三〇—〇・二〇)—鹿鹽川(〇・五〇)—大白澤橋(一・一五)—北條坂下(一・三〇)—北條坂上(二・一〇)—峠ノ茶屋(三・〇〇)—部奈(四・二〇)—伊那大嶋　五・一〇—五・二九)—辰野—解散

尙、詳細は紀文中の「大武川より大井川東俣へ」を參照せられ度し。

新高山　臺灣

中島嘉一郎　他二名

隨行　巡査一名、蕃人警手二名

八、六、晴、午後より驟雨　阿里山（八・〇〇）――タータカ駐在所（〇・三〇）

新高山（バトンカン）は内地の富士山の如く、一般向の山である。標高こそ高いが（一三〇七五尺）、夏は全く雪の影さへ無く、殆ど頂上に近い處に迄駐在所が出來て、登山道は北アルプスの所謂銀座通りにも優り、ちよつとした坂にも試驗坂、希望坂、努力坂、奮闘坂、成功坂、等の名前がつけられてゐる。登山口は阿里山口と八通關口とであるが、現在では蕃狀の不穩なる爲、八通關は全く旅人の通行を禁じて居るので阿里山から登るより他に道がない。それも入蕃には許可を要して、原則として團體以外は許されない。その代り巡査及び警手が實彈をこめた銃を持つて隨行する事になつて居る。

八、七、晴、午後より驟雨　タータカ駐在所（八・〇〇）――新高下駐在所（一二・〇〇）

春及び秋は阿里山から新高下駐在所まで一日の行程が一般であるが、臺灣南部の氣候的特徴として、夏（雨期）は殆ど極つて午後から豪雨が襲來するので半日しか歩けない。タータカ駐在所は丁度中間にある。阿里山から全部尾根傳ひである。可成突起はまいて行くが、それでも高低が相當ある。二、三年中には高低を少く修繕する計畫がある由だ。これが完成したら自轉車で登れるだらう。新高下駐在所は新高主山の直下で、槍に對する殺生小屋といふ位置にある。一萬尺を越えてゐる。蕃人の襲擊に備ふるため機關銃がある。兩駐在所共宿泊一人十錢。食事は阿里山ホテルのコックが出張して居る。一食七十錢。

八、八、晴　新高主山往復（二時間）　新高下駐在所（九・〇〇）――阿里山（四・〇〇）

新高主山へは朝食前に行つて來た。頂上を警察電話の電線が通つて居る。駐在所から上は木はなく、岩山であ

る。水成岩の水平の層が立派に見られる。内地にはちよつとない形だ。

地圖は蕃地地形圖五萬分一「新高山」及び「阿里山」。臺灣日日新聞發行。臺灣の地形圖は平地は參謀本部發行の内地のものと同じだが、山地は陸地測量部のものはない。印刷もきたなく、製圖法も古いためか感心出來ない。

スキー合宿

冬季スキー合宿（野澤）

一二、二一、雪後曇　昨夜の一〇・一〇の汽車で、朝野澤へ部員芋川、太田、勝田及び部員外三名到着す。冬の合宿へ早く來るとたまらない。ゲレンデならしの人夫みたいな眞似をして一日過してしまつた。

一二、二二、晴　いくらかゲレンデもよくなつて來てスキーが滑る樣になつた。情ない話さ。

一二、二三、晴後雨雪　部員、久保田禮治、手塚晴雄、河相薫、增山清太郎及び部員外九名到着。シャンツェに行く。風寒くさすがに冬だと思はせる。シャンツェの尾根にゐると時々人聲が風の音に誘はれて聞えて來る。下では野澤のジンゲルがふざけてゐる。とても風紀紊亂である。野澤の發展のためには何とかしなければ、心ある子女のまゆをひそめさせるであらう。

一二、二四、晴後曇　部員外高橋啓次郎到着、午前はパラダイスへ五、六名で行く。深雪であるためスキー

が深く入つて練習し難い。午後は又大勢でパラダイスへ行き、鐵索の尾根をかなり上の方まで登る。法政の連中が來る。

一二、二五、曇時々雪降る　今日はシャンツエの尾根でクリスチヤニヤの練習をしたり、又ゲレンデで各自テクニクをやる。武高の生徒が來てゲレンデは大賑ひ。

一二、二六、晴　粉雪に近い良雪が昨日から輕く降り積つて、ゲレンデも山も共に絶好のコンデイション。鐵索及び野澤峠、スキス、パラダイスと隨分がん張つた。

中森長太郎來り河相薫歸京す。

一二、二七、雪降る　午前九時上の平へ登る。鈴木、太田、中森、芋川、久保田、増山、手塚。歸りは鐵索の尾根を下る。深雪に雪煙を上げて降る愉快さ。今年のゲレンデは皆上手のものばかり。吾々は押へられる。併し感心にも新しい者も皆パラダイス邊りへ練習にやつて來る。

大岳、今井、奥野來る。夜は大懇親會。

一二、二八、晴　連日の奮闘にて、疲勞を恢復する爲め、午前中休養する者多數。

午後はゲレンデ、シャンツエに練習す。夕刻より溫度下り雪質よし。野村歸る。

一二、二九、吹雪　芋川、太田、久保田、勝田、外五名歸京。部員清水達雄來る。凄い大吹雪。ゲレンデだけでもつらい。「壯快なるスキー術」によつて名を知られた近衞直麿氏の一行が夕方着いた。若い女學生をつれて來たと思つてゐたら妻君だそうだ。

一二、三〇、雪　手塚外四名歸る。殘るは四名で大變淋しい。五十嵐先輩來らず。午前增山と二人でシャンツェの尾根へ上りステムボーゲンの練習、午後四名でパラダイスへ行き鐵索を上つてCの上へ降つた。雪質よく、よく滑つた。

一二、三一、晴　大友亮藏外一名來る。白馬の連中が成功して歸つたと聞いて安心した。七時起床、九時出發、增山、清水、大岳、中森の四名スキスへ行つて絶好のシュタウプシュネーに、ボーゲン、直滑降を思ふ存分享樂しえた。午後三時、大岳突然歸ると云ひ出し、忽ちの中に宿を去る。部員、中島、金田、赤城の三名到着。

一、一、吹雪　先輩五十嵐氏、吉澤氏夫妻來る。一日中吹き荒れて目も開けられぬ位だが、ゲレンデはスキーヤーで一杯だ。一旦宿へ歸つた連中も兩先輩の到着で、再びゲレンデに戻つて練習した。

一、二、吹雪後晴　午前はシャンツェの尾根とゲレンデで。午後、吉澤、五十嵐、赤城、中島、金田、中森、園山、增山、清水、大友、Cの上からパラダイスの上の鐵索に登りボーゲンで下つた。園山、大熊(外)、水谷、小林(外)の四名到着。後の二者は列車不通のため、飯山から徒歩にて來る。

一、三、雪　毛無山へ行くつもりが雪のため中止。午後はスキスの方面へ行き相當へばる。部員、近藤御大、磯野、丸茂の三名、勇敢に飯山から歩いて來る。

一、四、快晴　先輩小栗突如來る。シネコダック持參。五十嵐先輩歸る。

一、五、晴　吉澤氏以下十三名毛無山へ行く。歸りは峠、スキス、第二スキー場へ下つた。皆へばつた。

手塚、芋川再び來野す。外一名。

一、六、晴後雪　増山大友外四名歸る。一寸淋しくなつた。

一、七、雪　吉澤夫妻、小栗、清水歸る。高木を迎へに近藤外三名夕方から上境へ行く。

一、八、晴　午前は皆サボる。

一、九、晴　さすがにゲレンデも寂しくなつて來た。中森單身早朝歸る。芋川、園山、丸茂は妙高へ。

殘留組も午後全部引き上げて合宿を解散す。色々な不愉快な事が多く、年が改つてからの合宿の氣分が損はれたのは殘念である。日記記載者、手塚、久保田、中森。

春季豫科スキー合宿日記

三、九、晴時々曇　長野——湯田中——波坂——沓打茶屋——琵琶池——發哺溫泉

參加者　久保田禮治、芋川稔一、増山清太郎
園山德三郎、高瀨進三、關守三郎、太田又一
丸茂平造、勝田啓介、清水達雄、鈴木英雄

澁を出ると上林近くのあたりから雪があつたので全く遊びながら行く。波坂の上や、茶屋の附近、水電小屋の邊りで遊び過ぎて疲れてしまつた。發哺に着いた時には日は既に落ちてゐた。山に抱かれた靜かな宿だ。宿の前の谷川からは湯氣が立つてゐる。

三、一〇、晴時々曇　午前午後共にゲレンデで練習。ゲレンデとは宿の眞ぐ近くのスロープを意味する。清

水達雄、鈴木英雄の兩兄午後、迎に行つた勝田、増山、太田と宿に着く。

三、一一、曇時々雪　久保田、芋川、園山、關、増山、丸茂、太田は岩菅へ（但し途中より引返す）。清水、鈴木、勝田は燒額へ行く。高瀬は足を挫き休養。

岩菅行の記錄

出發（八・〇五）――東館、寺小屋鞍部の南側（一〇・三五）――寺小屋三角點（一〇・四〇）――寺小屋ピークの鞍部晝食（一〇・五〇――一一・一〇）――引返す（寺小屋、岩菅の最低鞍部より手前二ツ目のピーク）（一・〇〇――一・二〇）――寺小屋（三・一〇――三・三〇）――着（四・二〇）

三、一二、晴　夜物凄く雪が降つたので午前中は雪の中を泳ぐ樣。午後は皆高天ヶ原へ出掛る。但し高瀬獨り足のため休養。夜は小豆が出る。

三、一三、晴　午前中I・M・Kの三人さぼる。

午後ゲレンデで園山氏のクリスチヤニヤのゼミナール開かる。本日關、鈴木の二兄は再度岩菅を試みたれど果さず。關いたく殘念がる。夜は吹雪。

三、一四、吹雪　朝から吹雪いてゐるので増山、鈴木は一日中さぼる。明日歸る事にしたので話ははづむ。暗いランプの下に交される物語にふさはしい伴奏は外を吹きまくる吹雪の音だ。

三、一五、晴　解散。鈴木、増山の二兄は野澤へ。他は歸京。以上勝田記。

五色スキー

中森長太郎　外一名（加賀行三）

三、九、曇　板谷（七・三八――九・〇〇）――宗川（一〇・三〇）

ひる迄五色橋の上のスロープで滑る。三時から賽の磧へ行き一〇四〇米の山を捲いて清六平を經てゲレンデに戻る。

三、一〇、粉雪　宗川（一一・三〇）――青木山小舍（一・〇〇――三・〇〇）――家形山の肩（三・四〇）――小舍

三、一一、粉雪　小舍（九・〇〇）――家形山（一一・〇〇）――烏帽子（一二・〇〇）――一八九一米（〇・二〇――中食――一・〇〇）――家形山（一一・〇〇）――小舍（一一・三〇）

東大嶺を極むる筈であつたが出發が遲れたので中途で引き返すの止むなきに至つた。針葉樹の林の中の滑降はいつも氣持がよい。往復ともガンチヤン落しを通つてひどい目に會つた。

三、一二、晴　午前家形山に登る。小舍發（一・〇〇）。高倉を左に見て往きのトレースよりずつと上方を通る。風が始終吹いてゐるのでひどい波狀雪に惱んだ個所もあつた。雪はあまり滑りよくなくなつた。賽の磧から清六平を經て宿に着く。一部分を除いては、雪が惡くて困つた。大友亮藏君が來てゐた。

三、一三、　雪が惡いので元氣がない。午後板谷へ下る。

野澤溫泉

鈴木英雄、增山清太郎

三、一五、夜野澤着

三、一六、雪後晴　ゲレンデ——野澤峠——スキス——第二スキー場——ゲレンデ

三、一七、晴　出發(九・〇五)——峠(一〇・三〇)——一〇・四〇)——前毛無南側の鞍部(一・五〇)——奥毛無頂上(二・二〇)——二・四〇)——鞍部(二・五〇)——三・〇五)——鐵索尾根を下る——パラダイス(三・四〇——三・五〇)——ゲレンデ(四・一五)

同行者、高橋(要)、松井、權藤、宮田四氏。

三、一八、晴　畑スキー

三、一九、歸京

菅平と猫岳

磯野計藏、中島嘉一郎、手塚晴雄、金田一郎

三、一九、別所溫泉(五・三〇)——上田市(六・〇〇)——七、〇〇)——土合(九・〇〇)——九・三〇)——菅平東組(〇・三〇)

學校の先輩上田商工會議所理事岡田賢治氏に案内されて昨日は上田市を見物す。菅平は氏の紹介により乘鞍の歸りを立寄る事にした、土合まで自動車、土合よりは馬橇に乘り菅平まで行く。始めの中は土の上を然も雨に濡れて行くので悲觀したが其の中に雨も止み雪が深くなつた。菅平の廣い高原、猫岳、四阿の雄大なるスロープが折からの春の暖い日射しを受けて白く輝いて居た。其の間に、黑ずんだ小さい塊が平和さうに並んで見える。こ

の童話的な家々が私達の泊る事になつて居る東組の部落である。

東組の小林一幸氏と云ふ家に紹介されて居たので其の家へ泊る。此の菅平には宿屋が無く、スキー客は皆農家に分宿する事になつて居る。一泊一圓である。

三、二〇、吹雪滞在　附近でスキーを練習する。スロープは變化に乏しいが長い急傾斜が次第に下に行くに從ひ緩くなつて居るなどは初心者にもつてこいの直滑降のゲレンデである。スキー客が十名程居た。

三、二一、晴　菅平（八・〇〇）——猫岳（一〇・二〇——一一・三〇）——菅平（〇・一〇——二・〇〇）——土合（五・〇〇）

猫岳は緩傾斜な山で、アザラシをつけたまゝ一直線に登り、歸りも直滑降で下りて來られる位の山。雪質は大體良いが途中ウインドクラストになつて居る所がある。頂上は樹氷や、スノーマンなどがあつて綺麗な所だつた。浅間、四阿、岩菅の眺望もよかつた。

猫岳と四阿山との間は十枚岩とか云ふ岩のやせ尾根でスキーをトラーゲンしなければならないそうだ。長野あたりから眺められる雄大なる菅平の雪のスロープは此の猫岳の西斜面なのであらう。

第二部　一九二九・一一——一九三〇・五

上信越國境方面……七二
東京附近……七七
秩父方面……七九
八ヶ岳……八二
北アルプス……八八
南アルプス……九〇
スキー合宿其の他……九五

吹原不二雄　外一名

鼻曲山、劍ケ峯

一一、二四、半晴　輕井澤（五・〇〇）——峠町（六・〇〇）——一文字山（六・三〇）——一六五〇米突（七・三〇）——鼻曲山（九・四〇）——劍ケ峰（〇・一五——〇・三〇）——横川驛（四・四〇）

一文字山からはずつと尾根を傳ふ。殘雪五寸乃至一尺。淺間美しく新雪に粧はる。鼻曲山より東に派出する尾根を下り、霧積溫泉より來る徑との出合から、劍ケ峯に往復し、下りは霧積川に沿つて坂本町に出た。

發哺、岩菅山行

關守三郎・鈴木英雄

一、三、湯田中——發哺　雪量少し。

一、四、發哺（八・一五）——東舘——寺小屋（一〇・一五）——岩菅山（〇・一五）——鞍部休憩（〇・三〇——〇・五〇）——寺小屋（二・一〇）——發哺（五・三〇）

頂上少し下から、雪面硬化及其の他の理由で遂に引返す。

一、五、高天原附近にて練習。

一、六、東舘に遊ぶ。吹雪。

一、七、發哺——湯田中、長野經由歸京。

笠嶽、赤石山、横手山

園山德三郎

三、一三、雨後吹雪　澁溫泉（八・〇〇）――坊平小屋（一〇・〇〇――一〇・三〇）――丸池小屋（〇・五〇――八・〇〇）――熊野湯（一〇・〇〇）

丸池小屋に着く頃から猛烈な雨混りの吹雪になつて、全然先が見えない。小屋で焚火をして泊る心算だつたが午後八時近くなつて、漸く風も收つたので出發した。幕岩對岸の危險個所は斷念して尾根傳ひに平床原に出た。凄い月が雲の切間から時々現れて一寸よかつた。

三、一四、晴　熊野湯（一〇・〇〇）――小屋場（一一・〇〇）――笠嶽頂上（〇・一〇――一・〇〇）――湯（一・五〇）

三、一五、晴　湯（八・四〇）――鉢山（九・四五）――赤石山頂上（一・一五――一・三五）――鉢山（四・三〇）――湯（四・四五）

豫科の增山、鈴木、田中三君が去日偶然にも來熊したので、同行した。雪質はカチ〳〵でカンテンが全然きかない。鉢から赤石までの長い尾根を忠實に辿らなくてはならない。

三、一六、曇　モングチ澤プロムナード。

三、一七、晴　湯（九・一〇）――ノゾキ（一〇・三〇）――スキーデポ（一一・〇〇）――横手山（一一・三〇――〇・五〇）――湯（一・三五――二・二〇）――松尾根一九二〇米突（三・一〇）――湯（三・三五）

二寸ばかりの新雪で可成よい狀態。横手の頂上眺望絶佳。デポから湯までの滑降は二十五分で樂である。

三、一八、曇　湯（一〇・〇〇）――幕岩對岸（一一・〇五）――丸池小屋（一一・三〇――一二・〇〇）――坊平（〇・三〇）――湯田中（一・三〇）

熊野湯

鈴木英雄、田中秀三郎、増山清太郎

三、一三、野澤――飯山――上林　上林――沓打茶屋――熊野湯

三、一四、曇　出發（八・四〇）――鉢山（九・四五）――赤石山西南鞍部晝食（一一・五〇――〇・三〇）――赤石

三、一五、曇　山（一・一五――一・三五）――鉢山（四・三〇）――歸着（五・四五）

三、一六、晴時々吹雪　出發（八・五五）――松尾根・村界尾根分岐峯の東側鞍部（九・五〇）――一九六〇Mピーク（一〇・二〇）――覗き（一一・三〇――一一・五〇）――スキーデポ（〇・一〇）――横手山（〇・五〇――一・〇五）――スキーデポ（一・二〇）――熊野湯（一・五〇）夕方から澁へ下り夜行歸京

今年は雪が少いので、幕岩の對岸は往復共に新道を通つた。

十三日に激しい南風が吹いて雨が降つたため、そのあとがすつかりクラストになつてしまつた。そのためスキーの快味などまるで味へなかつた。

「覗き」から横手に登るのは樂ではないが、雪さへ良ければ下りは面白いであらう。勿論スキーを脱ぐ必要は無

いし、横手の頂上から三十分もあれば湯へ歸れると思ふ。

武尊山

吹原不二雄　外一名

四、一八、晴　沼田町（一一・三〇）——川場湯原（〇・二五）——背嶺峠（二・五〇——三・三〇）——花咲（四・四〇）

四、一九、快晴　花咲（七・四〇）——牧場小屋（九・二〇）——二號平（一〇・一五——一〇・四五）——一八四一米標高點（一・一〇——一・三五）——二號平（二・三五——三・四〇）——花咲（五・三〇）

四、二〇、曇濃霧　花咲（六・一二）——前武尊山（一〇・〇五——一〇・四五）——劍ケ峰（一一・一五）——中ノ岳（一・〇〇）——奥武尊山（一・四五——二・〇〇）——武尊神社（六・三〇）——打上（柳淀旅館）（八・二五）

四、二一、小雨後晴　打上（九・四〇）——大穴（一一・五〇）——水上驛

背嶺峠には殘雪なし。牧場小屋迄も亦同じ。二號平より少々あり、それからはブツシュ、七八丁は出てゐるも後は殘雪を傳ふ。大品原は殘雪なく、御澤邊りより殘雪上を行く。前武尊に登れば、濃霧猛烈に吹上ぐ。奥武尊よりは氷澤を下り、武尊川を渡渉四回、樹林を神社まで突進す。利根川は夜後橋附近仲々眺めよし。

谷川岳

小川竹夫、大友亮藏、十合健二

四、二八、晴後曇、夜雨　上野（前七・三五）——水上（後〇・四五）——鐵橋（一・〇五）——谷川館（一・五〇）

水上驛から谷川溫泉に至る近道があるのだが、其の假橋が流出したので鐵橋迄北へ行き、それから川に添ふて溫泉に着いた。汽車の中からは谷川岳が實によく見えた。あの素晴しい雪溪の姿は結局車中から拜んだだけで、其後遂に接し得なかつた。返す〳〵も殘念である。二十六、七日の頃の晴天にひきかへ、今日の午後は怪しげな雲を見るに至つた。

四、二九、雨　滯在、とう〳〵駄目だ。雨と川の音を聞きながら、お湯に浸つて伸びちやつた。

四、三〇、雨　谷川館（六・五〇）——高壺澤の雪溪（八・四五——八・五五）——奥ノ院へ五千米の處（九・一五）——大殘雪（九・四五）——天神峠（九・五五——一〇・一五）——獨立標高點（一一・一〇——一一・二五）——引返す——天神峠（一一・五五——〇・二五）——高壺澤（〇・五〇）——奥ノ院へ約六千米の處（一・四五——二・〇〇）——淺間神社（二・五〇）——谷川館（三・〇〇——四・三五）——水上（五・三五）——歸京

早朝起きて見たら依然として雨だ。霧の低い事夥しい、且、風がちつともないので雨雲が全然動かない。然しお湯に浸つて伸びるのも大人氣ないから斷然出掛る事にした。淺間神社の左からの急傾斜の尾根道は、雨なのでとても困つた。時間がかゝるし、寒さは寒し大分弱つた。天神峠を中心としての殘雪は、頗る豐富、且靴がちつともぐらないが、よく滑る。峠からの痩尾根傳ひは雪が多くて壯快。但し一寸先も見えないと云ひ度いが、三

間位は見えた。兎に角、眺望も何もありやしない。寒くて遂に戻つた。

附記、彦さん事、田村彦太郎は湯掘に行つて居ない。田村虎松と稱する男が彦さん代用に適當との事。早大の先輩、山田氏からは種々御教示に預つた。

谷川岳

金田一郎、中島嘉一郎

五、八、晴　谷川溫泉(五・四五)——天神峠(八・〇〇)——八・四〇)——谷川岳最高峰(一一・〇〇——一二・〇〇——天神峠(二・〇〇——二・三〇)——谷川館(四・二〇)

四日の夕方溫泉に着いたが、五、六、七と毎日お天氣が惡くて、谷川岳から越後へ越えて、再び仙の倉へ登る計畫をすつかり臺無しにしてしまつた。がつかりついでに、ザイルも宿へ殘して置いて、平凡なコースを取つた。

東京附近

大菩薩嶺（新入生歡迎旅行）

参加者　手塚晴雄、中島嘉一郎、高瀬進三
増山清太郎、鈴木英雄、清水達雄、大友亮藏
間瀬　正、十合健二、堀岡　清、小橋謙三
打橋壽郎、宮川雄二郎

四、二〇、晴　鹽山（四・一五）――踊石（五・四〇）――六・三〇）――雲峰寺山門（七・一〇）――七・三五）――丸川峠（一〇・四〇）――〇・二〇）――大菩薩嶺頂上（二・〇〇）――峠（二・三五――三・〇〇）――フルコンバ小屋（三・二〇）

四、二一、雨後晴　小屋（九・〇〇）――山葵谷小屋（一〇・一〇）――押垣外（多摩川畔にて晝食）（一一・三〇〇・二五）――鴨澤橋（二・〇五）――鶴ノ湯（三・一〇――四・〇〇）――氷川（五・五〇）

第一日はよく晴れてゐた。一行十三人の行進は確に偉觀である。雲峰寺の少し先から丸川峠へ道を取つた。初は實に分り難いが後は尾根を走る一本道、この尾根に鐵索がかゝつてゐて、そのための道。丸川峠の南面は氣持のいゝ野原。大菩薩北面の林道は殘雪と倒木で惡い。フルコンバの小屋は至つてお粗末ではあるが薪は豐富、人數は滿員なので夜雨が降つたが暖かかつた。夕方から霧がまいて、落葉松の林が馬鹿に美しかつた。

二日目は、朝降つてゐたので小金澤黑岳を變更して、丹波へ出る名案に從ふ。山葵谷には立派な小屋があつた。道は常に澤から五十米突程上を通つて決して尾根を通ることはない。押垣外の村人は大變親切である。こゝから氷川まで四時間程で行つた若者は誰だつたか。とにかく若の長い道にはがつかりした。之を走つて氷川まで四時間程で行つた若者は誰だつたか。とにかく若い人達は元氣がある。天候はよし、道は羊腸たり坦々たり而して人員また多く頗る新入生歡迎旅行らしい賑やかなものであつた。十三人の食事を手際よくやつて呉れた增山君に深く敬意を表する。（進）

三峠山（岩登り練習）

リーダー　浦松佐美太郎

五、二四、曇　小沼——達磨石——三峠山。十時頃迄天候が悪かつたので十一人共、皆不快な思をする。達磨石の上で二時間半ねる。これでいくらか元氣が付いたが岩登りをやりに來るなら頂上の茶屋へ泊つた方がいゝ。一泊五拾錢との事。

岩登りは浦松先輩の指導によつて大いに得る所あり。今後練習は時々やつて行きたいと思ふ。

参加者　中島嘉一郎、手塚晴雄、芋川稔一
園山德三郎、太田又一、丸茂平造、鈴木英雄
安達泰三、小橋謙三、堀岡　清

秩父方面

仙元峠

中嶋嘉一郎、中森長太郎

四、二、曇　新宿（八・一〇）——電車——御嶽（一〇・〇三——一〇・四〇）——乘合自動車——氷川（一一・一五）——日原（一・三〇）

氷川から日原までの道を期待して居たが、案外つまらなかつた。山上旅館泊り。

四、三、曇、西北の強風　日原（八・二五）——倉澤よりの道に合す（九・五五）——天目山分岐點（一〇・二五）——仙元峠（一一・三五——一二・〇〇）——浦山川に出る、大日如來（一・四五）——浦山口（三・三〇）

大體千米突位から上は一昨夜の新雪が積つて居た。約五寸、吹溜りは二尺位の所もあつた。天氣が惡くて十分樂しめなかつた。細久保谷を登つて一一四〇米突附近で地圖の道に合する新しい立派な道が出來て居た。自分等は地圖の道通り行つた。實に面白くない道だ。道の兩側だけに檜の植林があつて眺望零。浦山口は影森から三錢の距離にある。此の行は立山行の足ならしの目的だつたのに豆を二つ作つた。

殘雪の秩父

高瀨進三、太田又一、芋川稔一

四、四、快晴　鹽山（四・一五）——柳澤峠（九・四〇——一〇・三〇）——川浦峠（四・一五）——笠取小舍（七・一〇）

四、五、快晴　滯在。

四、六、晴　小舍（六・一五）——燕ダルミ（六・四五——六・五〇）——燕山（七・一五）——燕山と袴越の鞍部（八・〇五）（此處より引返す）——燕ダルミ（八・五〇——九・一五）——バラトヤ林道を下る——釣橋小舍（〇・三五）

四、七、晴　小舍（七・一五）——鹿ノ湯小舍（道より下へ二丁程）（八・四〇）——雁坂峠への分岐點（指導標あり）（八・五〇——九・一〇）——豆燒澤（九・三〇）——高平小舍（一一・一五）——落合（三・四五）——大輪（四・二五）——歸京

バラトヤ林道に就て。

燕ダルミから一時間足らず澤を下ると(この時、澤の中は雪で道が出てゐなかつた)小屋跡あり。こゝから道は澤の右岸の斜面をへづりつゝ少しく上りとなる。雪と氷と、其の上に道が悪いので可成り困難を感じた。枝澤山から北へ出てゐる尾根の一五〇〇米突邊りまでは上る事はあつても決して下らない。一寸心配しながら歩いた。この尾根へ上りつくと後は下り一方。此處に「右バラトヤ新線甲州方面、左危險に付通行禁止」の標木があつた。釣橋小舍は枝澤と本澤との出合から一つ突起を越せばいゝ。歩いて一二分の地點。二間に三間の感じのいゝ小舍。

危げな釣橋を渡ると道は百米突許り上つてゐる。後は殆んど高低なき林道。豆燒澤出合と釣橋小舍との中間程の所に鹿の湯小舍あり。道より二丁程下にある。帝大の演習林小屋である。廣さは上から見た所二間に三間位。屋根はトタン。

以後一度、道の間違ひやすいのは、豆燒澤を渡つた所で左右に道が分れてゐる。左の道は尾根をグン〳〵上つて終には尾根の上を西に進む。恐らく雁坂峠へ行くものであらうか。右を取るべきであるが、左の方がいゝ道だから用心を要する。なほこの豆燒澤を渡る手前に木樵の小舍がある。三間に五六間もある恐ろしく長いものだつた。(芋川)

松平牧場

四、四、晴　日野春驛(六・一二)——八巻(八・一五)——黒森(一一・〇〇)——牧場小屋(三・〇〇)　吹原不二雄

四、五、晴　小屋（七・四〇）――富士見平（九・三〇）――引返せる地點（一〇・一五）――富士見平（一〇・四〇）――小屋（一二・〇〇）――二・一〇）――和田（三・三五）――増富溫泉（五・〇〇）

四、六、曇　溫泉（一〇・二五）――鹽川（一一・三〇）――八卷（一・四五）――韮崎驛（三・〇〇）

此の頃の甲斐駒、鳳凰、八ヶ岳は素晴しい殘雪。鳥居峠は越えずに川沿ひの新道あり。牧場は殆んど殘雪なきも、夜は非常に寒し。富士見平よりは殘雪一尺五六寸内外、倒木甚しく遂に轉倒して足を傷む。ため信州峠越を中止して溫泉に浸つた。

八ヶ岳

芋川稔一、太田又一

八ヶ岳

一一、二四、晴、三時過より雪　小淵澤（六・五〇）――六・五五）――鐵塔（八・二五）――水場晝食（九・二五――一〇・一〇）――躑躅ヶ窪（一〇・二五）――達磨石（一一・一五――一一・二五）――押手川（一・五五）――編笠小屋（四・〇〇）

一一、二五、曇後雨一時雪　編笠小屋（九・四五）――押手川（一〇・五二）――御座石（一一・二五――〇・三〇）――鐵塔下番小屋（二・〇〇――三・二五）――小淵澤（四・一五）

小淵澤驛から八ヶ岳への道は、街道まで出ずに、驛前から直ぐに右方、汚い裏道を鐵道線路に沿つて取り、最

初の踏切を渡るといゝ。あとは間違ひつこのない一本道である。街道へ出てしまうとこの第一の踏切への横丁を通過ぎてしまう恐がある。

鐵塔の下には立派な新しい番小屋があるが猛烈な落書が板一面に書きつらねられてゐるから、うつかり泊りでもしたら夜通し寢られないかも知れない。

ゴツの下で道は一時下るのでうつかりしてゐると苦しまねばならなくなる。樹間からゴツの石が見え始めたら右へ〳〵と卷きながらゴツへ出ない様にして行けばいゝ。編笠小屋には床に五六本丸太があるだけ。

この時の雪の具合は押手川附近から次第に多くなり、ゴツの下の樹林では一尺五六寸。未だ軟いので始末が惡い。小屋の中にも勿論降り込んでゐた、情無い小屋だ。一晩中寒いのと、思ふ存分體を延ばす所がないのとで寢られず、翌朝大分評定をしたが結局逃げ足の早い所を發揮して一思ひに下つてしまつた。あつけなかつた。

北アルプス

一月の槍平と槍ケ岳

金田一郎、中島嘉一郎、磯野計藏、手塚晴雄
人夫　塚田清治、高橋益司

一、三、雪

松本飯田屋(一〇・〇〇)——澤渡(一二・〇〇)——中の湯(三・三〇)

自動車は澤渡まで通じて居た、此んな事は珍らしい。

一、四、曇　中の湯（六・二五）——燒、白骨道との出合（七・五〇）——安房峠（九・四五——一〇・〇〇）——平湯屋（一一・三〇——一・三〇）——一重ケ根（三・〇〇——三・三〇）——神坂（四・〇〇——四・一〇）——蒲田溫泉今田旅館（四・三五）

積雪少く、到る所例年の半分或は夫れ以下、平湯は流石に一尺程あり、雪質も又良い。

平湯より蒲田溫泉へ出る約三里の道は緩傾斜でスキーが出ないが近道をする所は大分良く飛んだ、一重ケ根と神坂の間は峠を越して行つた方が下を廻つて行くより樂で早いので此の方の道を行く。

蒲田に着いて驚いたのは殆んど雪がない事である。尤も蒲田では最も多い時でさへ三尺位普通一尺五寸だと云ふから大した所ではない。

輪かんの塚田大分早い、殆んどスキーと同じ速さだ。

一、五、雪　蒲田溫泉今田旅館（七・四〇）——穗高溫泉（九・一五）——中崎小屋、右俣、左俣の出合（一〇・〇〇・一〇）——小鍋谷（一〇・四〇——一〇・五〇）——柳谷（一一・五五）——猿飛（〇・三〇）——白出し（〇・五〇）——瀧谷（三・三〇）——ワボの危險のある所（四・三〇）——槍平室堂小舍（五・二〇）

蒲田より荷かつぎ人夫二人を連れて行く事にする、二人ともスキーでろろろ行ける、大分上手な腰をして居た。中崎の出合より右俣を行くに從ひ雪量增加し、猿飛附近は新雪二尺、槍平室堂附近は五尺位の積雪があつた、ワボーの出ると云ふのは南岳と北穗高との鞍部大キレットから來て居る澤である、無事通過。高橋、塚田の室堂へ着いたのは私達よりおくれる事二時間、二人とも輪かんである。

一、六、吹雪　滯在、最高溫度零下四度、最低溫度零下十四度、蒲田の人夫二人歸へす。

一、七、吹雪　滯在、最高溫度零下三度、最低溫度零下十五度、午前十時現在溫度零下十度

先着の同志社大學の飯淵氏の一行四名槍の穗先、或は槍の肩を越して信州側（槍澤）へ出る見込が立たないので歸る事になる、再び燒の中尾峠を越して行くとの事。

一、八、吹雪　滯在、最高溫度零下四度、最低溫度零下十四度、午前十時現在零下八度

一、九、快晴　滯在、最高溫度零下六度、最低溫度零下十四度、午後二時現在零下十二度

始めての天氣、小舍を出て附近の傾斜で滑る、ワボーの心配があつたので槍の穗先へ行く事を止めたが非常なる恨事である、其の代り活動寫眞及び寫眞の活躍を見た。

一、一〇、晴後吹雪　室堂（六・四〇）――澤の上部カールの底部（八・一五）――飛驒乘越（一〇・一〇――一〇・二〇）――引返す――小舍（一一・四五）

良い空模樣なので早く小舍を出たが飛驒乘越あたりでは猛烈な荒れになり、散々吹きまくられ方々凍傷にやられて引返す、斯んなに急變するとは思はなかつた。高橋うかつにも彼の最も大切な所をボタンを外しておいたので少しシミたと云ふ、山の神の激怒を買つたのだらうと小舍へ歸つて來てから皆呑氣な氣持ちになつてからかつた、冬の山では良くある事だから注意すべきである。

一、一一、晴後雪　室堂小舍（九・一五）――右俣を登り再び天候惡化し引返す――小舍（〇・三〇）

昨日にこりて乘越まではがんばらなかつた、其の代り悠々とスキーを享樂して右俣及び其の附近を滑つて來

た、雪質申分無く氣持ちよいボーゲンをやつた。

一、一二、晴後雪　槍平（七・二五）——飛騨乘越（一一・〇〇）——一一・三〇）——槍肩の小舍（一一・四五——一・四五）——大槍小舍（三・〇〇）——槍澤小舍（四・〇〇）——二の俣（五・〇〇）——一の俣小舍（五・四〇）

槍の穗先は見込がなかつた、槍澤は吹き溜り深い雪だつた、一の俣の小舍に着いた時は皆大分へばつて居た、塚田は一人おくれて小舍に着いたのは七・三〇。冬のアルプスは輪かんでは實際だめである、彼がスキーが下手だと云ふ理由で松本へスキーをおいて來たのは大失敗だつた。

一、一三、晴　一の俣小舍（九・〇〇）——上高地河童橋（四・〇〇）——四・一五）——中の湯（七・〇〇）

槍澤方面からは未だ今年になつて誰も槍へ登つて居ないらしい、一の俣小舍へは泊つた樣子がある、上高地の方へスキーのシュプールや輪かんのあとがついて居る。中の湯までと思つて安心して呑氣に滑つて居たので中の湯の手前で暗くなり、月が出たが山の上から梓川の右岸の方を照らすだけで非常に足元が暗らく困つた、勿論ロープソクは槍平に居る中に全部使つてしまつて無く、パラフインで作つて居た位だつた。中の湯の手前の橋二つ、雪崩で壞されるために橋桁だけしか殘つて居ないので、之を渡るのに大分ひや〳〵した、橋渡りは乘鞍の時でこりこりして居るのだし、今日も金田は一の俣を出ると直ぐ水の中に落ちてしまふし、中島ももう少しでルツクサツクと共に川の中に落ちる所だつた。上高地は積雪僅に一尺。

一、一四、曇　中の湯（九・三〇）——澤渡（一一・〇〇）——松本（三・〇〇）

澤渡まで自動車が通じて居た、其の代り乘合に乘つたら來る時の貸切二臺よりも高くついたのには驚いた、奈

川渡では一々別の自動車に乗換へさせられるし癪にさわつた。
尙、詳細は紀文中の「一月の槍平と槍ケ岳」を參照せられたし。

劔、針ノ木峠

浦松佐美太郎（先輩）、中島嘉一郎、磯野計藏
人夫　中山彦一

四、八、曇夕方より雨　千垣（八・〇〇）——芦峅寺（八・三〇——九・三〇）——藤橋（一〇・四五）
芦峅寺、藤橋間の道は雪崩のため、所々岩石を押出して崩れてゐた。藤橋附近の稱名川の谷がドフイネの谿谷に似てゐると云つてU氏は嬉しがつた。
四、九、早朝雨、次第に霽る　藤橋（一〇・五五）——ブナ小屋（二・〇〇——三・〇〇）——刈安谷（四・〇〇）——桑谷（四・二〇）——弘法茶屋（六・二〇）
人夫佐伯宗作、清太郎を雇ふ。
材木坂を登りつめた所から一面の雪となる。二、三尺位。ブナ小屋からスキーをつけた。鍬崎山は仲々よい山だ。夜は富山の灯が美しかつた。月影の冴えた彌陀ケ原は眞晝の樣に明るい。
四、一〇、晴、南風　午後から曇り始めて夕方雨となる。昨夜最低溫度零　弘法茶屋（七・五〇）——追分茶屋（八・五〇——九・〇〇）——室堂（一・一〇）
室堂以上は一昨夜雪が降づたらしい。弘法も追分も殆んど小屋は出てゐた。室堂は屋根全部が出てゐた。測候

所のバルコニーは實にいゝ休み場所だ。室堂は小屋の戸が開放しになつてゐたので雪がうんと吹込んでゐた。梁の上に積つた雪は焚火で解けて、眞黒な塵と一緒にポタポタ落ちるのには閉口した。弘法にも此處にも薪は澤山あつた。米、味噌も豐富。弘法にも室堂にもシヤベルの無いのは不便だ。

四、一一、雨午後より次第に霽る　夕方から一の越へ遊びに行く。

四、一二、曇後晴　劔へ行く筈だつたが暗雲低迷して感心しないので一日待つことにした。午後から次第によくなる様子が見えて來た。お晝過ぎ淨土の肩へ行く。北アルプスが一眸の中に眺められた。珍らしく氣溫が低い

四、一三、晴西風　室堂（五・三〇）——別山乘越（七・一〇——七・三〇）——鶴ケ御前と軍隊劔との鞍部（七・五五）——平藏澤の乘越（一〇・三〇）——劔岳頂上（一一・三〇——一一・四五）——平藏澤の乘越（〇・一〇——〇・三〇）——平藏澤と劍澤との出合（一・一〇——一・二五）——別山乘越（四・五五）——室堂（六・三〇）

往きは別山乘越から一旦劔澤に下つて小屋跡の所から、鶴ケ御前と軍隊劔との鞍部に出る。實にいゝ天氣で風は殆んど無いと云つてもいゝ程だつた。復りは平藏を下る。劔澤の小屋跡はスキーやルックサックが散亂して慘憺たるものがある。平藏澤も雷鳥澤もボコン〳〵もぐつてお腹がすいた。

四、一四、晴後曇、南西風　室堂（九・〇五）——一の越（一〇・一〇）——板屋峠下（一一・一五——〇・一〇）——雄山澤、黑部川出合（一・五五——三・二五）——平日電出張所（五・三〇）

本日清太郎は芦峅へ歸る。

板屋峠の少し上方から實に素晴しい雪崩が出て雄山澤を一里近く流れた痕があつた。谷はデプリで汚なかつたが可なり下まで雪にうまつて渡渉は二回。黑部川との出合に日電の小屋がある。立教の連中が滯在してゐる由だつたが、丁度スバリへ出掛けて留守だつた。平までの日電歩道は背負つてゐるスキーが邪魔になつて弱つた。スキーは雄山澤の上部で若干使つたのみ。

四、一五、雨　滯在、昨夜は暖かすぎて眠られなかつた。過ぎたるは及ばざるが如し。

四、一六、晴、西北風　平（六・三〇）——南澤出合（九・〇〇）——舟窪岳からの澤（一一・〇〇）——針ノ木峠（三・二〇）——三・四〇）——大澤小屋（五・〇〇）

宗作と分れる。

一昨日の夜からの雨は上の方は雪だつた。峠附近は新雪七、八寸。既に小さい表層雪崩を起してゐた。一氣に大町へ出る豫定だつたが、針ノ木谷に雪が少なかつたので渡渉に苦勞して時間を潰し大澤の小屋泊りになつた。峠附近では表層雪崩の危險を感じた。

四、一七、晴　大澤小屋（八・一五）——扇澤（九・一五）——屏風岩（九・五〇）——ヨセ澤（一一・〇〇——一一・三〇）——大町對山館（二・一〇）

扇澤から夏道によるる。畠山は道の右側（東）に新築された。瀧の小屋（ヨセ澤の下）もまだ新しい。足もとにキクザキイチゲが咲き亂れてゐる。川をへだてゝ對岸のコブシの白い花がきれいだ。

駒ケ岳、仙丈岳

高瀬進三、園山徳三郎　人夫　牛田重義

五、二、雨　日野春(四・〇〇)——柳澤(六・〇〇——八・三〇)——駒ケ岳前宮(九・三〇——一〇・三〇)——臺ケ原分岐點(〇・四五——一・四五)——黑戸山刀利天狗(三・一五)——屏風小屋(四・〇〇)

一日中雨だつた。殊に笹平からは相當な降りで本當にすつかり濡れてしまつた。刀利天狗から屏風岩へ下る所まではすつかり殘雪に覆はれてゐた。雨で軟かくなり出しては居たがさほどもぐらなかつた。屏風小舍はもう大分使つたらしく雪は全部なくなつてゐたし、割合にきれいになつてゐた。小舍へ着いた頃から俄然激しく降り出し物凄い風を伴つて一晩中完全に暴風雨の狀態であつた。

五、三、晴　屏風小舍(七・五〇)——七丈小舍(食事)(九・〇五——一〇・一〇)——駒ケ岳頂上(一・四〇——二・三〇)——六方石(三・〇〇)——小松峯(三・三五——三・五〇)——北澤小舍(五・三〇)

目を覺ますと窓の隙間から日光がさし込んでゐる。晴だ。しかも激しい風に吹き飛ばされて雲は何處へ行つたやら。だが風は不相變猛烈だ。そのうちに次第に弱まつて來たので出掛けた。

七丈小舍へ着いた頃には風は少しもなくとても靜かな好い天氣になつた。早かつたが長く休んでゐたいので飯を食ひ、前に見える八ケ岳の大きな裾野に感心したり、五月のうらゝかな陽は吾々を本當に幸福にして呉れた。

小舎の中はまだかなり雪があるが最近泊つたらしい跡が見えて居た。

此處から石鳥居の處までは一面の殘雪、多くの輪カンヂキの跡がついてゐる。變な所を歩くと股までもぐる。で大分時間がかゝつた。鳥居から上は大して雪はない。たゞ岩の間に氷が張つてゐて、それに乘かつて足を滑らし易かつた。

駒ケ岳の頂上からは雲一點なく上州秩父の山々が眺められた。七丈小舎からは見えた白い北アルプスの連嶺は春の霞に隱されてしまつた。駒の殘雪は案外少かつたが、頂上から見た仙丈はすばらしい。白峯に比較しても一際目立つて白い。昨夜來の强烈風のためであらう、頂上の神像が轉がつてゐた。下りに仙水峠へ出ずに途中からゴツの中を下つたが岩が不安定で樂ではなかつた。却つて峠へ出た方が遙かに樂だつた。

小舎の近所には殆ど雪なし。小舎は四月に慈惠の方が使つたきりらしく、すべてが整つて氣持よくなつてゐた。

五、四、晴　小舎(六・四〇)——小仙丈東の尾根二八〇〇M(九・四〇)——一一・〇〇)——仙丈岳(〇・一〇—一・三〇)——小仙丈(二・〇五——二・二〇)——北澤小舎(三・三五)

小舎から下流の眞正面に見える一際白い所を登る事にする。之はスキールートとして選ばれる所である。今の小舎がまだ建たなかつた頃の小舎の殘骸を見ながら北澤を下る。間もなく右の藪の中へ小さな澤を登つて行くと直ぐに殘雪を踏む樣になる。小さな白樺や何かで歩き難い事夥しい。上へ行くに從つてブッシュは全然姿を消し黑い太い幹が雪の上に直立してゐる。雪は硬くはなかつたが滑るのでアイゼンを着けた。上へ行くとかなり急な

傾斜である。眞下に北澤の谷がとても可愛らしく見える。漸く小仙丈から東へ延びた尾根の陽に輝く雪の上に腰を下ろした時、初めて「山へ登つて居るんだ」と云ふ様な氣持になつた。小仙丈から仙丈までは尾根の上を歩いた。鞍部は必ず鋭い雪の尾根であつた。

仙丈の頂上へ着く時分には空は依然陽は照つてゐるが大分雲が出て來た。仙丈の頂上からは南アルプスの山は殆ど全部見る事が出來た。

歸りは同じ道をグリセードで飛ばした。小仙丈の東から北側の急斜面を飛ばすとわけもなくブッシュの邊まで來る。併し暖かくなつたためであらう、ブッシュの中は凄くもぐる。すつかり腰から下を疲らして、北澤の邊をフラフラして小舍まで辿り着いた。

五・五、雨　北澤小舍(七・三〇)——仙水峠(八・二〇——八・四五)——岩室(九・三〇——一〇・〇〇)——地獄谷出合岩室(一〇・三五——一〇・四五)——ヒョングリ瀧岩室(〇・一五——〇・五〇)——赤薙澤合流點(一・四〇——一・五〇)——食事(二・一〇——二・四五)——一ノ澤(三・一五)——柳澤(五・一〇——七・四五)——日野春(九・一五)

拂曉小雪、小舍のあたり薄白くなつてゐた、が間もなく雨と變つた。出發の頃には殆ど止んでゐた。仙水峠から大武川へ下る。殘雪殆どなく踏跡明かで間もなく澤へ出る。之を渡つて尾根を廻ると摩利支天の南の一澤へ出る、この時雨激しく岩室に休む。十人位は泊れる廣さ。雨は止んだかと思ふと直ぐに激しくなり、雲しきりに飛ぶ。再び尾根をぐるぐる廻つて地獄谷の下流に沿ふ頃は薄陽さす様になつて來た。前栗澤と本流との落合左岸に

岩室がある。此處からは大武川沿ひに下つて行く、雨で流は大きいし、驚く程大きな岩の中を流れてゐるので所々山腹を廻るが雨ですべる上に、土が軟かく、とても歩き難かつた。ヒョングリ瀧迄の所で三回渡渉した。水勢が激しいので緊張した。夏には凡て橋を架けるから渡渉の勞はないらしい。ヒョングリ瀧の所に大きな岩室が二つある。焚火をして濡れたものを乾かす。休んでゐる間に青空が見え、陽が照り雨が止んだ。赤薙澤の落合までは樂だ（渡渉一回）、本流を左岸に渉り更に合流點下の渡渉を人夫は心配した、成る程去年の夏渉つた時は岩傳ひに足を濡らす事はなかつたのが今は甚だしい増水だ、が、幸にして渉る事が出來た。大武川の溪谷はヒョングリ瀧の上流一粁程の間は一寸珍らしい立派な溪谷である。（進）

鹽見岳

清水達雄、田中秀三郎、増山清太郎
人夫　酒井政勝、御堂島　寛

五、一八、晴　伊那大島――大草（この間自動車四十錢）――瀧澤――落合――大河原

久原のトロは廢止されたので約一里自動車に乘つたが、まあ部奈へ登る勞力が省ける位のものである。荷物は伊那大島から駄馬に託するがよい。

五、一九、晴後雨　大河原（九・一〇）――釜澤（一〇・一〇）――一一・四五）――小澁湯（一・一〇――一・五〇）

――高山澤落合幕營（五・〇五）

小澁湯を出てから雨は降りだし、水は刻々増して來て高山澤の上では遂に渡渉不能になつた。雨はやがて止み

さうに見えるので、幕營して翌日を待つ事にした所、一晩ビショ〳〵降りつゞけてしまつた。

五、二〇、晴　野營地（後一・〇五）——木馬道（一・三五）——高山澤の幕營地（二・一〇）

好い天氣に半日伸びて、渡渉するよりも早さうな高山中腹をへづるつもりで一時間ばかりも登る。高山瀧の地圖にあるものは中々立派である。

五、二一、晴　野營地（六・三五）——高山澤を離る（九・四〇）——高山（一・三五——二・〇〇）——高山裏野營地（三・二〇）

廣河原への道が見付からず、政勝は腹を痛めて苦しんでゐるし、寛の方はなつてない人夫であるから、一先づ高山裏へ出て樣子を見る事にしたのである。

五、二二、晴　野營地（六・五〇）——板谷岳（八・四〇）——小河内岳手前鞍部（晝食）（一〇・五〇——一一・五〇）——小河内岳（一・一〇）——三伏小舍（四・二〇）

軟化して鹽見行となる。

小河内岳北面は略〻白くなつてゐるがその他は雪は極めて少い。

三伏小舍は數日前泊つた人があるとの事、小舍半分は雪を除いてあり、氣持よく乾いてゐた。

五、二三、晴　小舍（七・〇〇）——本谷山（七・五〇）——權右衞門岳東鞍部（九・〇〇）——晝食（一〇・一〇——一〇・三五）——鹽見岳（一〇・五五——一一・〇五）——雪渓の終（一一・五五——一〇・三五）——鹽見澤落合（一・二五——二・一五）——三伏小舍（三・二五）

權右衛門岳の森林中は積雪數尺、鹽見澤は中俣の合流點の半分位の所まで雪があつた。「雪を見ると悲しくなる」と云ふ人夫を相手にしての鹽見澤のグリセードは相當大騒を演じた。

五、二四、　三伏小舍（五・三五）——峠（六・〇〇）——豐口山の鞍部（六・五五）——テラ澤（八・一〇）——釜澤（九・〇〇）——大河原（一〇・〇五）

北條坂から伊那大島に出て歸る。

スキー合宿其の他

昭和四年冬期スキー合宿記

二二、二三、雪後晴　今日の到着者左の如し。

（1）中島嘉一郎（2）磯野計藏（3）河相薫（4）芋川稔一（5）園山德三郎（6）太田又一（7）清水達雄（8）増山清太郎（9）大友亮藏（10）間瀬正（11）安達泰三（以上部員）（12）辻辰雄（13）平岡清（14）小川德四郎（15）田中秀三郎（16）水野衛夫（17）上保嘉保（18）橋本榮一（19）安田義一（20）青木欽二（21）宮川雄二郎（22）堀岡清（23）打橋壽郎（以上部員外）（24）金田一郎（部員）

昨夜降雪二尺程あり、スキー可。午後Bのゲレンデをならして中島責任コーチャー活躍目ざまし。

金田は獨り十一時の汽車であとより來る。

一二、二四、晴　今日の到着者次の如し。
(25)手塚晴雄(26)宇佐美敏夫(以上部員)(27)保田康雄(28)奥野純次(以上部員外)
午前中「パラダイス」へ行く。ラッセル奮闘一時間。雪少なくブッシュ多し。歸途太田スキーを折つたが午後も斷然精勤。夜は「クリスマスイーヴ」にちなんで懇親會。吉例「おばさん」の話は例の如し。
一二、二五、雪　本日の到着者左の如し。
(29)細野政男(30)松井喜代太郎(31)内田直作(以上部員外)
一日中ゲレンデだつたが雪質よく面白かつた。ドンチヤン又スキーを折る。初心者の進歩目ざましくAのスロープを皆氣持よく滑つて行く。
一二、二六、雪
(32)内山光鐵(33)新津雄(以上部員外)
午後大擧して野澤峠まで行つて來る。初めての人が二人ばかりおくれて夜暗くなつてからゲレンデへ滑り込む。「大茂ん」の提灯を眞中にして五六人づゝ揃つてAをボーゲンで下る。
一二、二七、雨後雪　毛無山へ十六人で出掛ける。峠までは猛烈な雨ですつかり濡れてしまひ一日中たたつてしまつた。其の後は雪で毛無の眺望もなし。歸りもおそくなつたので峠から下る。素晴しくへばつてゲレンデからはスキーをかついで下つてしまう。
夜は本科豫科對抗の民謡俗謡童謡の合唱競技會あり。夕方から十二時近くまでかゝつてなほも歌の種盡きず、

シルコが出る。

一二、二八、晴　午前中、増山、清水の二人熊野湯に出發する。

今日は中島、手塚、宇佐美、金田、磯野、河相、太田の連中悉くさぼる。責任者中島は懲罰に價する。ゲレンデは雪質悪く皆「パラダイス」へ行く。

夜は「ジエスチユアー」「名ざし」「へボ抜け」等々就寝遂に二時を過ぐ。

一二、二九、晴　合宿は明朝迄であるが事務は午前中に完了。先輩吉澤兄ヒョツコリやつて來る。今日の歸京者、午前中は宇佐美、河相、午後は芋川、太田、磯野、金田等。

後數人の殘留者あれど合宿は之にて解散す。（芋川稔一）

春のスキー合宿（野澤）

三月七日――十四日

委　員　手塚晴雄、中島嘉一郎、中森長太郎

部　員　金田一郎、磯野計藏、平井貞一、増山清太郎、鈴木英雄、十合健二、田中秀三郎、小橋謙三、原田常雄、打橋壽郎

部員外　時田憲治、其他十數名

針葉樹會員　浦松佐美太郎、曾田莊太郎

正月の頃からの事であるが例年に比較して信州一帶に雪少く、野澤溫泉も又例年の三分の一、四分の一、位の有様にて僅に三尺五寸、合宿の終る頃には二尺五寸位になつてしまつた。其の間一回吹雪があつたのみ、此の時は終日降つて約一尺五寸程の新雪を見たが其の外の日は度々雨が降る始末、ために雪はどん〳〵融けて行き、從つて雪質も至つて申分無く惡い、ワツクスは直ぐに落ちるし、スキーの先端は雪の中に深くつきさゝる。其の代り良い事には餘りスキーが滑らず、ターンは容易に出來た。

從來の合宿より以上意を用ひて、初心者にコーチした、毛無へ行く事、此の短い合宿期間中に三回、吹雪を冒して初心の人々を連れて行つた事もある。

事故は却つて天氣の好い、其の吹雪の翌日に登つた時の方が續出して、スキーを折る者二名、スキーを片方谷底に落すもの、峠からスキーを擔いで歸る者も出來たが初心者を毛無まで二度三度連れて行つたと云ふ事は前古未曾有の事。

浦松先輩や委員諸兄等の熱誠なる努力に對し深く感謝する。

野澤溫泉のゲレンデも此の二月の神宮大會以來立派になり、ブツシュは大分伐り拂はれ、全く見違へる樣な申分のないスキー場に變つた。是で雪さへ例年の如くあれば良いのであるが。

夜はトランプや麻雀やジエスチユアなど、やる事例年と變りなし。「エノシン」が後輩に數子を置いてキウ〳〵云はされてゐるのも面白かつた。

合宿の後半、雪が惡くなつた爲めゲレンデへ出掛けるのも臆くうで、遂には雨が降り出す始末なので荷物を纏

めて逃げ歸つた様な次第。（手塚晴雄）

白馬山麓北城スキー行

（岳聯の委囑により）　手塚晴雄、江口新造（早大）

一、二九、飯田町驛（一〇・〇〇）
一、三〇、松本（七・〇〇——七・二四）——大町（八・二二——八・五五）——藁場（九・三〇——一〇・〇〇）——四谷（一一・五五）

藁場から四谷までは馬橇で行く。此の馬橇は屋根がある。天氣好く、湖の雪景色も又格別。四谷に着いてから明日のスキー講習の豫定地になつて居る蕨平へ行つて見る。例年に比較して此處も又其の半分位しかない雪量の上に猫の額みたいの所で練習出來る様な所ではない。江口君は斷然こんな所でスキーをやるのは嫌だと頑張り、其の夜の相談會では講習生を二組に分ち第一班は初心者として僕が受持ち、第二班は熟練者卽ち去年黑田氏のコーチを受けた者を主とし江口君が受持つ事になつた。もと〳〵山岳スキーを目的としたる北城村人夫の冬季スキー登山の講習であるので、唯のスキーテクニーク許りではないのであるが第一班などは主として直滑降とステムボーゲンと云ふテクニークを教へる。

一、三一（講習第一日）、晴　蕨平スキー場に行く

江口君は主として北股入の猿倉を根據地とする豫定にて今日は細野の部落へ向つた。九時半前日の蕨平に行くと四つ谷、神城村飯田の人達で約四十名程の集りであつたが成程初心者の人達が多い。而かも最初の目的たる冬

季登山人夫養成と云ふ事より大分違つた種類の人達で景物の様な氣がしたが成る可く山岳スキーのがつちりした所を教へる。アールベルグのホツケ、ステルングを示し各個人につき其の缺點を指摘した、午後四時白馬館に歸る。

二、一(講習第二日)、晴　蕨平スキー場

今日も又猫の額で前日の如く行ふ。然し既に第二班の價値ある技術を有するもの、前途有望の者、アールベルグの本を良く讀んで居る人達を發見し得て嬉しかつた。

二、二(講習第三日)、晴　落倉スキー場、四谷白馬館——新田(八・三〇——九・〇〇)——落倉(一〇・三〇)鹽島秀吉方

いよ〳〵猫の額から解放され、落倉の廣大なる(少くとも)斜面をゲレンデとする事が出來た。親の原の前山と云ふ相當な急斜面で直滑降とステムボーゲンを練習した、此の落倉まで來た連中は第一班と云ふよりはむしろ第二班に入る可き人達で時間の關係で此方に來た者であるから少數とは云へ面白い。太田政男、鹽島靜雄、矢口六右衞門、宮田輝、鄕津長兵衞、松澤嘉一郎、鄕津久雄、横澤澤次、相澤松一、松島友衞、此の中で一番うまいのは宮田輝と云ふ青年で既に冬季案内人として白馬へ行つた事が四五回あると云ふがステムボーゲン確實にして恐らく北城村で一等のスキーのうまい者であらう。太田政男、鹽島靜雄、鄕津長兵衞等人夫をやるだけあつて目覺ましい進歩、運動は若い者にはかなはない。

二、三(講習第四日)、落倉スキー場

午前中鐵管路の斜面で練習し、午後は宮ノ下と云ふ一里程北の部落から來た相澤松一に誘はるゝまゝに南小谷村へ行き寺カヤ場のゲレンデを見る。相當な良い斜面であるが東南向きと風當りが良いから雪質が少し惡るかつたが面白い所だつた。夜は相澤の家に厄介になる。

二、四(講習第五日)、晴　落倉スキー場、宮ノ下(八・三〇)——千國——沓掛——分當尾根——鐵管路の斜面(一〇・三〇)

鐵管路は落倉の北西、阿彌陀山の裾、此處で再び江口新造氏等の第二班の連中と一緒になる、江口君は昨日猿倉より岩茸山の北を越して一日豫定より早く落倉へ來たのだそうだ。急に賑かになつて練習する。第二班の連中とても始めて其の滑走振りを見たが皆な宮田輝よりもまづい。

二、五(講習第六日)、曇　落倉——鐵管路——落倉——マキヨセ——新田——四谷白馬館(二・〇〇)

今度の講習も是で終る事になり夜は白馬館の二階で懇親會を開き、江口君の活躍振りを見る。

二、六、曇　飯田スキー場、神城村飯田の青年團が一日是非スキー場とスキー滑走振りを見て行つてくれと云ふので江口君は熊野湯へ行く約束があるので僕だけ半日をつぶして立寄る事にした。飯田のスキー場と云ふのは野澤スキー場を思はせる樣な谷の中の斜面で雪量も平均八尺位は積るそうであるから、此の附近では一番良いスキー場であらう。其の上汽車も此處までは今年の中に通ずると云ふ。

小學校の生徒から先生まで集つてくれたので約百名程の人の數で此方が非常に驚いてしまつた。然し愉快に滑る事が出來た。夜は青年團の人達五六名に二里の雪道を藥場まで送つて貰つた。藤村の「破戒」の最後の一節、雪

道を橇に乗つて雪の町飯山に別れて行く丑松の事を思出した。

記錄編輯に就て

今日迄、發刊された多くの學校山岳部機關雜誌に於ては、當然その眞髓と目されねばならぬ登高記錄が、餘りにも輕視されて、卷末に二段組に小さな活字で組込まれてゐる。この針葉樹の記錄も其の例に洩れなかつた。て、この第五號にあつては今までの型を破つて、登高記錄を最初へ一段組て組んでみた。そして記錄そのものも單なる時間の羅列ではなしに、もつと充實したものたらしめねばならぬと心掛けた。併しこの主旨は部員諸兄に、或は徹底しなかつた爲か、中には今迄の樣な意義少き記錄がないとも云へぬ。併しこの新しい企は、例へ不徹底に終つても、次の年報からはもつと整つた登高記錄の集るであらう事を信ずる。

記錄の配列は、今までの如く單に時の前後に依る事は止めて、先づ大きく地理的に分類した。これは記錄を見出す場合の便宜を考慮に入れてやつた事である。併し、各分類中にあつては——吾々の僅ばかりの記錄では、地理的に山を配列する事は却つて煩雜になるであらう事を慮つて——時の順序を追つて配列した。

記錄の分類中、東京附近なる項目中には、大菩薩附近、三峠山、丹澤山塊等を入れた。この外の分類項目に就ては特に疑問の起る場合はないと思ふ。

責任者　芋川稔一

紀　文

山の個性

浦松佐美太郎

自分の山に就ての記憶を、それからそれへと辿つてゆく時、恐らくは、初めて高い山の頂へ立つた折の思ひ出が、最も鮮な記憶の一として、浮び出て來るであらう。併し、更に過去へ遡つて、何時から山が自分の記憶に、生活の中に、入つて來たのかを考へてゆく時、自分の山に對する態度を、可成にはつきりと摑み出す事が出來る。

私は思ふ。或人が一個の山岳人となる迄には、私達の祖先からの、長い山登りの歴史が、少くとも一應は、その人の山の生活の間に、繰り返されてゐるのであると。假令現在に於ける登山の技術が、又山に對する人の氣持が、何の程度に迄進んでゐるとしても、生まれながらの山岳人でない限りは、人は此の發達の過程の最先端から、その山の生活を始め得るものとは考へられない。

或る人は、此の歴史の過程を辿りながら、或る點に於て、止まつてしまふ事もあらう。或は又、此の過去の過程を、極く短い期間に通り過ぎてしまつて、現在に迄發達して來た登山の歴史を、更に先へと、押し進めてゆく人もあらう。山登りを、自らの樂みとして味はつてゐる人達が、十分の滿足を得られるならば、私は此の前者で

あつて、少しも差支へる所がないと思ふ。たゞ併し、人の力の進歩は、此の後者に屬する人々の存在を俟たなければ、期し得られない事は明である。

此の後者の、立場を取つてゐる人達は、少くとも登山の歴史を正しく味讀する事と、世界の登山界の動きを考慮に入れる事との勞を惜んではならない。それは、此の事に依つてのみ、自分の山に對する態度が、獨斷に陷る事なしに、定め得られると思ふからである。

此の山に對する態度に關聯して、最も大事なものは、經驗である。過去の歴史は、私達に取るべきと、取るべからざるとの二の區別を示して呉れてゐる。然も尙私達は、之に自己の判斷を、加へ得るの自由をも與へられてゐる。かうして自分の進むべき道が定まれば、私達は一々それを、體驗に移してゆくべきだと思ふ。出來る丈多くの、そして種々の經驗を積む事が、自分の取つた態度に對する何よりの批判となる。山に對する態度は、かくして洗練されてゆくものと、私は信じてゐる。

併し、何にもまして大切なものは、山に對する情熱である。山をほんとうに愛する心こそ、之等凡ての根柢をなすものである。私が此處に、山を愛するといふのは、たゞ山を眺める事が好きであるといふのを、指すのではない。山に健康を求めに、或は山に人生觀を見出しにゆかふとする、さうした氣持からは全然かけ離れたものである。山に憧れ、山の上に自らの姿を燒き付け、そしてその頂を自分の足で踏まなくては、承知出來ない程の心意氣を指してゐるのである。云ひ換へれば、山が生活の中に、織り込まれてゐる事なのである。

であるから、自ら山岳人なりと稱しながら、常に進んでゆく登山の發達に、何等の同情を寄せる事なく、却つ

てすねくれて、あくせく山へ登る等といふ事には、自分は飽きてしまつた、麓の森で山を眺めながら、烟草でもふかしてゐるのがいゝのだ、などゝまことにみすぼらしい反抗を試みやうとする人は、此の意味で山岳人であるといふ名稱を、潔く辭退してしまふだけの禮儀を、先づ心得なければならない。

又、谷を歩く事も一の興味ある事だらうと、私は思つてゐる。併し、谷を歩く人達が、自らを眞の山岳人なりと云はんが爲に、高みを憧れてゆく者を、罵るに至つては私は返す言葉もないと思ふ。

高みを憧れる心、之こそ山への情熱を燃え立たせるものなのだ。私は、自らの風流を誇らんが爲めに、自らの優越を示さんが爲めに、大事な素直ささへも捨て去つて、高みを憧れつゝ勞苦の多い一歩一歩を、頂へと運んでゆく人々を、横目で睨まふとする人々を、さもしいとさへ思ふ。山を愛する人達の心は、あの青空の様に朗であつて欲しい。

私は、何事も生半端なのが、一番見苦しいと思ふ。命をぶち込んで山を愛し、血で山を焦れる、それ程の眞劍さを持つてゐる人達を、私は尊いとさへ思ふ。そして此の情熱の火を、一生大事に守り立てゝゆく人、之こそほんとうの山岳人ではないか。

山を愛する事は、やがて山を知る事である。山を知る道は、たゞ經驗によつてのみ開かれてゐるのだと思ふ。登山の技術に關する理論は、此の經驗を補ふ意味に於ては役立つが、若し主客を顚倒して考へるならば、それは無益を通り越して却つて有害であると思ふ。之を評する言葉として、疊の上の水泳といふのと同じ様に、室内登山といふのである。まして此の理論が、少しもその理論を述べる人の體驗を通してゐない時は、此の弊害が最も

甚しいと思ふ。

事實山に於ては、種々の條件が、全く數へ切れない程の雜多の組合せとなつて、次から次へと現はれて來るのである。だから室内登山が役に立つ唯一の場合は、之等の極く少數の基本的條件に關しての、間違のない意見だけであると思ふ。要するに、山に於ては經驗が最も大切であり、之を一つ一つ丹念に積み上げてゆく事によつて、始めて山を知り得るのである。勿論、何んなに數多く山を登つたとしても、山を愛し、山を知らうとする心がなければ、何の得る所もない事は、云ふ迄もない。

こんな極く解り切つた樣な事を、長々と述べて來たのは、山を愛する心と經驗とが、山岳人にとつて大事なものである事を、云ひたかつたからである。

數多くの山の經驗を積んだ人には、恐らくは好きな山と、左程迄に好きでない山との區別が、何時とはなしに作られてゐることゝ思ふ。又、數多くの山がありながら、多くの人々に山として、そして又山登りの對象として愛せらるゝ山は、その割に少いものである。又、多くの人からは、顧られない樣な山でも、或る人の心をば、强く引き付けてゐる山もある。私はそれを、山にも個性があるからだと、解釋してゐる。

出來るだけ數多く、自分に未知の山々を尋ねてゆくのも、一の行き方ではあるが、それと共に、自分の好きな山を、何處何處迄も知り拔かうとするのも亦、一の行き方だと思ふ。

季節により、天候により、一日の時の移りにより、時々刻々に變じてゆく山の姿を心に觀じ、之を再び山に移し直して、山にも氣持があると云ふ。春・夏・秋・冬、山は觀る者の心に、その折々の、全く別の姿かとさへ疑は

るゝ程の異つた印象を殘してゆく。朝の山、午の山、夕の山、一日の間にさへ山は、その氣持を變へてゆく。まして荒れ狂ふ嵐の中に見る山と、靜かに雲一つない大空の光の中に見る山と、之程にも激しい山の氣持の變り方はあるまい。若し自分に好きな山があれば、此の氣持を捕へてゆく事は、どんなに樂しいことか知れない。その故にこそ、山の紀行に季節の名を付け、月の數を冠するのも意義があるのである。

又、山はその見る側によつても、その姿を異にしてゐる。繪葉書等に現れた山の姿は、大抵誰が見ても美しいと思ふ樣な、向きから寫されてゐる。だから何の山と云へば、凡その人には、あんな形かと記憶されてゐるに相違ない。併し別の谷から、その山を仰ぐ時は、事實その山を見ながら、然もその山の名前まで聞かされても、未だあゝさうかなと思ふ位にしか似てゐない。まして寫眞なぞ見せられて、之は何處の山を何處から寫したものと解る樣になる迄には、一通りの事ではない。

ほんとうに山の個性を捕へ樣とすれば、どうしても下から見てゐたゞけでは、心にぴつたりと入つて來ない。山稜の上の岩角、頂上の雪の具合なぞが、はつきり感じに浮べられる樣にならなければならない。

山を思へば、その尾根の岩が雪が、そして又その折々の樣々の姿が、心に浮んで來るであらう。之等の印象を通じて、始めて山の個性が、生き生きと現はれて來る。そして山が自分の心に近くなるのである。

山の個性を、心でしつかり握りしめる事は、又山と離れ難い愛着に結ばれる事である。ほんとうに山を愛する者の、究極の願は、此處にあるのではあるまいか。それが爲めに、未知の山に對する憧れと、自分の過去に於て見出した心の山に對する愛着と、此の二の間に立つて、山へ登る者は惑を感じるのではあるまいか。

轉々と數多くの山をこなしてゆくのもいゝ。だが私には、心靜かに併し激しい熱意を以て、自分の心の山に深く深く食ひ込んでゆく樣な氣持の方が好ましい。

私達に多くの事を敎へて行つた、過去の夫々の立派な山岳人の、書き遺した物を見る時、彼等にも亦、心の山があつた事を知る。そして來る年も來る年も、その山懷へ引かれて行つた彼等の姿を思ふ時、何か微笑ましい程の懷しさを覺えるのである。

私は、自らの心の山を持つ人を、幸せだと思ふ。山を思へば、直ぐとその山が、目の前に浮んで來やう。何時でもいゝ、その山懷に入れば、それはもう自分の世界なのだ。そして山に對する情熱は、恐らくその人の一生を通じて、消える事なく守り立てゝゆかれるであらう。

あの山の上に廣がる朗かな大空の下に、思ふ樣暢々と、此の心持を、育て上げてゆき度いものと思つてゐる。

一月の槍平と槍ケ岳

手塚　晴雄

蒲田温泉へ

四つのスキーと二つの輪かんが裏の急な雪の坂道を登つて居る頃東空が明るくなり出した。直ぐ眼の下の谷の中に昨夜泊つた中の湯の温泉の淡い光が見える、もの〻一尺も積もつて居ない様な、所々青い笹が首を出して居る雪の坂道を、つゞら折りに曲がり曲がつてだん〳〵右に巻く様にして登つて行くと一時間半許にして峠の様な十字路へ出た。東は上高地、北は焼岳、南は白骨温泉に通ずるのである。私達はこの十字路から道を西南に取つて山の中腹を巻いて居る夏道通りに行く、餘り雪が少いのでおぼろげながらも夏道と分る。つゝましやかな細池を右下に見て行くと一時間程して再び峠らしい兩側から尾根の迫つて居る鞍部に出る。塚田が是も安房峠だと云ふ。地圖の安房峠は猶一時間もかゝつた。どんより曇つた雪空のためか、又道が殆んど巻く許りで登りがないためか、汗は少しも出ない。西穂、奥穂、前穂の氷と雪と岩の尾根が安房峠の枯枝の梢から光つて見えた。眞正面には霞澤がべつとり白く化粧して微笑んで居る。

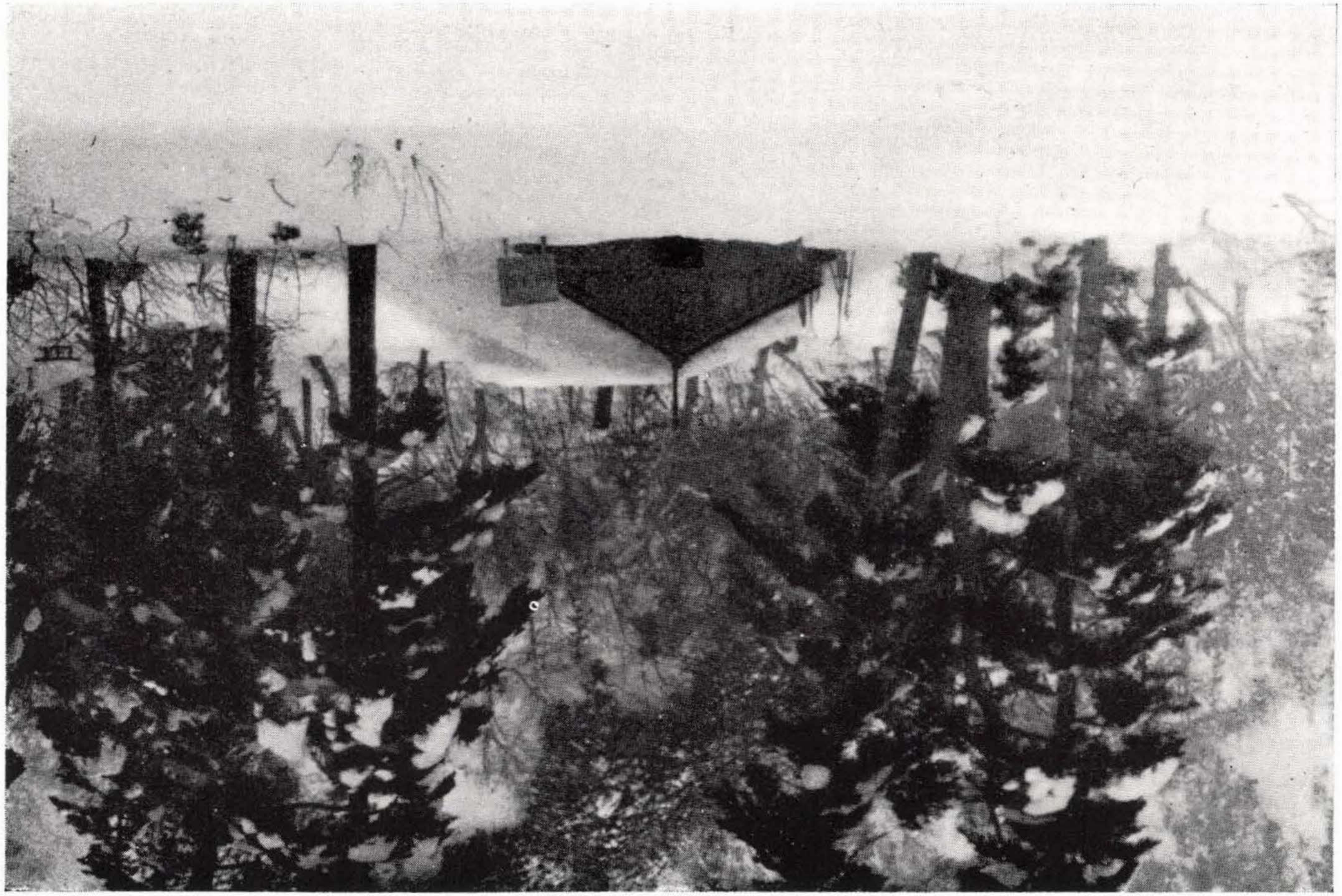
安房峠からアザラシを取つて滑り出す。十間毎位に道がジツグザツグして居り、雪少く石の根、木の根が直ぐ

首を出したがつて居るので危險で仕方がない、轉ぶ度に、肩から重いルツクサツクを取らなければとても起き上れない。轉ぶ、轉ぶ、漸く三十分程の奮闘で川の所へ出た。實際雪の少い坂道を滑るのは參る。

氣の毒に磯野と高橋は是の坂道を再び登り返さなければならなかつた、高橋の不注意で磯野のルツクサツクへつけたアザラシが一本、落ちてしまつたのか、見付からないのだ。二人共がん張つて登つて行く、外の連中は敬遠して共に平湯に行つて待つてる事にする。是からは道も相當な緩傾斜で下つて居るので好い氣持ちになつて滑つて行く。急に道幅が廣くなつてカンカンに道が凍つて來たので部落へ近づいたのだらうと思ふたがやはりさうだつた。

中の湯の留守居夫婦が平湯へ行つたら是非舟津屋へ寄つて呉れと云ふて居たので、舟津屋を探がして入つたのは晝時であつた。舟津屋の主人は此の珍らしい冬の客を喜んで迎へて呉れた。大分おくれて塚田が迎へに出掛けると直ぐ磯野と高橋が滑つて來た。再び安房峠まで行つて見たがアザラシはどうしても見付からなかつたさうである。此處の主人がスキーをはいて練習に安房峠下までは度々行くからと云ふのでアザラシの方は賴む事にして先を急いで私達は出發した。（此の主人よりアラザシと共に其の純朴さ躍如たる手紙を受取つたのは四月も半ば過ぎて居た、雪も消えて落葉が見える頃或る正直なお方が拾つて舟津屋へ屆けて呉れたのださうだ。）

塚田は輪かんなのでおくれるからと云ふて少し早く出發した。然し廣い往還で傾斜が殆んどないのでたう〳〵スキーの方が輪かんに追ひ付く事が出來なかつた。たまに人通もあるのだそうで道の中に又小さい道が出來て居て、其れを滑つて行く。



稽平の小舍　磯野計藏

餘り滑らないで癪にさわつたので自分一人おくれてスキーにワツクスを塗つて見たがやはり出ない。其れでも餌掛谷を渡る頃から前の連中の作つて呉れたシュプールが本道を外れて、近道々々と行つて居るので傾斜が出て來てビュン〳〵スキーを飛ばせた。

未知の所を一人でスピードを出した罰が來た。滑つて行く眼の前に急に大きな黑い石が見えたので是はと思つて足をひらいて其の石をまたぎ越したと思ふと又石が出て居る。あゝと云ふ頃は横腹を石にぶつつけて雪の中に倒れて起き上れない。一時は先へ行つた連中が引返して來て呉れるまで此のまゝ寢て居なければならないのかと悲觀したが、其のうちにやつと立つ事が出來た。

こんな事をして居たので一重ケ根の部落で待つて居る人達に途中で追ひ付くどころではなかつた。部落の裏の小さい峠を登る、蒲田川と高原川との出合を廻つて行くより近いと云ふのでスキーをトラーゲンして峠を越す。

蒲田川も中々大きい川だ、雲は低く、谷まで下りて來て穗高も何も見えない、今にも白い粉を落しさうである。神坂の沖田と云ふ人の家に寄つて槍平にある彼の持小舍の様子をきく、二階建で新しい小舍だと云ふが、兎に角行つて見た様子で營林署の小舍かどちらかに泊る事にする。蒲田の今田旅館に着いた頃はすでに谷はせまり來る夕暮と共に益暗らくなつた。何よりも第一に私達はルツクサツクを上り口にほうり出す。

夕飯がすむと、婢が二階の私達の部屋に上つて來て、湯屋は一町許りの河原に假小屋の中にあるから一風呂あびて來てくれと云ふた。さう云へば大正何年頃か蒲田川の出水で全部流された温泉が蒲田川の出水で全部流されたと云ふ事をきいた事もある。

湯屋は夜で分らないが成程粗末なものである。湯屋から上つて外へ出た時、谷は眞暗で足元が分らない、其の上良くほてつた顏に雪が吹きつけて來る。宿に歸つてから明日の行程を相談したが、最初の豫定たる中崎小金泊りは變更して一氣に槍平の室堂まで行く事にする。春になると此の蒲田から槍平まで往復も出來るそうである。此處で一週間分の米を買つたので又二人の人夫に是をかついで行つて貰ふ事にする。其の中の一人は此處の主人の弟今田由勝と云ふ男で、「最新のスキー術」を持つて居る男である。

右俣遡行、槍平へ

二三日前同志社大學の人が二人槍平へ中尾から登つたと云ふ、其の輪かんのあとが至る所の道にかすかに殘つて居るがラツセルは相當やる必要があつた。昨夜からの雪はすでに中崎の左俣、右俣の出合で五寸位、行くに從つて益深くなつて行く。

蒲田川の右岸、中崎の出合より約十五六町下に穗高溫泉とか云ふ溫泉が出來て、新しい家が對岸を行く私達の眼にうつつた。地圖の蒲田川の蒲の字の近所にある溫泉の記號のある所だ。

中崎の出合から左俣と分れて右俣を行く、急に谷がせまくなつて吸ひ込まれて行く樣な氣がする。河原の石塊がごろ〳〵雪の中から出て居る所、又落葉樹の疎林の間を登つて行く。

小鍋谷で早晝食を取る樣な時間になつた。風と雪が穗高の尾根から一圖に吹き下ろして來るのか、寒い所でルツクサツクから出す握飯をふるへながら食べる。

小鍋谷から柳谷へスキーを運ぶ頃には、雪も一寸止んで淡い日の光を雪面に見せたので急に谷の中全體が明るい感じがして來た。猿飛とか云ふ所を過ぎ、白出しを渡る頃は再び雪が降り出して來た、上高地の上流の梓川を思はせる樣な、景色の良い所もあつたが白出しから瀧谷の間は相當時間がかゝり、かなりへばつた。高橋はスキーを折つたので塚田と一緒に後から輪かんでのそ〳〵やつて來る。

瀧谷と槍平の眞中所丁度大キレットから出て居る澤が例のワボーの危險の最もある所で穗高の山稜では盛んに雪煙が物凄く上つて居る。此處を通る時はひやりとしながら穗高の方を見上げ見上げ今落ちて來はしないかと急いで登るのだが、又生憎雪が深く河岸が急なので丁度夢の中であせつて居る樣なもので中々足が進まない。流石にラツセルを續けて來た蒲田の人夫由勝達もラツセルを交代して吳れと悲鳴を擧げる。小さいデブリーを越すと谷が廣くなつて森林帶の中へ入つた、此處はもうワボーの心配はない所で谷は雪ですつかり埋まつて居る。漸く槍平の小舍へ着いた私達を美しい六日月が谷の眞上から見下して居た。小舍の中には同志社大學の人が二人羚羊の毛皮に恐ろしさうな恰好をして焚火の傍に座つて居た、挨拶をかはすと京都辯の優しい返事だつた。其の人達の連れて居る人夫中畠は疲れて居る私達のために甲斐々々しく夕食の支度を手傳ふてくれた。塚田と高橋は私達よりも二時間も後れて來たが小舍の外で呼んだ時・川下で返事が聞えた樣であつたが其れから隨分時間がたつてやつて來た、輪かんの彼等二人は全く疲れ切つて居た。餘程荷物をおいて輕身になつて來ようかと思ふたと云ふ位輪かんが腰までもぐつたのらしい。

私達が深い〳〵眠に落ちたのは其から間もなくだつた。

槍平室堂小舍

飛驒乘越から下ればスキーで約三十分程にして右俣の澤が急に平になりどうしてもスキーが出なくなる所がある、是が槍平である。室堂の小舍はこの右岸の林の中に大概雪で埋まつて居る、地圖で云ふと中崎尾根の標高二四三九・五米の山の眞東に當る所が槍平で穗高側から云ふと南岳と中岳との鞍部の西方にあたるであらう。

槍平の上と下とに穗高側から常に雪崩の落ちる道があるが、小舍は殆んど絶對に雪崩からは安全だと云へる。劔澤の小舍の樣な事はないと思ふ、其れに小舍は林の中で雪深く埋もれて居るので假令上から雪崩が滑つて來たとて危險はない。常に五尺位の雪は屋根の上に載せて居て小舍の所だけ雪面が一寸小高くなつて居る位で、良く屋根の上から滑つたものだ。

槍平附近は今年の樣に少い年でさへ軒まで雪が積つて居て七尺位はあつたらうから、平年の三月などはどんなにあるか分らない。其れに此處は吹溜りらしい、雪質は粉雪でゲンレデとしても良い斜面が中崎尾根の方の澤にある、又右俣を飛驒乘越の方へ遡つた所は澤が廣くなつてカール狀をして居るので滑るには非常な良い斜面である。

槍平の氣溫は記錄にもある如く常に零點以下で、一週間の滯在の中に零下二十二度と云ふ事が一回あつた。此んな寒さだからパラフインなどはきかない、どうしてもミツクスあたりを使はなければならない、小舍の中には炬燵櫓もあるし、ランプもあつたので大分助かつた。沖田と云ふ人の小舍は直ぐものゝ五間も離れて居るか居ない所にあるが新しい事は新しいがすきまがあるらしいので此の營林署の小舍へ泊つて居る事にした。

槍平より穂高　　磯野計藏

川は雪の中に埋れて居て雪を掘れば水をくむ事も出來るが面倒なので雪を溶かして使つて居た。薪は豪遊する程買つてあつた。大體薪なんど澤山あるのだから一々買はせなくともよささうなものであるが、昔の連中の濫伐の報ひが私達に廻つて來て營林署でやかましく云ふらしい。

第一怪しからんのは蒲田の人である、槍平では炭は一俵八圓だと云ふ。蒲田から此の炭を槍平まで運ぶには往復二日の人夫賃が一俵の炭代の上に加つて、人夫賃を一日三圓三拾錢として計算すると丁度八圓になるのださうだ。炬燵の設備があるのだから炭も欲しい譯で由勝に進められるまゝに炭を使ふ事にした。お蔭樣でどんなに暖かかつたか分らないが、後で良く考へたら、此の炭は此の春來る六高の山岳部の人達が秋上げておいたものだから、春補充すれば良いのだ。春ならば充分蒲田から槍平へ往復出來ると云ふのだから人夫賃二日分を取るのは不當である。其の外擧げれば不滿の點は種々あるが此方が知らないからと云ふて其の足元につけ込む蒲田の人達はひどい、蒲田人夫組合で大いに自重して貰い度いものだ。

記錄にある如く、小舍へ着いた翌六日は蒲田の人夫二人を歸へして、同志社大學の人達と一緒に一日を煙い小舍の中でさぼつて居た。

同志社大學の飯淵氏はあきらめて今朝中尾を通つて歸る事になつた。

其れから冬の天氣とて仕方が無いもので晴れる日は殆んどなく午後は必らず荒模樣に變つて居る。九日に一日のチャンスがあつたが愼重なる塚田の言に從つたので遂に小屋滯在の止むなきに至つた。十日と十一日の二日に渡つて右俣を乘越まで行つたのであるが是も失敗に歸した。

槍　ケ　岳

私達は豫定の一週間を既に此の槍平の小舍の滯在だけに費してしまつた。食糧の底が見え出して來てはいよいよ態度を明にして、或は同志社大學の人達の樣に涙を呑んで此のまゝ下るのも仕方が無いかも知れない。

ワボーと云ふ恐ろしい又厄介なものがあつては、晴れた風の無い日とても安心はならない。一日中何時落ちるか決つて居ない、何時でも氣の向いた時出て來る此の冬の雪崩ワボーは一週間の滯在の間未だ何處へも落ちて居ない。落ちると決つて居る所へも落ちて來ない、其れ丈一層氣持ちが惡い。むしろ春の底雪崩の方が其の條件が相當はつきりして居るから仕末が良い。

又昨日や一昨日の樣に谷の中では穩かな天候でも思ひ切つて峰へ尾根へ出て行くと金田の樣に吹き飛ばされて危く谷底へ轉げ落ちるかも知れないあの殺人的な物凄い荒れかたである。手の指や耳などが凍傷で變になつて居ない者はない。高橋の樣に大切な所をやられた者もある。

二回すでに失敗して槍の穗先は未だ登らずにあるがせめて槍の肩を越えて信州側へ出る事は普通の天氣なら出來さうなので明日は三回目の登攀を試み、萬一天候の許さない場合は斷然蒲田へ下りて、あの辛い思ひ出の安房峠も再び越さなければならないと決心して十一日の夜は早く炬燵と羽根布團の中へもぐり込んだ。

室堂から右俣の澤を大分登つた時振りかへつて見ると透明な青空の中に穗高連峰の岩塔は雄々しく突き立ち、霽上つた朝霧の殘りは其の裾を包んで立ちやらずに居る。私達の登つて來たシユプールは眼の下の小舍まで續いて居る。風のない申分のない天氣、此のまゝ變らずに居て呉れゝばと餘りにも幸多き惠まれた今日の登攀に輕い

心配さへ伴ふ。

澤にジツグザツグのシュプールをつけて高度を増して行く毎に、昨日は隱れて見えなかつた、拔戸、笠、錫杖が屏風の如く、鳥の翼をひろげたるが如く、高く朝日をあびて綠青の空に始めて浮び上る。

冬の山々の美しさ、限りなき山の魅力。

乘鞍さへ其の長い裳を東西に引いて、其のなでやかな軟い線を見せて、去にし日の回想をなつかしむ樣に見える。今まで眞正面に私達の小さい姿を見下ろして居た中崎尾根の岩角と平行になり、飛驒乘越も見上る許りになつた頃、拔戸の右に浮び上つて來た一點の汚れも知らぬ純白に輝いた蓮華、双六。何と云ふ美るはしさだらう、ありし日の尾瀨の至佛を思はせる白き山波、均整の取れた美しき線、なめらかな斜面、粉雪を飛ばしてスラロームを畫く自分達の姿。

心行く許り山々の情景に見入つて居る事の許されない私達が再び乘越に近づけば近づく程、朝の輕い心配が事實となつて來た樣だ。大喰が無氣味に大きな口を擴げて待つて居る其の上を怪のついた樣な怪しげな雲が飛んで居る、日に照された其の雲は本のへりにでも見る樣な怪氣な色どりをして光つて居る。私達は斷然がん張つて登りを續けて居る。乘越の下のウインドクラストになつてる所で早くもスキーをアイゼンに代えて置く、再び立つた！一昨日の飛驒乘越の上に。

風は强いが雪が未だ加つて居ないので未だ凌ぎ良い。東北に純白な大天井、常念が眼の前に手のとゞかん許りに迫つて居る。大天井の向ふに燕岳は見えないのかしらと思ふ間もなく、意外に高い空中に、雲の中から槍がグ

ーと突き出て來た。其の莊嚴さ、偉大さ、私はこんなに迄急迫的な高調の感情を以て槍を仰ぎ見た事はなかつた。

兎に角肩の小屋へ行く、乘越から十分位で達する。肩の小舍は二階の窓を外して入る。槍を背景にして先づ紀念撮影と思つてピツケルなど小脇にかゝえ込んで並んで居る中に槍の穗先は再び雲の中に入つてしまつて出て來さうもない、荒れ模樣になりさうだ、雪さへ交じつて來る。輪かんの塚田は一人で未だ奮鬪して登つて居るのだらうか小舍の中で待つて居ても心配になる。じつとして居ると寒いのでウイスキーをあほり片手に黑パンを持つて頰張りながら、出駄羅目の踊を踊つて寒さをしのいで居る私達の姿を人が見たらば恐らく吹き出してしまふだらう。磯野は却つてウイスキーがきゝすぎて靑くなつて元氣ない。

一時間半程おくれて迎ひに行つた高橋と一緒に塚田がやつて來た。割合元氣良く小舍へ入つて來たので安心した。外は益劇しい荒れになる許り、期待した穗先も無論駄目、槍澤を下るにしても雲と霧で先が見えないので若しスキーをつけて別れ〳〵になつては大變だと云ふ心配から、兎に角殺生小舍あたりまで歩いて行く事にして、深いし、膝位までもぐる雪をふみ分けてスキーをトラーゲンして行く。風は雪のつぶてを頰に痛く打ちつける。

殺生小舍の屋根が少し露出して居たので是が殺生小舍だと分つた。荒れも肩よりは少し穩かになつたのでスキーをはいて見る。磯野と金田は工合よく滑れるが、私と中島のスキーは反りが少く、短いせいか此の深い雪の中で二進も三進も動けなくて實に閉口した。山スキーと云ふても相當長く、反りも必要な事を痛感した。こんな工合に槍澤を苦しんで下らうとは想像しなかつた。

此の深い雪は又案外で一月の槍澤はウインドクラストの凄いのが出來て居るのではないかと思つて居た。多分此の數日間の吹雪で槍澤をめぐる山と云ふ山から全部雪を吹き落して吹きだまりを作つたのらしい。其れでも殺生小舍の附近急にクラストの露出して居る所も一二ケ所あつたので驚いた。

大槍小舍へ、歩くのと變はらない速度で着いた、其の證據には輪かんの塚田が一緒に下りたのでも分る。大槍小舍は窓から入れる位雪面から出て居たが中へ入つても仕方がないので其のまゝ又下る事にする　大槍下は夏でも好くグリセードの出來る所なのでスキーで滑つて衝動をあたへ、上の輕い雪と下の堅い雪とをなじんで居ないから人造雪崩を作ると云ふ恐があるのでスキーはトラーゲンして大槍小舍下を歩く。

再びスキーをはいて槍澤を一氣に下降する。雪もやんで谷も明るく前方も見えるので他の連中はボーゲンをやつて居るのに私だけは槍澤の廻り角まで直滑降で下りる。膝まで雪の中にもぐるので其の割合に出ず六〇哩のスピードなどとても出ない。高橋のアザラシスキーは猶出ないで歩いて下りる樣なもの、驚く可き槍澤である。

槍澤小舍から一の俣小舍までは雪が割れて水面が現れ然も谷せまく今までとは變つて滑りにくいので非常に時間を食はれてしまひ、一の俣小舍へ着いた時は中山の端から滿月近い大きな月が出て、谷は美しく輝いて靜に眠つて居た。

大武川から大井川東俣へ

高瀬　進　三

大武川へ

七月十七日、晴、柳澤を出たのは八時に近かつた。今まで黑雲に覆はれて前途を懸念されてゐた天候も、此の時分には雲の切れ間から日光を惠む樣になつた。

日夜山男を送り迎へするこの部落の人々は戸口に立つて見送つて呉れる。

柳澤の部落を通り抜けると街道に別れて用水の邊を綴る小徑に入る。夏草の生ひ茂つた小徑、その傍のさゝやかな雜木林は武藏野を思はせる。併し太陽の遠慮なく照りつける暑さには全く閉口である。此處の武藏野は頗る單調なので、暑さと共に苦しさをさえ感じる。時々乾草を山の樣に積んだ馬の柔和な愛嬌のある顏に會ふのが喜びであつた。石空川の河原を渡つてから一時間程もこの進軍は續いた。すると前方の山腹に大籔鑛泉の白壁が二棟三棟見える。鑛泉の直下で道は右折して大武川を渡つてゐる。河原の木蔭で一休みする。汗にまみれた身體を拭つてさつぱりすると誰も腰を下したまゝ動かうともしない。今に誰か立つたらと皆が思つて居るのであらう。太陽は照りつけるが黑戸山駒ケ岳のあたり、重い雲に取卷かれて顏を見せない。之から入らうとする大武川の溪

谷はこゝで大きくカーブして上流は東西に走つて居る。橋を渡つて左岸に出ると雜木まぢりの小松林、その間を縫つて白砂の上を歩いて行くと間もなく河原に出る。右から大きな澤が落合つてゐる。桑木澤、篠澤等を併せた汁垂澤である。大きい割には水量がない。このほとりに「大武川溪谷、山梨縣」と達筆に記した丈餘のいかめしい標柱がそびえてゐる。之から入らうとする溪谷はこゝから始まるらしい。流れには沿はずに密叢の中を行く小徑は大した登りと云ふ程でもないが、むつとする草いきれには大いに辟易する。水の音が暗い木蔭から聞えて來る。次第に遠ざかつて行く水の音がまた近づいて來る。先の方が明るく光つてゐる。そこはすつかり山間の溪谷らしくなつた大武川である。右岸へ渡る。

此處に立派な堰堤が築かれてある。この堰堤が出來てから大武川下流の部落が水害に苦しむ事はなくなつたそうである。大變結構な事ではあるが初め見た時は一寸啞然とした。この端を登り森林の中を行き間もなく一ノ澤を横切る。時々河原へ誘はれるがまた直ぐに樹間を辿る。炎熱の河原から落葉しく根元の小徑へ入ると全く別の天地である。岩に激して早瀬となる流れも快く響く。

一ノ澤を渡つてから一時間ばかり經つて山ノ神ノ澤(駒城村外二村入會地の村の字の北方に源を發する)を過ぎ、續いて二ノ澤(同上村と入との字の間から發して大武川に注ぐ地圖に記入してあるもの)のガラ〳〵の河原を渡る。この上流に砂峠の奇勝と云ふのがある。どんな奇勝であるかは知らない。山ノ神ノ澤と二ノ澤とは頗る接近してゐて合流しそうに見えるが大武川に注ぐまでは各自獨立を保つてゐる。陽が高くなるにつれて腹の蟲が不平を訴へる。幸にして巨岩ゴロゴロたる河原に出たので晝飯にする。一時間の後、微風に送られて再び木の根の張つたで

こぼこ路を森林の中へと辿つて行く。

大武川はかなり下の方を流れる様になる。二ノ澤を過ぎてからは一層谷らしくなつて來る。流れは概ね狹く切り立つた岩の間を怒り躍つてゐる。斜め上の方から瞰ろすと、一寸谷の中は歩そうけもなく思はれる。魚止瀧、勘五郎瀧等いくつかの飛瀑が幹や枝の間に見える。澤の音を聞くのは快いものである。上の方へは強く響く、地をゆるがす様に、風に鳴る樹々のさやめきの様に響く澤の音を聞くと、何となく心強く感じられる。森林の中の路に飽きて、水が戀しくなる頃再び大武川の岸へ出る。大武川本流と赤薙澤との落合の僅か下流、飛石づたいに左岸に移り更に大武川本流を渡ると、正面に赤薙瀧が關門の様に行手を閉ざしてゐる、細長い十米突程の瀧は左程大きなものではなく、又決して壯觀と云ふ程でもない。だが何かしら強い感じを受ける。それは城壁の様にそゝり立つてゐる岩壁に「之より奥へは一歩も入れず」と云つた様な威壓を感じるせいかも知れない。路は西側早川尾根の端を登つて行く。にぢみ湧く清水に滑り勝ちな、雜草の生えた急な處を遮二無二によぢ登る。赤薙澤寄りに尾根を卷きながらぐんぐん登る。尾根の裾を卷く道はとかく長いものである。赤薙澤は遠く響きもかすかに離れてしまつた。

「こゝが八町坂だネ、なかなかえらいデ」

人夫が後の方でこんな事を云つてるのを耳にしたが、どうして八町どころか。處々出つぱつた岩角や木の枝が邪魔になる。瀧から一時間、船石と云ふ稍船の形をした大きな岩の出た所へ來た。はるか下の方に赤薙澤の奔流が白く見える。この邊りの流れは大武川よりははるかに勇ましい。併し今はそれも大して興味がない。それから

更に一時間、今までの様な路を行く。澤が次第に近づいて來る。路はやゝ降り氣味になつて一つの澤が東から注ぐ所で右岸へ渡つて行く。時計は既に四時を示してゐる。一同殊に私はすつかり疲れてしまつたので此處に第一夜を送る事にした。

此處で落合ふ澤は高嶺の北、獨立標高點二二九〇Mの南西のガレに源を發するものでミノクチ澤と云ふ。落合に立つて上流を眺めると、去來する雲の間に二二九〇Mの峯に連る幾つかの面白い形の峯々が聳立して居る。

野呂川へ

七月十八日、晴。「ご飯にしませう」と云ふ聲に眼を覺ます。時計を見ると九時を廻つてゐる。大急ぎでテントを出る。晴だ。青空が高く見える。雲は一つも無い。うつさうと生ひ茂つた兩岸の綠濃い林からは鳥の聲も聞えず、澤の音は快い響を立てゝ朝の靜けさは亂されない。

人夫は昨夜ねてから雨が降つたとてテントを焚火に乾かして居る。大きな岩の間をこぼれる樣に流れ落ちる水は、落合のあたり大きな一枚岩の上を滑り流れる、如何にも山の流れらしく氣持ちがよい。

私にとつては難有い一夜の憩を與へて呉れた此の露營地に別れを告げたのは七時に近い。テントを張つた背後の茂みを登ると、森林の中に朝露にぬれた踏み跡を見る事が出來る。幾つかの小さな尾根をからみ、流れを下に見ながら進む。肌ざはりのよい朝の冷さに足ははかどる。今日は大樺池までだと思ふとかなり頑張る必要がある。再び流れに降る。露營地を出てから十五分の行程。この邊りでは流れは非常な急傾斜をなしてゐて、殆ど瀧

の續きと云つてもいゝ程だ。左岸の急なザラバを登り切ると、澤をはさんで兩岸に十米突程の大きな岩が扉の様につつ立つてゐる。メドの大岩である。左岸の方を日向のメドと云ひ右岸の方を日陰のメドと稱へる。左岸は東向きになつてゐるので午前中は日光に照らされて明るい。それに岩の周りに大木もなく如何にもいつでも日向の様である。之に反して右岩はすべてが陰氣である。上の方、傍の方から覆ひかぶさる様に繁つた常磐木の黒いまで濃い綠、その作る陰の暗さ。この陰の中に立つてゐるのが日陰のメドである。この原始的な單純な名稱が面白い。

日向のメドの下の板の様な岩をへづつて、岩を傳ひ、木の根を行くと樂にこゝを過ぎる。下からは氣がつかなかつたが此處に一寸した瀧がある。メドの大瀧と云ふのだそうだが、下からは岩に隱れて見えない。落口から瞰ろす瀧も珍らしい。兩岸が高く樹も生ひ茂つてゐるので相當暗い谷らしく感じられるが、赤薙澤も此處で終つた様なものである。之からは谷も淺く、流れもおだやかになり、すべてが平凡になる。奥赤薙澤が左の森林の陰に消えて行くと、水量はへり今までの勢は何處へ行つた事か。八時三十分、袋澤と本澤との落合に着いた。せせらぐ流れに太陽が躍つてゐる。之で愈赤薙澤にもお別れである。顏を洗ひ汗を拭ひ水と名殘りを惜んだ。ゆつくり休んでヲナシの尾根へとりつく。

「ヲナシはなかなかえらいで」と云ふ重さんの言葉通り相當な登りである。ジツグザツグに登つて行く。まばらな針葉樹の間からさし込む日光に苦しむ。振り返へると八ヶ岳の峯々が白雲の中に島の様に首を出してゐる。山らしいものを初めて見た喜びに時々ルツクサツクが下された。八ケ岳と休息のために。

早川尾根は一面の翠巒に包まれて大武川めがけて走つてゐる。十時少し過ぎ二千米突のあたり本澤側の小さなガレの上に出た時、このアルバイトにやゝ疲れたので晝食をとつて元氣を恢復する。コツヘルが沸き立つて、腹の蟲も滿足してゐる頃になると不思議に元氣は朝の様になる。再び登り初めたのは十一時。同じ様な登りではあるが元氣が異ふからはかどる、もう二度も休んだら峠だと云ふ聲に勢づいて頑張つたせいか尾根を右に卷いてダラ〳〵と下ると其處がもう廣河原峠である。早川屋根から下つて來た道は袋澤の頭の方へ草の中を昇つて行く。さるをがせのたれ下つた大きな針葉樹の間に白峯の雄峯北岳が浮び出てゐる。北の方を振り返へると先きの八ケ岳は白雲に包まれて見えない。たゞ下界が白く光つてゐる。村落の白壁も、街道も、小さな丘も、田も、畑も、すべてが美しい一の塊りとなつて目に映る。友等はカメラを持つて姿を隱し、人夫等は先に峠を下つて行つた。峠には私一人。村を出て旅に急ぐ旅人が村はづれの峠まで來た時きつと村を振り返る。一々見覺えのあるなつかしい白壁や屋根を眺めて感慨は深い。そしてやがて次の新しい天地に新しい希望とあこがれをもつて峠を下つて行くのであらう。私にとつては村落の白壁も田も畑も大してなつかしくは思はれないが、この峠を境にして眺めると北と南は全く別な世界の様に思はれる。靜かに考へながら休んだ。友等はまだ歸つて來ない。獨りで野呂川めがけて峠を下る。森林の中のかなり急な傾斜は下るのに決して樂ではない。それに所々に道を塞ぐ倒木は靜かな歩みを妨げる。朽葉の堆積したのに足をのせると勢よく尻もちをつく。兩側の澤は早くから水の音は聞えるが密林の中に姿を見せない。東側は仙水峠の様なゴツで路は次第にこの東側へ導かれる。八百米突の下りはなか〳〵に盡きない。對岸の綠林は下るに從つて高さを增し、何處に野呂川があるとも見えない。一時間半の後ゴツか

ら出る澤に遇ひ之に沿つて下ると森林はいつか灌木となり、道しく落葉は小石と變り、やがて美しい白樺の茂る野呂川の岸へ出た。川幅は廣く、悠然と流れる中に云ひ知れぬ落付きを持つて居る。

廣河原までは間も無くである。大樺池までの豫定ではあるが既に四時、之からいくら頑張つても暗くなるので此處の小舍に泊る。早くから小舍に居るのも馬鹿らしいので岸に枯木を集めて焚火をする。上流の方を眺めるとアサヨ峯が綠の尾根に頭角を現はし、その頂のあたりは陽に輝いてゐる。併し谷間はもうかげつてゐる。鱒釣りが二人下の方から長い竿を水の上に突き出しながら上つて來た。

「久しく御馳走を待つてゐる蚤が居るでナ」

そう重さんは云つたが幸にそれらしいものはシュラーフザツクの中へは入つて來ない。

白　峯　へ

七月十九日、晴。今日もすばらしい天氣だ。朝の冷さが快く身にしみる。五時半、きせるをくわへて動きそうもない重さん等をあとに、露にぬれた雜草の繁る小徑へと小舍を出る。しばらく大樺澤に沿つて行く。流れの奏でるリズムに氣も輕くなる。尾根を登るにつれて樹間をもれる日光がはげしくなる。こんな時聞えて來る小鳥の二聲三聲はどんなにか疲れを癒して呉れる事であらう。木の根、木の根と辿つて行く、かなりの登りだけれども朝の元氣で頑張つた。大樺澤の一支流に着いた。友の作つて呉れたレモンティーのうまさ。三十分程も休んだ頃下の方に人夫の帽子が見え出した。大樺池は間も無く見えた。雪融けのたまり水は薄黑くにごつて、好い感じはし

間の岳　　辻辰雄

ない。その傍に小舍がある。まだ新しいので廣河原のより好い。やつと追ひ付いた人夫等、三米突程の釣竿と三十糎以上もある鮠を一尾、之がゆつくり來た原因らしい。

北岳から東に延びた尾根が眞正面に展がつてゐる。一寸興味深く感じる尾根である。

愈例の急峻な傾斜、綠の草の中に一條の細徑の昇つてゐるのに從ふ。こゝの繁茂した草は身長程もあつて草いきれで息がつまりそうだ。ソウシカンバの木蔭をオアシスの様にして休んで、數多くの美しい花咲く中を北岳と小太郎山との間の尾根へ出る。

美しい大觀が目の前に展がつた。西に相對する大きな山塊が仙丈である。野呂川へ落ちる二つの流れが光つてゐる。甲斐駒が白くそびえてゐる。それから尾根續きに鳳凰が幾つもの嶺をならべてゐる。晝食を攝つて、北岳指して登る。今年は雪が少い。北岳の頂までは少しも殘雪を見る事がなかつた。午後一時北岳の頂きに立つた。京大の人が三人居た。彼等はやがて今私達の來た路を降りて行つた。人夫の來るのを待つて居る間に曇つて來て風も強くなり、信州側から雲を吹き上げ甲州側へ吹き降して行く。隨分待つた。待つて居る間に間ノ岳と農鳥の嶺をゆつくり眺めた。間ノ岳はまだ相當遠い。農鳥には峯が、それも同じ様な峯が幾つもある。一時間も待つたと思はれる頃、三米突の釣竿が岩の上に見え出した。再び歩き出す頃には風も餘程弱くなつた。間ノ岳まではかなり長いけれども散歩の様にのんびりした。北岳から三時間餘を費して間ノ岳頂上へ着いたのは五時二十五分。

頂上から眺めた暮れ行く南方の山々は美しかつた。西に沈む夕陽に映えてバラ色の美しい雲を背景にして、農鳥岳、鹽見岳、荒川岳、惡澤岳の山々峯々が近く遠く連る様は忘れる事が出來ない。

雪田の雪もかなり少い様であるが、傍には雪融けの清水がこんこんと湧き流れて、やがて岩間に吸ひ込まれて行く。日の暮れぬうちにと鞍部の小舍目掛けて降る。ともすれば西南の尾根へ誘はれる。霧に閉された時よく迷ふ事を聞いたが成程と思ふ。完全な小舍は先着の一隊が占めてゐたので屋根のやぶれて月ののぞき込む小舍に入る、小舍の近邊には全然殘雪はない。間ノ岳から水筒につめて來た僅かの水で作つた味噌汁を啜りながら、昨夕廣河原で重さんの作つたゴヘイ餅をかぢる。至つてつゝましやかな夕餐がすむと、一同元氣なさうに寢る支度を急ぐ。

寒月の様に凄く蒼白い月が冲天にかゝつてゐた。

大井川東俣へ

七月二十日、晴時々驟雨。目が覺めたのが五時過ぎ、もうすつかり明るくなつてゐる。隣の小舍はとつくに出掛けたらしくひつそりしてゐる。水は無し、朝飯の世話はいらない。人夫二人を先に東俣へ急がせて炊事をさせる事にして、カタパンをかぢりながら農鳥岳へ行く。昨夕下つた間ノ岳が黝く、おしかぶさる様である。まだ朝日を受けないのである、農鳥岳からは東俣が直下に瞰ろせる。蒼い影の底に沈む東俣の谷は左程奥深くも思はれないが、何かしら云ひ知れぬ靜けさがたゞよつてゐる。谷をへだてゝ鹽見岳から北に走る尾根の一面の蒼綠が、東俣へ落ち注ぐ流れに美しいひだをつくつてゐる。

重さんが獨りきせるをくわへて待つてゐる小舍へ歸つたのは八時近く。仕度をして石室の所から直ちに西側の

傾斜を下る。思つた程急ではないが、雪崩に曲つたソウシカンバや雑木に妨げられ、それに落石にも心を配るので緊張してゐる。三十分の後には下り切つてカラ澤をしばらく行くと白峰澤の流れに出る。此處は僅かではあるが柔かい草の生えた平地になつてゐる。小舍に殘雪がない時、翌日更に登る努力を惜しまないなら愉しい露營の一夜を送り得るであらう。

之から今日一日は澤歩きである。晴れてゐた空は澤を下り出す頃から大分怪しくなつて來た。西の方から流れて來る雲がいつのまにか空一面にひろがつてしまつた。兩岸は概ね灌木雑木の密生で歩き難い。で多くは岸と云ふより澤の中を歩くと云つた方が適當である。澤の岩から岩へ渡るのだが、かなり落差が大きいので飛ぶ樣にして行く。だから隨分忙がしい。そしてガツン〳〵と鋲が岩へぶつかるのが頭へひゞいて、あまりいゝ氣持ではない。だが草鞋のS氏は滑る〳〵と大こぼしである。怪しかつた空はとう〳〵雨になつた。三峰岳の下から來る澤に出合ふ頃には流れに無數の小さな水煙りが立つてゐたが、幸にも大した降りにもならず暫く後には止んで了つた。雲は依然として西から流れる。熊ノ平から阿部荒倉岳へかけての尾根が雲の間に隱見する。殆ど人間が入らないらしく、大きな倒木が數多くある。多くは行手を遮つて邪魔なものだが、時には絶好の橋となるのもある。小さな岩壁の所を過ぎると、流れは全く穩かになつて間もなく二五七五米突の鞍部から出る支流の出合である。この支流は廣いゴツの間を流れ下つてゐる。無數の枯れ切つた灰色の倒木流木が散亂堆積して無氣味な感じを抱かせる。

この支流を合せると、東俣は急に廣々と開けて、今までのせゝこましい樣子は跡方もなく消え失せて、岩を嚙

む奔流は小波を立てる靜かな碧い流れとなり、すべてが變つて新しい氣持になる。空模様はいつかまたすつかり晴れ渡つて來た。しばらく灌木の多い河原の砂利に快い足音をひびかせながらのんきに歩く。流れが波立つて勢づいて來た。大きな岩の間へ激して流れ込む。其處が瀧である。高さは十米突足らず、東俣唯一の瀧らしいものであらう。大きな倒木が瀧の眞中にひつかゝつてゐる。自然の仕業ではあらうが見事でもない瀧を一層面白くくしてゐる。此處から下には鮠が居ると云ふので重さんはるばる野呂川から持つて來た三米突餘の釣竿を一心に水に垂らし始めた。だが一向に獲物がかゝらないらしい。正規の朝飯に惠まれなかつたので腹の中は頗る閑散である。自然に一同の足が早くなるから不思議である。殆ど變化のないのどかな流れを一二度渉る。それも水が少かつたせいか少し心すれば足をぬらさずにすむ程度である。左岸から農鳥澤が勢よく落合つて來る、その落合の下手の茂みの蔭にすつかり調つた晝の支度が皆を待つてゐた。午後一時、滿腹と谷を渡り來るそよ風にすつかり元氣になつて出發した。釣のおやぢは獨り先に無我の境をさまよつてゐる。

農鳥澤を併せた流れは暫く下ると岩の磊々たる中を奔下する。靜かな流れよりも元氣があつていゝなと思ふのも束の間、またもとの様なゆるやかさに還る。太陽は北荒川の尾根に隱れて日がかげると、澤らしい影が多くなる。尾根の頭から續いた針葉樹が暗い。南の方に鹽見岳であらう雲の中から時々頭が覗く。新蛇拔澤の落合までは隨分長い様に思はれた。尾根の上の方から拔けた岩石の砂礫の堆積が東俣の谷を半ば埋めてゐる。その堆積の上を新蛇拔澤は東俣に注いでゐる。此のあたり河原はかなり廣くなつて、流れはその隅を通つてゐる。今夜の宿雪投澤はもう近い。三時二十分、その落合にルツクサツクを降ろした。東からは池ノ澤が廣河内の南から深く谷

になつて、暗い森林の間を東俣に流れ込み、西からは此の雪投澤が勢よく白波を立てゝ合流する。

雪投澤に臨んだ小高い平地にテントを張り、營火の煙が立ち昇る頃、激しい驟雨が襲つて來た。谷の驟雨は音がはげしい。流れ一面が騷ぎ立つてゐる。廣い河原の向ふ岸の森林がかすんでしまつた。いゝ加減あたりに潤ひを與へて晴れた。淸々しい氣がみなぎつてゐる。

鹽見岳へ

七月二十一日、晴　前の淸流で顏を洗ふと、ねむ氣が一度に何處かへ飛んで行く、明るくなり初めた澤は昨夕とはまるで異つた眺めである。谷の中では時間による變化がはげしいらしい。

のんびりした人夫のお蔭ですつかり遲くなつて、六時四十分東俣に別れを告げて雪投澤を遡る。初めのうちは澤に岩が多いので瀨の樣に瀧の樣になつて谷川らしい。幾度か岩を這ひ上ると、それから上はまるで他愛がない、實におとなしいものである。時々振り返へると農鳥岳から南への尾根が牛の背の樣に延びてゐる、左岸から注ぐ一の流れを過ぎる。雪投澤へ注ぐものゝうちで最も水量もあり大きい。八時四十分である。上流に向ふに從つて岸にザラバが多くなる。十時頃水源近くの氣持ちの好い處で晝食を攝る。西側のゆるやかな斜面は流れに近くなるに從ひ殆ど平である。ミヤマキンバイ咲き亂れる草地は好ましい露營地である。之から上は相當急でボカボカの土なので頗る能率が上らない。苦心してやつと登りつくと這松が控えてゐる。なるべく北荒川岳への尾根に出た方が好い。一時間の後にはどうやら北俣岳の下の尾根に出た。西側の凄いガレに氣を取られながら堅く踏ま

れたクリーム色の急な尾根を登ると間もなく北俣岳である。東南へ延びた蝙蝠岳の尾根が折柄の霧に美しい。

此處から鹽見岳までの間は非常に氣持がよい。それは灼熱の日光を遮る輕い霧のためにあたりが大變に落付いたせいもあらうが、それの外に多くのものがあるに違ひない。黑ずんだ綠の這松の展がつた岩陰へ廻ると、そこは北俣に向つてゆるやかに傾斜した草原で種々の色彩に飾られてゐる。その中を辿る細徑はやがて小さな這松の中へ續く。根を踏むのも氣遣ひな程やさしい這松。そこを出るとまた草原。黑百合の花の色あせたのが目につく。その妖艶なおもかげは何時の夢であらう。蝙蝠岳が薄霧の中に兩翼を美しく展げてゐる。かうした靜かな美しい天地に全く疲れを忘れた。時々足を止めるのもこの氣持の中に長く居たいからである。鹽見岳の頂上に着いたのが午後零時。

最高峯には多くの石が巧みに積み重ねられてゐて、之を白峯の方から望むと兜の樣に尖つて見えるのである。霧のため北も東も西も南もすべてが隱されてゐた。東南は急傾斜をなして中俣に落ち鹽見澤となつてゐる。今は下の方は見えない。時々霧の切れ目から薄陽がさして中俣の水がきらめく。それも僅かの間でまた元の通りあたりは冥々となつてしまふ。岩角に一羽の雷鳥がとまつてゐるのが深く印象に殘つてゐる。三伏までは樂だし、時間もまだ早いので十分にゆつくりと腰を落付ける。西に向つて尾根を下りだすと人夫はとても早い。岩のゴロ〳〵した急な所を下るのだから骨が折れる。人夫の姿はまた〻く間に霧の中へ隱れてしまふ。道はかなりよく踏んであるので墜石の心配はないが、岩にけつまづいたり這松に足を取られたりして、やつと鞍部まで下ると人夫は悠々とキセルをくわへてゐる。權右衞門岳を途中から卷いて行くと森林帶へ入る。今までの尾根から朽葉踏み

しめるジメ〳〵した森林の中は餘りにも陰氣である、殊に霧に閉ざされた今日はその感が深い。尾根の東側をナタメを見ながら進む。この森林の中は相當迷ひ易い。隨分時間が掛つた樣に思つたが三十分許りで鞍部へ出た。陰氣なのが氣になつたが夏向きで涼しい、尾根通しにピークを二つばかり越えて灌木まぢりの森林を登ると本谷山である。此處から下り一方である。暗い森に圍まれた草地が目に付く、その柔かなスロープには何となくひきつけられる。下りの途ははかどる。次第に中俣の澤音が強くなる。やがて對岸の綠が見え出すと間もなく古い小舍(?)の上に出る。新しい小舍は一町程上に見えてゐる。

赤石嶽、聖嶽

園山德三郎

昭和四年六月十一日

信州も伊那の地方は殊に養蠶で忙しいと見える。照會した人夫は得られないで、やつと見付け出したのは、田島の善さんと云ふ親父さんだつた。農繁期に來たのが、こつちの不運とあきらめる。豫定は赤石から鹽見だつたが天候の保證があるので聖行きと變更した。テントは無いが一枚のシートで我慢する事とする。キツカリした時間に出發と午前十時までお茶を飲む。往來の人影が判然と映る程、陽がさして來た。重い雲脚が漸くに動いたものと見える。

「善さん、出るとしやうか。」煙管をおさめて、茶椀の露を切つて立上つた。どうせ泊りは廣河原だとばかり、頗る調子を下げて、土地の自慢話や宿屋のお內儀の惡口やらを長々と聞かされて上藏に入る。緩い傾斜の道を小澁川に沿つて登つて行く。暑いから日向休みと云はれる處の日蔭に入つて一服やり、釜澤の上で晝食をとる。兩岸の新綠と眞白な河原と濁つた小澁川の水だ。眼を射るやうな岩石の間を、右へ左へと流れて行く。

小澁湯の爺さんは例の通りだ。何を言つたつて聞える事ぢやない。冷いお茶を振舞つてくれた。相變らずの小

澁湯に、たつた一つ變つた事がある。それは湯の直ぐ下に深い蒼い淵が出來た事である。去年の夏の大雨から出來たこの淵は、白く濁つた川の水と考へ合はされない程に蒼い。杉の樹が淵の中に立つてゐる。枯れたまゝに立ち盡してゐる。これから渡渉だ。情ないやうで樂しみな渡渉である。湯で草鞋とはき換へたので、趾の股に心もち痛い。水の響の中を、丹念に數へて十三回の渡渉が終る所、其處が今日の御殿である。澄んだ水の荒川澤と濁つた小澁本流との合流する處が廣河原である。水泳せずに濟んだ恙なさを笑祝し乍ら泊りの仕度にかゝる。午後の五時　驟雨で濡れた上衣を乾してゐると、夕闇が谷に襲つて來た。

六月十二日

いやな雲だ、この調子では危いぞと思ひ乍ら輕い食事を始めた。五時前なので、天候は定かには豫知出來ない。曇つた空から風の音がして來る。大聖寺平まで行けば判斷がつくだらうと、眼前の樹の根から第一歩の登りにかゝる。いくら登つても盡きそうも無い大聖寺ヅルネを、盡きる所まで登らなくてはならない。

舟窪からは一面の殘雪だ。スポリスポリと兩膝が仲よく埋まる。尾根を左にまいて惡場にかゝる。短いが急な雪溪を登り切るとザラ場になる。雨だ雨だ。矢張り雨になつてしまつた。三歩に一歩はズリ落ち乍らも、やつとの事で石楠と這松の中に入る。風が益ゝ強く砂が眼に痛い。眼を細くして一登りすれば大聖寺平だ。吹き飛ばされた帽子を未練がる善さんを後にして、石室まで驅け下りた。雪をかきのけて中に這込むと、二坪ばかり空いてゐる。午前十時。雪の無い所に腰を下して先づ一服やる。惜しい事をしたと呟き乍ら善さんが入つて來た。

雨もひどい、風もひどい。殘雪の表面を、むしり取るやうに風が狂奔する。時間から云へば惜しいけれど、赤石を雨で通るのは尙ほ惜しいと考へて、早泊りと極める。午後の三時頃、晝夜兼帶の食事をして不足を云ふ腹を慰めて、そのまゝ一番幸福な眠に落ちた。

六月十三日

午前四時。未だ暗い。風が吼えてゐる。が、外に出て見ると、惡澤嶽の頂上に雲が切れてゐる。西の方も稍ゝ明るい。占めた、天氣だとばかり景氣よく枯木をくべる。風穴から煙が流れ出る頃、雲を破つて太陽が出た。千枚岩の投影が荒川嶽の斜面に明瞭に寫つてゐる。雲が千切れて流されて行く。これでいゝ。

一面の殘雪を踏んで、直接に拜み所へ急な登りを始めた。悠然と雷鳥が鳴いて居る。惡澤から鹽見、それから頭の切れた北荒川と、視界が段々に廣がつて來る。富士の劍ケ峯が强い太陽の光線を反射して雪煙をあげてゐる。赤石澤の北澤、それは實に冬そのものだつだ。眩惑を感ずるまでの殘雪と、錯覺を起すまでの傾斜。

赤石嶽は直前に牛の如く眠つてゐる。春曉の光を浴びて假睡んでゐる。これも東側一面は完全に雪だ。やつと沈みかけた雲が再び浮び出して、遠く鹽見を犯す頃、午前七時十五分、赤石嶽の一等三角點に腰を下す事が出來た。

聖。聖。何は措いても第一の饗應は、眼前に蹲る白皙の聖嶽。眼で味ふだけでは足りない。耳も口も何でも使つて味ひたい。莫に火を付ける事すら忘れて、飽く事なく見入つてゐると、ガスの樣な雲が襲つて來る。梅雨期

に於ては、眞の意味での晴天は早朝だけしか望めないものと見える。だからこそ僕のやうな者でも、午前四時には食事にかゝらねばならないのである。

聖への食入るやうな熟視から漸く覺めて、後を顧みれば、鹽見、朧な白峰。西に遠く木曾駒の群嶺、近く大澤、兎の連峰、東に富士の孤嶽、何れも雲を纏ひ對峙してゐる。何とも云へない。

人夫の善さんは赤石にだけ詳しい。明治四十年の頃、一等三角點を建てた時、測量に從つたとか、話はその事ばかりで一向面白くない。いゝ加減に切上げて貰つて標石から腰を上げたのは八時だつた。ガスの來ない間に方角を見極めてをいたが、歩き出すとひどいガスに包まれて了つた。願望の成就した包み切れない歡びを懷き乍ら、よく緊つて居ない岩場を降りて行つた。鞍部まで四十分もかゝらないのに、この膝はガク〳〵になつて了つた。高低の無い尾根を僅に行けば殘雪と這松との交錯してゐる平地、これが百間平である。土地一體が濡れてゐて、彈力のあるクッションのやうだ。白湯と牛罐で簡單な午食が始る。米飯を投げてやると、雷鳥が近寄つて來る。一羽は不安氣に見守つてゐる。一羽は無遠慮に寄つて來たが、食べるでも無く鳴いてゐる。長閑な笑ひだ。

此處まで可也判然としてゐた踏跡が急に絶へて、我々は、ガスの中を百間洞へと、雪溪を幾度も渡り渡つて、赤石南澤の水源へと降りて行つた。絶嶺から絶嶺へ。崇高なワルファールト。大澤岳三角點には、古い名刺が幾枚か色も薄れて殘つてゐた。午後零時四十五分。影繪のやうな赤石が尨大な姿を、薄絹の膜に寫してゐる。風は依然として強い。が雨の氣配は全然無い。

今宵の宿は、頂上から約十分の鞍部にとる事ときめた。其處は凹地になつてゐて、雪と水と這松との相等の條

件を具へた露營地だつた。地を均し石を集めて火を焚けば、テントの無い我々には、これで準備完了だ。天候は善さんの保證がある。シートを頭から冠つて無理に眠る。夜の十時近く目を覺すと、星で一杯だ。首を出す必要も無い。眼を開けさへすれば空が見える、星が見える。焚火に照らされて、赤々とほてり乍ら善さんが眠つてゐる。平和な夜だ。自然と自然との闘争も今は全くおさまつて、靜寂な夜だ。十日の月が十方世界を隈なく照らしてゐる。鳴く蟲も居ない。動く梢も無い。眠るんだ眠るんだ。

六月十四日

何と云つても可也寒かつた。シュラフザツクから頭を出すと朝冷の風が、眼に強い感覺を與へる。曇つた時計の硝子を拭つて見ると午前四時だ。炊事萬端を任せて、ひとり岩頭に立つ。日本中が見える。名を知らない白い花が、吻から漏れる白齒のやうに岩蔭に微笑んでゐる。聖と赤石の間を、赤石澤の水が白い泡を見せて、朝の粧を凝らしてゐる。鹽見の右の肩に間ノ嶽が、本谷山の左の頸に仙丈が、聖の右に上河内が、覺めやらぬ眠を惜しげに霞んでゐる。西に緩、東に急な兎岳は屹立した斷崖を抱いて特異な相恰で構えてゐる。

午前六時には、輕くかいた一汗を丸山(二八〇六米突)の頂で拭つて居た。小山のやうな突起が二ツ兎岳に續いて居る。山の唄を唱ひながら丸山を降り切ると大きな雪田がある。これを目印にルツクサツクを置いて、身輕く聖へ往復ときめる。

これからの踏跡は大體東側を通つてゐる。急な雪溪を幾度もトラバースして廣濶な兎への登りとなる。右手の

山波は、明日越すべき奥茶臼から尾高に續いてゐて、對岸の立俣山との間に深い大澤の本流を含んで居る。左の赤石澤水源の美觀にも眼を奪はれる。東西斜面を異にして、其の印象の斯くまでも異る大澤と赤石澤とは、尾根を辿る者の、突き詰めた運命觀に強い何物かを與へずにはをかない。

兎と聖の間からは、南アルプス最南部の易老、光の尾根筋が扇の繪のやうに描かれてゐる。

兎岳は幅廣の山だ。此處の頂上から聖は實に近い。光岳は遠い。聖の凄慘な懸崖が、視覺を射通す殘雪の反射と相俟つて、休む者の息を彈ませる。例に依つて雲が何處からともなしに浮び出して來る。今の内にと聖へ急ぐ。雪が多くて時間がかゝる。登つたり下つたり忙しい。右側は西澤の物凄い谷だ。自然、左に卷く氣味になる。

聖の最高點は、期待に外れた平凡さだ。素通りしさうな惧もある。その上に、ひどいガスだ。何にも見へない。飯も不味い。

散々な不首尾で早々に兎へ戻る。二時間足らずで兎の最高點に着く。それから、あの廣漠たる尾根を、善さんは確信を以つて北へと走つて降りる。二米突四方の世界が開拓される。ガスが冷い。前にルツクサツクを置いた地點を發見するのでも充分の注意を要した。その雪田で湯を沸して、熱いやつを飲んだ。此處は兎と丸山との最低鞍部になつてゐる。大澤に降りるには格別の踏跡も無いが、兎、丸山間の何處からでも、大した困難無しに可能だと思はれる。暫くして、澤の水が出て來る。左右から小さい澤が集つて來る。岩崩れの跡も幾つか越えた。午後の六時四十分になると、四邊も暮れて來たのに大澤渡は未だ遠い。丁度地圖で大澤の澤の字附近に露營

ときめた。四時頃、古い鮨小屋の跡を見たが、使用には堪えない。此處までの下江は、渡渉も樂だし、岩を卷くにしても、大した事は無かつたが、これからは相當骨が折れるらしいので、頑張らずに泊ることにした。巨巖の蔭にシートを敷いて長々と横はる。水も薪も食料も豐富で、王子様のお泊りのやうだ。依然として、夜は名月だ。

六月十五日

大澤渡までは早く行きたいので、四時前に起きた。最後の朝の食事だ。豪遊をする。仕度に手間どつて、出發は五時半になつて了つた。案の定、渡渉は可也煩はしいものとなつた。瀧のあるあたりは左に卷いた。瀧らしい瀧でもない。七時半には大澤渡に着く。深ケ澤の水が加つて水量は俄然多くなる。地圖にある道の跡でもと、隨分探したが、見當らないのでい〻加減の見當で登り出す。尾高山(二一、二一二・四)の東の峯を越えて、地獄谷に下る豫定なのである。曇つてゐた空から、とう〳〵雨が降つて來た。シト〳〵と椹の樹に降つて居る。十一時に輕い晝食をとつた。水を持つてくる事を忘れたので、隨分苦しい。全然水は無いのだ。霧雨では集める事も出來ない。其處から五分も登ると、まだ新しい鉈目を一つ發見した。氣を好くして附近を探したら、朗々な踏跡がついてゐる。恐らくこれは深ケ澤へ鮨を釣りに行く人ので、大澤渡より幾分上から付いてゐるのであらう。人の道は矢張り歩きい〻ものだ。一時には二、二六〇米突の無名峯に達した。三角點の爲の切拓きが劃然としてゐる。道は尾高山から地藏峠への尾根の右隣りの尾根に付いてゐる。グン〳〵降りると、倒木でひどひ個所が幾つか有つ

たが、二時半には地獄谷へ着いた。ザラ場を降り切つて小流を對岸に渡ると、久原鑛山の舊飯場がある。人は誰も居ないので無氣味だ。素晴らしく良い道を青木川の本流について行くと、地圖の地獄谷の谷の字附近に立派な小舍がある。これは鑛山のトロ終點で、事務所になつてゐる。夫婦が二人、見慣れない姿の我々を見守つて居た。足の痛くなるトロ道を忠實に辿ると、急傾斜をケーブルで昇降させる所がある。此處だけはジグザグな道を探して下る。凄い地獄谷を、縱に二町餘りもトロ軌道橋が架つて居る所が有る。不完全な枕木の上を小股に歩くのは、餘程の大膽さを要する。三時半だ。青木川と地藏峠からの道との交點にある部落をアンコと云ふ。アンコから大河原まではトロ道を通つた。深ケ澤の部落あたりからは、地圖通りの道があるのだらうが、有るなら其の方が良ささうだ。ウネ〳〵としたトロ道は興味が無い。危い大鹿橋をヨタヨタと渡つて、大河原市場に入ると、流石に身も心も疲を感ずる。濡れた體で丸川旅館の前にペチヤ〳〵と坐り込んだのは午後六時十五分だつた。例の主婦が例の如く迎へてくれた。

東北朝日連峰雜記

小川竹夫

東北朝日は何と云つても東北の山である、素朴な山である。然し素朴だからと云つて、決して吸引力に乏しいとは云へない。彼の美しき花崗岩の白き膚、頑强にへばり着いた苔の如き草木帶の連續、アルパインタイプの山々によく見る石のごろ〳〵した崩壞地、落石の類全然なく、如何にも豐潤な處女の如き山である。然かも之に配するに豐富なる雪溪の美を以てするが故に愈々以て人好きのする山と云へる。朝日の生命は山の清廉なる若さと云つても決して過言ではない。但し若さと云つても地質構成上の科學的若さでは勿論なく、文學的藝術的な若さである。殊に此處は七月一杯と八月上旬に亘つては、晴天の日多く、快濶なる尾根の縱走を充分に味ひ得る。兎に角標高僅かに千八百内外の山にしては、出來過ぎた山である。南北アルプスのみが山ではない、此の邊の山にもどし〳〵行つても決して損はないと思ふ。先輩吉澤氏一行は相當に苦しかつた印象を受けられた樣だが夫れは野川を登つたからである。東北の山に特有な、殊に朝日の尾根筋の東側に發達せる無類の籔にアルバイトし過ぎたからである。アルバイトが面白いと云ふ人達は別だが、あのうんざりする籔くゞりは我々の大なる禁物である。而して朝日の尾根の東側或は南側から大尾根に達するには何時も此の猛烈な籔が問題になるのだ。

朝日を語るに當つて、先づ注目しなければならないのは、連山悉くが比較的均等な花崗岩で出來てゐる事だ。勿論局部的には種々の變質作用を受けて片麻岩狀を呈するが、全般的には等質な花崗岩と云へる。吾國に於て六千尺を越ゆる花崗岩峰の稀なるに、朝日連峰の聳立するは南の飯豐山塊と共に花崗岩峰の横綱とも云へる。朝日の花崗岩に就いては色々説明もあらうが左の安齋徹氏の言を拜用すれば充分であらう。

「花崗岩の特色は堅硬純潔にして色澤爽然たる所にあり」「花崗岩は堅硬である爲に、容易に侵蝕されるものではない。往々絶ゆる期なき流水に對して、徒らに其の勢威を屈せざる所に本岩石の特色がある。若し屈せざるべからざるに到れば、其の節理裂條により、大塊に摧け、以て堂々たる大絶壁を形成し、地形は益々豪壯となる……小朝日岳の西南、熊越の斷崖は實に之であつて、其の險たるや花崗岩に非んば能はざる景象である」。

朝日の大尾根は鳥原山より大朝日迄は東西に走つてゐるが、大朝日より以東岳、大鳥池迄は大體に於て南北に走つてゐる。此の地形的特性が東側面に積雪量の豐富な事及び、西側面に灌木の密生を生じ、所謂藪の猛烈さを形成する事を、原因付け理由付けるのである。二十萬地圖村上を見れば分る通り、連峯の西側は日本海に面し、東側は中央地帶なる村山盆地に面するので、常に、殊に秋から春にかけて日本海より襲來する定向性西風は勢ひ連峯の西側面を打つ事となる。且此地は最大雨量地なるが故に風雨、流水の機械的破壞力も大となるわけである。從つて大尾根筋の近くには抵抗力の大なる灌木類が次第に密生し、此の連峯を保護するに至つた。かるが故に西側に發する傾斜は比較的緩であるが灌木の跋扈は夥しきものありて、人間の踏破不可能な迄に發達し、所謂東北

大朝日の大藪を作る。朝日登高に際して少し特異なルートを求めれば先づ問題になるのは常に此の藪である。安齋氏は此の例として、三面の秘境から連峯に達する事の難澁を擧げて居られる。只此の藪の問題を解決するのは雪に依る登高である、冬季登山である。殘念な事には此の地方は冬季の天候はなか〳〵芳しくない。人間萬事思ふ樣にならないものだ。

東側面に積雪量多きは如何に說明せられるかと云ふと、西側日本海方面が激烈なる風雨の威力を受けるに反し、東側村山盆地方面は常に平靜なる大氣である。全國最大雨量の此の山地に於て、冬季の大雪は日本海よりの西風に運ばれて大尾根を越え、平穩なる東側面の大氣中に沈下して東側に異常の積雪を見るのだそうだ。從て雪溪も東側に發達するは勿論である。一方東側は比較的急斜面なると、積雪及び雪溪の、極めて小規模ながら、一種の氷河的作用を營むにより灌木の矮生は西側に比して少く、却て高山植物などの植物帶が連續する。

以上で大體ではあるが連峰の概略的特性と云つた樣な事柄を記したから、此れからは斷片的な事實を意の儘に書いて見る。

朝日と緣の深い地で、日影大平附近が頗る好適なスキー練習場たり得る事である。日影大平附近とは鮎貝驛より約二里半、地圖荒砥中の尖山、暖日(スクヒ)山を連ねて南東に下る氣持の良い斜面のことなのである。此の事は沼井鐵太郎氏の推賞する所だし、私も中平の山通、原田富助に直接に聞いた話だ、又實際行つて見て斯く感ぜざるを得ない。大體日影と云ふ部落は尖山から南東に下る尾根の東微北の如何にも日當りの良くない日蔭の土地である。從て積雪量がとても凄いと云ふ事も想像し得られるし、又雪質もスキーに好適だ相だ。富助の話だと日影或は大

平には往時領主が居を構へ、自然の城壁に據りながら、秘かに悦に入つて居た土地だとは大正の初頃此の邊の山々の三角點測量に從事した極めて純朴な年配の山通である。

朝日鑛泉に至る夏道(地圖の點線の道)は頭殿山の北を殆ど高低なく山腹を縫ふて居るが、冬道は尖山の左の鞍部から約六七百米夏道を進み、左に岐れて郡境に出て、此の境界線を頭殿山嶺を越えて、ワラビ野に於て夏道に合するのである。ワラビ野とは地圖の左端より約一寸ばかり點線の道を右に來た草地の記號のある處だ。此處は鳥原山、小朝日、大朝日、平岩、御影森等を一望に收め得る頗る愉快な場所である。よく注意すると鑛泉のある地點をも指示する事が出來る。ワラビ野の手前數丁の所にはブナの巨木が多くてさながら原始林を觀る樣だ。朝日のブナは實に美しい、早春の頃殊に其の膚が綺麗だとの事である。

鑛泉から大朝日に直接に登る事を中ツルを登ると云ふ。中ツルとは地圖に一七〇〇m以下標高數字の入れてある眞ん中の尾根の俗稱なのだ。中ツルを登るには鑛泉より川に添ふて溯行し黑俣澤と朝日俣澤の合流點にあるシ小舍に至る。此の小舍は先年迄は廢屋同然だつたが近年良くなつたのだ。此の小舍は冬期スキー登山にとつては重要な據點となる。小舍からあとは黑俣澤を一寸渡り、數字のある中ツルの尾根を大朝日目掛けて直接に登るのである。鑛泉から鳥原、小朝日を經て大朝日に至るには少くとも七時間を要するが、此の中ツルを登ると僅か五時間、ゆつくり歩いても六時間なら大丈夫大朝日迄行ける。もつとも此の兩者のルートに於て其の趣の異るは勿論であり、中ツル登路は小朝日經由の登路に比して却て面白味が少いのだが、冬季登山としては中ツルの方が遙かに有用である。

大朝日の頂上に極めて近く小舍が出來た事は、何と云つても山男を喜ばす。小舍と云つても社殿なので二間に三間半の堂々たるコンクリートのヒュッテである。これなら我々が寫眞で見る本場の歐洲アルプスの夫れに比しても大した見劣りはしないと思ふ。食器や雜品を洗ふ水溜も石で出來てゐるし、別に飯盒炊事の焚火をやる小さな小舍までである。薪も相當にある。只飲料水を得るに北方約三十分(往復)を要するは殘念な事である。此の小舍は安齋徹氏等の盡力で山形電氣會社で新造したのだ。兎に角此の小舍が登山者、殊に冬の山男を益する所甚だ大なるものがあると信ずる。然し此の小舍を目して自然の風景を害ふものだ、コンクリートのヒュッテはどうも不愉快だ、折角の美しい山を臺なしにすると排擊するものがある。此の論は一應は受取れるが、贊成し兼ねる所である。コンクリートの醜さ以上に、より直接的な利益を登山者に持ち來すからである。

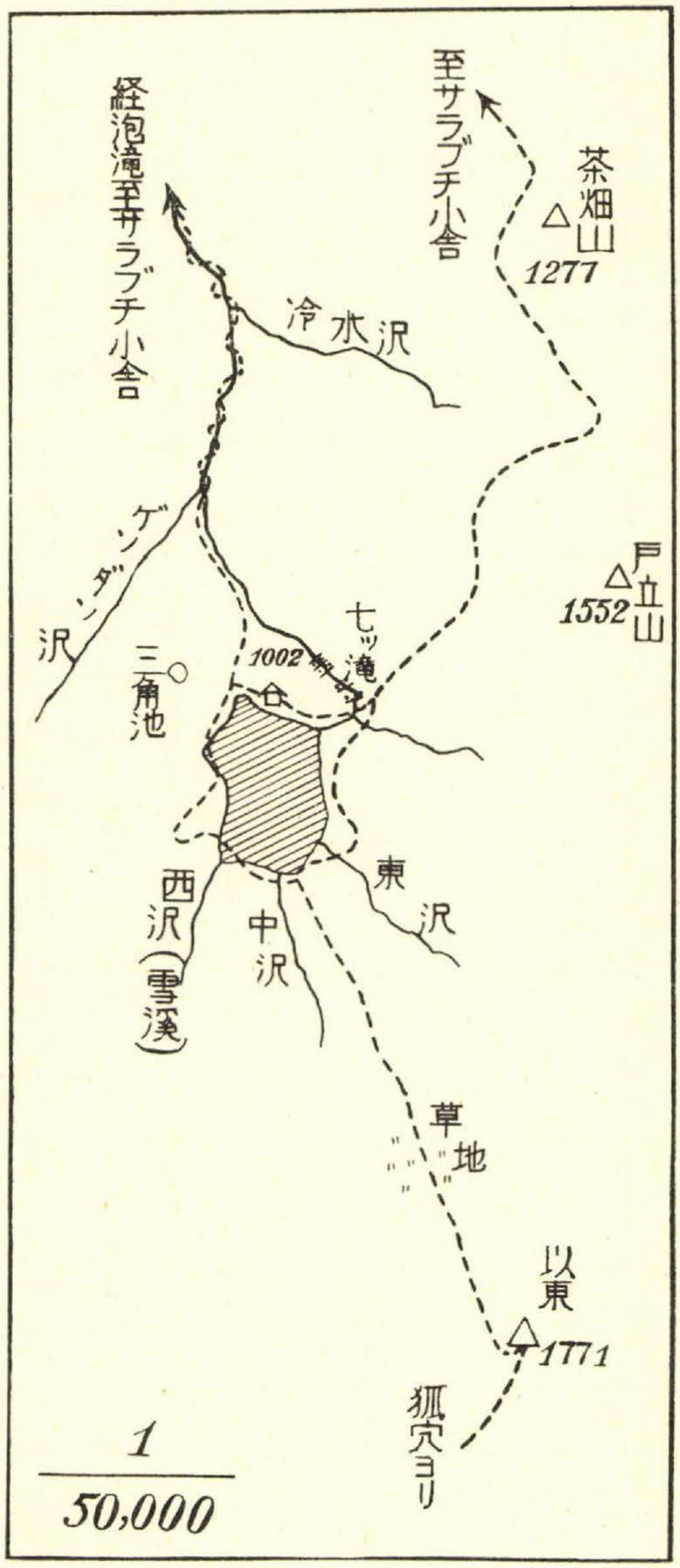
も一つ山男に耳よりな話がある。其れは狐穴キヤムプ地に新しく小舍が建てられる事だ。まだ出來ないがやがて立派な小舍が出來て朝日縱走の安全さを裏書きする事になるかも知れない。これに就ては私が狐穴と以東の中間にて、營林署の役人に出遭ひ、夫れらしい事を察したし、又後に大鳥川を渡渉して下り、サラブチの小舍に泊つた時、狐穴に建てる小舍の材料を運ぶ人夫連に會つて直接に聞いたのだから確實である。而も其の材料から察して之も矢張り素敵なコンクリート建らしく感じられた。元來從來の如く大朝日から大鳥池畔の小舍迄一日で歩まねばならぬのは聊か遠い憾がある。それが若し此處に小舍が出來ると、此の缺陷が除かれてテント無しの縱走が全く樂になる。また此處に本據を置けば、相模山方面より三面に至る部分、及び障子ケ岳に至る尾根等の踏破も可能になつて來て登山者をどの位益するか知れない。私の經驗に依れば大朝日から三方境迄は、道はよく伐つ

てあり頗る明瞭だが、三方境から以北は尾根が廣くなつて少しく不明瞭になつて來る。然し此の道もやがて修理されて良くなる相だから縱走は益々樂になるばかりだ。此の縱走に於て、地圖上では寒江山と云ふ山に遭ふが之は誤稱であつて正しくは寒河江（サガエ）山と呼ぶのだ相である。而して、一六九五mが南寒河江で一六五〇mが北寒河江と區別される。一四七〇mは所謂三方境である。

以東岳から大鳥池に下るには溪流に沿ふては絶對に行けない、瀧の遮る所となり、遂に動けなくなる事がある。必ず峯傳ひに下山するのが此處の藪を通過する必要條件であるのだ。今迄は以東から大鳥池迄は餘程時間を費消したらしいが今では約二時間で下れる。先づ地圖大鳥池中の以東岳より長さにして六七分位北西の一五五〇mの記號のある草地に降り、其處から新道をどん〳〵下ると數字の入つてゐる尾根を下る事になつて東澤と中澤との間に出る。大鳥池の岩小舍は池の北岸、一〇〇二の數字の直下の池畔にあり古い小舍跡からは約一丁半ばかり東寄にある。此の小舍も新しい頗るいゝ小舍だ。屋根が大きな一枚岩で、周りが處々コンクリートを使つてゐる。如何なる山荒れに對しても安全であらう。廣さは約六疊敷位かと思はれた。只此の小舍の內部が少しく濕氣が多過ぎる樣な氣がした。然し何處の岩小舍でも餘り乾燥したのはないらしいから止むを得まい。

以東から池畔に下り、更に小舍に至るには、從來は西側の岸を廻つて行つたが之は損である。私も西廻りをやつて實際癪に障つてしまつた。途中で絶壁となり、どうしても行けなくなり、約五十米も登つて又池畔に出るのがほんとに嫌な事だ。あとで聞いた事だが東岸を廻つた方が遙かに樂だとの事である。

茶畑山を廻る新道は安全だ相だ。此の山道を通れば一日で田澤迄はのす事が不可能ではないとの事だ。一方池



畔より泡瀧迄の渡渉は依然として凄い。此處は踏跡すら殆どないから成可く河原を行つた方がよい。殊に茶畑の新道が出來てからは殆ど人が通らなくなつた、だから此處を稱して道と云ふのは少々おかしい位である。天氣が良い時なら大した心配はないが、少し天候が怪しいと思つたら斷然茶畑の新道を通らなければならない。勿論渡渉を決行するなら、少くとも細引位は用意しなければならない。日程としては、池から一日で繁岡に達する者も居るが、普通サラブチ小舎迄が適當ではないかと思はれる。兎に角此處の一日掛りの渡渉はとてもえらい。右岸

から左岸、左岸から右岸、幾回となくふらり〳〵と渡渉を續けなければならない。或時は爽快に、或時は命掛けで渉り、ヒヤ〳〵する事が數回もある。

此處を渡渉して下つた後四五日は大鳥川の急湍の音が耳に着いてなか〳〵離れなかつた。

猶、最近朝日連峯の高山植物に關し山形師範教諭橋本賢助氏より貴重なるお報せを受けたから氏の了解を經て此處に記す。此地方の高山植物に關し調査必ずしも完全ならざる折柄、當地方の隱れたる斯道の權威橋本氏の發表を得た事は大なる收獲の一つであると云ふも過言ではないと思ふ。

朝日連峯に於ける高山植物

一、きく科　たかねよもぎ、いはよもぎ、ひとつばよもぎ、みやまうすゆきさう、みやまかうぞりな、やまははこ。

二、ききやう科　ちしまきやう。

三、まつむしさう科　まつむしさう。

四、をみなへし科

はくさんをみなへし。

五、すひかづら科

りんねさう。（西朝日岳北面）

六、おほばこ科

はくさんおほばこ。（清太岩方面）

七、たぬきも科

むしとりすみれ。

八、ごまのはぐさ科

×おほばみぞほほづき、　みやままこな、　みやまこごめぐさ、　えぞしほがま、

九、しんけい科

いぶきじやかうさう、　みやまくるまばな、　たてやまうつぼぐさ。

十、りんだう科

いはいてふ、　おやまりんだう、　×つるりんだう、　みやまりんだう。

十一、さくらさう科

つまとりさう、　ひなざくら。

十二、いはうめ科

×いはうちは、　いはうめ、　いはかがみ。

十三、つつじ科

あかもの、　あをのつがざくら、　×いはなし、

くろまめのき、　こけもも、　こめばつがざくら、

みねずわう、　みやまほつつじ。

十四、みづき科

ごぜんたちばな。

十五、さんけい科

しらねにんじん、　はくさんんうふう、　みやませんきう。

十六、うこぎ科

はりぶき。

十七、あかばな科

こあかばな。

十八、ずみれ科

おほばきすみれ、　きばなのこまのつめ。

十九、おとぎりさう科

×しろばなしやくなげ、　×しろばなのこめつつじ、

しなのおとぎりの。

二十、かへで科

みねかへで。

二十一、そよご科

つるつげ。

二十二、がんからん科

がんからん。

二十三、かたばみ科

×みやまかたばみ。

二十四、ふうろさう科

はくさんふうろ。

二十五、まめ科

いはわうぎ。

二十六、いばら科

うらじろなまど、 ×おにしもつけ、 ごえふいちご、 しろばなとうちさう、 のうごいちご、 ちんぐるま、 まるばしもつけ、 みねざくら、 みやまきんばい、 みやまだいこんさう、 こがねいちご。

二十七、ゆきのした科
あらしぐさ、　うめばちさう、　くろくもさう、
二十八、べんけいさう科
ほそばのいはべんけい。
二十九、いしもちさう科
まうせんごけ。
三十、じふじくわ科
みやまたねつけばな。
三十一、めぎ科
さんかえふ。
三十二、うまのあしがた科
しなのきんばい（えぞきんばい）、　しらねあふひ、　みやまとりかぶと、　はくさんいちげさう、　みつば
わうれん、　みやまからまつ、　みやまきんぱうげ、　もみぢからまつ。
三十三、なでしこ科
えぞふすま。
三十四、たで科
×ふきゆきのした。
づたやくしゆ、

いぶきとらのを（龍門山寒河江山間）、　むかごとらのを。

三十五、かばのき科

だけかんば、　みやまはんのき。

三十六、らん　科

きそちどり、　×こいちえふらん、　たかねさぎさう、　たかねとんぼ、　×のびねちどり、　はくさんちどり、　×やまときさう。

三十七、ゆり　科

いはしやうぶ、　きんかうくわ、　くるまゆり、　こばいけいさう、　たけしまらん、　×おほばたけしまらん、　×ちごゆり、　ちしまぜきしやう、　つばめおもと、　につかうきすげ、　ねばりのぎらん、　ひめいはしやうぶ、　まひづるさう、　おほばゆきざさ。

三十八、ね　科

みやますずめのひえ。

三十九、かやつりぐさ科

みねはりゐ、　みやまくろすげ、　いはがりやす、　うしのけぐさ、　ひげがりやす。

四十、ま　つ　科

はひまつ、　みやまねず、　みやまびやくしん。（以東岳）

四十一、ひかげのかづら科

たかねひかげのかづら、　×ひめすぎらん。

四十二、うらぼし科

×やまそてつ　　以上

◇山形縣西五百川（イモカハ）村朝日鑛泉より小朝日、大朝日を經て連峰を縱走する途中に於て採集せし高山植物の目錄である。

◇西朝日岳北面に於ける「りんねさう」は昨夏、予の發見せるものである。

◇和名の上に×印のあるのは、學者に依つては高山植物としない向もあるが、兎に角本縣の高山では相當高所まで分布して居るから特に記載する事にした。（橋本氏記）

武尊山と其附近

吹原不二雄

一、前置き

上越南線が前橋を過ぎると山旅人は赤城山の左手に遠く武尊山の蹲つてゐるのに氣が付くに相違ない。沼田に近づくに從ひ、次第に其山容は擴大され益々壯大となり、沼田街道を尾瀬方面に出掛ける時には、右手に平べつたく開折された赤城山とは比べものにならぬ程堂々たる武尊山の豪容が、北方の空に浮んでゐるのを見るであらう。又彼が鳩待峠の上に辿りついて、ほつと息をついて南方今來し方を振返つた時にも、女性的曲線をもつた尾瀬の山々とは異つた、鋸齒の如き峯々をもつ峻嚴な武尊山がすぐ眼の前に聳えてゐるのに魅せられるに違ひない。奥上州の國境をめぐつて立ち並んでゐるどの山頂に立つて見ても、武尊山程其の雄大さが人に印象付けられるものはあるまい。近くは赤城の山々から北望して見ても、間近くそゝり立つ武尊山が、懷ろに川場谷を抱いて翼を大きく左右に張つた均齊のとれた姿を見せてゐるのに視線が會へば、誰しも感歎の聲を擧げるに相違ない。

斯くも多くの山旅人に眺められ、感歎せられてゐる山にも拘らず、餘り登られては居ないらしい、喧傳されては居ない。故にこゝには唯紹介までに四月及び五月に武尊山に登つた貧しい經驗を述べて見る。

武尊山には藤原道及び川場道があるが、其の東南麓花咲から登るのが最も容易であり、昔からの本道でもある。花咲では山崎の星野義情氏宅に宿を請ふのが最も好都合である。氏は法稱寺の別當をして居られる關係上、武尊山の開發には大いに努力し、現在は上毛開發會の顏役である。此の法稱寺は明治以前神佛混淆の頃は武尊神社と一緒で相當盛んなものであつたらしい、今は星野氏宅が法稱寺、神社は更に五町程西に行つた處に鎭座してゐる。

二、花咲まで

沼田から乘合で來れば平川の部落で下車する、(追貝からでも雜作ないが)路傍に武尊登山口との標柱があり、武尊山登山の看板も掲げられてある。こゝで街道と分岐して左に入り、間もなく片品川を渡つて幡谷を拔け、上幡谷を過ぎると前面に前武尊が見える。塗川を渡つて小坂を上れば山崎の部落、眞中邊りコンクリートの小橋の架つた右手の大きな家が星野氏宅である。

或は尾瀨方面から、又は奥日光からならば鎌田或は須賀川から宇重田峠を越して花咲入りをするがいゝ。堀割り見たいな小暗い間を拔けた小徑は山の側面を上つて峠に達する。前面に前武尊、イヘノグシ峯がそゝり立つて見え、振返へれば白根山に似てお供餅を重ねたやうな皇海山が山波から盛上つて見え、氣分が爽快になる。こゝから鍛冶屋を通つて花咲まで三十町程。

三、四月上旬の武尊山　（昭和四年）

星野氏宅から二町も行つた處の寺の傍を右の作場道に入り、道は小坂を越えて登戸の部落に入る、こゝに觀音堂あり、その傍に花咲石といふのが安置されてある、登山路はこゝから始まり、而して武尊山に關聯した一つの傳說的因緣がある。

武尊山は彼の穗高岳と同樣に太古穗高見命が建御名方命と共に登山された爲に「ほたか」と名付けられたのであるが、又武尊山と書くのは後述する日本武尊に深い關聯がある爲である。景行天皇の御宇三十年、日本武尊が東夷征討に御巡幸せられた時、奥勢（尾瀨か？）に賊が屯して此地方一帶を荒し良民を苦しめてゐた。そこで尊は此の武尊山に陣を構へられ、賊を攻めんとすると、賊もさる者、通力で大雪を降らせて官軍を惱ましたが、尊は例の燧袋より神火を揚げ給ふた。すると不思議や高山ケ原（高山平か？高山平は武尊山二一二〇米圈より東微北に派出する尾根の一七六〇米邊一帶なり）に神風起り、これが爲め炎々たる猛火は奥勢の方に燃えさかり、斯くして賊は通力を失ひ、其の城郭燒失したゝめ賊は四散し各處にて死滅してしまつたが、彼等の靈魂は宙に飛び石に華（ハナサ）いた、花咲の名これに起因すると。此の賊の惡靈殘れるか爾來疫病絶えない爲め、其の大石に穗丹花石明神を祀つた處、病魔は忽ち退散してしまつた、それが此の花咲石であるといふのである。

こゝから左手が杉の森、右手は麥畑の間を稍上れば大品原の雪原、原の中に「武尊神祠」といふ額の上つた鳥居がある。前方には前武尊・イヘノグシ峰が嚴そかに聳てゐる。廣い雪原からは桑の枝先のみ突き出てゐる荒涼な風景、雪量は一尺位なものだらうが靴は大抵もぐらなかつた。原の中を奥まで行つてもいゝが右手の川向ふの

松林の中を歩いても行ける。後者をとつて行くと、登戸から約一時間半にして松林は盡きて水楢？林に入る、右手の尾根を見ると露岩が多數あり、その右手が地圖の不動坂(電光形點線)らしい、此の左方の支尾根は上るに容易である、主尾根に上りつくまで少しブッシュがあつたが大したことなく、尾根の上はかなり幅廣で、雪の緩傾斜が長々とうねつて前面に聳ゆる圓頂峯の前武尊の胸元まで伸びてゐる、處々に雪庇もかゝつて見られる。四顧すれば尾瀬の山々も日光群山も手に取るやうに近く見えるといふ素晴しい眺望であつた。三十分も緩やかに上ると林の中に入る、駒鳥だらうか朗らかな春の歌を囀つてゐるのも聞かれた。尾根は御澤(一五八〇米邊の尾根の北に當る小澤か？)を右手に見て少し下るが又ぐつと上り續ける、暫く行つて小高い處に武尊中興開山行者普寛法印の石像を見出す。そこから頂上までは針葉樹林を縫つて約卅分の上り、段々前方が開けて來ると圓つこい雪丘上に堂宇が見える、前武尊の頂上である。堂の中に安置せる日本武尊の銅像は吹き込んだ雪に埋れて全く見られない(花咲より四時間)。

こゝから眼を右方に轉ずると、先づ目に入るのは間近にぐつと押し立てた様な岩峰劍ケ峰(二〇八〇米)である、川場谷側は全く雪を止めない切立つた岩壁、前武尊側は刷毛で撫で廻した様な雪の斜面、東側は疎らな木立が雪面に面白い影を投げてゐる。劍ケ峰の右方にイヘノグシ峯(二一一〇五米)が鷹揚に構へ、兩者の間から中ノ岳(二一二一〇米)が頭を擡げてゐる。……暫くしてから雪白に輝く武尊連峯から眼を右に移す、イヘノグシ峰の大きな眞白い尾根が低下すると其の上に笠ケ岳續いて至佛山が端麗な山容を擡げ、至佛山の裾は長く引いて尾瀬ケ原邊りの凹地を作り、又燧岳と崛起してゐる。續いて聳ゆる黑岩山・鬼怒沼山等の連山・奥日光の連嶺は森林が

頂まである故か蒼黑いので見ばえがしない。

劍ケ蜂は殘雪が登路の急斜面を殆ど蔽つてゐるので東側斜面を捲くより外はなかつたが、相當急傾斜であつたから緊張させられた。約三十分の後、鞍部に辿りつけば前面に現はれたイヘノグシ峰の尾根には雪庇が厚くかゝり、その下は搔き取つたやうに凹狀を呈してゐる。西側は樹林が茂つてゐるので尾根の樹林に境した處を上る。上りついてから中ノ岳への尾根は馬の背のやうに瘦せた箇所もある、偃松の上を薄く蔽つた殘雪を涉つて進むと中ノ岳の「武尊宮」と記した石祠を過ぎる。中ノ岳と奥武尊の間の一小峰の蔭に日本武尊の銅像と行者の小銅像を見て尙も上ればやがて頂上につく。雪は消えて小廣い、一等三角點が眞中に据えられ、邊りに三角櫓の破片らしきものが平べつたい岩片と共に散亂してゐる。眞白い上越國境の山々・奥日光・尾瀨の連嶺はぐるりを取卷いて頗る雄大な眺望である、すぐ傍に聳ゆる劍ケ峰山もどつしりとして雪の衣で蔽はれてある、夏は徑なきため登攀不可能であらうが今頃なら登れるかも知れぬ。

歸途には尾根を傳ふより頂上から斜に中ノ岳の南下を滑降してイヘノグシ峰北方の鞍部に戻る方が早い、前武尊まで約一時間(往きは一時間と四十分)。

三時頃になるとやがて晴れ渡つた濃碧の空にも雲がもくもく現はれて來て暗い影を投げ始める、雪白の嶺々も夕闇に包まれやうとする序幕。急いで下る。大股に雪面を下るのは仲々早くて愉快である、大品原まで一時間とは要しない。故に早朝六時半頃出發して夕刻五時には戻つて來られるのである。

四、五月下旬の武尊山　（昭和四年）

四月に訪れた時から約二ケ月近くも經つて居るので山麓はすつかり春めき、村人は總出で畑仕事に掛つてゐる。然し山には未だ相當の殘雪が光つてゐた。大品原に出ると例の鳥居をくゞり、間もなく上枝の奇妙に曲りくねつた落葉松を左に見て一旦大品川を渡るがすぐ又原の中を行く、鳥居の處から約一時間、やつと原は盡きても小流れになつた大品川を渡り、直きに不動坂にかゝるが、徑は地圖のとは違ふらしい、坂下の高度四四〇〇呎、坂は斜面を西北に上つてゐる。電光形に十分も上れば不動明王像が道傍に坐つてゐる。坂上から笹の下生えの間を行くこと二十分にして御澤に出る、昔はこゝに御室があつたが雪で潰されたとか。殘雪はこゝにかなり存して道を失はしめるが左手に斜面を上ると、急にはなるがはつきり徑は付けられてある、こゝから前武尊まで約一時間。前武尊の頂上の御堂の中には丈四尺の日本武尊が嚴めしく立つてゐられる。夏には御來光を仰ぐため泊るものが多いとの事だが水はない。

劍ケ峯には前武尊から見て左端に木の根岩ケ根を攀ぢて登路がある、頂上には普寛靈神の石碑及摩利支天の小石祠がある、こゝに立つて始めて奥武尊の殘雪に蔽はれた雄姿を川場谷の最奥に望む。劍ケ峯には尙三岩峯あり、各大日・妙見・八幡を頂上に祀つてある、此大日峯と妙見峯との間はギヤツプをなして居り、妙見峯の東面岩壁は樹木さへ茂つてゐなかつたならば素晴しいものである。（星野氏所藏の武尊山繪圖によると劍ケ峯は主峯に妙見、外に摩利支天・大日の二峯しかなく、イヘノグシ峯は神遊峯と記されてある）登路は是等四峯を越えてイヘノグシ峯との鞍部に出るが、處々鐵鎖を垂れてゐるし、然も手がゝりは充分あるので四十分かゝれば越せるので

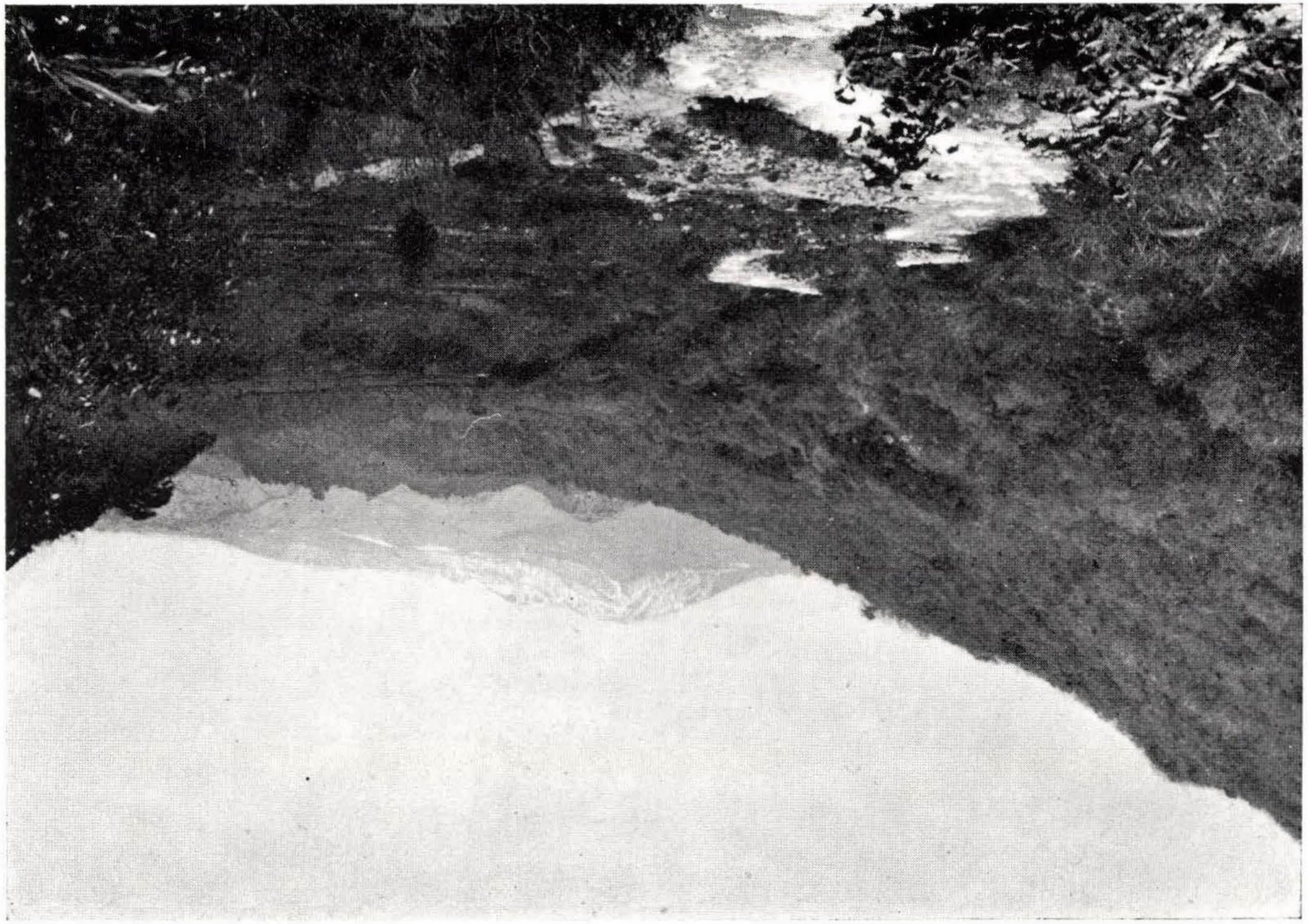
ある。徑は鞍部より尾根の稍西側を進んで中ノ岳の南面に出る、更に尾根筋を行く徑もあるが近年あまり通らぬのでブッシュが茂つてゐる、南側笹の中を通ずる徑を行くと途中に一ケ所雪融水が湧出してゐる、これは眞夏でも存してゐるとのことだつた。やがて殘雪次第に多くなつて細長い窪地の雪原を過ぎる、住し沼といひ、夏は長さ約一丁餘、幅二三間の水溜りになる、こゝに八月になるとサンショウウヲに似た小さな異様な怪物が發生するが本名は分からないといふ星野氏の話であつた。こゝから尾根に殘雪上をかき上ると銅像二基、大きいのは丈三尺七寸の日本武尊、片眼落ちて物凄い、小さいのは丈二尺位の開山行者普寛上人、一本齒を穿いて杖を突いて立つてゐる。奥武尊はこゝから笹の間を五分も上ればいゝ、一等三角點があるだけに展望は三百六十度遺憾なく利く。前武尊から一時間半、花咲から五時間半で達せられ、下りは三時間半あれば充分である。

五、四月中旬の武尊山　（昭和五年）

今年は何處も近來になく雪の少なかつた年であるが、武尊山も亦同樣であつた、花咲から武尊山を藤原に越した模樣を簡單に述べて見る。

早朝六時過ぎ花咲出發、殘雪の全くない大品原を通つて不動坂を上り切ると漸く殘雪が徑にのさばり出す。約二十分、御澤邊りからはずつと殘雪上を行く、普寛法印の石像の所は殘雪なく、苔のクッション に腰を下ろして少憩、これからは全く殘雪で蔽はれてゐる。前武尊の頂上は殘雪軟かくて膝位までぼくぼくもぐつて歩き難い、お堂の中には未だ一かたまりの殘雪があつた。

花吹よりみる富山　　金田一郎



花咲より約四時間、十時十分こゝに着く頃から曇つて居つた空模様は俄然悪化し、川場谷からは濛々と濃霧が湧き上つて來て、行手の劍ケ峯・イヘノグシ峯を包んでしまふ。寫眞を撮らうと約四十分も待つて見たが仲々雄姿がはつきり現はれないので諦めて、軟雪に惱みつゝ鞍部に下つた。見上げると上の方に徑が露はれてゐる、占めたとばかりに殘雪を上つて徑にまで取付くと後は殘雪なく頂上まで樂に上れた。此時やつと濃霧は絶えて奥武尊・中ノ岳・イヘノグシ峯が並んで壯大な景色を見せた、が然し劍ケ峰の三岩峰を越えてイヘノグシ峰との鞍部に下りると又も濃霧に包まれてしまつた。尾根の殘雪上を傳つてイヘノグシ峰・中の岳を越え、例の銅像の處に來て偃松の蔭に風をよけながら小憩、更に奥武尊の三角點を踏んだ時(一時四十七分)は濃霧稍薄らいて藤原側、尾瀬方面が雲霧の中に隱見して居つた。頂上から西に偃松、石楠の中を下ると左手に一突起があり、日本武尊大神と記した青銅柱が置かれてある。西北方に伸びた尾根は稍平らになり、更にぐつと段をなして下つてそれから長々寶臺樹山まで延びてゐる。ずつと尾根の殘雪上を傳つて來たので、今年は雪の馬鹿に少ないのをすつかり忘れて、尾根筋をとらず、氷澤へと下り込んだのが不運の元、四時二十分急傾斜を下りきつて見ると、雪しろに增水した武尊川は仲々物凄い勢、始め四十分ばかりは徒渉四回もして兩岸を傳つたが、堪らなくなつて遮二無二右岸の樹林(川より約百米)中を突進、散々顏や手足に搔傷をこしらへて、やうやう夕霧の四邊を薄暗く包む頃、武尊神社に辿り着き、青木澤を通つて打上の柳淀旅館まで下つたのは八時半、小雨は冷めたくシヤツを濡らして居た。

(雪のある時分は武尊川を溯り、アリキノクボを上つてそれから尾根を傳つて奥武尊に出ると面白いと聞いたが融雪季たる四月や五月には澤傳ひは不向きであらう、昨年四月藤原から土地の者が登つたのも尾根傳ひをした

といふ話しであつた。）

六、四月上旬の武尊牧場（昭和四年）

武尊山に遊んで更に時日に餘裕がある人に自分は一日を武尊牧場（地圖の牧場ケ原）に遊ぶことをお薦めしたい。

山崎から畑の間を通つて鍛冶屋の部落に出て少し行くと、左側に牧馬取扱所といふ札のかゝつた家があるが、現今は牛だけで馬は殆ど放牧しないとか。牧場開きは五月一日で、百二三十頭の牛が主として川場方面から牧場に送られるのださうだ。大品川を渡る頃になると右手の山波の凹み、宇重田峠はずつと後に見返る。十二社の前を通り、それからは一〇九三米の山腹を捲いて北進するのだが、徑はてんで見當がつかない位に一面の殘雪、又稍下つて川沿ひの濶葉樹林の中を行くと、今度は川岸にぐつと迫つた押出しを危ふげに通る、左手に俗稱イオノカヤの洞穴がある。間もなく牧場に入る、もう何時の間にか西俣澤に入つたらしい、相も變らず樹林中を行く。橋を渡つて左岸に移ると少し上つて小廣い平地に牧場小屋がある、森閑としてまだ邊りは一二尺の殘雪で圍まれてゐた。

こゝから西北に稍開けた谷が入つて居る、其の左手の小尾根をからんでブツシュの急斜面を斜に上るとやがて一號平を過ぎ、前方に圓い丘が現はれる。そこが二號平、一面草地だが一二箇所雪が融けて露はれてゐるが、あとはすつかり雪に蔽はれて居て、唯原の緣端を周つて水楢、栗、山毛欅、白樺、サウシ樺等が茂つてゐる。

更に進めば何時しか三號平になり、此處から見た武尊連峯の壯嚴な姿は仲々忘るゝことは出來ない……眞正面に見える中ノ岳、イヘノグシ峯はべつとり雪で粧はれてゐるが、それが眞白といふより寧ろ銀白色にぎらついて居り、更にそれに漆黑の岩壁が象眼されたやうに處々露出してゐる、碧空にくつきり浮んで高く聳えてゐるので人を威壓する相貌を呈してゐる。

三號平の雪原を過ぎると、やがて水楢の樹林の中を辿る、地圖で見ても分かる通り此邊一帶は極く緩い傾斜が西へ西へと高まつてゐる。大して急な傾斜もなく、一八〇〇米の等高線内に入る頃になると（此邊一帶を高山平といふ）、上越國境尾根卽ち利根水源をめぐる山々が眞白に粧はれてゐるのが梢越しに波打つて見え、又武尊の雪嶺が時々、三號平で見たより更に擴大され益々壯嚴さを加へて、眼前に現はれ、又樹林に隱れる。樹林の中では執拗な雪塊にしがみ付かれた米栂の枝は下方に押し付けられて未だ冬の忍從を餘儀なくされてゐた。

一八二〇米邊へ來ると武尊山は勿論、利根川水源の山々が遺憾なく視界に入る、更に前進、一八四一米標高點はもう間近に迫る、尾根上の雪の凹凸を一々上下して行く、左手は雪庇の連續で壯觀を呈してゐる。

二號平より約二時間、遂に標高點とおぼしき地點に到達。もう中ノ岳は見上げる程間近に迫つてゐる、何といふ素晴しい雪壁であらうか。

歸路は二號平までは愉快に走り下れる（約一時間半）。更に牧場小舍までは二十分、山崎の星野氏宅までは約二時間。ゆつくり一日で牧場の廣濶な氣分が味はれ、壯嚴な武尊山に見入ることが出來る。

（昭和五年四月中旬）には牧場ケ原までは殘雪殆どなく、三號平から六七町樹林（下生えは頑强を以て知られて

ねる根曲り竹）の間に踏跡があつたが、それからは殘雪上を一八四一米の地點まで行けた。雪庇はすつかり落ち、一八四一米の地點は雪丘で、中ノ岳の東北面の雪壁がこゝからいとも壯嚴に仰がれた。

七、五月下旬の武尊牧場（昭和四年）

五月も末になると四月に遊んだ時とは全然違つた氣分を味はふことが出來る。十二社の前を過ぎて山腹を少し行くが、又下つてから新綠の濶葉樹林の中を歩く。西俣澤を渡る頃になると牛が三々五々群をなして萠え始めたばかりの草の上に、或は臥し、或は佇んで暖かい日ざしを享樂してゐるといふ有樣、牧場氣分が横溢してゐる。

一二八一米標高點のある尾根の西方に入り込んだ澤に沿ふて徑は上るが、三四丁も行つて左手に電光形をなして上り、やがて一號平に出で、更にゆるく上つて二號平となる。此邊一帶は牛馬が歩き廻るので徑として別にある譯ではない。平の凹地には雪融水がせき込んで流れてゐる、眼前には武尊の峯々が巨城の如く聳え立ち、殘雪が陽に輝き出されて更に偉觀を增し添へてゐる。振返ると牛の遊ぶ白樺林の上の方に至佛山も燧岳も姿を見せてゐる。この牧場は青葉に包まれた夏もいゝが、秋になつて栗拾ひ、茸狩りにも興ある處ださうだ。それから牧場の東方を流れる江戸澤を傳つて遊ぶのも面白いであらう。代八瀑も素晴しいさうだし、田代原もブツシユのひどくない氣持のよい處、そして其の邊りになると目の下一尺位な岩魚がうよ〳〵居て人を知らないから面白いやうに取れるとの話しも聞いた。

劍ケ峰の岩壁及び中ノ岳、イヘノグシ　　吹原不二雄

八、背嶺峠（花咲峠）

武尊山への登山には往きか歸りにか一度は越えて見ても面白い峠である。花咲の小學校から一里四丁廿間、一時間四十分ばかり、塗川の支流ツナ澤に沿つて上る、栗生を過ぎて岫をまわる角に來るとそこに十二山神の小祠があり、こゝから直ぐ左手の谷合ひに行つて前の山にかき上るのが千貫峠道だ。（五月に一遍越えたが、荊棘其他灌木、雜草がおひ茂り、すつかり荒れ果てて通る人とては一人もない廢道、おまけに峠上の展望はなく、木賊の部落への下りは屈曲を重ねること五十度近く、足がガク〳〵してしまふ、これは背嶺峠が出來るまでは盛んに馬なども通つた道だつたが）

更にツナ澤に沿つてゆるやかに上ると何時の間にか峠の頂上に達する、二等水準點、馬頭觀世音が安置され、營林署でベンチも設けてある。東西南北いづれも開けてゐるので奥日光の山々も一眸の下に入り、桃のやうに稍尖つた圓頂の前武尊、槍先の如き劍ケ峯、御隱居さんのやうに奥深く鎭つた奥武尊、大きな岩壁を見せた劍ケ峯山等前面に聳え、前武尊から眞南に派出された尾根に突起した不動岳の岩峯は稍目立つが、前武尊からうねつて此峠まで下つてゐるカヤトの尾根にある天狗岩は全く分らない、但し天狗岩へは行けるさうだ、天狗岩から其の東の一三五九米三角點附近は一帶にカヤトで此頃スキー場にしたと聞いた。

こゝから川場湯原までは約二時間。川場湯原からは（沼田——川場約二里半、自動車九〇錢一時間）二里弱位か、二時間半行程、薄根川の清流に沿ふてどこまでも上る、小一時間木賊までは殆ど上りなく、木賊の手前で右手から注ぐ逆川に沿つて林道が入つてゐる、これを行つても花咲に出られる、最も容易で樂であらうが、平凡ら

しい。木賊過ぎて一時間薄根川を離れて峠道にかゝると左手に川場口の武尊登山路が入り込む、峠の西側は一面のカヤト、夏はさぞ暑いであらう、それより三十分で峠に上り付く、花咲へは約一時間十分である。

附記

尙藤原口と川場口との登路を簡單に紹介して置く、

（一）藤原より（山岳第十六年第三號武田博士の藤原より武尊山への登路）（霧の旅第十一年第三十二號安田氏の武尊川云々）……藤原道は青木澤の部落から始まる。幅廣い坂路を十五分も上るとやがて寶臺樹山の南側中腹の氣持のいゝ草原に出る、背後に笠ケ岳、谷川岳、茂倉岳等の殘雪美はしき山々を見つゝ、相生それから門兎といふ原を過ぎて蛇坂を上り、卅分ばかりでカヤノ澤を渡り、十分の後、武尊神社に達する。社の前を通つて木立の中を武尊川へ下る路をとり、二三十間で細流（間ノ澤）に出遇つたらすぐ對岸に籔の中を上る小徑を辿ると約十分で瀧の上流に出られる。それからは石のごろついた水量の少ない河床をどこまでも本流を溯行すること約一時間、溯行困難になつたならば左手に這入り込んだ澤を上り、尾根に上りついて山稜を頂上めがけて籔くゞりをする、奥武尊の西方の隆起（俚稱藤原武尊か）に上れば眺望よく、更に約二十五分奥武尊に達する。青木澤より約七時間かゝる。

（二）川場より（山岳第十一年第三號日高氏の武尊山）（新井氏の武尊山と片品の奇勝といふ小冊子）……登山路は川場溫泉より背嶺峠道を行くこと約二里（峠より下つて約二十分）路傍に武尊山道入口とした標石がある地點に始ま

る。シラネ坂を過ぎて約半里ばかり行つて薄根川畔に出で、そこに堂宇(行小屋)がある。これから前武尊から眞南に派出された尾根に上るのである。始めは暫く草原、夏はかなり堪へるであらうやうな、それが植林地、更に檜の木立の中を上るやうになる。次いで約三つの岩峯(不動岳)を鐵鎖にすがつて上下し、それから數丁にして水神と書いたクラカケ岩を過ぎると傾斜は益ゝ急になり、約二十五分、前武尊と劍ケ峯との鞍部に出で本道に合するのであると。川場より約六時間半を要するであらう。

尙コース・タイムに就ては記錄欄を參照して下さい。

守門山スキー行

關　守三郎

春の訪れは、雪國で一番よく樂しまれ、味はれるだらう。果しなく擴がつた越後平野が、それこそ文字通りに白皚々一面の雪野原に埋れてしまひその上に鉛色の雪雲が毎日重苦しく低迷して、人々を暗い雪圍ひの中の煙い爐邊や炬燵に迄押し込めてしまふ冬、人々はあきらめと忍從の心を以てわびしい日々を送りつゝ春の訪れを待ち詫びる。だから豐穣な越後平野がそのか黝い土の肌を先づ信濃川の邊りから露はして、春陽に照りはえる一面の雪野原の白さの中に、その黑い帶狀の部分を、一日一日と擴げて行く時に、この地方の人々が如何なる歡びを味ふか、それは南のくにの人々には到底分るまい。

里の子供等は一番雪消えの早い大川の上手に土の香をしたつて、浮れ出す。そして彼等がその一冬の間の冬籠りの陰鬱さから解き放たれた、歡びの光の充ちた眼を以て、晴れ切つた蒼青な大空を眺め廻はすなら、その紺青を、東の方でクツキリと分つ純白の(雪の衣を着けた)山の淸淨な姿に心を奪はれるに違ひない。それは全く淸らかさ、純粹さ神聖さそのものであるから。

嘗て私も、かう云ふ少年時代をもつた。然しその頃には之等の峯々へ登らうなんて云ふ事は夢見もしなかつ

た。

三十一日は素晴らしいお天氣で栃尾で汽車を降りてからもうずつと雪道だつたので、眼が心配になる程であつたが一日、二日は矢張り駄目だつた。雪量は凄いものだが何分四月だから雪質が駄目だ。新雪でも降つてくれればいゝんだがそう甘くは行かず、吉平守門館に滯在せねばならなかつた。砂糖のない村だから弱つた。

だが、三日は朝から素敵な天氣でカンカンに凍みついてる。三角點一〇二四から北東にでた小尾根に朝日が輝いて素敵に綺麗だ。ホテル・スモンクワンを出るともう六時。（一面に雪に埋まつてゐる大池の傍を通つてから）でこの尾根の下に辿りついた時には、一時間足らず經つてゐた。皆アイゼンをつける。一日の午後にこゝまで來て見定めて置いた通りに、この尾根をカキ上る。仲々急で雪が固くカンカンになつて居つてよかつたが、もし柔かくなつたら、こゝを登るのは困るだらう。栗ケ岳がよく見える。守門から比べると雪が遙かに少ない。尾根上に登りついたのが八時。こゝから見た守門は實に美事だ。E氏は「雄山みたいだ」と云ふ。全く寫眞で見た雪の立山に違ひない。雪さへなければとても、こんなに見えぬのだが、之ではとても一五〇〇そこそことは思へぬ。全く素晴らしい。雪の守門はこの方面から眺めるのが一番好い樣だ。

こゝから三角點一〇二四に取付くのに松木さんがこの前に來られた時には、大きな雪庇に弱られたさうだが、今度はドンドン行く。雪面に一二寸キラキラする極めて、眼の細かい粉末になり切つた雪が輕く積つてゐる。スキーにはよささうである。低地では見られぬ珍らしい雪質だが、どうも新雪ではないらしい。雪國に生れて育つ

たのだがこんなのは初めてゞあつた。然し歩く分には少しも邪魔にならず、ドンドンとばして行くのは面白くさへあつた。一二〇〇Mと思はるゝ邊りで輕い食事をとる。樹氷が實に美しい。が、雪が深いので梢の方が少しでてゐる丈で、吹雪かれたら困るであらう。少し登つた所で、馬鹿に雪が固く、遂にピッケルを使用する。恐らく風當りが強い爲だらう。廻つて廻れぬ事もあるまいが、ピッケルは持つて來るべきだらう。雪庇の發達が實に素晴らしく二三間も、此方の方から一尺位の割れ口を開いて威してゐる。

十時二十五分、前守門三角點一四三二着。こゝからの展望は、全く筆舌に絶すると云ひ度い。グルリと廻る山脈の重疊はその名前を擧げる丈でも大變であるが、その中でも最も眼を惹いた一群は、八海、中駒の魚沼三岳の白銀の山容であつた。全くここからの眺めは、自分が今迄に持つた最も素晴らしい眺であつた。

十分の休の後、奥守門との鞍部へ二〇〇Mの降り。この頃にはもう雪が、水氣を含み始めて來て、アイゼンがゴロゴロする。然し別に危險のキの字もない廣い尾根だ、そのまゝ走り下る。下がいやに平に見えたのでスキーを束ねて滑り落した。いゝ鹽梅に止つたが、降りて終つてから見ると案外平でないので、濟んだ事乍ら、一同ホッとした。雪面の起伏は實際分らない。時に十一時。美しい樹氷をつけた一尺許りのブッシュの中を上る。上り切ると忽ち前が開けて奥守門へ續く尾根通しが壯大なスロープを展開する。奥守門から東に出る峯續きは實に素晴しい山岳美を示す。その白銀の如き山肌に巨大な雪庇の印する陰影が點々と象眼されてゐる。

快晴とての素晴しい展望に惠まれて、我々の心はすつかり擴がり延びた。立並ぶ雪白の峯々を名指しつゝ頂上に着いたのは十一時四十五分であつた。頂上は風當りが強いので三角點及びその傍の小さな石の祠や標柱やは、

ちやんと出てゐる。土さへも少しは出てゐる。絶好の快晴に割合に暖いが風が寒いので溫度はプラス〇・七である。頂上からの展望。それは只 Splendid and magnificient と云ふより他はない。前守門の眺望を一層よくしたものだ。頂上より東に走る馬の背尾根、その上に聳ゆる東守門の白銀のピラミッド。その右に現はれる淺草岳は、その北に流した悠然たる緩傾斜により直ちにそれと識られる。之丈が更に加はつた展望である。

憧れの頂に立つて、心からの滿足を以て、眺めた之等の山々の姿は忘れられぬものである。

ふり顧つて見ると、登り來し三角點一〇二四からの尾根續きはその東側に著しい雪庇の發達連續を示してゐる。この前に來られた時等は一町近くもの雪庇が出て居つたとの事である。

この素晴しい眺望をほしいまゝにし乍ら飯を食べる。見た所東守門への縱走は大して困難ではないらしい。又烏帽子も、雪の工合さへよければこの頃でも守門川の右岸を傳つて登高できさうである。淺草岳も深い雪ですつかり澤が埋つてゐるから五味澤邊りに宿つて、之等の澤を上つて容易に頂に達せられよう。

十二時三十分愈〻頂を辭する事にして、アイゼンのまゝ藤平山に向つて出た尾根を降る。風陰になると晴天の爲かとても暖いので皆上衣をぬぐ。少し下つた所でスキーを着ける。この時の雪質は、又一寸薄い氷の膜を散らした樣なもので粉雪ではないが仲々スピードが出る。午前中の登高もこの痛快なる滑降享樂によつて充分その償をえた程であつた。一時二十五分藤平山、三十五分一〇二七米通過。忽ちにして下界の村落が、その明瞭さを增して來る。尾根通しにとばして三角點一〇二七とその西北にある第一突起と第二突起との鞍部から西南の斜面を下る。所々雪穴……クレバス……が出來て居り、いゝ氣になつて降つて行くと、とんでもない事にな

る。この澤の隣に可成りの底雪崩が押し出してゐた。餘り滑降が面白いので芋鞘へ下る筈の家でゆつくり休ませて貰つてから、田小會出發、平野又新田を經て原で平石川を渡る迄又痛快な滑降を味ふ、池峠をこえてからは、すつかり平な道だ。太陽は未だ高い。吾々は今ははや懷かしの守門となつた白銀の雪峯をふりかへりふりかへり、すつかり伸びて高唱し乍ら、須原へと急いだ。

後記

雪の守門は、この二道の他、未だ色々な登路があらうが最も樂で、愉快なのはこのコースであらう。吉ケ平は文字通りの寒村ではあるが、兎に角守門館と名だけは勇ましいのがある。附近は好スロープならざるなしつて云ふ所であるから未だ雪質の良い頃に行つたら、スキーには實に愉快であらうと思はれる。今年(昭和五年)は、越後はとても雪が少なかつたのであるが、それでも守門は去年と餘り變らない位に、雪ですつかり包まれて居つた。八月末でも守門の裏側の谷には、大分殘雪が見られた事を以てしても如何に降雪量が多大であるかは分らう。降雪旺なる頃は、その多量の雪の爲に可成困難するさうである。

スロープは豐富であり、危險は少なし、不便ではあるがスキー登山を享樂しようと思ふ者には、實にもつて來いの山である。

雜　　記

追想斷片

丸茂平造

想ひ出の小窓から見る過去の姿は美しい。過ぎし日の追想は美しい繪卷の轉廻であり、汲めども盡きぬ詩の泉である。苦難の一夜も雨の旅も美しい幻のやうに現實の心を癒して吳れる。快き思ひ出は山に登る心の一部を占めるものではないだらうか。されば辛い思ひを重ねて二度と再び山の土を踏むまいとさへ思ふ心も、新綠萠す春の峯、芳香漂ふ御花畠へ、或は新雪戴く冬の山へと切なる憧憬を感ずるのである。

豐よかな若芽の萠え出し初める頃の上州の山を想ふ。長い憂鬱な冬を押除けて、春の若草が一齊に芽をふき出した頃であつた。一面に敷きつめられた柔かな若草の褥に煙のやうなしぶきを感じながら、睡るともなく睡つた數分、それは餘りにも淡い假睡ではあつたが、美しい追憶として私の過去に消えやらぬ印象を殘して居る。あたりには輕い霧の流れが峯の風に送られて濃く或ひは薄く流れ動き、しつとり濡れた若葉がぱち〳〵と音して燃えてゐた。

山懷に抱かれて睡る氣分はことよなく快きものである。かゝる快感は山々に足を踏み入れた者の等しく感ずるものではないだらうか。たとひ數分なりともすべてを忘れて幽窃の自然の中に溶け込み得る心は幸福である。

快き午睡から目覺めたときにはあたりは深い霧に包まれてゐた。霧に包まれた自然は美しい。すべての汚物を蔽ひ隱して混沌咫尺を辨ぜざる境地に人を導いて行く。三方ケ峯の霧は地藏峠へ出る迄に、何時か煙のやうな雨に變つてゐた。鈍重な牛の歩みが牧場の草を追ふて靜かに動き、可憐な鈴蘭の花が雨の地上に咲きこぼれてゐた。

六月の初めといふのに寒さがひし〳〵と身に泌みて感ぜられる夜であつた。道にはぐれ、夜の牧場の中を彷徨し疲れて木立の蔭に腰を下した。折しも月蝕の夜とて、恐ろしい暗闇があたりを支配してゐた。いくつかの尾根

がぼんやり闇の中に薄氣味惡く起伏し山の靜寂が嚴かに迫つてくる夜であつた。遙か下の方に干俣の村の灯が怪火のやうに明滅して居た。谷から吹き上げる風が、暗夜の峯に聳える異樣な大木の葉末に鳴つてゐる。斯んな時には神祕的な山の威力を感ずるものだ。山に生命が宿つてゐて、今にも何か話し掛ける樣な氣分になる。やがて青白い月光が徐ろに下界を照し出した。今迄闇の中に沈默して居た山襞が月光をあびてくつきりと浮び出した。暗夜の山の姿も無氣味に感ぜられるが、それにも增して淡い月光に濃い明暗を織り込んで寫し出された山の姿は尙更神祕的なものである。山峽にある賤しい牧場の小舍を一夜の宿と定めて入る。小舍の眞中の四角に切られた爐邊には、豐富な薪が次から次と投げ込まれ、その度にぱつと燃え立つ焰に照されて皆の顏が闇の中に赤々と浮き出した。小舍は古いものらしく壁は所々破れ落ちてゐた。破れた隙間から青白い月光が斜に室の中へ射し込み、肌寒い谷風が身を振はせた。どんな人間でも夜更の山小舍の中に焚火に暖まりながら、ぢつと坐つてゐるときには、幾分なりとも言ひ知れぬ、センチメンタルな氣分になるだらう。

あられもない空想が頭の中を走馬燈のやうに馳せ廻り、輕いペーソスを感じながら、何時かぐつすり寢入つてしまつた。些の屈託も感ぜずに。

曙の光が東の空をほんのり彩り初める頃、消え殘つた榾の燃えさしに水をかけて小舍を出る。黎明の冷氣がワイシャツの袖口から流れ込み、入浴した後の樣に昨夜の不快な泡沫を洗ひ流した。乳色の朝靄が春の陽光に追ひ立てられるやうに次第々々に消えて行つた。急な登りが盡きると新綠の草原がうね〳〵と丘の起伏に從つて伸びてゐる。上州の山は平凡だ、平凡の中になつかしみがある。さわやかな朝まだき空氣の中に重苦しい郭公の聲が傳り、なだらかな牧場の丘に一群の馬が嘶く、春の朝は長閑である。うね〳〵した尾根道が吾妻鑛山分岐點で稍廣い道に合し、山腹を卷いて萬座の湯につゞく。

心持ち狹まつた道が針葉樹の林の中へ入つて行く。樹間に萬座川の淸流が朝の陽光に照り映えて美しく見え出した。北側の斜面には所々黑く汚れた殘雪が僅かに冬の名殘りを留めて居た。

初冬の山郷の想出

小川竹夫

山を越え高きを行けば
おのづから歡喜にえみぬ
さなり思ふに其日見しは
わがふるさとの奇しき地なるよ

ウイルヘルム、シュタインコップ

何時だつたか「山とスキー」でこんな文句を讀んだ事がある。北の國の霜月の半頃はめつきり寒い。十時間の汽車旅行の後にこんな寒い暗い茫漠たる原野があるとは思へぬ程である。吾妻の初雪に輝く姿と板谷峠の新雪に驚かされた眼は此處に至つて全くフレムドな感に充される。羽前から越後へ通る小國街道を西へ西へと進むと、水分の多い雪が痛い程に冷く、しん〳〵と感ぜられる。

此の頃の山の空氣は何處へ行つても寂しい。それが東北地方の山に行くと、此の寂しさが層一層に感じられ、そして決して險惡ではない一種の暗憺さに浸される。此の暗憺さの中に陸奥(ミチノク)の冬の生活が盛られ、奥の細道が長長と續くのである。都會と隔絶して爐と炬燵とに嚙り付き乍ら、深く雪圍ひした薄暗い家の中で刈上げ餅を燒いて食ふ彼等の生活は矢張り此の暗憺さの中に浸つてゐるのだ。同じ紅葉にしても此處のは眼を奪ふ絢爛さがなく、粘り強い質的な一種の迫力がある。

いと寒き初冬の日なり我は今紅葉めぐりて
さまよひにけり
峠路を登りつめたるいたゞきの目路の限りは
吹雪雲なり
すさまじく瀑布かゝれりそのあたり雪消えぬらし
紅葉血の色

羽前の朝日岳の南面の山々は一様に濶葉樹の山である。鍛がはびこつて、霎を冠り乍ら頑强に侵入者を妨げ様とする。孫守(ソンモリ)あたりのピークから北を眺めると、大朝

日、西朝日、以東なんどの遠き峯々、近くは祝瓶などが望まれ、南方遙かには、飯豐山塊の飯豐、西ケ岳などが目の醒むる様な膚を露出してゐるのが覗き得られるのである。併し快濶なる青空と純白の雪とが、明瞭なスカイラインを成す事はほんの時稀(トキタマ)であつて、何處迄が山で何處迄が空なのか分らない。此處にも暗憺さがあるのだ。川と谷もめつきり水が多い、其れが又やたらに冷い。一日歩いても一人の炭焼にも遭はぬ事がある。たゞ折々、名の知れぬ山鳥の羽搏きと、栂、楢などの頭からバサリと落ちる雪の響などが耳を聳てしむるだけである。餘りにも寂しく餘りにも暗い。

寒き日の奥の細道辿りゆけば落葉吹雪の
顔たゝきけり
足ひきつ雪に喘へぎつなかなかに日暮るゝ頃に
橋わたりけり

それでも、忘れた頃には懐しい太陽が顔を出す事もある。此の時には、山人は野刈、萱刈に出掛け、炭焼の煙が柔かに棚引く。子供等は小雀(コガラ)四十雀(ガラ)などの小鳥を捕る。澤庵大根や痛快なる唐芥子が南側の明り障子に吊されて一脈の潑溂味を添へる。山から一人降りて來ると、野獸を捕る不細工なトリツクを見る。野兎の糞に興味を感じ乍ら、久し振にモンペ姿の童兒とも戯れ合へる程の愉快さも湧いて來る。峠を越して來た越中の藥屋から紙風船や繪草紙を貰つて喜ぶ子供等の顔も流石に明い。

わらはべと共に登れりやしろ山たそがれの雪
齒にぞしみしか
いただきの墓場の草の卒塔婆は雪にぬれけり
奥の細道

併し此の明い日の目も、やがて雪に變つて日が暮れる。家中の者が一人二人とみんな圍爐裏端に集つて來る。丸太が燻つても別に彼等の視神經を刺戟しない。態々、裏山から雪を分けて掘り出した自然薯の味も床しい。同じ部落の「太助さ」も「熊吉どん」も「かみのぢいさ」もやつて來る。野蠻ではあつても、實力のある酒宴が開かれる。肴はと云ふと勿論、栗だとか、キノコ類などの山のものだが、綿々として盡きない山の話も極めて恰好な肴なのである。炭焼小屋が熊に荒された話、青ジシが群をなして相模山邊を下つた話、「橋の伜」が生意氣な山登りをして凍死した話。それから此等の純朴な山人達は代る代る珍しい物を東京の客に持つて來てくれる。ひと

が持つて來て、自分が空手の時は如何にも肩身が狹いと云ふ樣な風をする。山栗、乾ウド、キノコ、干岩魚等が目の前に竝べられる時は其の僞らざる眞情と深切に强く胸を打たれて、一寸濕つぽい氣持になる。

夜が更けると一人二人「お休み」と云つて歸る。

「おや、たまげた、とんでもねく降つた」。狹い入口を排して外へ出た男の一人は叫ぶ。成程、眞暗の闇の中に吹雪の音が怪しい迄に、はびこつてゐる。松の梢がうなる、栗林が一齊に搖れ動く。そして屋根の上、裏山の上に三寸位に積つた雪を、いとかすかに感じ得るのである。床に入つても容易に寢付かれない。清水の音が豪雨の樣に聞える。

山の夜はとのもを叩く初吹雪まるたくべつゝ
圍爐裏かこめり

羽越の國境を越えて、越後の驛路に出る道も一入と寂しい。一里ばかり山の人に送つて貰ひ、「お達者で」と別れる時には特に此の寂しさが身に泌みる。それでもルツクに收められた山栗などのお土產を考へて僅かに元氣付く事が出來る。顧れば週日を過した山里が尾根や、森のかげに隱れて見えない。只祝瓶の英姿や、朝日の崇高な姿がほのかに、若い旅人との名殘を惜んでくれる。

溪流のへりを進むと、强い山の川風が、川底から吹上げて來て帽子が飛ばされそうになる。既に八分通りは散りしきつた紅葉の黑い樣な色合を透して、急流の渦を見詰めてゐると、我と我が身が此の世の者とも思はれぬ。滅法に寂しく、減法に靜かである。上流から推し流されて來た一片の流木にも捨て難い愛着を感じ、忘れ難い懷しさを感ずる。木の葉が飜々と舞上る、小さくなつて見えなくなる迄も舞上る。暗い雪雲が吸ひ込むのかも知れない。

とある小舍水車のなきねいとさびし冬の越路は
犬も見ずなり

炭積める馬ひとつ來ぬなつかしやくつわとるもの
幼なかりけり

とある瀧壺の許にルツクを下して休んでも、只情ない寂寞感を增すばかりだ。「あゝくたびれた」と體を伸しても、何物も應答を與へない。瀧の水を汲んで飲むと、これ又物凄く冷いのに驚く。瀧の落口には夜來の吹雪のかたみが薄く積つてゐるのだ。ルツクを擔いでまた步む。

「情ないぞえ越路の旅は」なんて口吟み度くなる程に寂しさが身にしみ入る。道はなか〳〵に遠い。空はなかなかに暗い。遠く西の方、日本海岸の彼方が薄靑く吹雪雲

が切れてゐるほか、一帶に暗憺さが充ち充ちて居る。木々も、流れも、岩も、草も、谷を啼き渡る小鳥の聲まで

山を思ふ心

センチメンタル・リベフル

も。だが、この暗憺さの中にこそ、存外「ロマンテイクの青き花」が咲いてゐるのかも知れない。

ところ

渡邊九郎

暑かつた仕事の一日も終つた。帳簿も片付けた、算盤も。お客の長椅子に倒れる様に腰をおろして煙草に火をつけた。店も網の外から見ると違ふ。柱の白さと天井の高さを知つて目をつぶつた。歸らうかなと目をあけるとカウンターまでの石の床に中之島支店の字が五つ。字はなゝめに指し込んだ夏の陽が金文字の硝子を通つて出來る。中之島つて何、中之島つて。あゝ名か、大阪の。俺は銀行員だつけ大阪の。學生でなく東京でなく。

秋が來て田圃が黄色くなつた。明い内に歸る事が段々出來なくなつて、今日も電車が六甲の山に近付く前に陽がその後に落ちそうだ。上の方を開いてなゝめに立つてる電柱の列はカーブの度に野原も空も勝手に切つて新しい書き方の繪の様だ。西に向く程のものがみんな夕日に照らされるのは分つてゐるけれど、黄色の野原に金色に一杯の陽を受けて走るのも新しい繪だ。けれども知らない繪ぢやない。陽の落ちようとしてゐる山は六甲で、俺の行かう、いゝえ歸らうとしてゐるのはあの麓なんだ。歸る、毎日歸る、俺はたしかに其處に住んでゐる、この新しい繪の中に。

寮の冬は石神井の様に寒い。寮つてものは何處にあつても似てるものだ。だから香爐園は濱で石神井は武藏野でもそんな事には頓着なく寒い。けれどもうれしいものは冬枯れの雜木林の上に覗く石神井の雲取が、凍る様に澄み切つた朝に畦道からクツキリ見える六甲だ。處々に

赤い肌が出て凸凹の多いこの山はあんまりはつきり見えると張子の様でおかしい。そういへば何時だつたか店の奴が六甲は中がからつぽだといつたつけ。でもそれとは違ふ。俺にはそんな事どうでもいゝ。曇つた夕方なんかには山らしくいゝ具合になつてゐて、その曇り加減に、霞み加減に昔登つた山のどれかゞ思ひ出せるもの。

春が來た、うき〳〵する様な。夏も秋も冬も繪の中の人の様に暮した俺はこゝで俺の春なんか見ようとも思つてゐなかつたのに。

朝の阪急が御影を過ぎるともう一杯の櫻だ。けれども見てゐるだけで醉ふ様なその色からは大阪は出て來ない、神戸も、だから勿論東京も、結局何處々々の春なんてものはない。春には東も西もない。今時分東京では風が吹いてほこりとも霞ともつかないものが空一面にひろがつて、それが又陽の光を和げて一層春らしくしてゐる頃だらうが、そのおんなじ春が御影で櫻になつてるんだ。

俺は今迄間違つてゐた。ところといふものに歴史的の意義を結び付けて、これと自分との間に勝手に有機的な關係を豫定した。自分から考へて同じものは二つとない。だから新しいところはみんな繪になつた。けれどもこのために知らないところがやたらに繪になつたり、其處の自分が勝手に人形になつてたまるものか。今の世では生れたところに生れた儘で生きて行く事なんか許されないんだ。

標準化と流通經濟の世の中に人はコスモポリタンたるを要するんだ。だから俺の今ゐるところは確かに繪でない西の空で、其處に働いてゐる銀行員は確かに人形でない俺なんだ。

繪はむしろもうせん俺の住んでた東京で、人形はむしろ山に登つた學生なんだ。

去年の今頃俺は寮の窓から夕暮の六甲を眺めて何時までこゝにゐるのかと思つたけれど、もうその冬は神戸だつた。そして春は夙川で夏には又香櫨園に來てゐる。そして俺は俺の昔の考へで行くと一寸も意義のないこの新しい繪の中でその日その日を出來るだけ樂しくしようと努めてゐるぢやないか。

夏がまた來た。箕面の楓は初夏の陽を若葉に透して滴るようだ。その綠には上高地も念場ケ原も、十和田も戰場ケ原も俺が見ればあるけれど、それよりもつと確かな事はたゞの綠である事だ。それでいゝぢやないか。ところを考へなくたつて。

と　き

ガランとした寮の食堂で飯を濟まして部屋へ歸つても未だ明るい。二階の窓に倚りかゝつて煙草に火をつけた。煙は形を崩さずに今度は外の何かに吸はれる樣に塀を越えてスーツと出て行く。塀の外は田圃だ。田植を終つたばかりの細かい綠の點々が鏡を張つた田に映つてゐる。田圃の向ふは六甲の山續き、その間は松林だ。汽車は海と山との間を走るから松林をくゞる。左から右へ松の綠の中から白い煙があがる。左は西だからあれは東京ゆきだ。

手紙を懷にして濱へ出て見た、香櫨園の。松原を拔けると深くなつた砂が足の甲にやわらかい。まるい月が澄んだ秋の空にあがつてゐる。月の出て來た紀州の山は黑くて低くて房總の山の樣だ。チカ〳〵光る波に引き上げた舟は北條だ。腰をおろした砂の冷たさは鎌倉だけれど、立ち上ると後の松林の上に摩耶のケーブルが光つてゐる。

凍えた空も大阪に着く頃にはずつと和らいで堂島の大橋を渡るときには河面はボーツとしてゐる。でもその靄は春の霞と違つて冬の朝、口から出るあの白い息を澤山集めて固めた樣な。橋を潜る船に搖り動かされて河岸の石垣をピチヤ〳〵なめる小波はもう少しじつとして置けば凍りさうな色をしてゐる。橋の上に立つてその色を見てゐると今はもう燒けてなくなつた日本橋の家を俺は思ひ出す。溫かい部屋を出た姉が長い廊下を兩の袖を胸に合はせて、「大寒む小寒む冬の風」つて歌ひながら走つたつけ。そして俺は硝子越しに見る庭の、風の度にカサカサの葉を土の上に廻はすのを見て寒いなと思つたつけ。

春になつた。日曜に京都へ行つて見た。絲の樣な雨の中に智恩院の石段を降りて、花の樣な人の中を新京極へ出た。たゞ春だと思つた。仕事を早目に切り上げて奈良へ行つても見たりした。夜の奈良を歩いて電車に乘つた。今は生駒のトンネルでその向ふが大阪で、先の方を組み合はせて投げ出したのが俺の足でそれより外には何にもない。

俺は今迄間違つてゐた。昔といふものをなつかしく思ふ餘り、これと今との間にやたらに因果關係を豫想した。昔の夢のみ追つてた俺に現在は單なる過去の延長だつた。だからその中に昔を見出す事の段々出來にくゝなつて來た今日といふ日は俺の心をあんまり樂しくしなかつた。けれどもそのために今日といふ日の新しき先に手をかざしたり、新しき自分に目をつぶつたりして暮す事が出來るものか。今の世では夢を追つて昔の儘で生きて行く事なんか許されないんだ。調子の高いテンポの早い世の中で人は時間的にもコスモポリタンたるを要するん

だ。だから今日といふ日は昔と何の關係もなく大切であり、今の自分は夢とは別に大事なんだ。棄てゝいゝのは昔であり、忘れていゝのは夢なんだ。

朝刊を持つて電車の中に席を探すときにも、夕刊をひろげて電氣の下で煙草に火をつけるときにも俺は昔なんか考へずにたゞ今を出來るだけ樂しくしようと努めてゐるぢやないか。

夏がまた來た。店の用で大阪の街を走ると俥から見る曲り角のガソリンスタンドの赤い小さい箱の中で女がコンパクトを使つてゐる。それでいゝぢやないか。昔を考へなくたつて。

や　ま

生きる事のほんとの姿は樂しさだ。どんなときにもところでも人は樂しく生きる樣に出來てゐるからみんな苦しむ。而も今生きてる事を生きてゐるといふ。だから今が樂しいと思へる者が幸福だ。昔は今を樂しくするためにのみあり得る。

俺にも樂しかつた事が少なかつたとはいへない。けれどもその總てが今の俺を樂しくはしない。それは同じ樂しかつた昔の內にも、今の俺がときの流の造るやわらかさや、ところの違ひの生むなつかしさを通して昔の俺を樂しかつたと思ふ心と、昔の俺がその日の俺を樂しいと思つた心とがあるからで、今を樂しくしてくれる昔はたゞ昔の俺がその日の俺を樂しいと思つたその昔だけなんだ。だから昔を思つても今を樂しいと思ふ心が俺にはやつぱり一番尊い樣に思はれる。

ときと、ところに離れ度い俺の心を樂しくする程のときと、ところ。それは俺には山より外にない。俺は俺の山を今はつきり見る事が出來る。

廣瀨の村で飯を濟まして雁坂峠への道をゆつくり歩くと二股はもう近い。晴れた空を上にして道傍の草に寢ると秋の陽に直ぐ睡りに落ちた。

× × ×

目が覺めると木賊と破風が秋の空に高くて、峠道と別れてバラ平を過ぎて子西(ねとり)川を左に見て歩く。川は輝きながら重なり合ふ紅の音で、ナレイ澤の吊橋を渡つてユク澤と合はさつて、紅の下に白い河原が二つに分れて、東澤の河原にかけた板を渡ると二股の小舍は綠の中。はざまを埋める紅は高く〳〵盛りあがつて傾いた秋の陽に上の方だけが燃えてゐる。夕飯が濟むと暗くなつて川下の山の端から月が靜かに昇り出した。小舍に入つて煙の中にユラ〳〵搖れる魚の恰好の自在鍵を見詰めてゐると青い光が板のすき間から指し込んで來る。

カサ〳〵落葉を踏んで雁峠から澤を降る。暗くなると道も長い。高橋の村へ入つて去年も泊つた百姓家を探すと、納屋の前の小川で若主人が馬の手入をしてゐる。聲で去年の學生さんと分つてあがると、鹿の啼き聲を教へてくれたおばあさんも、そばを打つてくれたおかみさんも、部屋の隅に積んだとうもろこしもみんな去年と同じ色をしてゐる。煙草の好きな小供の少し大きくなつたのと、ランプの下で見る若主人の鼻の下に小さなひげのつけばいゝんだ。（四・七・五）

近代的登山

關守三郎

偏見と云ふ魔術師の捕虜となる事が少い、若い人達のナイーヴに開けられた眼には、現在の社會の階級分裂が映らずには居らぬだらう。そして、そう云ふ眼を以つて見る時、近代的登山の有つ階級性は、ハツキリと見えて來るに相違ない。（但し近代的と云ふ規定は、決定的に重大な意味をもつてゐる。）

近代的登山史の頁をくれば、到る所にその階級性の外的顯現が、見出される。資本主義の母國たる英國の人々の、アルプスの峯々に於ける活躍が、近代登山の歴史の最初の諸頁を彩どる事は偶然ではない。資本主義が發展して行くとともに、大陸諸國の人々も、次第に、その頁に名前を現はす。そして、コーカサス、アンデス、ロッキー、ヒマラヤ等の山々が、次々に、之等の資本主義先進國の人々によつて頂を極められて來た。

「スープに浮ぶ油脂」が發生し、増加して來るに從つて、近代的登山が愈々隆盛となつて來た有様は、年代を

對照して見たら、ハツキリと現はれて來るだらう。

又、所謂「登山家」と云はれる人々や、登山界の指導團體やの社會的地位を一見すれば、この事實は、一層明かにならう。

昨年、山登りの階級性を今更らの事の樣に、ベトーネンした一事件?に際し、ある立派な登山家が、大分憤慨された事があつた。この事は、その人の思想的及び生活的立場及びその思想生成の背景となりし時代等から考へて無理もない事である。のみならず、正に、近代登山の階級性を告白するものとして、見られるのである。何故なら、魔術にかゝつた登山家に、近代登山の階級性が見えないのは當然だから。

で、要するに、近代的登山は、階級的な、餘りに階級的なものである。その階級的色彩はぬぐひ去る事のできぬものだ。

然し乍ら、自分は、この近代的登山の階級性を目して惡いとか、いゝとか云ふのではない事は勿論である。それは、單なる事實だ。ザインだ。そして、善惡の價値判斷の原理は、所詮、絶對不變なものでは ないだらうから。

所で、吾國に於ける近代登山は、その多分の輸入的傾向も與つて、最近極めて急速な進歩を遂げた事は周知の事實である。そして、その原因は、明かに最近の我國の資本主義の極度の發展、爛熟と、結びつけて考へられやう。全部がさうだと云ふ譯ではないが、演劇、映畫、スポーツ見物等の隆盛と一脈相通ずるものある事は見逃されてはならぬ。だが今こゝでは、そんな事を云ふのではない。

問題はある人達が、今更らの事の樣に、近代的登山のブルジョア性を强調して、之をプロレタリヤに迄享樂できるものたらしめんとする?に至り、「プロレタリヤ登山」の叫び聲をあげたと云ふ事實である。こんな叫び聲が、あがつたのも、最近の色々のプロレタリヤもの續出の折から別に珍らしくない、と云へばそれ迄の事だ。

だが、よく考へて見る迄もなく、この叫び聲は、ナンセンスに過ぎない。何故なら、之は明かに、上層建築の最高層の一つを、基礎構造の變革なしに、變革しようと云ふものであつて、とんでもない間違ひだから。

成程、演劇、文學その他の上層部門に於いても、プロレタリヤのそれを、標榜する人達は少くない。然し乍ら之等に於いては、多かれ少かれ、それが社會的效果（アジ的）を必然的に有するものであるが、登山に於いては

吾々の對象は、自然であつて、決して社會ではない。こに兩者の決定的な差異が存するではなからうか。

吾々は殘念乍ら、政治的、經濟的ヘゲモニーの轉換の前に於いては、この「プロレタリヤ登山」なる叫び聲に對して何等の重大なる意味を認める事はできない。少くともこの「プロレタリヤ」と云ふ文句を現在正しく解釋せんとする以上はそれは空語に近いものに過ぎない。

吾々は、近代的登山そのものの有つ、もつとも優れた一面の裏に「優れたものは、少ないものだ」と云ふ語の曲義的解釋を認めざるをえないのである。

之は自分が、常々登山――近代的登山に對してもつてゐる考の一端を、叙べたものにすぎぬ。登山は、之を各個人について見れば、所詮、個性的なものであらう。然し、社會的に觀る時には、どうしても、こう云ふ風に見られるのではないかと思ふ。

勿論、山へ登る時に一々小理窟をこねまはすのは、愚かしい事だらうかも知れん。山へ登るに際しては、こんな事には、眼をとぢられる丈、とぢて登るのは、私とても同じ事だ。

尙こんな文章?を、この年報にのせる事は、恐らく編輯者にとつて、餘り都合のいゝものではないかも知れんが、どこか隅の方へ、細い活字で、ベタベタと詰めこんでくれれば有難いと思ふ。そして、この生意氣な小理窟?に對し、誰か共鳴して、くれる人がゐればなほ在りがたい事だ。

漫想二題

數

村尾金二

神はじめ言ひけるは「世に一人にて山に登るは惡し。必ず之に適ふ助者あるべし。」とて土の塵と肋骨とに息吹き入れてその仲間を創り給へり。これより人、山に登る時は必ず伴侶ありて二人以上となれり。なんて神話はな

い。

人數が登山に於て論議される。單數か複數か。その中でも單獨登山と云ふ事が重要な問題となつてゐる。

單獨登山は許さるべきか。漠然とかう質問したつて返事のしようがない。その行はれる登山に就いての色々な條件が考へられた後に答へるべきものだ。

第一、登る人自身の經驗とか體力とかの問題。

第二、登られる山とコースの問題。

第三、登る季節と天候の問題。

その外、準備の程度、登攀の方法等々々（無數の etc.）が考へ合された上で單獨登山が可能か不可能か、危險か、安全かが言はれるのぢやないかと思ふ。だから抽象された登山一般と云ふものには必ず何人以上で登るべきだと斷言出來るものではない。まだ十分山に慣れぬ人にとつては燕から槍、上高地へ一人で行くのは可成り冒險であらうし、又氷河の裂目の多い地方を一人で行く危險の度合は多いかも知れないが、山に慣れた人が天候にさへ惠まれゝば雪中の藥師岳へ登らうが槍へ走らうが割に安易にやつてのけると思ふ。

こんな點から考へると、自分はむげに單獨登山を斥け度くもないし、また、單獨登山が一番、山に登るのに價値多いものとも斷言し度くない。一人であれ、二人であれ、五人であれ、十人であれ、愉快な面白いものが醸し出されるのであつて、何れが登山に必要な人數とも云へない。一人の時には一人の味はひが、三人ならば三人丈けの親和が、七人なら七人から湧く快適があるのが登山の相（すがた）ではなからうか。

一人で山に入る。それは往々こんな時が多い。

梅雨ばれの空から輝やかしい日射しがのぞく。やがて白い入道雲が頭を擡げる頃だ。街では女のパラソルから忍びあしに小刻みに「夏」がやつて來る。新聞では山の寫眞と記事とで一ぱいだ。測量部の地圖が開かれ、赤鉛筆が走る。友の誰彼に會つての會話は、

「何處へ行く？」「劍へ」とか

「今年は何處だい？」「南さ」とか

「出掛けるかい？」「黑部の方へ行こうと思ふ」

皆、北へ、南へ、東北へ、北海道へと散る仕度だ。そこで、自分も此の方面の此のコースときめて連れを探すと生憎、居ないとか、また折角約束しても祖母さんがなくなつたからとか、點呼だからもう一週間ばかり待つてくれとかとなる。さあ堪らない。登高の念に燃える時はキリ、と引きしぼつた弓の樣だ。弓は滿月。もう待ちきれ

ない。パツと飛出す。道は無論困難な箇所は修正して、槍から藥師とか、白馬から鐘釣とか平易な道となる。そして一人で歩いて一人で寢て一人で語つて峰から峰へと、行くのだ。二人、三人で歩く時は相當諧謔も飛び出すし泊り場へ着いてからの仕事の順序も都合よく運ばれる。だが山の中は好いが、人の多く泊る山小舍や、宿屋では、虐待されるか、虐待されぬまでも立騷ぐ澤山の人の中にゐると何んだか心淋びしくなる。結局、山の中は何よりも、人間の大勢ゐるのが怖いと云ふ事になる。「人間がこわあい」と泣き出す小說を思ひ出して自分でも可笑しくなる。

それが七人、十人の同勢となると賑やかなものだ。淋しいなんてことはない。かうなると面白いことには、仲間の間に社會性が發揮されて小やかながらも社會問題が起る。先づ重量負擔の問題。誰も人の一生の樣な格好をしてまで重き荷を負ひ度がらない。そこで負擔力に應じて重量が分配される。何を以て負擔力の基準とするか。正確な所は分らないが、事實は、正直なものが結局、負擔力が多いと云ふ結果を示してゐる。何故つて、僕なんかいつも、澤山背負はされるんだもの。

次が食料の問題だ。極く小人數の場合は互讓の精神を殘留してゐて、雨でも降り續いて、數日の滯在の場合などはお粥で、その上一日二食で我慢をする。それが澤山になると自衞意識からか、可成り食慾を擴張するものが出來て來る。宿舍で丁度人數に割當てゝ持つて來た飯櫃を取換へる間はまだ好いが、食料に制限のある山の泊りでは可成りの脅威を感ぜぬ譯には行かない。山での此の脅威を若し、マルサスが親しく目睹したとしたら次の樣に云つたかも知れない。

「山で人口が算術級數で增加する時、各人の食慾係數は幾何級數で增加する」と。適當な統計と如何にも尤もらしい理論とを以て。

山は

「山は、「季節は、「すさまじきものは、などともの、は附を創つた淸少納言の才筆は、當時のユツタリした大宮人の風格と、彼女の健康な纖細さとを備へてゐて、鋭い觀察眼には時々、微笑まれるものがある。それ程の廣さや、深い內容などではなしに唯、小さな頭で登山に關するものを二つ三つ考へて見た。

心のときめきするもの。夏の山にて始めて雪を見たる(冬、春のシーズンなら何時でも雪を見る樂しみはある)が炎熱の下を往つて、まづ雪溪に近づいた時の嬉しさ、

殊に巷の炎暑が強ければ強い程。）一人行きてフト岩角を曲りたる時、雷鳥の雛つれて遊ぶに會ひたる（何とか呼びかけ度くなる。）

おそろしきもの。夜、小舍の戸口に立つ時、霧にうつれる己の影。たゞ廣き小舍に一人臥したる（狹ければ好いが廣いと蠟燭の光で出來る自分の影が馬鹿に大きい。廢墟の樣な大黑鑛山の夜の凄さ。岩の蔭で一人ねる方が餘程好い。）岩根よぢるとて木の株と思ひて手を出すに、スル〳〵動きて蛇なりし時（氷の樣な冷さが全身を走り、額に脂汗がにじむ。）

あさましきもの。夏、雪溪のかゝる所に雪のなき（槍澤がガラ〳〵の石ばかりのを見た時の變な氣持。）いたく眠りて、事變ありしを知らざる（早月川の溪でテントを張つた。夜中からの雨。朝起されて見廻したら皆、水の中に浸つてゐるのを知らずに眠つてゐた。）食料盡きて空腹甚しき時に思ふ事など（草鞋を見て仁王樣の草鞋の樣なカツレツを食ひ度しなど思ふは、いみじう、あさまし。）

お話も、こう本當にあさましくなつちやつちや仕樣がない。と云つて正攻法でジリ〳〵押してゐては位負けがする。何とか引つ込みのつく樣にお茶を濁さして頂く。方向を轉換して、

木の根、草の根わけて尋ねて會ひ度いものは。親の讐ぢや今は通らない。懷しいあの人ではエロチツクだが、山には關係がない。行衞不明になつた友。出發してからもう數日。豫定なら歸つてる筈なのに、そして搜索隊が文字通り木の根、草の根わけて探す。悲慘事だ。僕自身幸ひこんなにして友達を探した經驗はない。またこれからもし度くはない。

拾ひ度いものは。氷河の裂目に落したピツケルなどは誰にも知られてゐる話だ。山に登る仲間は、ガツチリしてる連中が多くて、對人的にはハニカミ家もあるが反面には野性的な圖々しさがある。だから別に拾ひ度いものはと云ふよりも拾ひ度くないものはと云つた方が通るんぢやないかと思ふ。東北、朝日岳に五貫澤と云ふのがある。昔は五貫もする黃金の塊がゴロ〳〵出て來たそうだ。其の下の小舍で泊つた時の話が、若し今、其處で大きな黃金塊を見付けたら如何しようと云ふのだ。結局は、何も彼も打捨てゝ背負へる丈け背負ふ。背負へる丈けなら二十貫位はどんなものだらう、なんてテント一張を持つのさへ遠慮する者達の間だけに、そんな拾ひ物の空想が山の夜の話題らしくのんびりしてゐる。

こんなに下らない事をいくら書いても書き切れぬものは。山想ひだ。きりがない。此の邊で失禮さして頂く。

明神岳へ

横倉吟三郎

滿天之れ星、數多の星が明日の天氣を保證するかのやうに上高地の空にまた〻いて居る。皆は常さんの捕つた鮠に腹を拵え、明日の明神行きを胸に抱いて靜かな眠に入る。翌日眼を覺ますと既にテントの中は明るい。早速飛び起きて清冽な梓川の水に嗽ぎ、案内者の下川の作つて置いてくれた味噌汁に舌鼓を打ち、支度もそこ〳〵に六時玄文澤のテント場を出る。途中溫泉で浦松氏を促がす。少し時間をとりさうなので我々は先へ行く。七月初旬の上高地は未だ淋しい、小梨平のテントも寥々である。朝露に濡れながら右明神池、左前穂高の標木から右へとたどる。四十分ばかりで池に着く。私等は二の池、三の池の間で焚火をして、之から登らんとする明神岳について色々な想像をしながら浦松氏の來るを待つ。暫くする内にガサゴソと露拂ひをしながら有明村の彦さんをつれた浦松氏の姿が現れた。

八時半頃愈々池を離れる。友のルツクには一昨日霞澤で充分その威力を發揮した新しいザイルが結ばれてある。少しもどり氣味に草をかき分ける事五分位でガラガラの澤に出る。涸澤を少し登ると澤は二分する。右手のは明神前岳から來るもの、我々は左手の水の少しある澤を登る。澤は可成り狹くなる。一枚岩に嚙りついて登つたり、又小瀧を避けたりしながら各自が自分々々の道を選んで登る。登るほどに左手に草つきの斜面が可成上から下つて居て、流れは右手上で小瀧となつて居る。一行は一休みする。德本峠は既に我々の下にあるやうに見える。燒岳の煙の臭ひがプンと鼻を突く。一寸天氣の事も氣に掛つたが何しろ日はカン〳〵輝いて居るので安心して登る。綠の草の間には黃、紫、白等色とり〴〵の高山

植物が點々として實に氣持ちが好い。左上手にオーバーハングの岩を見つゝ私等は右の藪尾根に潜り込んだ。之れを東に横切つて、先の瀧の上部に出るべき岩の棚を間違へて、その可なり上へ出てしまつた爲澤へは直接下る事が出來ず、仕方なく其儘藪尾根通しに攀ぢ登る。兎に角此の藪潜りには閉口した。木の枝に乘つて潜つて行かねばならぬ。何んの事はない中學校の平均臺の復習である。平均臺がすむと懸垂である。上の方の木の根につかまつては腕の力で登る。電信柱をかつぎ出したやうな金田氏等には我々よりも尙一層苦手らしかつた。そこへ行くと彦さんは商賣でガサ〳〵一人先へ登つて行く。オーイと呼ぶと頭の上の方から返事が來る。松の木に登つて澤に降りつく適富な場所を物色して居たのだ。私等は右の方に藪を拔けると草つきの岩の斜面に出る事が出來た。此處をトラバースして瀧の上部の小瀧のある一寸した平地にたどりついた。時間は十時頃、未だ少し早いが晝飯にする。食休みの後、又登り始める。暫くする中始めての雪溪にぶつかつた。私は雪溪の上を通らず右手の岩を這つた方が早さうなので岩の斜面を行く。皆はステップを切つて雪溪を登る。そこを通りすぎて少し右の方へ澤は曲がつて居る。澤によらず草つきの斜面をピッケルを打ち込んで登る。奮闘に奮闘を重ねて、澤のとある岩の上に休憩する。吉澤氏は皆と分かれて雪溪を眞直ぐ登つたので三十米位上の藪の中で惡戰苦闘を續けて居る。一息入れた後又澤について登る、途中で藪を拔けた吉澤氏も一緒になる。岩壁を登ると其處は既に岳川の谷を俯瞰する事が出來る明神尾根の一部である。池から最早六時間も費して居る。先は未だ仲々だ。行手は這松の海である。泳ぐやうにして這松と闘ひつゝ進む。何しろ這松の上を渡つて行くので疲勞は身にこたへる。途中チョコレートの一個に勇氣を恢復し又這松の海に飛び込む。斯くて頂點に達したのは二時二十分過ぎ。

途中から我々の心配の種だつた乘鞍の頂の雨雲は案の定、私達の視界を五、六間に狹め、小雨まじりの風を吹きつけて來た。一寸飯盒の蓋をあけて見たが、固くつめたい飯を食ふ氣にもならない。

私達は之から何時間掛かるか見當のつかない未知の岩稜を只彦さんと浦松氏を賴りに濃霧と雨の中を非常な緊張で急峻なアレートを降りる。小ピーク、キレットの連續である。岩にかじりついては登りして行く中、前面の濃霧の中に可成の傾斜の一峯を見出す。やれ〳〵明神槍へ來たか。此處迄來ればと元氣をつけて其處を越す。然

し思ひは空し。それは單なる小ピークに過ぎなかつた。又前面に現はれる、今度こそと思ふと又違ふ。霧のためにサツパリ譯が分からない。愈々之から大きなギヤツプ通過といふ少し前で飯を濟ませる。冷めたいので無理に押し込む二口三口で澤山になつてしまふ。

彦さんと浦松氏は二人でギヤツプを拔ける途を搜すべく左の方へ少しく下る。我々もとある岩蔭に二人の返事を待つ。ガラン〳〵と岩の落ちて行く音が響いて來る。浦松氏と彦さんの話聲が雨中に聞えて來る。「イヽヨー」の聲に皆は降りに掛る。斜になつたチムニー狀の所をズリ降り岳川谷側に出る。急なアレートからギヤツプに向つてヘツリをやり戻り氣味に降つて一間半許りのチムニー上部に出た。此れを苦心して降りる。此處で熊さんが强硬なアンザイレン說を持ち出した。そこを拔けると今度はトラバースである。下はズツト垂直に落ちこんで濃霧の爲めその深さは測り知れない。誤つて石を落せば二三秒は音もしない、その中「ガラーン」「ガラッガラッ」と下に轉落して行く音が聞える。神經を尖がらせながら注意に注意をしてどうやら皆無事にトラバースを終る。槍の岩壁が十メートル位下に我々の方に迫つて居る。此處で我々は一先づ最難場通過の後の神經をやすませる。

之から前穗高迄はもう大した事はない。次の小ギヤツプで又白谷側雪溪の最上部のテラスでチョコレートを嚙る。腹は大分北山である。飯盒をあけて見る。飯はある事はある。然し咽喉へは通らない。小ギヤツプを出でダラ〳〵の登りになる腹はすく、すつかり參つてしまつた。浦松氏の好意でビスケツトにバタのサンドウィツチを御馳走になる、不思議に咽喉へよく通る。漸く元氣を恢復して又皆と一緒に元氣に歩調を運ぶことが出來た。我々の初めの計畫では前穗の頂上より前穗と奥穗のザツテルへ出て其處から岩小屋へ下るつもりであつたが一行の疲れも甚だしいので大事をとつて上高地へ降る。下川には氣の毒をした雨の中を岩小屋で我々の身を案じて前穗の方を向いてオーイ、オーイと呼んで居たさうだ。然し後で考へるとあの日涸澤へ降らないでよかつたと思ふ。體が普通の時でさへ尙可成の注意を要する急峻な雪溪なのだから。

我々は斯くて前穗の頂へは行かず斜横に岩場を這つてとにかく縱走路と合致した。此處からは闇の中でも途だけは間違へない。前穗の一枚岩の上部へ出たのは既に七時二十分。左手の雪溪を先づグリセードした。上の方は一寸調子よくいつたがアツと思ふ内にスリツプした。ピ

ツケルは手から離れた。もう仕方がない滑べるにまかせる。足が岩にドンとぶつかつた、上體がグンと前に出た。止つた。足が一寸痛かつたが別に大した事もなくて幸福だつた。次に磯野がグリセードした。又同じ位の處からスリツプした、岩を一つ乗越えて止まつたので腰を少し痛くしたらしい。金田、手塚は彦さんの命で雪の縁を傳ふ。磯野は浦松氏のブランデーに元氣をつけて下る。雨の中をグツショリ骨迄濡れて貧弱なラテルネの光りを頼りにゴツゴツの岩道をころげまろびつ、ひたすらに降る。大正池の電燈が恍々とかゞやいて見える。前穂登山者が渇をいやす清水へついたのが八時頃。森林帶が九時頃、この邊から道は多少岩が少くなる。雨の中をヒタスラに五千尺へ向つて急ぐ。岳川谷末端のガレに出た。製材所の樋。かくて丸西の傍に來ると犬か盛に吠える。今日の明神の經驗がフラツシユバツクする。河童橋を渡つて五千尺の板の間にグツショリ濡れた體を投げ出したのが十時二十分過ぎ。直ぐ様湯に入つて衣服を着替へ流動物を採つて十二時頃十六時間の勞働に疲れた體を暖かな蒲團の中に休める。

あゝ思出多き明神よ。

ポンポン山に登るの記

吉澤一郎

電車の中で一寸した挨拶のはじめに「なんぞボロイもうけはおまへんか！」といふ言葉を聞く大阪へ來て、一番はじめに感じた事は周圍に山の多いに拘はらず工場からあがる煙の爲にどんな快晴の日にも之等が瞭つきり見えない事だつた。然し大阪には登る山の多い事が何よりだと思ふ、それに郊外電車や汽車が發達して居て何處へ行くにも簡單である。時間的にも經濟的にも。

茲にいふポン〳〵山は名前だけだと二百米突位のものだらうと馬鹿にし度くなるが實は六七八・九米突といふ東京の高尾山より餘程高い山なのである。そして眺望の

いゝ事も比較にならぬ、二等三角點の置いてあるのも宜なる哉である。

中國山脈の東端を爲す妙見山塊の一部この老ノ坂山脈も矢張り解析準平原の特相を示し、分水界の不明瞭な事は陸測五萬の京都西南部を擴げる事によつて直ちにうなづける事なのである。

ポン〳〵山への常道は省線高槻驛より北方神峯山(カブサン)寺、本山寺を經て山頂に至り、釋迦岳から下山、大澤、柳谷觀音を通つて省線山崎驛に出るのをよしとする。私達は都合上新京阪長岡天神驛からの道をとつた。こんな所からは登る人もないと見えて目的の山の名前さへ誰に聞いてもけげんな顔をしてゐる許りであつた。仕方なしに村人の言ふ事はいゝ加減に聞いて置いて專ら地圖を便りに歩く事にする。

新京阪の長岡天神驛は地圖に開田とある南の聚落記號の中にあると思へば間違ひない。午後一時半に驛を出て長岡天滿宮の境内を通り抜け、奥海の部落から立石に這入る。立石といふのは奥海の南に流れて行く小さな谷の名前である。谷の兩岸に露れて居る岩を見ても此の邊が秩父古成層の山である事がわかるのである。南アルプスの地藏岳へ行く鳥居峠附近にも似た可愛らしい明るい氣分のする所だ。地圖に小徑のある尾根の北側の中ノ谷を登る、何と云つても規模は小さい。十町も歩くと突き當り急な小尾根の斜面にある踏跡を辿つて、國境尾根に出た、此の邊りの地形は複雜であつてとても五萬の地圖では何處に居るのか見當がつかぬ。結局尾根傳ひには行けぬ事を確めてから出駄羅目に藪潜りをやつて大澤の部落に流れる小澤に出る事が出來た。此の邊から又五萬が物を云ふ樣になる、大澤から北へ行つて道が左右に別れる所へ來たのは四時五分前であつた。そこには「右よしみね左釋迦ケ岳を經てポン〳〵山に至る三十町何間(キヨンダル)」と記した標木がある。今私達の降りて來た小谷は京谷と云ひ釋迦へ行く谷は上流の方を水晶谷、此の邊を岩ツボと云ふらしい。時間は遲いが近さうなのと日の比載的長いのとで登る事にする。此の邊は澤とも云へぬ小さな流れを谷(ダン)といふから劍谷や東大谷等に耳慣れてゐる者には寧ろ滑稽に聞えて來る。徑が腹から尾根筋に出た所に獨立樹がある、地元では一本杉といふが之は汽車や電車で京都に向ふ時實に明瞭に釋迦岳の位置を教へて呉れる。四時半釋迦ケ岳通過、こんな所まで山仕事に來て居る人が三人ばかり居た。地圖で見るとは案に相違の遠方にポン〳〵山三角點の櫓が眞新しい故か一際目立つて光つて居る。

崩土の山稜から多少の上下を繰返して遠く見えた割合には案外早く四時四十五分には三角點に着く事が出來た。

此處に立つて先づ眼を惹くのは北に怪異な黑々とした愛宕山である、九百米突といふ値打は充分にある。關東へ持つて行けば千五百米突位相當する山容であらう。次には地圖には明瞭でないがポン〳〵山のすぐ北の小鹽山で割にドツシリして居る横擴がりの山だ。比叡と京都、桂川、巨椋ノ池、木津川と宇治川、總て眼下に横はる箱庭でしかない。比良は薄曇りの空にボカシた様に前山の後から覗いてゐた。龜岡盆地に眼をやる、盆地の右側には龍王ケ岳の斷層崖が城壁の様に蜒々と切立つて居るのに反し、左側はリアス式側脈の出入が大堰川の右岸までせり出して居てその對象の妙を非常に面白く感じた。西の方は何處まで行つても山又山である。複雜ではあるが大した高低の差は認められない、これこそものゝ本に記された解析準平原の特相であるんだ。南方は生駒を知り得た他は空と同様漠然とした印象だけしかうける事は出來なかつた。六一三米突、ポン〳〵山　釋迦ケ岳、六一八米突等の峯々に圍まれた谷の邊りを谷奥といふのだ相だ。

五時十分にいよ〳〵下山にとりかゝる。暫く降りてから氣が付くと何んだか變である。五分ばかりドン〳〵下つたのだから可なり下の方に來てゐる。うつかりして丹羽の篠山の方へでもまぎれ込まふものなら大變なので、元の所へ引返す。結局こゝで二十分ばかり損をして常道に戻る。同行の淺見君は兩方ビツコ（？）になつてチヤツプリンそのまゝの歩き振りだ。兎も角六時十五分には善峰（ヨシミネ）への別れ道に歸りつき、これから大澤から東へ峠路を行き、國境の所から急な降りとなり有名であるといふ柳谷の觀音様に敬意を拂つて高いビールを呑まされ、奥海の橋から自動車で長岡天神驛へ歸着したのは丁度八時であつた。ポン〳〵山はその氣分から云ふと河口湖の北に聳える黑岳そのまゝである。兎も角關西へ來たら一度は登つて見てもいゝ山であらう。これから何年當地に居るかはわからぬがせい〳〵周圍の山々を登つて關東の諸君に御報告申上げる積りで居る。（五・五・四）

阿里山行

冠木啓藏

昨年四月臺灣へ渡つたついでに試みんとした新高登山の計畫はアリマンシケンとかいふ蕃人を頭目とする一蕃社の出草の危險あるを爲登山禁止の有樣で果すことを得ず、阿里山で我慢しなければならなかつた。此の記事は仙臺歩兵四聯隊の兵舍の暗い電燈の下でおぼろげな當時の記憶を辿つて居るのである。

四月七日

臺灣の四月は既に内地の七月だ。午前八時頃雨の港基隆を出た汽車はひた走りに南に走る。窓外を望めば想思樹の並木道を大きな角をゆらり〳〵とふりながら水牛が通る。水田には白鷺が幾羽となく群がつて居る。天を摩するが如き刺竹林に圍まれた田舍屋が遠近に見える。臺南の近くより芭蕉畑が續き、山際の部落には檳榔樹の林が南國を思はしめる。午後四時頃嘉義の町へ着き、蒸される樣な暑さと遠く望む阿里山の方を包む黑雲とに明日の天候を氣づかひながら町をぶらつく。椰子、びらふ、印度ゴムの木等の下を聲高に話しながら本島人がはだしで通る。夜は宿屋の一室に蚊を追ひながら内地の春の長閑さを思ひ、拭つても拭つても流れる汗をふきながらパイヤに舌鼓を打つのであつた。

四月八日

午前七時頃北門驛から阿里山鐵道に乘車する。この鐵道は營林署の阿里山材運搬の爲に設けられたるもので蜿々長蛇の如く七千尺の沼ノ平迄登つて行く。竹崎附近には一見白樺に似たダルベルギヤシツソの林及内地の栗ノ木に似た龍眼ノ木が多い。汽車は愈山に入る。山にある樹木は内地の川柳に似た想思樹が多く、刺竹は少くなつて内地の竹のやうな竹林が綠の波を漂はし、亭々たる檳榔樹の林は悠然と四方を見下して居る。芭蕉の畑は部落の近くでもあらうか。樟腦寮に停車すると本島人が大

きな籠にバナナを賣りに來た。十錢を投ずれば一人では食ひ切れない程の量がある。汽車はトンネルを入つては出、出ては入りしてぐる〳〵とぐろを卷いて獨立山を登つて行くのであるが、之が卽ち有名なスパイラルラインである。高度を增すだけで、同じ樟腦寮を同じ方向に三度も見下して居るのが面白い。しだを木の上に茂らせた樣な蛇木が點々と異樣な形を藪の中から見せて居る。噴木湖に停車すると隆々たる筋骨をした生蕃人が荷物を下しにやつて來た。頭にはなめし革の帽子とも頭巾ともつかぬ一種獨特なものを冠り、その頂には鷹の羽が二枚つけてあり歩く度にひら〳〵とひるがへる。胴には江戸時代の陣羽織の如き毛皮を着、腰には蕃刀を帶し、褌を前に垂れ大きな荷物を肩にのせて輕々と歩く有樣はギリシヤの彫刻が動き出したかと思はせる。露はに出た兩腿から兩脚のひきしまつた筋肉は如何なる山野をも踏破するに十分であることを物語る。山を下つて來た汽車から同樣の姿の蕃人が三名、各銃を肩にして下車した。多分獵の歸りであらう。悠々として右方の急坂を下つて行つた。文明社會のせゝこましさと對比する時彼等の生活がうらやましくなる。汽車は又喘ぎながら右に左にうねりうねつて登つて行く。身にしむ寒さによつて餘程高く登つたことを知る。濃霧に四面が閉される。持參したシヤツを重ねる。やがて霧のはれ間から塔山の姿が現れるかと思へば又かくれる。濁葉樹林の大木が多くなつて來ると同時に熱帶性の樹木が影をひそめる。二萬平に着いた時は霧もはれ惡魔の如き塔山が嚴然として目前にその雄姿を現した。山の半面は斧で切つた如くに岩層を見せて仁王の如くに立つて居る。男性的なこの景色に對しては誰も嘆稱の辭を惜しむ者はあるまい。廣場の端には八重櫻が今を盛りと咲いて居る。神木のあたりは紅檜亞杉、山欅の如き濁葉樹の古木の密林である。千古不斧の阿里山の密林の一部である。沼ノ平に着いたのは午後三時頃でもあつたらうか。沼ノ平で乘換えて直ちに眠月へ行く。汽車は塔山の斷崖を通つて居るさうだが濃霧の爲に三四間前の世界は一樣に灰色である。やがて汽車は七號機といふ集材機の側に止つた。伐倒された檜の大木が谷の方からこの機械によつてワイヤーを傳はつて車の上へ積込まれる。機械が動き出すと谷の底から夢の樣な霧を破つて大木が姿を現はし、見る〳〵中に車の上にどさりと積み込まれる。何れも直徑一間以上もあらうかと思はれる。毎日々々伐り出す檜は今後何年續くであらうかと考へると何とも云へない憂鬱さを感ずる。再び沼ノ平に歸

り營林署クラブに一泊する。緣より眺むれば霧もはれ夕日に映ゆる塔山の物凄き赤色の岩と千古の綠とがよい調和を見せて居る。

四月九日

三時頃に起き出でゝどてらの衿を合せながら緣からガラス戸を透して見れば降る樣な星空だ。世界はまだ眠つて居る。山も林も眠つて居る。やがて鷄鳴曉を告ぐれば東の空が白み、一つ一つ星が影を消して行く。先づ塔山の頂が紅に染まり、次第〳〵に紅の色が這ひ下つて來る。まだ谷の林は眠より覺めぬ。急いで東方に當る祝山に登つて見れば遙かに新高を望むことが出來る。その右に圓き形をなして居るのは東山であらう。眼を左に轉ずれば谷を隔てゝ對高山が谷にのしかゝる樣に切立つて居る。更に後方を俯瞰すれば塔山も全く眠より覺め、沼ノ平の人家からは藍色の煙が立ち上つて居る。しばしはじつと眺め入りながら「この氣分この氣分、だから山登りは止められない」と心の內で獨語したことであつた。

山　小　屋

△

暫らく山に行けない僕にとつては山は曾て感じたより以上の魅力をもつて逼つて來る、山に行かない人の知らない苦みであらう、せめての事に山の思出を記さう。

それは上州の事であつた。山の危險と云ふと大抵は道に迷つたとか種々あるが人一倍動物嫌ひの僕は山でこの位恐ろしかつた事はない。鹿澤から四阿山を越え浦倉山から右に下りて散々根曲竹に苦められ萬座川を渡つて夕闇せまる頃、吾等四人は新綠の美にひたりつゝ歩いてゐると牧場に出た。白樺の林には偉大な牛が幾匹も居たが、久し振で人の顏を見たのが、懷しかつたのかも知れぬが、皆角を下げて一齊に向つて下りて來た。こつちは驚いた。熊や狼なら兎に角平常食つてゐる牛等にさし殺され踏みにぢられては大變と疲れたのも忘れて四人は逃げ出した。幸ひさう追つて來ぬので胸の動悸が未だ止まぬ中、又向ふから馬が猛烈な勢で走つて來た。動物にたゝられた日は又しても牛道に迷ひ入り夜十一時頃迄さまよひ歩き、牛道に印せられたゴムタビの跡を失ひ、吹きさらしの廢屋にふるへながら一夜を過した。

始めて山が好きになつたのは豫一の時、吉澤さんにつれられて燕嶺に行つてからだ。富士等先に行つたが、あれ程強く印象付けられた事は無かつた。へばつて上高地に着いた時、小栗、森竹兩氏から御馳走された菓子の味は忘れられない。

富士は眺める場所に依り大變感がちがふ。三峠の樣に近いと美しいとは思ふがあまり細くみえ過ぎる。東京からでは平面的な感しか起らぬ。誰かの云つた如く白峰から見た富士位清い美しい富士はあるまい。殊にあけ方の……

尾瀨は僕には因緣附の場所である。一度は都合で行かれず、その時は吾友は皆病んで一人は悲しくも失はれた。昨年計畫したら又駄目。さはれ美しい想像の繪を夢に迄擴げる。そこには又ソロモンの榮華も及ばぬ造化の妙をきはめた吾友が住んでいる。いつか又訪れん事を期しつゝのぞんで居る。

（へいさがり）

△

どう考へて見ても「山」つて云ふ奴は、決して華やかなものではない樣だ。快活さも奔放さも乏しい、樂天的な所もない。

日本晴の朝、嶺頭に立つての眺望、白皚々たる雪原、力そのものの樣な岩壁、等々。之等は、表面的には華やかであり、快活であり、時には樂天的に見える事もあらうが、その底を割つて見れば其處には憂鬱なるエトワスがある樣に思へる。然し此の憂鬱には、神經衰弱の夫れとは違つて、「落着き」と「眞面目さ」と「若さ」がある。之は必ずしも俺一人の主觀ではないらしい。

昔の猛者連が去つて以來、部には仇名を頂戴する奴が少くなつた。稀にあつても餘り呼び馴されて居ない。只一人居る。牛乳商さんの若旦那で、何でも音響を諷示する名だ。所が豫科にも此の

名譽ある仇名の第二世が現はれた。本尊は其の音響にも似ず頗るしとやかである。俺は癪に障つた時は何時も、圓滿なる彼を想出す事にしてゐる。因みに、第二世は○談に關しては及第出來る。

要するにブルヂョアは羨しい。

仇名に關して一寸補足する。平常呼び馴されてゐる名で、頗る可愛い仇名がある。何が彼をさう呼ばしめたかは今更余輩の云々する必要なき事である。氏は本三なるが故に卒業論文を物せざるべからず、とか。傳へ聞く所に依れば、論文の題目は「映畫の本質と其の現實形態」とか云ふいかめしきものなりと。（彌次）

△

籔ノ湯の下、大武川のほとり、そよ風訪れる木陰に彼等は休んで居りました。止め度なく流れ出る汗もやがて拭はれ、足許を流れる清流にすつかり元氣を恢復しました。時計の長針がⅤからⅦの間を走り去りました。併し彼等は動かうともしません。彼等八の眼は一様に何處かをみつめて居ります。焦點の一致する處に何があつたでせう。其處はたゞ一面の綠の小松林でした。人の丈ほどの小松が茂つて居ります。そしてその綠の上に紅いパラソルが一つ陽炎の様にゆれて居りました。彼等の焦點の一致する所は實に之に違ありません。併し諸君、之だけで彼等を責めるのは早計だと思ひます。その時の彼等の氣持は到底第三者の忖度し得ない所なのです。

彼等は勇ましくも亦げにやさしい大和男子なのでありました。（GO）

△

三伏峠の下の小舍が立派になつたからつて聞かされて、之て寒さにふるへる事もなくなつたと樂しみにして居りました。鹽見から霧に閉ざされた森林の中を縫つて、漸く中俣の水源に出ました。目の前にはかつてふるへた、物凄い小舍が今も嚴然と存在して居りました。新しい小舍は何處？　一町程上になるほどまだ新しそうな小舍が聳えて居りました。外形はたしかに私を安心させました。見たところ、大樺池の小舍や廣河原（野呂川）の小舍よりは立派です。眞新しいバケツも備へてありました。併し内部を細に點檢すると入口の戸は上下が二寸位宛開いて居る、破目板は合せ目が五分位宛すいて居りました。やがて焚火が勢よく皆の顏に赤く映え、日は暮れました。果してその夜彼はシュラーフザックの中で寒さにふるへて居りました。焚火は相當な勢なのです。とうとう夜明けまで二睡ほどしか致しませんでした。扨翌朝、「昨夜はとても寒くてねむられやしなかつた」と私は訴へました。併し皆様、なんとまあ、彼等は無神經な彼等であつた事でせう。誰一人寒かつたと云ふ奴は居りませんでした。嘆ずべきは神經の鈍い輩であります。（GO）

△

寒い小舍つて云へば八ツの編笠の鞍部の小舍位物凄い奴はないね。屋根はとにかくトタンで屋根らしい。問題は破目だね。破目

つて云ふ字がよくあてはまると思ふ。先づ直徑一寸五分から二寸の丸太を縱に植えてあるんである。而して、慄然たらざるを得ないのは二本の丸太の間の空間が丸太の太さよりも大なりと云ふ事さ。床にはかつて太き丸太が竝べてあつたらしく思はれる。夕暮この小舍へ着いた時はこれでも小舍だと思つてうれしかつた。だが一晩中風の音を聞きながらふるへながら、吹き飛ばされやしないかと思つて明るくなつた時、つくづく山小舍の嚴然たる定義が必要だと考へた。之は先づ人間の入る小舍ぢやない。どう考へても檻だれ。

併し近年大分動物の登山が流行るらしいから建設者に先見の明があつたのかも知れない。（うなぎ）

△

本年度休稿（禁轉載）

（DON）

思出の抽匣

一、Walter Weston

九月の末だと言ふのに朝晩は東京の十一月の末の樣に溫度が下る。枝からふるひ落された木の葉が、カサカサと、舗道の上をころがつて居た。人ッ子一人通らない、靜かな Court から、石階を上つて中へ入る。釦を押すと、リフトは、ガタガタとからだをふるはせながら、ゆつくり登り出した。ここはロンドンの眞中のフラットだと言ふのにドアーを開けて入ると、いきなり、掛物や簞笥や團扇や、その他が一諸になつて眼の中へ飛込んで來た。

煙草盆の中から、ちやうど、手品師がシルクハットの內からハンケチを取出す樣な手付をして、ウヤ〳〵しくシガレットをつまみ出してくれるこの老人が、かつては、嘉門次と一緒に、熊の肉かなんかをしやぶりながら、飛驒や信州の山をかけ廻つた人とはどうしても思へなかつた。然し、彼が手垢によごれた "Japanese Alps" を持出して來て、色々と說明してくれる時、燃ゆる樣にかゞやいた彼のまなざしは、彼の、ありし日のたぐひまれなる Achievements と、そして、若き日のそれよりも、尙一層盛んではないかと思はれる、山への情熱を語つて居た。

"I will lift up my eyes unto the Hills, from whence cometh my help. My help cometh from the Lord who hath made Heaven and Earth. (Psalm 121. 1. 2)

これは彼が僕のスケッチブックのかたすみに、書付けてくれた文句である。

二、山　へ

朝の六時。向ふの待避線で貨車から牛乳を盛んに下して居る。朝早いので、乘り降りする人もない、ガランとした、プラットホームに、ポツリと、五六人、小學校の生徒が固つて居る。皆、汽車の方を見上げて話し掛けて居る樣子だ。デツキには、先生らしい、若い男の人が小さなカバンを横に置いて立つて居る。先生の轉任らしい。やがて、赤いカバンを掛けて、白い髭を生した車掌が、青く塗つた、しやもじの樣なものを振つたと思ふと、汽車

は一ゆるぎして動き出した。子供達は、走りながら盛んに、ハンケチを振る。それに應へて、又盛んに手を振つて居た若い先生の目には、露が宿つて居る様に思はれた。やがて列車はベルンの町を離れて、よく、繪葉書等にあつて、見おぼえのある、鐵橋をゴウ〳〵と鳴らして、渡つて行つた。何んと云ふ山か知らないが、遠く、白く、光つて居るのが見えた。

三、インタラーケン

未だ早いと見へて、食堂にはさつぱり人つ氣がない。隅のテーブルで英吉利人らしい、おばあさんが唯一人、食べて居るが、カタ、とも音を立てない。窓の外は直ぐ、Thuner See と Brienzer See とをつなぐ川になつて居ると見えて、冷たい空氣が音も無く流れ込んで來る。眞白な遊覽船が、手のとゞき相な所に、二三艘一緒につながれて居る。舟ばたに、陽のかげが急がしげに動いて居る。對岸の紅葉が水にうつるあたり、鷺鳥が二三羽、影を亂して游いで居る。Auguste Renoir のかほりを感じた。

四、グリンデルワルド

El. Schidegg を出たフニクラーは、ガタン〳〵と、急斜面を下りて行く。ヒーターをたいて居るので中は暖いが、外は雨で山の方は吹雪らしい。すぐ、息で曇つて仕舞ふ硝子窓をふき〳〵アイガーのワンドを見上げる。細かく、一面に新雪におほはれた岩は、雨足の晴れ間に、時々、目の前に現はれては消えた。

一たん、下迄下つた電車は、スキッチバックで、村の方へ上つて行く。雨の中を牛が、首に付けた鈴をひゞかせながら、吾家へと歸つて行くのが見える。停車場へ降り立つと、二階建のその屋根越しに、Wetterhorn があほがれた。

槇さんが、アイガー、オストグラートへ出掛ける朝、言ふに言はれぬ興奮に包まれて、電車に乘つたのは、今、自分の踏んで居る、このあたりかも知れない。華やかな、出迎へに圍まれて、村の少女の口づけに、はにかんだ様子も、恐らく、この邊から見えた事であらう。

電車はここでうしろに貨車を一豪付けると又ヒタ馳りに暗くなつた Lütschenthal を下り出した。

五、伊太利へ

ローンの谷は、今、非常な速力で窓の外を流れて行く。ポプラの並木も、雨にぬれそぼれて、道がいたずらに、白く光つて居る。Brig で谷に別れて、Simplon のトンネルに入る。これを越せば伊太利だ。何んでもない事の様だが、このゴーゴーと言ふ響と、長い暗とは、人の胸をときめかさずにはおかない或物を持つて居る。北の國の人々が、あの暖い海と、輝かしい青空と、そして人の世の華を求めて、幾度か、その瞳をかゞやかし、その胸をおどらせた事か！　古來如何に多くの巡禮達が非常な辛苦をして、このアルプスを越して行つた事か！

やがてトンネルは下り坂となつたと見へて、速力は益々加はつた。急に、パット、明るくなつた。伊太利だ！青い、青い、本當に青い。じめ〳〵した山の向側に引換へて、何んと言ふ、晴々し

い空の色であるか。伊太利の空の青さ！これは、まつたく、實際に見なければとても想像にも及ばない事を初めて知つた。

晝頃になつて、汽車は、Lago di Maggiore のみぎわを走つて行つた。青い空と青い湖、そして、その上に、サン〳〵と降りそゝぐ太陽の光。小さな島が見え出した。バラ色の大理石で造られた palazzo と多くの terrace から成る庭園をのせて居る。名前は、Isola Bella この名前を口の中でくりかへし、くりかへし、して居る内に、何んとも言へないいゝ氣持になつて仕舞つた。そしてさらに華やかなる可き、明日の日を思つて、すつから、上氣して仕舞つた。花の都、フイレンツエ！そのフイレンツエへ、自分は今、行かうとして居るのだ。

× × × ×

それもこれも、最早、一昨年の事となつて仕舞つた。又いつか再會の日迄、一つ〳〵大切に、仕舞つて置かうと思つて居ます。

（雲）

高山裏の小屋のある夜のこと

白峯から赤石へ行つた旅のある夜の事、高山裏のささやかな小舍の前に、私達は白檜の焚木を高く積上げて、赤々とその燃えてゐるのを眺めながら寢に就きました。好晴の夏の山の夜に特有な西風が、私達の體の上に灰を降らせました。靜に寢てゐるとそのバラ〳〵といふ音が耳に就てなか〳〵眠れはしませんでした。

その翌朝の事です。一晩好い氣持に眠つたパンちやん、目を覺してみると腹の上に大きな、一尺四方位の穴があいてゐました。夜の間に腹の上に火事が始まつたのを知らずに寢てゐたのです。隣の人が目を覺した時には、もう大切なシュラーフザックの穴は一尺四方位になつてゐました。そして、その火事をもみ消されたのも知らずにゐたのでした。

小澁の谷から鹽見に行つた旅のある夜の事、高山裏の小屋の傍に白檜の焚火を中心に、三人の山男がお茶を飲んでゐました。その時私はふと變な臭をかぎつけました。見れば、べべちやんの帽子から煙が上つてゐます。驚いて揉み消した時にはその穴はもう直徑五分程になつてゐました。そして三人の男がその帽子をいぢり廻してゐる間に、穴は倍程にまで擴つてゐたのです。

高山裏は火難の地です。風上にあのハネ易い白檜を焚くのでもの。

（ター公）

似非熊の足跡

尾瀬ケ原の水電社宅を出たのは未だ五時少し前、薄暗いが晴れ渡つた空には星が冷たさうな光を殘雪の上に微かに投げてゐた。

僕等は殘雪の狀態もよし、又絶好の日本晴に惠まれて、景鶴山の西肩を越えて國境尾根を歩んで行つた、全く公園を散歩してゐるやうに。アヲモリトドマツだかコメツガだか處々に植込のやう

に群れて殘雪から上體を露はしてゐる外には、何等歩行を妨げるものもなく、廣い尾根上は唯一面白皚々の雪原である。奥上州の山々の名物たるネマガリ竹の叢は、今は數尺下に雪のために押しつけられてぐうの音も出ないらしい。(尤も景鶴山西肩と大白澤山西北肩では既にちよつぴり猛威を振ひ始め、兩箇所共五分間ばかり僕達をいぢめ付けたがすぐ雪原に解放して呉れた)

傾斜の極く緩い白澤山の樹林を越えると目的の平ケ岳は尨大な圓頭頂を國境尾根に据えて、磁石が釘でも吸引する樣に、いやが應でも視線を吸ひ付けてしまつて離さない。東側には未だ雪庇が幾つもかゝり、頂上は未だ厚い殘雪で蔽はれ、綿布團を被つたやうにふつくり高まつてゐる。それが若々しい五月の陽に輝いてぎら〳〵してゐるんだから堪まらない。僕等の登行慾はいやが上にも高められ、いそ〳〵と白澤山の下りにかゝつた。

間もなく先頭に歩んで行つたN氏が急に立止まつて、「おい、熊の足跡があるぜ。爪の跡まではつきりついてゐるよ」と叫んだ。すわとばかりに駈けつけて見ると、成程、熊公の足跡らしい。大きな足跡がはつきり、爪の跡まで鮮やかに雪面に印されてある。左下の水長澤の方から上つて來てずらつと平ケ岳の方に續いてゐる。足跡は時々入り雜つてはゐるが、どうも三匹らしい、そして未だ通つてからいくらも時間は經たないらしい、こうまで鮮やかな足跡では。

三人は輕からぬ不安を懷きながら、その足跡について鞍部に下つて行つた。途中で奴さん達に出遇つたら何うしやう。未だ食物にあり付かなくて、いゝ餌食到來とばかりに襲來したらどうしやう。こつちも三人、向ふも三匹だが、相手は鬼熊以上の本熊先生、僕等がどんなにピッケルを振廻したつて一度ぐわんとあのでかい手で撲られりや堪つたものぢやない、といつて逃げたつて始まるまい。

考へれば考へる程、氣持が惡かつた。その中によく〳〵奴さん達の足跡を拜見した小生は、それが獵師の足跡なることを發見した。其場合正に大發見であつたのだ。爪の跡と思つてゐたのはカンヂキの爪の跡で、其證據には十文字に結んだ紐の跡が小さいが、爪と爪との間にはつきりついてゐたのだ。

これで熊さん來襲の心配もどうやら消え失せ、僕等は胸を撫て下ろして平ケ岳をひた上りに上つて行つた。其の中に彼等の足跡は再び上州側の谷へ下りて行つてしまつた。やがて僕等は山頂とは思はれぬ程廣々とした雪原に上り着いた。こゝが平ケ岳の頂上だつた。

(然し熟々考へると熊公仲々油斷になりません。熊公退治の獵師がわざ〳〵出張して來る位だから、何處にどうぶらついて居て不意に出つ喰はすかも知れませんよ。)

(面鳥)

△

"Scrambled egg among the Alps."

これから先、若し、幸にして、三十年も生き長らへる事が出來たとしたら、そして、多分その頃は、すつかり肥つて仕舞つて、精々、上高地あたりの谷から山を眺めて滿足しなければならない

様になつたとしたら、自分は本を一册書かうと思つて居ます。そして表題を、かう付け様と考へて居るのです。その中に、どう言ふ事を書くか、それは勿論分かつて居ませんが、少くとも、冒頭には、次の文字を書付けたいと思つて居ります。

I climbed the roofs at break of day:
Sun-smitten Alps before me lay;
I stood among the silent statues
Ard statued pinnacles, mute as they.

How faintly flushed, how phantom-fair,
Was Monte Rosa, hanging there
A thousand shadowy-pencilled valleys
And snowy dells in a golden air.

何んと、すばらしいとは、お思ひになりませんか。然し、あはてて、感心するには及びません。この詩は、知る人ぞ知る、Victorian Age の巨擘、Alfred Lord Tennyson の書いたものですから。

（雲）

△

上高地の夜

梓川の川邊近く天幕を張り、山らしい粗末な夕飯も濟ませた頃、明神の頭に霧がかゝつてきた。夕の靄が川面に擴がり始め、六月の上高地は靜かに暮れやうとしてゐる。眞白な小梨の花が美しく咲いてゐる。

山櫻もところ〴〵うす紅の花瓣を落してゐた。

白い紙卷きの煙草を無暗にくゆらしながら樹影のベンチに腰を下した。五千尺旅館に水をひき入れる水車が或は高く或は低く哀しい調べを奏でゝ廻つて居た。四邊の靜けさに調和して快い音樂である。

次第々々に暗くなつて樹の間に明神の尾根が薄黑く逼つてきた。雲の切れ間に初夏の夜の星がきらめき出した。（ハトマメ）

△

山の一人旅は實によく山の本體？と云つた樣なものとぴつたりする、其れ丈に寂しいことは滅法だ。だが然し此の孤獨の寂寞を忘れしむるものがひとつある。焚火。亡くなつた大島さんは其著「山」で「心さびしい時は火を燃やせ、その陽氣な顏をみつめよ」と云つて居られる。げに然りだ。俺達ですら「せめて火でも燃やそう」と云ふ氣になる。此の「せめて」が意味深長なのだ。

奥上州の春の山は、石楠花とこぶしの花盛りだ。友の一人は「石楠花よりもこぶしの花の方がさつぱりして好いね」と云つた。他の友は「丁度、若い修道院の尼さんと云つた感じだ」と相槌を打つた。

「てはあの雨に叩かれて腐れかゝつた奴はどうだ」

「まあ、年增女の凋落の美かれ」

「なあるゝ……」。

△

南の春の山に始めて入つて、一つ期待しなかつた喜に出會し

（彌次）

た。低い山には雪が消えて、高山にのみ殘雪があるから、低い山の間に顯現する高い山がすぐ目に留るのである。

伊那電鐵の中でSやTが好い氣持さうに眠つてゐる間、私は一人白峯や鹽見や、赤石惡澤が出たりかくれたりするのを好い氣持になつて眺めてゐたものだ。

三伏の小舍の中で、晴れた夕方の空の澄んだ色の中に私達の焚く紫の煙が溶け込んで行くのをぢつと眺めてゐると、間ノ岳の頭が夕映に輝いてゐるのが目に付く。豐富な殘雪は薄桃色に、そして山肌は赤い〳〵、朱のやうな——併し決して毒々しくはない——色に輝く、春の南の山の暮方以外、私はまだかうした山の色を見た事がない。三伏の小舍から中俣の下の方に間ノ岳の頭が見える。一寸夏の山旅では見逃してしまふ處、それが春の山なら、いやでも「あれが間ノ岳！」と知らればすまないのである。

山から出てきて、汽車の中で山の人夫の使ふ言葉を眞似て喜ぶ人がある。

笹子の驛で發車の汽笛があたりの山に木靈した。

「よく響くれ」

「うん、山のエーサ（あいさ）だかられ」

と云つた調子。

（淨）

あだな

「あだな」と云ふものは、いゝものだ。トン、ペン、コン等、なかなか可愛いゝのもある。オンボ、ヤマネコ、カボチヤに到つては、呼ぶ方がかへつて赤面する。

今日も幸ひ、天氣もよく、至極のんびりと山をenjoyして來た夕方等、火を圍んで煙草をくゆらす時、

「おい、ペンチヤン、もつといぶらないのを燃せよ」なんて、これが本名でやつた日には仕末に終へない。

「あのう、ちよつと君、村尾さん、もうすこし、いぶらない木を燃して下さいませんか」

まるでぶちこはしだ。

この意味に於て未だ「あだな」のない諸兄に呈上するの光榮を有したいと思ふ。

先づ、浦松佐美太郎氏を「カメサン」とは如何で御座る。蓋しslow but steadyは彼の信條とする所である。

次に宇佐美敏夫君は「ヘーチヤン」としたい。提案理由の說明は遠慮したいと思ふが、知る人ぞ知る、である。

お次は河相薰君。「河馬」が至當と存ずる。別に、彼が端艇部員であるからではない。その理由は彼に遇へばわかる事と思ふ。

本二に來ては、高瀨會計氏には「うなちやん」を進三したい。彼のピンポンは、鰻屋に三年奉公せずんば、あたはざる妙技であるからである。

次は芋川稔一君。彼は今度の編輯委員である。餘り適切なる「あだな」を書くと全體が沒書にされる恐れがある。若しさうなつては、折角の我が雄圖も空しくなる 次第であるから、不徹底な所で

御用捨を願ひたいと思ふが、「トツツアン」としたいと思ふ。「トツツアン」あれで仲々、いきな所があるつてね。

小川竹夫君には「彌次さん」と願ひたい。出所は十返舍一九物する所「東海道五十三次、彌次郎兵衛、喜太八」にある。あはせて彼の髭をも參照せられたい。

關守三郎先生、「ハッチャン」彼の鋭角的な顏貌ははちまきさせると最も感じが出る。

吹原不二雄君、君の顏の色は外氣の溫度により種々千變萬化する。故に、當然に、「メンチャン」たらざるを得ない。元來「七面鳥」とす可きかも知れないが、いにしへより質は流れるとぞ云はれける。

降つて一年に入る。先づ、その人ありと知られたる、增山清太郎居士。「タクアン」とは如何。石神井の名物たるに於て、兩々相讓らざる名聲を有する。便宜上「アンチャン」でも「タア公」でもそれは呼ぶ人の勝手である。

次は、丸茂平造君。「ハトマメ」。彼、一度、驚愕するや、その顏面神經の變化は、お寺の鳩が豆鐵砲を食つた時のそれと相似形をなす事が最近發見された。「マメチャン」と呼ぶを便とす。

次に擧げたきは「スムース、パイン」事鈴木英雄氏である。彼、性、溫厚にして、悠容せまらず、「アンパン」の名に最もふさはしい。

さて、どんぢりにひけえしは、田中秀三郎君である。「翁アメ」。彼の笑つた顏を凝視せられよ。さらば讀者の疑問は立所に氷解しよう。

さて、色々と、蕪言を弄したが、これを用ひると、用ひざるは、全く同人諸兄の自由意志に存する。以つて、部の氣分釀成に幾分寄與する所ありとすれば、筆者の感激これに過ぐるものはないのである。

（雲）

齒

夏目さんの「猫」に、寒月君が空也餅で齒がかけた話がある。稍〻モダーンな僕は牛肉の佃煮で、大切な齒を一本かいて了つた。それが全部取れたならまだしもだが、恐ろしいピークが取殘されて未練らしく孤閨を守つてゐる。こいつが喋舌るにつけ、食ふにつけ、舌に觸つて實以つて痛い。齒が痛いやうに聞えるが、痛いのは舌の方だ。つまり、齒に舌が觸つて痛いのだ。屛風の小屋で八方手を盡してTに說明してやつたが「ウフ」と云つたきりである。猫の言分では無いが、人間なんて薄情なものである。いや人間が薄情なのではない。人類マイナス自分則ち薄情なのである。だからこそ「ウフ」か或は「そうだらうれ」だけなのである。元來ウフは眞面目な發音ではない。ウムとフフンを加へて二で割つたものである。「そうだらうれ」の「そう」は英語のSOであつてザツト以下を受ける語である。故に、長々しい前言を一纏にして代表させる語なのである。然るに、この場合に於ては面倒臭いからこそ「そう」で纏めて了ふのである。「嘸ぞ痛いだらうれ、無理もないよ、隨分鋭いから……」の略なのである。實に薄情

なものである。親の廣大無邊なる恩は、自ら子を持つて知り、人類マイナス自分の唯物論的薄情さは、自ら齒を失つて知る。

重い靴をはいて、重い荷をかついで、何しに山へ行くのだとよく人に聞かれる。お判りですか、僕は眞理を知りに山へ參るのであります。

（オー）

三伏の小屋

或る夏絶好の天氣に惠まれてとう〳〵白峯から三伏峠まで來てしまつた時のことである。都を出て六日目、持ち續いた天氣もこの夕は霧と暮れて、三伏の小屋には赤々と焚火が輝いて居た。こんな時にはおきまりに焚火をかこんで雜談に花が咲く。しかしこの時は雜談もただならぬものがあつた。都を出てとにかく、毎日天氣つゞきにがつちり歩くし、皆もそろ〳〵都が戀しくなつたのであらう。口にこそ出さないが皆の顏にはあり〳〵とそれが讀めた。赤石まで頑張るか、それとも大河原に下つてしまふか。こんな時の分れ路はすこぶるデリケイトだ。この時の皆の食氣が振つて居る。Tは青疊の上で汁粉、Mはまぐろの壽司、Sは風呂からあがつてソーダ水。その夜、寒さにふるへて眼を覺したら滿月がはめの隙間から晃々と友の顏を照して居た。翌朝ともかく皆は高山裏へと相變らずの歩みをつゞけて居た。

鰌

之も或る夏、その年は徹底的に天氣に不運で屏風小屋で三日間の滯在を餘儀なくせられ、とう〳〵待ちきれずに雨の中を北澤の小屋へと來てしまつた時であつた。つれづれなるまゝに、人夫や友は鰌釣りに出かけたが、收獲は僅に大小まぜて數尾。しかしこの數尾が毎日わかめの味噌汁に干物攻めの口にはとてつもなく美味だつた。その味が忘れられずに、翌年大井川の東俣をわざ〳〵下つて思ふ存分鰌を食つたが、その時はどうしても北澤の樣な美味はなかつた。しかし人夫は忠實だ。居ないとされて居た小澁川の廣河原でも丹念に釣をして、とう〳〵尺餘の鰌を三尾都への土産にして吳れた。有難かつたがその鰌は他の人の口に入つてしまつた。

（ベビー）

△

外では風がびゆう〳〵吹いて居ます。かすかな火の邊で淋しい晝食をパンで濟ます。もうター公、ベーチャンも頂上に着いた頃だらうとみこしをあげて、寫眞機片手にぶら〳〵出かける。澤を登ると頂上はそこに見えるが這松の抵抗にあつて止むなく街道へと退却する。やつと鹽見の見える所にたどりついたが、羚羊の足跡とは違つた樣な足跡を雪の上に見つけてびく〳〵ものであたりを見まはす。鹽見の雪溪には彼等の姿は見えず、大聲で呼んで見たが足跡におどかされて一回で止めた。小舍に歸つたのが三時前。すぐに彼等はよち〳〵と澤をのぼつて來た。

汽車は北へと走つて居ます。そして夕日は勿論西から窓に直角

的に差込んで居ます。Bチャンに西はどちらかと尋ねると汽車の走る方向を指しました。山男が磁石を見なければ、日が照つて居ても方向が分らないのはどうかと思ひますね。

（餘）

△

初秋とは言へ雲一つない蒼空、眞晝の太陽は遠慮ない。峠から續いた氣持の良い楢や栗の林を出て、蒸し暑い草いきれに閉口しながら、三つのルックサックは玉黍蜀の畠を拔けて、十軒あるかないかの小部落に入つた。「此處が大多和です。一休みしませう」と、有峯で一緒になつた連の男は、とつゝきの百姓家の縁先に荷を下ろした。男のどなり聲に應じて出て來たのは、四十位の、經子にもんぺい袴をはいたこの家の主。良く寄りなすつた、茶を一杯飲んでくれと、とても喜んで、菓子を出したり、爐に薪を入れたり、果ては玉黍蜀を爐の傍に山と積んで、此處のは甘いから是非一本食つて見てくれと言ふ。とてもそんなに食ひ切れないので良い加減に切り上げ、立たうとすると、一寸待てと、今度は奥から大きな德利をかつぎ出し、どうか一杯やつてくれと言ひ出した。連の男は、一息に三杯程を飲み干したが、遂に主はもぢ〳〵してゐる山男達に向つて受けてくれと來た。彼の二人は暫く決し兼ねてゐる樣であつたが、とう〳〵怨めしげに辭退してしまつた。勿論笹の露にも刄の立たぬ他の一人は、之を受けられる道理がなかつた。

再び暑い路に踏み出して、しばらくしてから、何か考へてゐたらしい眼鏡が突然、獨言の樣につぶやいた。

「あいつ、やつても良かつたなあ。」

（アン）

あだな考

「あだな」の筆者「雲」は雲助の略てある。彼氏が雲助である事は自他共に許してゐるのであるが、僕の感から云ふとこの二字は「クモスケ」とは讀みたくない。どうしても「ウン」と發音して「ウンスケ」と讀み度いれ。で、通稱は「ウンチャン」と云ふ事になる。彼自身は「クモスケ」でないと感が出ないと盛に主張してゐるのだが、近頃、部室内に於て「ウンチャン」の呼聲の高いのは、萬更ら僕の考のあてはづれでない事を證明してゐるだらうて。

次には、「オンバウ」なるあだなに考察を進める事にしやう。このあだなに關しては、元々他に讀み樣がないので、その原始形態に於ては、雲氏の場合の如き發音上の問題は起らないのであるが、これの發展せる段階たる愛稱を考察する場合に、そこに一の矛盾が起つてくる。即ち愛稱の單なる現象形態は「オンチャン」てあるが、之をもつと深く觀察するならば、Onchan 及び Onchi-yan なる二の要素に分析する事が出來る。で、讀者諸兄はこの二の要素と中島名譽幹事とをよく、その純粹なる形態に於て考察して頂きたい。諸君は必ずや容易にこの矛盾を Aufheben し得て「オ・ン・チ・ヤ・ン」なる自然、必然的なる概念に到達し得る事であらう。

（TOTZAN）

報　　部

昭和三年度

本年度幹事

記錄　中島嘉一郎
會計　芋川稔一
　　金田一郎
　　高瀨進三

△**スキー準備會**　十二月八日　於本科部室
今冬季のスキー合宿（野澤）は十二月より一月にかけて約二週間行ふ事に決定せり。

△**忘年會**　十二月十二日　於元園軒
山男でも稀には絃歌低唱する必要があるさうだ。どうだか。
出席者。廿一名

△**豫科山岳部送別會**　昭和四年一月三十一日　於新宿白十字堂
出來立ての白十字の二階で一寸改つた氣分でやる。あんまりいゝ氣持になつて會費を超過しちやつた。
出席者。園山德三郎、小川竹夫、高瀨進三、關守三郎、芋川稔一（以上卒業生）清水達雄、太田又一、增山清太郎、丸茂平造、勝田一郎、以上十名。

△**一橋山岳部送別會**　二月四日　於如水會館
出席者、高木英二、近藤恒雄、森竹五郎、赤城鈴太郎（以上卒業生）外に部員十八名。

昭和四年度

本年度幹事

庶務　小川竹夫
　　太田又一
記錄　芋川稔一
會計　勝田一郎
　　金田一郎
器具　增山清太郎
　　園山德三郎

△**浦松氏歸朝歡迎會**　四月五日　於如水會館
出席者。（先輩）淺原丈平、浦松佐美太郎、奥野綱重、村尾金二、矢作太郎、淺原重繼、近藤恒雄、（部員）中島嘉一郎横倉吟三郎、手塚晴雄、金田一郎、高瀨進三、園山德三郎、芋川稔一、太田又一、增山清太郎、清水達雄
浦松先輩を迎へて、如水會館の日本間でやる。一晩ぢや、とても盡きない本場アルプスの山の話に――ジャナリステイクに言ふならば――夜の更くるのも知らなかつた。

△**新入生歡迎會**　四月十九日　於石神井部室
出席者。（本科）中島嘉一郎、久保田禮治、金田一郎、宇佐美敏夫、横倉吟三郎、手塚晴雄、中森長太郎、小川竹夫、園山德三郎、高瀨進三、芋川稔一、關守三郎、吹原不二雄（豫科）增山清太郎、清水達雄、太田又一、勝田一郎

（新入生）　鈴木英雄、間瀬正、十合健二、小橋謙三、渡邊芳雄、以上二十二名。

△**學生登山聯盟に關する懇談會**　六月二十日　於如水會館

出席校。早大（四名）　法政（四名）　帝大（四名）　明大（三名）商大（浦松佐美太郎、吉澤一郎、中島嘉一郎、磯野計藏、金田一郎、芋川稔一）

早大先輩藤田信道氏議長となり、早大山岳部提出の具體案に依りて、議事進行したれども、結局不賛成の者出で、猶、夏季登山をひかへての事なれば具體的なる事は秋の會合にゆづり、單なる懇談會に終る。

△**針葉樹會集會**（復活第一回）　六月二十一日　於如水會館

久しく中止してゐた集會（第三金曜例會）の復活第一回會合であり、會の名稱も針葉樹會となる。出席者頗る多く實際堂にあふれてゐた。本當に。部屋が小さかつたから。

出席者。（先輩）　中川孫一、浦松佐美太郎、吉澤一郎、近藤恒雄、赤城鈴太郎。（部員）中島、金田、横倉、太田、河相、久保田、吹原、芋川、關、小川、勝田、增山、宇佐美、磯野、手塚、中森、清水、鈴木、高瀨、園山、平井

（針葉樹會集會は以後毎月第三金曜に如水會館に於て開催せらるゝ事となりたれども、本部報欄には、其の中特別なる集會のみを掲載する事とせり）。

△**夏山の相談會**　六月二十九日　於本科部室

本年度夏季登山計畫は北アルプス、六班七組、南アルプス四班五組、其の他東北朝日方面一班、尾瀨方面一班、全部にて十二班、十四組なり。

なほ本夏季登山に際しては、各リーダーより登山の報告を臨時山岳部本部中川先輩宅に通知する事とす。

△**豫科夏季登山準備會**　七月二日　於石神井部室

夏季登山計畫中、第二班烏帽子槍縱走は申込者、豫科生のみなりしを以て、石神井にて豫科單獨にて準備會を開く。

△**針葉樹會集會**　十月十一日　於如水會館

浦松さんの御好意に依つて、幻燈をやつた。歐洲のアルプス。主としてウェッターホーン。同氏の丁寧な說明によつて、皆、深い印象をうけたらしい。柄になく深刻な顏をしてスクリーンを見てゐた。

出席者。（先輩）　浦松佐美太郎、中川孫一、矢作太郎、吉澤一郎、近藤恒雄、赤城鈴太郎、森竹五郎

（部員）　中島、磯野、金田、横倉、手塚、宇佐美、小川、關、園山、高瀨、吹原、清水、芋川

△**スキー合宿所に關する相談會**　十月十九日　於本科部室

今春中止してゐた「スキー合宿」を今冬は再び擧行する事とし、不取敢、野澤酒屋旅館に待遇、乾燥室等の交渉をする事とし、園山氏其の任にあたる。

出席者。金田一郎、中島嘉一郎、磯野計藏、關守三郎、小川竹夫、吹原不二雄、園山德三郎、芋川稔一

△**山岳部臨時總會**　十月二十六日　於本科部室

會計報告
金田會計幹事の報告あり。
關東學生登山聯盟經過報告
磯野氏の詳細なる報告あり。聯盟加入に對しては部員全部賛成す。
スキー合宿の件
十九日に決定せし野澤への問合せの返事未着のため具體的なる事は決定せざりしも、今冬十二月中にスキー合宿を擧行するに就ては、部員大多數の賛同を得たり。
年報發行の件
編輯委員芋川氏に一任する事とす。
庶務變更
高橋要二氏辭し新に小川竹夫氏就任。今後庶務は外部的交渉にたづさはる事とす。

出席者。中島嘉一郎、磯野計藏、横倉吟三郎、高橋要二、河相薫、手塚晴雄、小川竹夫、關守三郎、太田又一、増山清太郎、金田一郎、園山德三郎、中森長太郎、芋川稔一　以上十四名。

△**關東學生登山聯盟發會式**　十一月二十一日　於大隈會館
本山岳部よりは先輩吉澤氏及び部員十五名出席す。（以後、學生聯盟に關する記錄は特別なるものを除き、本部報欄には掲載せず）

△**スキー合宿相談會**　十一月三十日　於石神井豫科部室
稀には豫科でやるのもよからうと云ふので、寒い中を出掛ける。後の雜談が長すぎて暗くなつてしまひ、小さな火鉢の火が赤く光る。とんだ所で山小屋の氣分を出したはいゝが、歸り掛けに、豫科會計御大に本科生が皆つかまつて、しぼられちやつた。

出席者。（本科）中島、金田、磯野、園山、芋川
（豫科）太田、丸茂、増山、鈴木、清水

△**スキー合宿準備會**　十二月十四日　於本科部室
今度より責任コーチヤーを委任する事とし中島嘉一郎氏其の任にあたる。
先發隊としては磯野、金田兩兄廿一日出發と内定す。（但し天候不順のため、實際には先發隊は出さざりき。）

△**故篠田君告別式參列**　昭和五年一月十一日
豫科山岳部員篠田見一君、腎臓病にて慶應病院に昨一月十日逝かる。
豫科山岳部より太田、増山、清水、勝田の四君告別式に參列す。
本科よりは、別に弔辭を送る。

△**杉浦教授歸朝歡迎會**　一月二十三日　於如水會館
洋行前は、豫科の名物だつた杉浦さんを迎へて、針葉樹會員、山岳部員聯合にて杉浦さんを圍んで、山の話に賑ふ。歐洲アルプスで獨乙人と登山競走をした時の悲壯な同教授の顔が見たかつた。

△**山岳部送別會**　二月八日　於新宿白十字堂

酒つ氣なんかなしでやる。元園軒でやる時とは違つて紳士的だ。卒業生は要ちやん一人だが、部員總出で盛にやる。

出席者。（卒業生）高橋要二、（本科）中島嘉一郎、手塚晴雄、金田一郎、磯野計藏、横倉吟三郎、園山德三郎、高瀬進三、小川竹夫、中森長太郎、芋川稔一、（豫科）丸茂平造、清水達雄、增山清太郎、鈴木英雄、大友亮藏、安達泰三、小橋謙三、十合健二、間瀬正

△**豫科山岳部送別會**　二月十四日　於石神井部室

非常にさゝやかだつた。どうかと思ふ。但し費用はかゝらないがれ。

出席者。（卒業生）太田又一、增山清太郎、鈴木英雄、清水達雄、丸茂平造、（豫科）大友亮藏、間瀬正、十合健二、小橋謙三、安達泰三

△**本科スキー準備會**　三月一日　於本科部室

本スキー合宿の責任コーチャーは手塚晴雄、中森長太郎の二人に決定す。猶、針葉樹第五號發行の件に就き相談し、三月の休中に編輯委員にて具體的な事を決定する事とす。

出席者。金田、中森、中島、小川、手塚、磯野、芋川、園山、高瀬、横倉、關

△**豫科スキー準備會**　三月五日　於豫科部室

出席者。增山、清水、鈴木、太田、丸茂、十合、間瀬、大友、小橋、安達、田中（外）

お菓子は多かつたんだが出席者は少なかつた。

昭和五年度

本年度幹事

庶務　太田又一
大友亮藏
芋川稔一
十合健二
清水達雄

記錄　間瀬正

會計　園山德三郎

器具

△**新入生歡迎會**　五月一日　於石神井部室

出席者。（本科）吹原、清水、增山、太田、勝田、久保田、磯野、河相、金田、中島、丸茂、園山、高瀬、鈴木、小川、中森、手塚、芋川（豫科）間瀬、大友、十合、安達、小橋（新入生）堀岡、打橋、宮川、澤井

△**針葉樹會集會**　五月十五日　於如水會館

浦松先輩の「マンメリー」に就ての小講演あり。登山史上忘るゝ事の出來ぬマンメリーに就ての講演は非常に有益なるものであつた。

出席者。（先輩）浦松、奥野、松木、村尾、近藤、赤城（本科）磯野、宇佐美、中島、横倉、久保田、園山、芋川、高瀬、中森、吹原、關、小川、太田、清水、田中、丸茂、鈴木、勝田、增山（豫科）間瀬、十合、安達、小橋、堀岡

編輯後記

過去二年間程の僕自身を顧るならば、登山能力が低下してゐるとか、彼はサロン、ベルグシュタイガーであるとか云はれても、其に對して一言の抗辯すら出來ぬ僕である。而も其の僕に、この第五號の編輯が任されたと云ふ事は、果して當を得た事であらうか。兎に角、僕には唯原稿を集めて其を印刷屋へ持ち運ぶ事より以外には、何も出來なかつた。その様な編輯者である以上、僕にはこの編輯後記で人並の言葉を書き連れる事は許さる可きでない。唯、編輯上の大略の報告をするならば、第一に、記錄を最初に出したのは、浦松先輩の御意見、並に部員の多くの賛成によつてやつた事だが、記錄幹事たる僕の無能は、折骨の新しい良き試をも不撤底なものとしてしまつただらう。又、次に雜記の編輯にあつても、僕の無能さは遺憾なく暴露されて、その煩雜なる事は多くの執筆者に對して申譯がない。此等の缺點を擧げてくれればきりがない。

今は唯、此等の缺點を第六號、第七號の編輯者が補つて呉れる事を心に願ふより外はない。恐らく第六號は、僕がまだ一橋の地を立ち去らぬ中に世の中に出るだらう。その時には、必ずや埋め合さうとする償を、確く心に誓つてこの後記を終へる。(芋川)

編輯委員　中島嘉一郎　芋川稔一
　　高瀬進三　太田又一

昭和五年六月二十七日印刷
昭和五年七月一日發行

定價一圓五十錢

東京府下和田堀町和田三三〇
編輯兼發行者　芋川稔一

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

東京商科大學内
發行所　一橋山岳部

板倉勝宣遺稿

山と雪の日記

（最新刊）

四六判コロタイプ六葉
定價二圓
送料八錢
（初刷五百部）

序篇　追憶　槇有恒

此の本の由來について、其他　松方三郎

山岳人板倉勝宣氏が、雪煙に包まれて、白神の苑に復醒めぬ眠に落ちてから八年の時は既に流れた。しゞまなる立山の雪は消える事があつても遺されたる者の深き悼みは終に癒ゆる事はないであらう。誠に氏の犧は何物にも替へ難い餘りに大きな損失であつた。

本書に收むる所、氏が山に親しむ者に遺した績の片鱗に過ぎないとは云へ、氏を懷しみ、其の足跡を覗ふ窓は本書を措いては他にないのである。即ち敢へて岳友諸兄に捧げる所以である。

目次

旅の一日
夏休みの日記より
燒ヶ岳
槍ヶ岳の嵐
嘉門次さん
正月の半日
大町より立山への一節
冬休みの紀行より
奥穗高と乘鞍
奥穗高より南穗高へ
乘鞍登山
五色溫泉スキー日記
山と雪の日記
夏の日記
大正池
上高地の月
霞澤ヶ岳
霞澤ヶ岳の途中
小屋
小屋の生活
冬の日記
峠停車場
ステムボーゲン
直滑降
テレマーク
停車場より溫泉へ
五色溫泉より高湯へ
春の上河内へ
手稻山に寢るの記
ムイネンリ岳登山記錄
春の槍から歸つて
登山法に就ての希望
雪の信飛連山とスキー
圈谷
北海道の冬期登山の道
槍の北鎌尾根

氷と雪

藤木九三跋
加納一郎著

四六判圖版十二
挿繪四十一個
用紙上質特製

（目次進呈）

定價二圓五十錢
送料十八錢

東京市神田四　北甲賀町　梓書房　電話神田二七七五番　振替東京七八六四四番

泉温澤野の雪

煙湯ぐ搖雪粉る昇ひ舞

國天のーヤーキス

飯山鐵道上境驛より三十町

設備完全・湯量豐富

酒屋旅館

電話十八番

日本山岳會　會員　吉澤一郎著　（新刊）

登高記

四六判三〇〇頁
クロース裝上製
定價貳圓貳拾錢
送料拾八錢

若き登山家に告ぐ

今や登山は其季節を選ばぬ樣になつた。吾々は四季を通じて愛する山の懷にわけ入る事が出來る。近年冬期登山の犧牲者多きを加ふるに及び世の不識者は徒らにその危險を叫ぶ。然し山は斯くも危險なものであるか。本書は必ずしも一流の登山のみをふくんでは居らぬ。けれども比較的容易なるスキー登山の氣分、乃至は谷登りの愉快さを詳細なる地圖及び見取圖等と共に示す點に於いて決して他書に劣る事はない。冬に於ける熊野湯、夏に於ける劍、上高地の研究等々、山はまだ〳〵吾々の研究の對象として行詰つて居ない事を物語る。著者が過去數年間に實行せし山旅、スキー登山の粹を集め、以て著者が登山に對する思想を眞實に表現したものが本書である。從つてこれが眞面目なる登山家達にとつて良き指導書になり得ると共に參考書としての價値も充分ある事と確信する次第である。

（目次大綱）　第一編紀行　簡單なスキー登山　一、發哺　二、熊野湯附近　三、再び熊野湯へ　野川・大朝日岳・大鳥川　只見川夏の山旅　霞澤岳より六百岳へ　雨の明神岳へ　鏑川水源の印象　降雪期に於ける立山針の木越え　一、五月―弘法より針の木越え　二、三月―大澤小屋より弘法へ　劍岳裏側池の谷溯行記　立山川東大谷より早月尾根を經て劍へ　長次郎谷東窓より三窓を經て小窓の雪溪へ　第二編雜記　色んな登山家　山の鳥　山岳回想　登山新聞記事の誤記に就いて　不愉快な山の思ひ出

發兌元　古今書院
東京市神田區紅梅町拾壹番地
振替東京三五三〇四番
電話神田(25)三七五三番

夏は避暑
冬はスキー

一度來た人は其の味を
忘れる事が出來ません

上州
谷川溫泉
谷川館

日本北アルプスへ

お出の節は是非お立寄り
下さいませ。
お待ちして居ります。

松本驛前角
鐵道省御指定
飯田屋旅館
電話（長）二七番
六一四番
市外專用二番

上野驛より草津溫泉驛まで九時間

爽快なる緩急斜面豐富

草津溫泉

大阪屋旅館

—低廉親切—

スキーメン、登山家を歡迎す

●**奥上州**の未知の山々へ

●**野反池**附近へ

●**澁峠**を經て**澁溫泉**へ

●**横手山**は眺望無比

●**草津白根**へは一日のコース

●**花敷**を經て**四萬**へ

スキー靴と登山靴

堅牢無比
防水完全

東京市本郷三丁目交叉點

太田屋靴店

電話小石川四七一二
振替東京六一二七

斯界の専門家指導の下に

都下唯一

天幕

ルツクサツク

専門製作店

!!!

四の二路小川今區田神

階一ルビ町保神

片桐商店

NSK

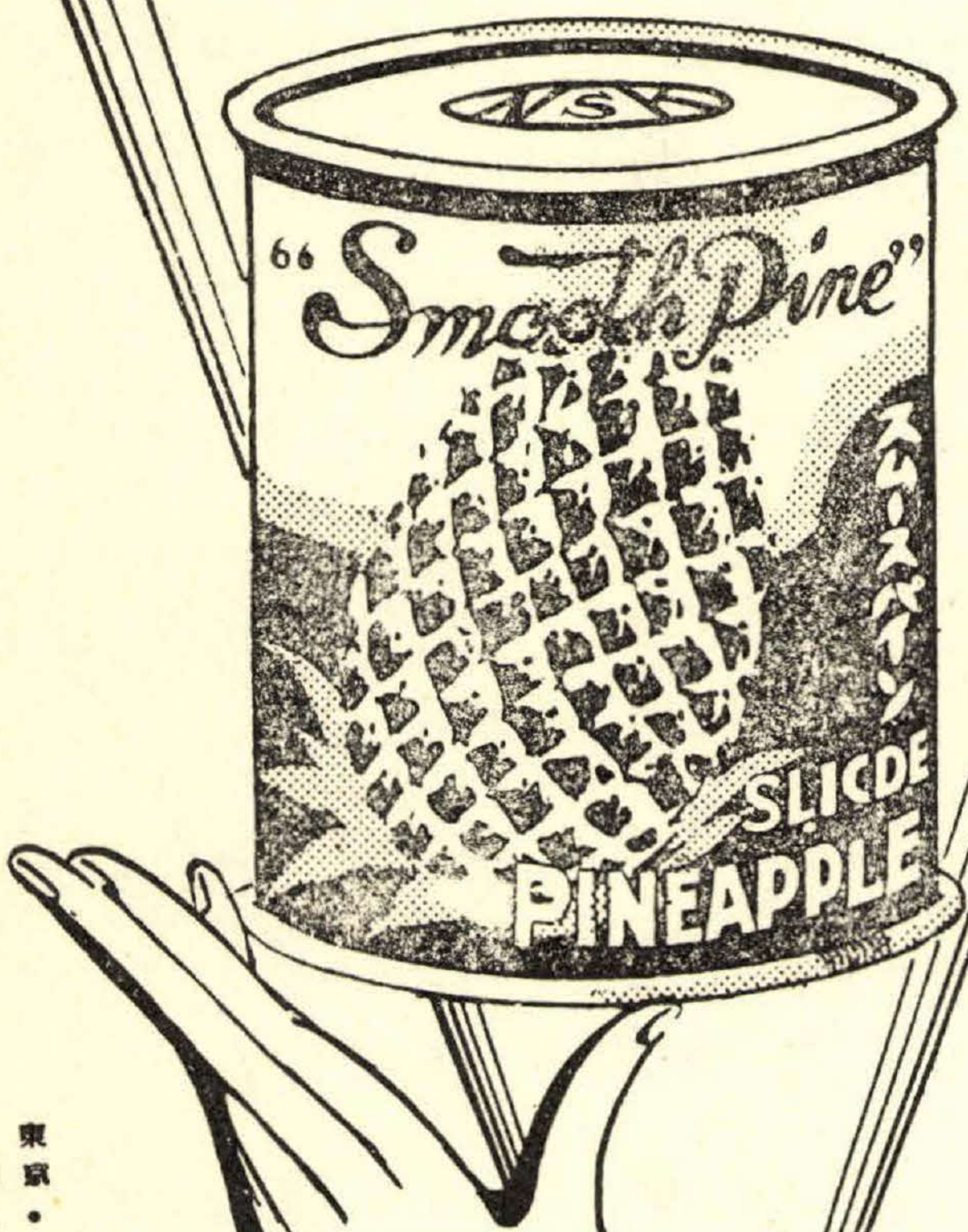
『春のピクニックに!!
登攀の好伴!!

國産パインアップルの代表品
スムース・パインありて
一抹の涼味と元氣を與へん』

製品 エキストラ（金線印）
等級 スタンダード（青線印）
ブローク（黒線印）

パイン スムース

加糖缶詰品に優る



東京・丸の内
内外食品株式會社

諸君、用意ありや？

野へ行くにも、山へ行くにも

常にカルケットの用意ありや？

僅か一個の**カルケット**も多大の榮養分を含む

一罐の用意は

一行の飢を脱し、元氣を增し、

キャンプの夕、團欒の中心をなす、

而も携帶に便なり

おいしい、じようのお菓子

カルケットの用意ありや？

（各種有り）

全國到る處の菓子店 食料品店に販賣す

東京 大阪

中央製菓株式會社

絶對に防腐劑を含まず

特製

月桂

冠

壜詰

宮内省御用達　大倉恒吉商店　吟釀

宮内省御用達

發賣　明治屋　株式會社

5—3

養　靜　と　樂　行

箱根底倉溫泉

園　山　高

館　旅　屋　蔦

電話宮下六・四五・六七・三一番

（絶　謝　代　茶）

キリンビール

營養價値

麥酒大壜一本の
營養量は
牛肉四半斤に等し

倫敦衛生試驗所報告

清涼飲料
キリンレモン　サイダー
タンサン

（絕對に人工着色せず）

宮內省御用達
麒麟麥酒株式會社

痛み・疲れに

サロメチール

たゞ患部に塗擦すれば足る

スポーツに、旅行に、キャンプに、或は轉地に缺くべからざる鎭痛劑として推奬さる。

◎少憩の時、入浴の後又は就寢前に、痛み疲れたる筋肉又は關節に少量を擦り込みをけば、休息又は睡眠中に、よく浸透して作用し、爵血を消散し、疲勞を去り、再び愉快なる運動の繼續を可能ならしむ。

◎それのみならず、靴ずれの豫防に、頭痛の塗擦に、虫の螫したる後の痒み等にスポーツマン又は旅行家は色々の救急用途を看出さる。

二五瓦……一圓
七五瓦……二圓五十錢　各地藥店にあり

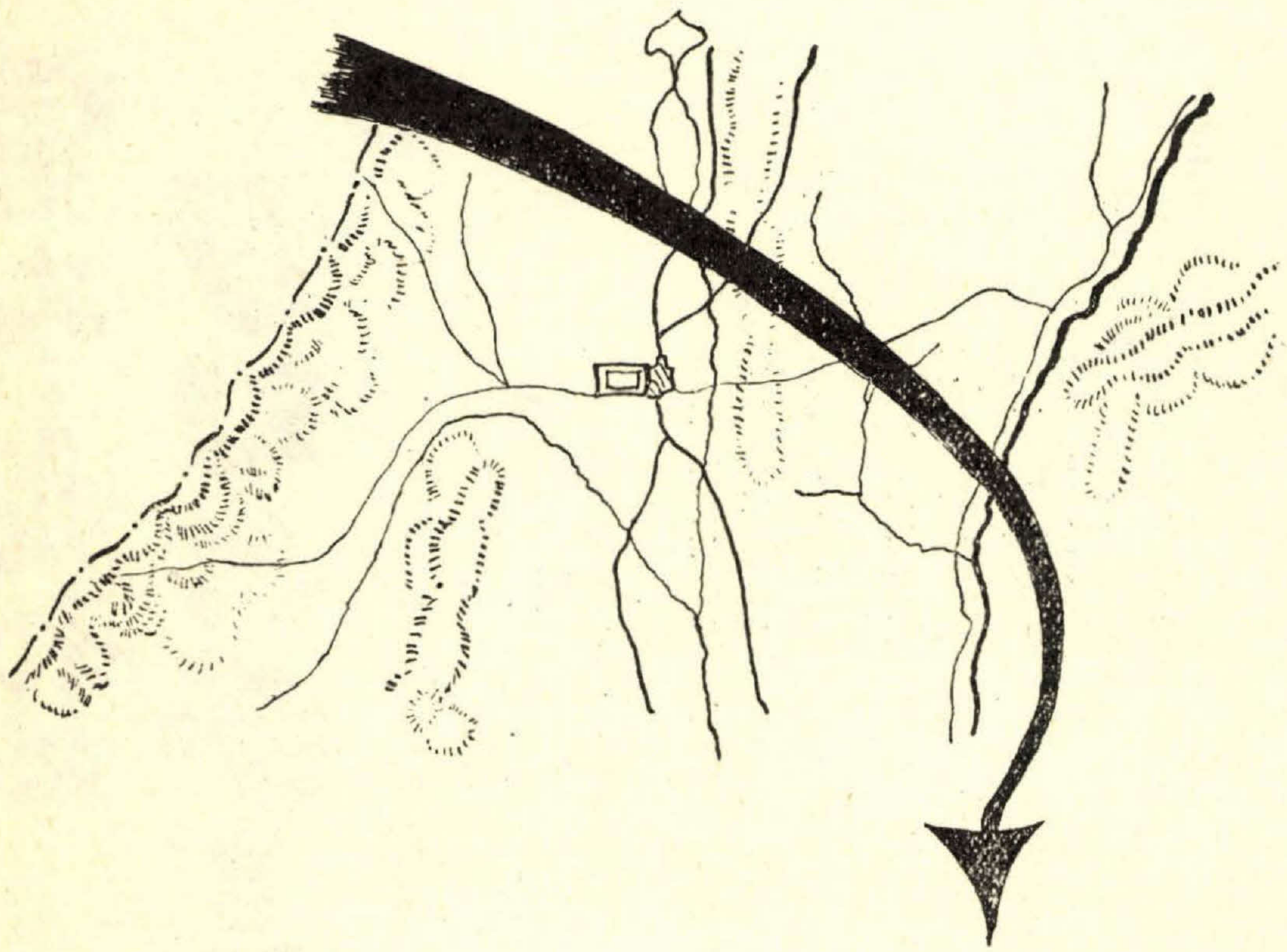
田邊商店
東京—大阪

旅行必携　スポーツ救急函

サロメチール、デシチンその他內外用藥品繃帶等を納めたるポケット小函

（大きさは圓本の約二分の一）

一函……三圓五十錢　著名藥店にあり



山の想出は
オリエンタル
の印畫紙へ
乾板へ

ピーコック
オーケー
プレスアート
ポートレートオーソ乾板

社會式株業工眞寫ルタンエリオ

仕切印刷屋

社會式株

高瀬商店

本店　東京日暮里杉金町七七二

支店　大阪市東區南久寶寺町三ノ一

輸出部　横濱市中區上尾町一ノ五

靴山登と靴一キス

——呈贈グロタカ第次越申御——

登山家實用向

特價品金拾圓也

圓五十…製革水防
圓二十…製革水防
靴 {一キス と 登山 鋲◆

すまりあに富豊各 (錢六本一) ルーケンリク (錢五本一) ーニコリト ◆

次越申御を數文袋足及形足は節の文注御方地尙

すまげ上申附送御てに便包小換引金代費實第

用御部岳山學大各

津布久靴店

東京市牛込區肴町六拾番地電車通

振替東京四一八八四番

信越山懐の深雪境

熊の湯の雪は海内隨一と申されます

山ならば

横手・赤石・笠・志賀・白根・萬座

峠ならば

草津峠・澁峠廣濶な針葉樹林

峠越え草津へのルートは愉快な一日

長野電鐵湯田中驛より三里强

熊の湯

山本順次郎

美滿津の山の道具！

登山靴其他
炊事具各種
META燃料
ピッケル（30cm.）
ルックサック
テント
夏スキー
山スキー

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

電話（小石川）845・2071

秩父宮殿下
高松宮殿下
澄宮殿下
竹田宮殿下
北白川宮殿下
山階宮殿下

賜御用命

於各博覽會

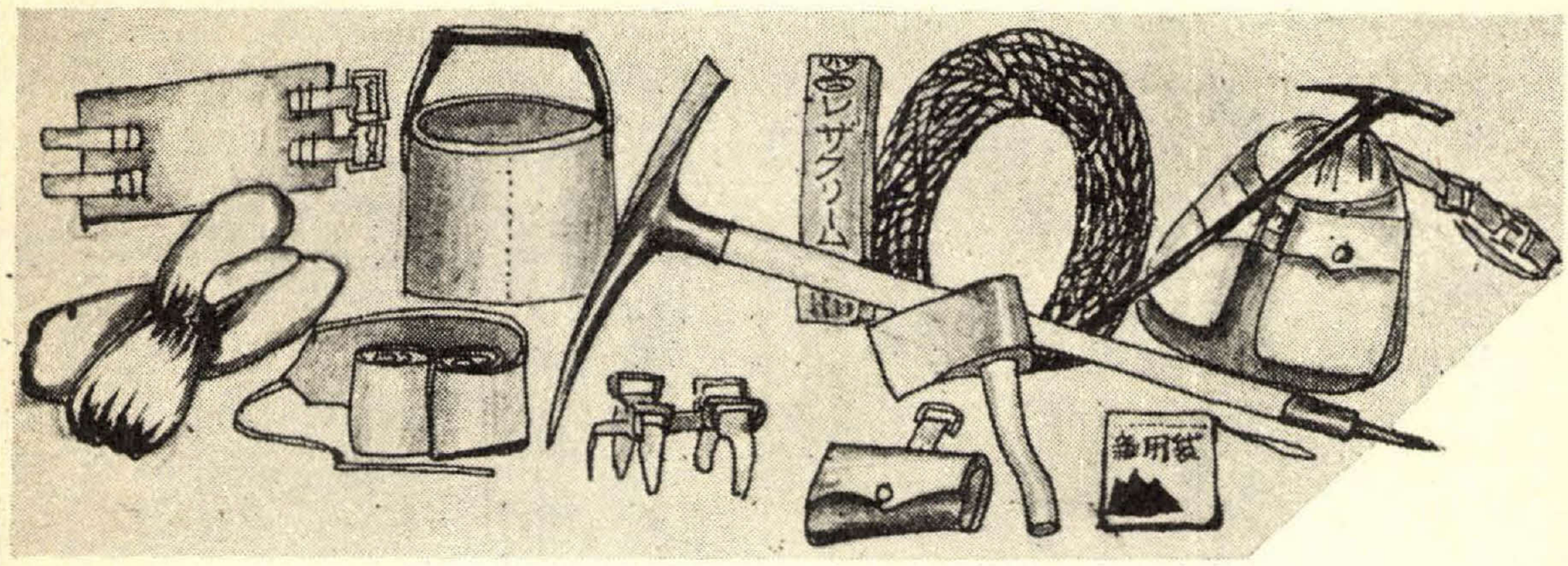
名譽大賞牌金賞牌受領

靴ーキスと靴山登

——呈進グロタカ第次越申御——

山崎靴店

東京四谷大横丁角



洋服
登山用具
天幕

登山用具一切の
修繕所

カタログ贈呈

山岳堂
上野廣小路十七
（上野町通り）

針葉樹　第一號（一九二五）
——品切——

針葉樹　第二號（一九二六）
——品切——

針葉樹　第三號（一九二七）
本欄、雜錄、山小屋欄、年報、寫眞四葉
約二〇〇頁　定價一圓五十錢

針葉樹　第四號（一九二八）
本欄、雜錄、山小屋欄、年報、寫眞四葉、スケッチ地圖二葉
約一三〇頁　定價八十錢

御希望のお方には右三號及び四號お頒ち致します。
（御送金は書留にて）

東京市神田區一橋通町
東京商科大學内
一橋山岳部

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第1号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第1号～第6号は近藤恒雄氏所蔵本に，第7号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第5号　復刻

昭和60年7月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

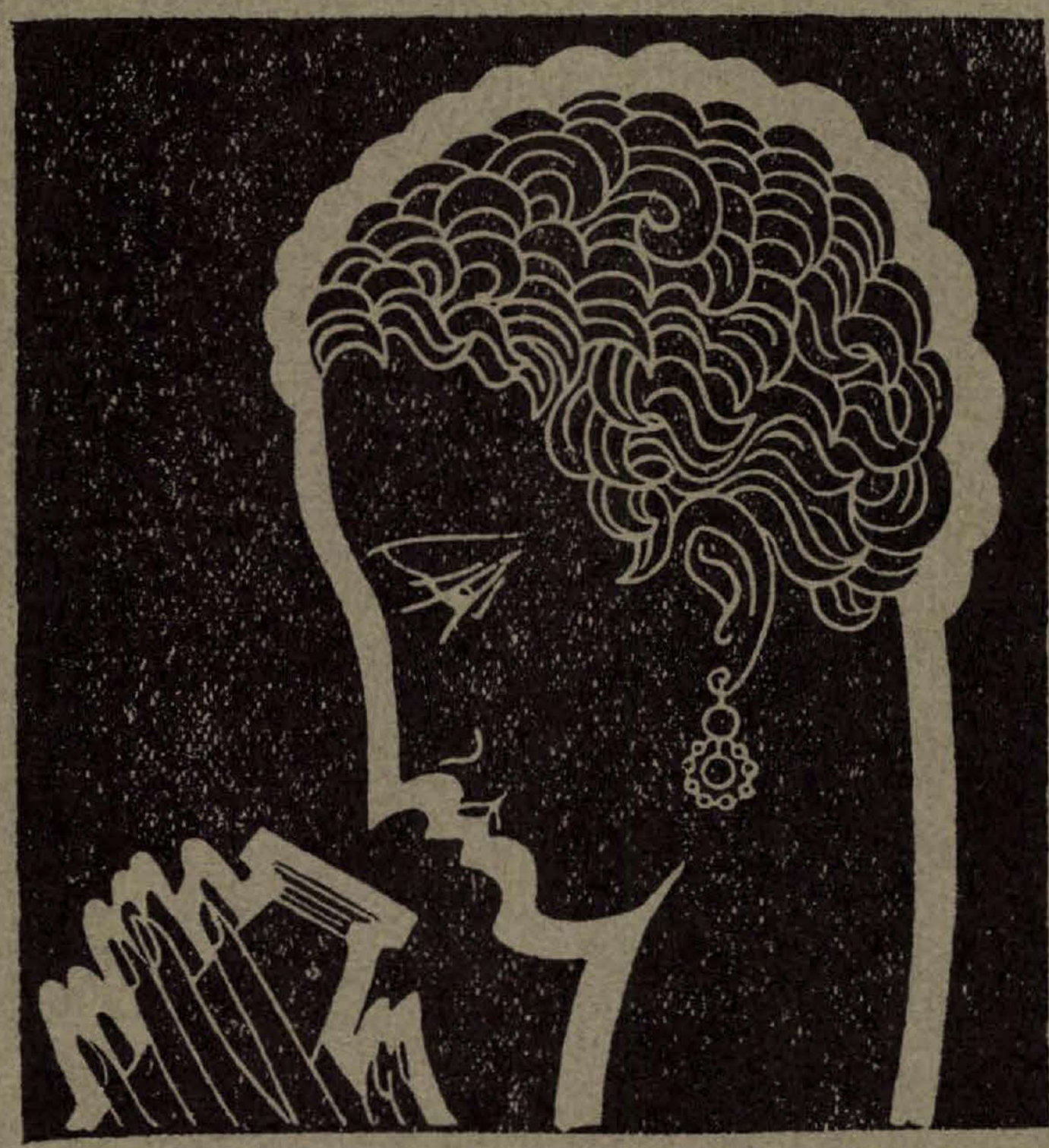
編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋5-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚2-35-7

SPORTING GOODS FOR LADIES AND GENTLEMEN

一年、春、夏、秋、冬の四期を通じてスポーツは盛んに行なはれて居ります。私達にスポーツの必要なことは申すまでもございません。そしてこのスポーツ程男の方にも女の方にも上品で有益な趣味はないでせう。いや趣味と云ふよりはもう運動をすることが普通なのです。けれどもその服裝とか身なりとか又はお持ちになつてゐる運動用品とかが偶々その人の人格を引き落す時がございます。運動用品を充分に撰擇する必要がございますいや味のない上品な運動用品をお求めになつて下さい。私共はこの點によく氣を付けて皆様に上品な品をお頒ちしたいと思つて居ります。

SANSEIDO



東京・神田・駿河臺

株式會社三省堂書店